

筑波大学博士（文学）学位請求論文

# 曲亭馬琴研究

—江戸出版文化と異国表象を通して—

金 学淳

二〇一六年度

目次	i
凡例	vi

## 序章

第一節	本論文の目的	1
第二節	本論文の意義	7
第三節	本論文の構成	9

## 第一部 江戸出版文化と曲亭馬琴の読本

### 第一章 江戸時代の商業出版・職業作家——曲亭馬琴を中心にして

第一節	はじめに	16
第二節	「職業作家」馬琴の原稿料	17
第三節	貸本屋による書物の流通形態	21
第四節	書物（新刊・続刊）の広告	28
第五節	売薬・店の宣伝	31
第六節	おわりに	35

第二章 『椿説弓張月』の読本の世界——〈話型〉と「勸善懲悪」を通して

第一節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	40
第二節	馬琴の長編構想と中国明代小説——「話」を媒介にして・・・・・・・・	41
第三節	『椿説弓張月』における物語と〈話型〉・・・・・・・・・・・・・・・・	49
第四節	『椿説弓張月』における「勸善懲悪」・・・・・・・・・・・・・・・・	60
第五節	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	65

第三章 曲亭馬琴の「懲悪」と読本の世界——『南総里見八犬伝』における「悪」の問題

第一節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	69
第二節	分冊出版と物語形式・・・・・・・・	71
第三節	『八犬伝』分冊出版と〈反復と連鎖〉・・・・・・・・	78
第四節	絶対的善悪論から「勸善懲悪」へ・・・・・・・・	86
第五節	「勸善懲悪」に関する只野真葛への反論・・・・・・・・	90
第六節	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	99

第二部 曲亭馬琴における異国

第一章 曲亭馬琴の異国情報収集と考証——『白石叢書』の収集と校訂

第一節	はじめに	103
第二節	異国の情報収集——『白石叢書』の収集	104
第三節	『白石叢書』における馬琴の書入れと校訂——異国に関する書物を中心に	118
第四節	『白石叢書』と琉球——『南嶋志』と『琉球国事略』	128
第五節	馬琴と蝦夷——蝦夷関連書物を中心にして	134
第六節	おわりに	139

## 第二章 異国遍歴小説における異国と異界——「女護が島」表象を中心に

第一節	はじめに	146
第二節	幻想の異国とその馴致	147
第三節	平賀源内『風流志道軒伝』の「女護が嶋」	151
第四節	遊谷子『異国奇談和莊兵衛』の「女護が嶋」	155
第五節	馬琴の女人国（女護の島）	157
第六節	おわりに	165

## 第三章 『椿説弓張月』における異国・異界としての琉球表象

第一節	はじめに	171
第二節	『椿説弓張月』における琉球表象の特徴	171

第三節	琉球表象における異国と異界	177
第四節	曲亭馬琴の琉球表象とその認識	182
第五節	おわりに	188

#### 第四章 異国と異界のはざままで——曲亭馬琴の考証随筆と『兔園小説』の異国・異界記録

第一節	はじめに	191
第二節	馬琴の考証随筆と『耽奇漫録』	192
第三節	珍奇珍談の収集グループ——兔園会	204
第四節	江戸後期の雑学集——『兔園小説』集	210
第五節	珍奇な女性に関する記録	212
第六節	江戸のアマゾン伝説	214
第七節	想像の異国と脅威の異国——「うつろ舟の蛮女」	224
第八節	おわりに	232

#### 第五章 曲亭馬琴の異国認識——只野真葛『独考』への反論を通して

第一節	はじめに	239
第二節	只野真葛の「国の全体」という異国認識	241
第三節	「国の全体」と儒者——馬琴と真葛の主体認識の違いをめぐる	248

初出一覧	296
図版一覧	293
参考文献	285
結章	274
第五節 おわりに	267
第四節 馬琴の異国認識	260

## 凡例

- 一、引用に際しては、原則として引用原本の漢字表記に従い、引用文に沿ってルビを併記した。
- 一、年号は基本的に西暦で表記し、和暦で表記した場合はその後に西暦を併記した。
- 一、本文中の引用は「」で括った。長い引用の場合は、前後を一行あけ、二字下げをした。引用文中の、前・中・後略は……を用いた。
- 一、論文のタイトルは「」で、雑誌名、作品名は『』で表記した。
- 一、〈 〉内は概念語かキーワードを示し、作品名や引用以外の「」は論者による強調を示す。
- 一、比較箇所、内容のまとめ、引用の続きなどには、○記号を利用した。
- 一、今日の人権意識からすると、不適切であると思われる語句や表現もあるが、歴史的事実やその当時の文脈を忠実に再現するために、あえてそのままの表現とした。

## 序章

### 第一節 本論文の目的

本論文は、曲亭馬琴（一七六七年～一八四八年）の作品、主に馬琴読本および異国関連の作品を、江戸時代の社会状況の中に位置づけ、特に馬琴が生きている江戸社会内部での出版文化の影響による作品構成と、作家として社会の外部に立つ馬琴における異国表象という観点から分析したものである。作者の執筆は個人の営みではあるが、作品創作とはその当時の社会状況との関連性が強く、さまざまな影響を受けていることは言うまでもない。それは古典作品でももちろんであり、本論文では江戸出版文化と異国という内外の社会状況下で、そうした社会環境が馬琴作品に与えた影響とその認識を考察していく。またその認識に留まらず、実際の作品に対し、彼がどのような方法で取り組んでいたのかを総合的に分析するのが主な目的である。今まで馬琴作品の分析は、中国小説もしくは日本古典からの影響などに関する作品論が多く、社会との関連性に注目したものは少ない。本論文の意義は、馬琴の作品を日本内外の社会情勢を通して考えていくことに見出されよう。

徳川幕府の開幕以来、鎖国を政権維持の手段の一つにしてきた日本は、江戸後期に入ると、巨大な蒸気帆船を操って海の彼方から迫り来る西洋列強の諸国の脅威にさらされるようになる。そのため奇しくも、北は蝦夷（北海道）から南は琉球（沖縄）まで、日本列島の北端と南端における海防政策が、幕府にとって重要な課題となっていた。北方のロシア帝国は、東方領土への拡張政策にともない、蝦夷地（北海道）にロシア船を頻繁に接岸させるようになった。そのため幕府は、松前藩が領有していた東蝦夷地を一七九九年に、またそれまで、アイヌ民族居住地として松前藩の領土とはせず、かといって幕府に帰属することも明確にしていなかった西蝦夷地を一八〇七年に、それぞれ直轄地とした。このように、空白地域が大きく拡がり曖昧なままの境界の存在が、ロシア帝国の東方領土への拡張という欲望をもたらしたということができる。ただ、その脅威が反作用をもたらし、幕府および江戸の知識人に、国（家）が支配する「領土」や「境界」という概念を生じさせたと

いう点で、この影響は甚大であった。

ロシア以外にも、日本列島の沿岸各地にあつては、異国船の出没・着岸による開港と貿易の要求、それらによつて掻き立てられる異国に関する関心、それにとまなう関連書籍の流通が増幅拡大し、日本列島は対外認識の面で大きな変化を要求された。その代表的な例を挙げれば、ロシア使節ラクスマンが根室に来航、通商要求（蝦夷地、一七九二年九月三日）を行った。その後、イギリス人航海士ブロートンが室蘭に来航（蝦夷地、一七九六年八月一四日）、その対策として幕府は寛政三年（一七九一）に命じた異国船漂着時の警備をあらためて諸大名に示すことになった（一七九七年七月、一月三〇日）。また、ロシア使節レザノフが来航し、通商を要求したため（長崎、一八〇四年九月六日）、幕府がロシア船の打払いを命じた（一八〇七年一二月）。さらに、イギリス軍艦フェートン号事件（長崎、一八〇八年八月一七日）などが挙げられる。

すでに、長崎の出島ではオランダとの交易が盛んとなり、西洋の文物が紹介されていた。一七二〇年、キリスト教書籍以外の洋書の輸入が緩和され、『解体新書』（一七七四年）などの西洋医書が翻訳された。また対馬藩では、対馬海流に乗って次々と着岸する異国船が、さまざまな要求を突き付けてきた。それが江戸に伝えられるたびに、幕府をはじめ、江戸の町人層をも大きな不安感が襲った。鎖国を支配手段の一環としていた島国日本にとって、このような深刻な脅威に対応しうる対策はなく、従来にも増して鎖国を強化する以外、方法はなかった。

また、馬琴が作家として活動した文化・文政期は、商業出版が開始され、商品経済の発展が日本社会内部で大きく成長した。その一方、異国の国々の出現・接近と通商要求という、日本外部での状態変化を伴った前近代末期の大きな変革期である。日本の周辺に現れ始めた異国の国々は、江戸の人々にとって恐怖と好奇心の対象である一方、経済的な観点からみると、異国の産品などをもたらす貿易相手でもあった。国内においても、商品としての書物の大量生産、書物の企画と刊行を担当する貸本屋の増加など、商品流通システムの発展により、異国の国々の情報と知識を題材にした書物も流通するようになった。それで江戸の知識人たちは異国関連の書物入手するようになったのである。

作家による創作とは、流通経済システムの様々な影響下で行われる個人的な関心事に関する執筆であり、また公益などを

求める社会的な行為でもある。このような創作動機、執筆意志は、個人の興味や教養、もしくは各々時代の文壇に共有される知が触媒となって発生する。それと同時に、創作には作品を執筆・流通することにより利益を創出しようとする商業的行為も深く関係する。その時、書物はそれが読者に提供する知識・情報を含めて、それ自体が一つの商品となるわけである。

したがって、その書物を商品として売るための多様な商業的な流通システムが発生する。それはちょうど現代における出版社、発行所、印刷所、製本所、本屋（古本屋、レンタル本屋、インターネット販売など）に該当する。高木元は「近世文芸の顕著な特質は出版流通機構システムの上に成立したことにある。これは、写本においてすら板本は、本ではない、という意味を持つてしまったということでもある。したがって「商品」としての書物が大量に生産され消費されるようになった十九世紀以後、その出版流通機構を無視した文学研究は成立し得ないといっても過言ではなからう」<sup>(1)</sup>と、書物の商品性、出版流通システムに影響されるといふ近世文芸の特徴を指摘している。本論文の第一部ではこの点に着目し、商品としての書物と、それと関連して起動する出版の流通経済システムの意義について考察してみたい。

江戸後期には流通経済が発達し、書物も商品として市場に回り、それによって執筆を専門とする職業作家層が現れ始めた。その時代に、代表的な職業作家として登場したのが、馬琴である。彼は売薬などの副業も持っていたが、原稿料から収入の大半を得た職業作家であった。両目を失明した後、嫁のお路に口述させ作品の創作を続けた姿勢からも、職業作家としての強い意識がみられる。

馬琴は山東京伝（一七六一年～一八一六年）を訪ね弟子入りを望んだが、入門は断られ、出入りだけが許された。京伝の所に入りする際に、最初の作品の黄表紙『尽用而二分狂言』を寛政三年（一七九一）、「京伝門人大柴山人」という名で刊行した。その後、京伝の作品を主に代作し、文化三年（一八〇六）まで約八十種の黄表紙を執筆した。このような黄表紙の執筆から始まった馬琴の創作は、長編読本<sup>(2)</sup>・合巻という小説様式（ジャンル）に移り、刊行された読本は四十種、合巻は七十五種に及んでいる。その中でも力を注いだのが、読本の史伝物<sup>(3)</sup>であり、その嚆矢となった作品が『椿説弓張月』（文化四年（一八〇七）～文化八年（一八一二））である。また、代表作である『南総里見八犬伝』は文化十一年（一八一四）

から天保十三年（一八四二）まで、二十八年間にわたって記された全九十八巻百六冊に及ぶ江戸後期の最大の長編作品である。本論文の第一部では、この二つの作品を研究対象とし、以下のような問題点を中心にして考察してみたい。

馬琴が読本を執筆する際、出版の流通経済のもとで、長編化されていくための構想が重要な課題となっている。馬琴の『椿説弓張月』は四、五回単位の読み切り型式であり、その一回分の話が事件の発端、展開、結末という完結した内容を持っている。すなわち、それは〈話型〉という完結された構造を持つ小物語となっている。さらに、それがそのまま終わるのではなく、反復と連鎖という形で続けられていくことで、長編作品を成している。また『南総里見八犬伝』でも、「勸善懲悪」をモチーフとする小物語が完結された構造をもっており、それが悪人を中心にして反復され、長編化されていく。

次に、馬琴の長編読本の構造を、江戸後期の書物流通の観点から考察するだけでなく、その当時の作者、読者、両方を結び仲人の役割をしていた貸本屋とも関連させて考えてみたい。その際、江戸の流通経済システムに注目し、作者・版元・貸本屋が利益を創出するため、いかにして長編作品を企画、出版、販売したのかという社会的側面から考察する。その時に発生する書物による広告、店の宣伝など、書物のメディア機能についても考えてみたい。さらに、出版流通経済のシステムの影響下にあつて、作者がどのような構成、技法を用い、長く間を置くことなく続けて作品を長編化して記したのかということに注目し、論じることしたい。

本論文の第二部は、馬琴の膨大な作品の中から、新井白石の『白石叢書』への馬琴の注釈・考証、日本国内外の現実・架空の諸地域での遍歴を描く馬琴の著作（遍歴小説）<sup>④</sup>、『椿説弓張月』における琉球表象を取り上げることにより、異国に由来する事物を考証した『兎園小説』（一八二五年）などの考証随筆について考察し、そうした諸地域や事物についての表象（ある事物や概念の表現のされ方）の特徴に注目しつつ、その現代的意義について論じるものである。具体的には、これまであまり論じられてこなかった（馬琴以外のものも含む）遍歴小説、これまでに論じ尽くされた感もある『椿説弓張月』、そしてこれも扱われることの少なかった『兎園小説』といった作品を取り上げ、これらの作品における日本内外の地域や事物についての表象を、〈異国と異界〉という概念を使って整理・分析する。その際、異界表象にも注目するが、より重要視され

るのは異国表象の複雑さである。中国の古典や西洋からの情報を元にした異国表象は、非常に幻想的なものもあれば、現実的なものもある。本論文では、特に異国表象の幻想性と現実性が共存しつつも拮抗していることを指摘し、その意義を論じる。さらに、作品では拮抗する異国と異界を描いていた馬琴が、実際の異国をどう認識していたかという点について、只野真葛（一七六三年～一八二五年）『独考』<sup>ひとりかんがへ</sup>（二八一七年）への反論書である『独考論』<sup>どっこうろん</sup>（一八一九年）を用いて比較分析を行う。その議論の中で、異国に関する部分を取り上げ、馬琴の異国認識についても論じることにする。

ここで、異国と異界という概念について概説しておく。風間誠史は「世界の外へ」——『異国奇談和莊兵衛』頌」という、本論文にとっての重要な先行研究の中で、本名不明の遊谷子『異国奇談和莊兵衛』（一七七四年）に先行する遍歴小説、平賀源内『風流志道軒伝』（一七六三年）について、次のように述べている。

実際、平賀源内の『風流志道軒伝』は遍歴小説という枠組の中でのみ見ても、画期的な作品だった。『志道軒伝』以前は、遍歴小説と言えはほとんどが地獄巡りであり、あるいは極楽、龍宮、仙界といったいわば既成の異界巡りだった。それに対し『志道軒伝』は、大人国、小人国、手長国、足長国、穿胸国といった「異国」（『和漢三才図絵』や『増補華夷通商考』を典拠とする）を描き出したのである。（5）

風間は「地獄」や「極楽、龍宮、仙界」といった伝統的なこの世の外の世界を「異界」、『和漢三才図会』などの典拠に則った外の世界を「異国」として記述している。本論文は、異界概念については風間の記述に従うが、異国については少々修正を加えたい。すなわち、本論文では、馬琴という作家が日本の外に現実にあつた諸地域や国家の存在を意識し、情報収集につとめたということを重視する。そのため、『和漢三才図会』のみならず、西洋の情報を伝える文献を参考とした、ある場合は幻想的であり、ある場合は現実的でもある、日本内外の諸地域を「異国」と呼ぶこととする。これらの異国・異界概念を用いると、例えば馬琴の諸作品は、現実的な異国についての情報を十分に得ていたのではあるが、その情報を最大限に活

用してはならず、伝統的で奇怪な想像力の産物である異界の事物や人物が登場したり、幻想的な異国と現実的な異国の狭間で馬琴が引き裂かれてしまったりすることが分かってくるのである。(6)

重要なことは、異国・異界表象が複雑に入り組んでいる馬琴の作品が、異国の到来に「脅威」を感じていた知識人の反応を示していたのではないかということである。そのことは、異国の情報を多数入手していたにもかかわらず、馬琴が只野真葛との論争において、むしろ旧来的な華夷秩序に基づく世界観に自閉していったことに端的に表れている。それは異国の脅威にさらされていた、江戸知識人の防衛機制の現れだったのではないだろうか。(7)

先行研究の中で、馬琴と異国に関しては、植田啓子が馬琴の対外認識を最初に指摘し、馬琴に異国情報を提供した人物とグループを綿密に述べている。(8) 播本眞一は馬琴と異国の関係や馬琴所蔵の『鎖国論』について論じ、彼に根付いているものが「皇国史観」であると指摘している。(9) 『白石叢書』と馬琴の関連については、歴史学からの指摘が発端となり、新井白石研究者である宮崎道生が、『白石叢書』の馬琴の書き入れを網羅的に整理し、馬琴の白石認識などにも触れている。(10) 『椿説弓張月』は、その前半と後半の構想問題に関しての論文が多く、その中では、馬琴読本における構想と考証の問題を論じた大高洋司の論から多くの刺激をうけた。(11) 琉球支配の意味を問う論文としては、風間誠史『椿説弓張月』の「琉球」(12)、播本眞一『椿説弓張月』論(13)があり、両者とも白石の「南島思想」の影響を指摘している。本論文では、そうした白石の影響を認めたくえで、作品の内容に沿って異国琉球の支配志向について論じていくことにする。馬琴の『独考論』を主題にした論文はなく、只野真葛『独考』との比較や、『独考』を通して真葛の思想を論じたものが多く、その中では鈴木よね子の論を参考にした。(14) さらに、『独考』は海外で注目を浴びており、「Solitary Thoughts」という英訳や『Thinking Like a Man』(15)という書物がある。馬琴が参加した文人会である「耽奇会」、「兎園会」や、そこで披露された記録を主に論じた論文はなく、紹介のみの短編のものが目につく。江戸の遍歴小説に関しては、文学史的位置とその流れなど、遍歴小説を紹介したものがあり、『和莊兵衛』と『夢想兵衛胡蝶物語』の関連性を問う論も見える。(16) 馬琴の勸善懲惡に関しては、古くから多くの論文があり、現在まで馬琴の演劇における問題(大屋多詠子)(17)、誤読の問題(大高洋司)(18)などの主題

で論じられている。濱田啓介は勸善懲惡を中国からの影響、読本との関係などの観点から網羅的に指摘している。<sup>(19)</sup>しかし、馬琴作品における「悪人」または「懲惡」を論じたものは少ない。この点には注目しておきたい。

## 第二節 本論文の意義

馬琴は数多くの読本や合巻を著したが、そうした作品以外にも、随筆というジャンルに入るような、例えば旅行随筆の『羈旅漫録』考証随筆の『燕石雜誌』『烹雜の記』『玄同放言』がある。またそれらとは少しく異なるが、文人会での記録書の『耽奇漫録』や『兎園小説』があり、滝沢家の記録ともいえるべき『吾仏乃記』『後の為乃記』も遺されている。さらに、評論のジャンルともいえるべき、戯作文学論『近世物之本江戸作者部類』などもあり、馬琴は随筆、家記、評論に至るまで、様々なジャンルの執筆活動を行っていた。彼は読本を主とする旺盛な文筆活動を支えるために、それらの素材とすべく、多くの和漢の書物を借りて筆写したり、その内容を校訂したりする作業をも、執筆の合間に熱心におこなった。ここではその幅広い文筆活動を支えた素材収集と考証作業を考察することにより、馬琴研究の新たな視点が発見できるのではないかと考える。それは馬琴の収集・考証活動を主に取り上げること、彼が持っていた思想や学問的姿勢を明らかにすることである。

また、馬琴が〈異国〉を描いた『椿説弓張月』について言えば、物語の舞台である架空の、あるいは実在の島々が、未知の〈異世界〉として描かれている。『椿説弓張月』は文化四（一八〇七年）〜同八年（二八一）の作品であるが、この時期に馬琴は『白石叢書』を入手しており、中国ばかりではなく、朝鮮や西洋の情報や風俗にも触発されて、異国的な〈異世界〉を創出する資料の一つとして用いたことが指摘できる。

馬琴が収集、考証作業を行った対象は、古代から馬琴が生きていた当時までの様々な文物、人物、異界、異国、伝承など、多岐に渡る分野のものである。それらを彼がどのような手法、手順で理解、受容したのかを、まず明らかにすることが必要であろう。その上で、そのような収集・考証作業が、彼の執筆活動にどのように活用されたのかという点も重要な課題であ

る。馬琴にとつての収集ないし考証は、古代から現在まで、江戸の町から異国、さらには幻想空間である異界までの世界と、時空間を問わず「異」なる世界に対する、好奇・探求という知的好奇心の発露であり、これはそのまま彼の作品構想と執筆の基盤を支える知的作業でもあった。

本論文は、馬琴による異文化情報の収集とその考証という観点から異国情報をテキストとして収集し、そこに様々な注釈を付することで得られる異国情報と、その情報源を明らかにすることを目指す。異国情報はテキストとして収集されているが、そこに様々な注釈が付されることで、新たに異国情報が得られたものと思われる。

馬琴が収集していた「情報としての異国」を把握するためには、馬琴、および真葛という女性作家による叙述を比較する作業が必要となる。すると、馬琴が異国と日本との関係、また異国認識を、中国の中華／異国という優劣観のもとに認識していることが、真葛の世界認識との比較を通して浮き彫りとなる。馬琴が伝統的な中国の保守的世界観を持っているのに対し、真葛の主張は、伝統的な世界観を克服し、異国とは様々な風俗、物産を有する国々によって構成されている。こうした二人の見解の差異から、馬琴の異国観とその根幹を支えている儒学認識を考察することが、本論文の主な課題である。

また、馬琴が参加した文人会については、これまで本格的に論じられたことがなく、馬琴研究の際の周辺の補足材料として言及されるのみであった。このため、その会の性格や参加者も未だ明らかではない。そこで、馬琴が参加した二つの会を詳細に研究することで、文人としての馬琴の姿、江戸における文人会の有り様が、明らかになるものと思われる。こうした文人会と馬琴というモチーフを通して、文化・文政期における世界情勢と流通経済の中におかれた日本及び江戸の文人たちが、どのように地方と異国の情報を共有し合っていたのかを明確にしたい。馬琴が行った異文化情報の収集活動、その考証作業、会での活躍を考察することによって、従来の研究で主に取り上げられてきた戯作者としての側面だけではなく、文人としての馬琴像という新たな視点を生み出すことが期待されよう。

江戸後期における、商品流通経済の観点から創作活動を考えるならば、読本は商品である以上、大量に売るのが目的であるため、購買者の関心、好奇心に訴える素材が必要となってくる。当時、異国の船舶と異人が日本の沿岸に出現し、その驚

きの風聞と情報が江戸にも入ってきていた。馬琴がこの異国情報を利用し、江戸の読者の関心を惹くために、そういった風聞と情報をプロット、ストーリーに巧みに生かし、商品としての読本を創作したことを、本論文では明らかにする。読本の珍奇性に関し、異国と悪を用いて、馬琴読本の構想の特徴を明らかにすることを目指したい。それは、実際の異国情報が、虚構の異国表象に変化していくさまと、異界あるいは異国と悪人の結びつきによってどのような悪人、怪物が表象されたのかを解明することである。つまり、文学作品における十九世紀初期の地理観の拡大が、中世的な伝統かつ宗教概念としての異界と異国をない交ぜにした読本空間を作り出しているという点を検証するのが本論文の特徴である。さらに、本論文は馬琴とその作品をめぐる文学研究に留まらず、江戸後期における地理観の拡大、宗教的な異界概念の変化、好悪の両面にわたる多面的な異国認識など、近世から近代へ移行していく江戸後期の社会と文化の本質を考察する研究でもある。

以上のように本論文は、その膨大な著作が、数多くの研究者によって研究つくされていくかに思われる馬琴を取り上げるものであり、先行研究の議論を参考にしつつも、先行研究において論じられることの少ない作品を年代順に扱う。その中で、異国と異界という概念を用い、具体的に作品を読み解き、異国との正面からの出会いを回避しようという、江戸末期の典型的知識人としての馬琴像を浮かび上がらせるといったことが目的である。また補足的な学的貢献ではあるが、馬琴が実際に所有していた筑波大学中央図書館所蔵『白石叢書』への馬琴の書き込みについても、検討したことを記しておきたい。

### 第三節 本論文の構成

本論文は、序章、第一部「江戸出版文化と曲亭馬琴の読本」の三つの章、第二部「曲亭馬琴における異国」の五つの章、そして結章によって構成されている。以下、各章の概略を記す。

第一部の第一章「江戸時代の商業出版・職業作家——曲亭馬琴を中心に——」では、江戸時代の商業出版下にあつて、職業作家であつた馬琴について論じる。江戸時代の以前には、文芸書物は一般の民衆が購入して読むものではなく、支配層、

富裕層などの教養のためのものが主であったが、江戸時代に入ってから、娯楽のための書物が出版・流通し始めた。それは町人の経済力の成長、出版システムと流通機構の発展により、浮世草子のような娯楽的読み物が、一般の町人まで届くようになったことに起因する。その中でも大きな役割を果たしたのが、読者と作者・版元を結ぶ仲人たる貸本屋という存在であった。その貸本屋が媒体となって行われた書物の出版と流通、また職業作家の原稿料、書物の広告、店の宣伝といった流通経済システムの変化・発展などについて、考察が進められる。

同第二章『椿説弓張月』の読本の世界——〈話型〉と「勸善懲悪」を通して」では、『椿説弓張月』が〈話型〉の反復と連鎖によって長編化されていることについて論じる。本作品の主人公は源為朝であるが、「貴種流離譚」の要素や「勸善懲悪」というモチーフが、彼の渡つていく島々と琉球で繰り返される。また、そのモチーフは為朝だけではなく、人物に繰り返されることで長編のプロットが形作られている。本章では、本作品における〈話型〉を作品の内容から析出し、それが反復・連鎖されていることと、その〈話型〉に沿っている悪の造型についても考察したい。

同第三章「曲亭馬琴の「懲悪」と読本の世界——『南総里見八犬伝』における「悪」の問題」では、「勸善懲悪」をモチーフとする小物語の反復と連鎖が『南総里見八犬伝』をつらぬく構成原理になっていることについて考察する。江戸後期では、理解水準が低い読者層のため、物語の単純化、定型化、読み切りの完結性などが求められた。馬琴の長編読本は、その完結した小さな筋立てが反復・連鎖することによって長編物となっているが、その完結した小物語のモチーフとして本作品で注目されるのが勸善懲悪のテーマである。さらにその勸善懲悪の懲悪に注目し、悪人を中心にして考察してみたい。

この勸善懲悪は、近代に入ってから坪内逍遙の『小説神髓』による批判を受け、リアリズム主義による攻撃の典型的な対象となり、近代における馬琴の評価に大きな影響を与えた。坪内逍遙は、馬琴の読本を「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」と批判しているように見えるが、ある程度評価をしている箇所もある。

以上のように、江戸後期の出版経済、書物流通の発展の影響下にあつて、馬琴は読者の興味と関心を維持しつつ、自分の作品が売れることを目的として、どのような作品構成及び構想を活用し、作品を長編物として執筆していたのか。本論文の

第一部では、江戸後期の出版流通経済の中で、馬琴が作品を長編化させるために、どのような作品構成及び構想のモチーフを利用していたかを論じてみたい。

第二部の第一章「曲亭馬琴の異国情報収集と考証——『白石叢書』の収集と校訂」では、貴重な資料である筑波大学中央図書館所蔵の『白石叢書』を検討し、先行研究に従いつつ、馬琴の書き込みを精査・整理し、彼の異国情報収集の有様を確認する。そして、その異国情報が、彼の創作作品にいかなる影響を与えたのかについても若干の考察を試みる。特に、琉球と蝦夷に関する書物に注目し、考察を行うことにする。

同第二章「異国遍歴小説における異国と異界——「女護が島」表象を中心に」においては、近世後期の日本における遍歴小説、たとえば遊谷子『異国奇談和莊兵衛』や平賀源内『風流志道軒伝』における異国・異界表象を検討しつつ、馬琴の黄表紙『庭莊子珍物茶話』（一七九七年）『風見草婦女節用』（一七九九年）、読本『夢想兵衛胡蝶物語』（一八一〇年）における、異国と異界の表象に論及する。特に様々な異界的な異国の中、「女人国」に焦点を当てて考察を行いたい。これらの作品は、異国や異界を扱っているが、しかし結局のところ、日本の内部に回帰するという特徴を持つことに注目した。

同第三章『椿説弓張月』における異国・異界としての琉球表象」は、異国として表象された独立国である琉球をめぐる物語に、奇怪な人物と奇怪なストーリーを伴う異界表象が組み込まれていることを分析する。その奇怪な人物としては、異人でありながら、巨大な悪人である「矇雲」を取り上げ、『椿説弓張月』を主人公の源為朝ではなく、異人の矇雲を通して検討する。さらに、馬琴の琉球認識に関しても考察を行う。

同第四章「異国と異界のはざま——曲亭馬琴の考証随筆と『兔園小説』の異国・異界記録」は、まず馬琴とその周囲の知識人グループによる考証作業と、その成果である『耽奇漫録』『兎園小説』について記述する。さらに、ロシア船の南下などによる現実の異国の接近により、どうしても異国の情報に直面しなければならなかった馬琴が、それでも異界や（幻想の）異国表象にあふれる物語を生産していったことを指摘する。本章では特に、モンスターとしての女性表象について詳細に分析するが（巨大な女性、女人国、「うつろ舟の蛮女」など）、これは、これまで先行研究でほとんど取り上げられなかったテ

—マである。

同第五章「曲亭馬琴の異国認識——只野真葛『独考』への反論を通して」では、馬琴の異国へのまなざしを主とし、只野真葛との議論を比較考察し、論じることにする。本章では、論述の構成として、まず真葛の異国認識に触れながら、馬琴がより具体的にどのような異国認識をもって反論したのか、馬琴の批判を主な議論の位置に置くことにした。

【注】

- (1) 高木元「江戸読本の新刊予告と〈作者〉——テキストフォーマット論覚書」『日本文学』一九九四年一〇月、一二二頁。
- (2) 横山邦治は読本の定義について、「読本」の名称は、八文字屋本を呼ぶのに、西川祐信などが画く絵本の対としての読む本と称したところから始まる。この名称は、正徳頃から生まれて元文頃一般化したようであるが、その頃の広告や書籍目録類では、「絵入読本」とか「風流読本」という表記が一般であるようである。……時に中国白話小説を呼ぶのに用いる「小説」、「稗史」、「稗説」などという字を当てて「ヨミホン」と読ませている、「読本」という語に含めた意は、林羅子とか曲亭馬琴とか当代の戯作者の論客たちの言説から要約すると、一に作り物語であることであり、二に勸善懲惡の理が表現されていることであり、三に戯作であるということであった。……「読本」の語が、現今のような意味で文学史上の用語として定着するのは、やはり新しい時代を迎えてから、明治二十三年四月刊の関根正直著『小説史稿』で「読本は遠く演義の史より伝統せる。実録体の書と。院本とを併せて。更に一変したるものなり」と学的に規定してからである。これ以後の文学史の記述では、浮世草子と読本とが「読本」の用語で統体として把握されるという現象は皆無となつていたのである」と述べている。横山邦治編『読本の世界—江戸と上方—』世界思想社、一九八五年、二〇三頁。
- (3) 横山邦治は『椿説弓張月』、『南総里見八犬伝』を史伝ものとして捉え、馬琴の稗史ものについて、「稗史ものにおける史伝ものは、仇討ものとともに量的に双璧をなしており、質的には読本の代表的傑作とされている「南総里見八犬伝」を史伝ものの中に見いだし得るように、展開期読本の最高峯を形成している。……稗史ものにおける史伝ものということになれば、やはり曲亭馬琴の「椿説弓張月」の出現から始まるといつていいであろう。この「椿説弓張月」は期せずして稗史ものの続きものの続きもの嘴矢ともなつていたのであるが、馬琴の続きもの以外の史伝ものといえは、「頼豪阿闍梨怪鼠伝」一〇 葛飾北斎画文化五年刊、「俊寛僧都島物語」八 歌川豊国画文化五年刊の二作

であろう。」と述べている。横山邦治『読本の研究―江戸と上方と―』風間書房、一九七四年、五六六―五六七頁。

- (4) 『徳川文芸類聚』では、遍歴小説のように定義している。「遍歴小説といふも、『膝栗毛』一類の如き紀行小説にあらず、また『岩見武勇伝』の如き武者修行譚にもあらずして、著想脚色彼の『ガリバー巡島記』の如きに類似せるものを指すなり。即ち実際には決して有るまじく、又到底往来せらるべくもなき架空の国土を遊歴したる体に作り做して、種々の事件を語り、様々の光景を叙する間に、一種の寓意若くは諷刺を含ませたる小説なり。蓋し江戸時代封建制度の下に在りて、言論の自由を有せざりし作家が、其の想像に成れる無何有郷に自由の天地を作り、仮託の事相人物によりて、当代の政道及び世態に対する不平を漏らししに起れるものなるべし」(国書刊行会編『徳川文芸類聚』復刻版第三、国書刊行会、一九七〇年、一頁)。
- 『徳川文芸類聚』の初版は一九一五年に発行され、『異国奇談和莊兵衛』を含む一三作品を収録しており、ヨーロッパの小説(『ガリバー巡島記』)を用いて、同時代性で江戸の遍歴小説を定義しているが、江戸の遍歴小説が持つ異界性、珍奇性、幻想性などは読み取っていない。ただ近代日本において、遍歴小説が既に一つのジャンルとして定着していることは注目すべき点である。なお、この定義については本論文の第二部第二章との関連でも参照されたい。

- (5) 風間誠史「『世界の外へ』―『異国奇談和莊兵衛』頌」『日本文学』第四七巻第二号、一九九八年、六七頁。

- (6) 『椿説弓張月』のテキストとしては、岩波文庫版上中下巻(一九三〇年)があるが、校訂者の和田万吉は「はしがき」において、馬琴は『弓張月』の成功のあと『南総里見八犬伝』などの「巨編を出すに至つた」が「但此頃から著者の考證熱が旺になりかゝつて居たので、本書には主人公源為朝の系譜や琉球地理の穿鑿が煩纏に過ぎる程に引出され、小説の讀者には幾分倦怠気味を催させる」(三三頁)と述べている。実際、読者は、例えば前編卷之二第五回で、琉球にルーツを持つ快(怪)男児・紀平治の紹介が始まるやいなや、琉球人一般についての説明や琉球語についての語彙録などを読まされることになる(五一―三頁)。ところで、馬琴自身は「序」で「この書保元の猛将八郎為朝の事蹟を述。その談唐土の演義小説に倣ひ多くは憑空結構の筆に成。閱者理外の幻郷に遊ぶとして可なり」(一三頁)と述べてい

る。つまり、『椿説弓張月』においては、馬琴の人物や（日本以外の）地理についての旺盛な「考證熱」に裏打ちされた表現と、「憑空結構の筆に成」る「理外の幻郷」の表現とが、いわば拮抗しているわけである（この点については特に第二部第三章を参照）。この二つの表現の拮抗に注目したのが、本論文の萌芽である。

(7) 小谷野敦は『八犬伝』における「海防思想」について論じている（小谷野敦『新編 八犬伝綺想』筑摩書房、二〇〇〇年）。

(8) 植田啓子「曲亭馬琴の対外関心について」『言語と文芸』第四二号、大修館書店、一九六五年。

(9) 播本眞一「曲亭馬琴伝記小攷―曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川暈翠旧蔵本『松窓雜録』について」『読本研究新集 第二集』翰林書房、二〇〇〇年。

(10) 宮崎道生「滝沢馬琴の蒐集校訂本『白石叢書』」『国学院大学大学院紀要』第一六輯、国学院大学大学院、一九八四年。

(11) 大高洋司『椿説弓張月』―構想と考証』『日本文学研究論文集二二一 馬琴』若草書房、二〇〇〇年。

(12) 風間誠史『椿説弓張月』の「琉球」―『相模国文』第三三号、相模女子大学国文研究会、二〇〇六年。

(13) 播本眞一『椿説弓張月』論』『日本文学研究』大東文化大学、二〇〇七年。

(14) 鈴木よね子『独考』試論―その方法と実学・国学の影響―』『都大論究 第二十四号』東京都立大学国語国文学会、一九八七年。

(15) ベティーナ・グラムリヒオカ著・上野未央訳『只野真葛論―男のように考える女―』岩田書院、二〇一三年。

(16) 小谷信行「和莊兵衛の系譜」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』鈴鹿工業高等専門学校、一九九六年。

(17) 大屋多詠子「馬琴読本の演劇化―文化期の上方演劇作品における―」『読本研究新集 第五集』翰林書房、二〇〇四年。

(18) 大高洋司「馬琴流（勸善懲惡）の言表と「誤読」の問題」『江戸文学』第三六号、ぺりかん社、二〇〇七年。

(19) 濱田啓介「勸善懲惡」補紙』『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年。

第一部 江戸出版文化と曲亭馬琴の読本

## 第一章 江戸時代の商業出版・職業作家——曲亭馬琴を中心にして

### 第一節 はじめに

書物が営利目的として出版されたのは、江戸時代の寛永年間（一六二四年～一六四三年）に入ってからであるとされる。<sup>(1)</sup> 江戸時代の出版を商業的な機構の面から考えてみると、第一に出版を担当する版元、第二に原稿料（潤筆料）で生活を営む専門作家、そして第三に購読者に書物を提供する（売る、貸して見料を取る）業者、さらに第四として購読者が存在する。この読者層は、これまで伝統的な知識層が主流であったが、識字教育の普及と相俟って拡大し、文芸を楽しむほどの識字能力を持つ庶民層の読者が増えるようになった。なお経済的に書物を購入できない庶民層も、書物に手が届くようになった。第三の（貸して見料を取る）貸本屋の存在が、このようないわば新興購読者層の経済力に見合うものとして発生してきたと言える。

江戸時代の商業出版は、井原西鶴（一六四二年～一六九三年）から出発したと言えるだろう。それについて中嶋隆は「現在、西鶴の没する元禄六年（一六九三）以前の出版システムに関する直接的資料は見出せない。たとえば、重版・類版の問題や、出版取締まりの具体的実態については、状況から推測を積み重ねていくに過ぎない。なにより、西鶴の小説が、どの程度利潤の意識された商品だったのか、あるいは、西鶴と当時の読者とが、主体的作者と不特定多数の読者という図式的関係で捉えられるのかという肝心の点に、考察の余地が残る。恐らく、こうした研究状況は、これからも続いていかざるを得ないだろう」<sup>(2)</sup>と指摘している。

さらに町人の経済活動が活発となることで、一般町人が経済的に力をつけてきた江戸時代の後期、すなわち本論文の研究対象とする曲亭馬琴が、人気作家として登場する文化・文政期（一八〇四年～一八三〇年）の頃になると、このような商業的な出版文化は一層成熟することになった。この時期に山東京伝、馬琴、式亭三馬、十返舎一九、為永春水、柳亭種彦など

の作家達が輩出され、彼らは娯楽的な読物を盛んに出版した。その中でも、馬琴の『南総里見八犬伝』（一八一四年～一八四二年）、種彦の『修紫田舎源氏』（一八二九年～一八四二年）などは、かなりの長編作品である。そのことは分冊形式の出版が長期にわたったことを意味するが、それだけ広範な購読者の人気を博したということであり、その意味で、長編作品の商業出版の嚆矢ともいえるのではないかと考えられる。

本論文では江戸文化後期の作家達の中で、本格的に執筆を商品とむすびつけた馬琴に注目し、商品としての文芸のあり方を考えてみたい。その際、次の三つの点を考慮する。

- 一、馬琴は京伝をはじめとする作家群のなかでも、もっとも職業作家として自立しようとしていること。
- 二、生活を維持していく手段として原稿料のみならず、書物の広告、売薬と店の宣伝（メディア機能）などを利用した点。

三、江戸時代の商品流通経済の発展による書物流通の機構（貸本屋）の変化及び成長。

書物流通という商品経済の状況下で、職業作家としての馬琴が誕生したことを考えると、経済と文化、そして文芸の関係性の中に、それ以前の時代にはない特徴が見られる。それは作品の創作に商業的な外部が影響していることで、その外部の様々な経済原理が作家、作品を支配することにもなる。このような経済流通構造の中で、書物を商品として認識し、それにもとづいて作品の内部を分析する。それを馬琴のケースにおいて見てみると、馬琴の読本がなぜ長編の構成を多く取っているのかを、内容からではなく、その形式性の分析から解釈することが可能になり、その形式性を支配しているのが江戸後期の商業出版であることが注目できる。こういった観点から本章は、江戸後期の作品をめぐる商業的システムに着目する。

## 第二節 「職業作家」馬琴の原稿料

江戸後期の職業作家達は兼業を伴って執筆をしていた。まだ、執筆が本業として定着していなかったが、兼業よりも執筆

活動で家族の生活まで支えようとした職業作家にとつきて、原稿料（潤筆料）は収入源の大きな部分を占めていた。『近世物之本江戸作者部類』には、「寛政に至て、京伝・馬琴両作のみ殊に年々に行かれて、部数一万余を売るにより、……初てくさぎうしの作に潤筆を定めたり」<sup>(3)</sup>とあるように、馬琴の作品がかなり売れていたことがわかる。その原稿料を推測して把握することで、作者の執筆の商業的な価値が明らかになるのではないかとと言える。特に馬琴という作家は日記、書簡などの様々な記録を残しており、その個人の記録から原稿料の推測が可能である。

佐藤悟は、馬琴における原稿料の問題をもとに合巻と読本ジャンルの性格や書物流通の主体としての貸本屋について論じている。この論考は作者の原稿料という経済状況が合巻と読本ジャンルの性格にまで影響を与えていることを明らかにしようとしている。

馬琴の板元に対する潤筆料値上げ要求の交渉を日記と書簡を精密に検証することにより、馬琴の主張する潤筆料の原理、及び合巻と読本の潤筆料の実額を明らかにし、さらにそれを通して板元と作者という問題を考えようと試みるものである。それは必然的に合巻と読本の性格についても論じることになり、さらに貸本屋が何故に読本出版の主体となりえたかという問題にも突き当たることになる。<sup>(4)</sup>

その潤筆料を最初にもらったのは山東京伝であるが、彼も煙草屋の商売を行い、収入の大半は執筆ではなく、商売によるものであった。完全に潤筆料だけで生活を営んだ最初の作家は、一九、馬琴であるとされる。

公平な目で見た場合、江戸で最初に潤筆を受けたのはやはり京伝であろう。しかし京伝は『伊波伝毛乃記』に書いてあるように京橋銀座一丁目に紙烟草入煙管店を構えていて、決して潤筆だけで生活していたわけではない。筆一本での生活を初めに行ったのは一九、次いで馬琴とするのが事実であろう。<sup>(5)</sup>

ここで見通そうとしている兼業から専業へという文芸作者のあり方の推移は、作者の自立と商品としての文芸の成立を捉えることにつながる。そのプロセスは本章にとっても首肯できるものである。つまり、馬琴や一九といった専業の職業作家の以前には、京伝が兼業作家として存在していた。彼は、自分が書いた作品に続刊の広告や店の宣伝文と一緒に載せ、利益を得ようとしていた。貸本屋を通して書物に触れた読者に、店とその商品の広告まで読ませたのである。これは合巻や読本といった文芸が、商品流通の一環たるコマースシャル的な役割を果たしていたことを意味する。言い換えれば、江戸後期における文芸は、商品流通経済に組み込まれ、広告の媒体という役割を補助的に果たしていた。現代における商業雑誌のメディア性をすでに孕んでいたであろう。次は馬琴の原稿料に視点を移し換え、作者の執筆をその対価に関連させて論じてみたい。

はじめに馬琴の原稿料に着目した麻生磯次は、『金瓶梅』一輯（五両）、『美少年録』三輯（三両）、『八犬伝』八編（十両）、『殺生石後日』（五両）、『八犬士略伝』（一両）、『八犬伝』八輯（十両）<sup>(6)</sup>と、その原稿料の金額について論じている。また、それを読本と合巻に分けて一冊本あたりの推算額をみると、「大体読本は一冊二両、合巻は一冊十枚で一両位の相場であった」<sup>(7)</sup>と述べている。さらに江戸後期の実際の原稿料は今の物価計算式で、ある程度は予測が可能である。麻生はもっと具体的な馬琴の原稿料を探っている。

原稿料の収入が、年に四十両として、これを米に換算すると、約四斗入百俵となる。尚他の諸物価などを勘案して見ると、今の相場で、約五六十万の年収があったと見てよいだろう。兎に角一代の文筆家としてならした馬琴の原稿料としては、甚だ微々たるものであった。今の作家に比べて、恵まれることが少なかったのである。<sup>(8)</sup>

しかしこの論考の推定額は時代の差異を考慮してみても、かなり少ないと思われる。筆一本で家族の生活まで支えていたとは言い難い。次の高木元や服部仁によるさらに詳細な説明を見てみよう。

○筆まめな馬琴の書き残した日記や書簡などによれば、文政・天保頃の原稿料は読本一集（五冊）で十七両（特に『八犬伝』の場合は二十二両）、一方は巻一編（八冊）で五両であったことが分かる。米一石を一両とし現在の標準価額米の値段で換算し、ちよつと乱暴な計算をしてみると読本一集で八十万円くらい、合巻一編で二十三万円ほどとなる。読本五冊は四百字詰原稿用紙二百五十枚ほど、合巻八冊で八十枚ほどだから、原稿料は一枚二千五百円〜三千円といったところであろう。一方年間年収は七十両（三百三十万円）ほどということになる。……読本は元手がかかるうえに一集十五〜二十匁（約九千円）と高く、四百部ほどしか売れなかった。一方合巻は安上がりのおかげで一編一匁七、八分（約九百円）で四、五千部売れたのである。また作者の側の問題としても、合巻は二週間ほどで書き上げることができるが、読本は最低でも二、三か月は必要なのである。(9)

○合巻は四巻二冊について五両、『八犬伝』以外の読本は一部十七両、これに四年間の出版部数を掛けて、四年間の『八犬伝』についての潤筆八十四両を加え、その上に書肆からの雑収（これは日記に載っているものはそのまま加え、載っていないが当然貰っている筈である売出しの際の肴代は計算に入れた）を加えた総合計が四年間の馬琴の書肆から得た収入である。『八犬伝』の潤筆を除いた収入を計算してみると、天保二年は七十五両二分と千疋、天保三年は三十二両と千三百疋、天保四年は二十七両と七百疋、天保五年は二十七両一分と千三百疋であり、これに天保六年正月に売出しとはならなかったが書く予定で書肆から受取っていた潤筆前金十八両と合巻の潤筆増金二両を足し、その上に『八犬伝』の潤筆八十四両を加えた二百六十五両三分と四千三百疋が四年間の馬琴が書肆から得る総収入である。一両は六千五百文という天保十三年の幕府公定比価によって銭を金に換算合計すれば二百八十二両一分強、年平均七十両プラスマイナス十両位であったろう、と計算上は一応こういう額が想定し得る。(10)

以上のように、この三つの先行論から推定算出額を計算してみると、「職業作家」に支払った原稿料は現在から見るとそ

れほど高くない。しかし、高くない原稿料に比べて、書物（特に読本）一冊の値段がきわめて高かったことがわかる。このことが書物の流通形態に貸本屋という独特の仲介者を生み出した。十九世紀初期になってから、かなり貸本屋の興隆があったことは想像に難くない。特に草双紙類に比べて読本というジャンルの書物は高値であり、一般の民衆が購入して読むのが難しい状況であった。そのような状況から貸本屋が読本を購入して一般読者に安値で提供するというシステムが成立していった。それは拡大する読者層に対応するための近世的システムだったということになる。貸本屋はその利益を得るため、書物流通の仲介者となり、さらには商業出版にも大きくかかわるようになっていった。

### 第三節 貸本屋による書物の流通形態

江戸時代の後期になると、出版文化はそれ以前の時代とは異なり、貸本屋を中心とする書物の流通が盛んになった。書物を提供する仲介業者の中心が貸本屋であり、近世後期の出版文化は、やがてこの貸本屋が支配するようになっていった。貸本屋は読者と直接にかかわったため、読者の好み、反応、要求などを直接に受けることが可能であった。そのため、やがて貸本屋が資本金の増加に伴って版元として本を出版する出版事業を担うことにもなった。一般の版元本屋がきわめて少数の上流購読者層と接触するだけであるのに対して、版元まで兼業した貸本屋は、より広範な大衆読者層（下級町人層）が好んで読む人気作品を早く把握していたのである。長友千代治は、貸本屋の起源、出現は寛永年間（一六二四～四三）であると述べている。

江戸時代において、一般大衆が小説や浄瑠璃本など娯楽読物を読む場合、本を買い求めて読むよりも、貸本屋や行商本屋から借りて、見料（見賃）を支払って読む方が普通であった。……貸本屋の誕生を、民間で出版が行われるようになり、商業本屋が栄え、娯楽的な本が豊富な挿画入りで出版され、一般大衆が読書を楽しむようになる頃からと、

漠然と推測することはできない。そしてその時期を整版印刷が普及しだし、庶民相手の仮名書中心の小説、実用書、娯楽読物が出版されだす寛永年間（一六二四―四三）頃と目安をたてることもできる。言うまでもなく、この前後から商業本屋は増加し、出版物も多くなることは、出版史や文学史に照らして明らかである。(11)

寛永期の商業本屋の増加、旺盛な出版物の生産などの出版文化の発展は、貸本屋の出現と大きく関連していることがわかる。貸本屋は現在のレンタルビデオ・レンタル漫画のように、店が本を購入し、それを読者（客）に一定の時間貸すことによってレンタル料を取り、利益を得る業者である。得意先や取引店などを中心に貸本を提供し、本屋の兼業も少なくなかった。明治期になつてからも、貸本のブームで貸本屋は繁盛し、貸本向けの小説が執筆されたケースが多かったとされる。



【図一】繪草紙屋「和泉屋市兵衛店」



【図二】貸本屋「鶴屋喜右衛門店」

長友は貸本屋の営業方法による形態で三つの貸本屋タイプを提示している。一は「市中巡回の貸本屋」、二は「郭くわくに入り込む貸本屋」、三は「芝居（小屋）に入り込む貸本屋」である。この三つの中、「市中巡回の貸本屋」について「江戸時代には、各種の品物を取り揃えた総合的な貸物屋、あるいは単品の特需品だけを貸す貸物屋があり、貸本屋もそのような貸物屋の一つであったともいえる。すなわち貸本は、いろいろな物品を貸す貸物屋の一物品であり、これがいわゆる貸本であった」<sup>(12)</sup>と、最初の貸本は貸物屋の様々な商品の中の一つであると指摘している。貸物屋の単なる一つの商品であった貸本は、町人の経済成長、識字層の増加、出版専門の版元、職業作家などの出現に伴い、確固たる商品として定着したのである。「遊郭」に入り込む貸本屋は、いうまでもなく遊女（女郎）を顧客にしていたのであろう。また「芝居（小屋）」に入り込む貸本屋は、役者を顧客にするというよりも、芝居を見物に来る客層に貸本の宣伝・貸出しをしたと思われる。その場合、役者評判記のたぐいなどが貸本の中心になったのであろう。

こうした貸本形態が、主に女性読者層の拡大に大きな影響を与えたことが推定される。それは、李氏朝鮮時代の「貫冊セチエク」（貸本）が都市に住む女性読者の増加と緊密に関係していることと同様であろうと考えられる。なお近世における出版文化に関する江戸と朝鮮の比較研究は、今後の課題としておきたい。このように貸本屋は読者層の増加、拡大化という面で、かなり重要な位置を占めていた。それについて長友は、貸本屋の繁栄と庶民文学の発展との関係を、次のように述べている。

貸本屋の目玉商品は八犬伝、朝夷巡島記、美少年録、水滸伝、三国志、西遊記、真田三代記、各種の太閤記などである。……貸本屋の繁盛は、識字人口の増加が招来したものである。武士の弟子は藩校で、町人の弟子は寺子屋で教育を受け、これがかかわらず丁稚奉公する者は奉公先で読み書き算盤を習ったので、識字人口は多かったと考えられる。……このようにして江戸時代後期は低俗で、読者迎合の娯楽読み物であふれることになった。しかし、これも決して悪いことではなかったようで、裾野をひろげた中から本当の庶民文学が生まれてきたようである。京伝や馬琴の作品を見る時、彼らの名作はこのことを承知した上での産物だったといえる。貸本屋は、出版や作者とかかわりながら庶民の娯楽読み

物を商品にしていたという理由で、庶民文学発展の原動力になっていたといえるのである。(13)

また、この貸本屋は江戸、京都、大坂の三大都市をはじめとして全国に広がっていった。その貸本屋の地域拡大と発展過程をみると、

享保（一七一六〜三六）頃の大坂では所謂本屋仲間の者と競合するまでに発達し、近世中期頃からは三都以外にも出現した。明和四（一七六七）年創業の名古屋大野屋惣八や、享和二（一八〇二）年にはすでに営業していた城ノ崎温泉中屋甚左衛門の如き温泉地の貸本屋等がそれである。隆盛期の近世後期になると、文化期（一八〇四〜一八）の江戸に貸本屋仲間が組織され、同五年の江戸には総数六五五人、同十年頃の大坂には約三〇〇人もいた。また店頭営業の定着もこの頃からである。(14)

とある。貸本屋は利益としての見料（一定の期間における一部の貸本に対する料金、今のレンタル料である）などをどの程度とり、期間はどのぐらいであったのか。前の引用に続けてみると、

見料と期間は享保期の河内柏原三田家の場合、月一回から三月に一回の巡回を受け、軍記等の見料が『書籍目録』記載売値の平均三割五分程であった。また明和八年の名古屋風月孫助は新刊浮世草子の見料を八分以上（期間不明）とし、これは売値の約六分の一である。中甚は蔵書の半数を越す浄瑠璃本を七日間三分前後で、大惣は丸本を十日間四、五分前後で貸し、幕末の江戸では見料統一協定も結ばれた。(15)

とある。また、長友は「貸本の見料は、たいていは一部全巻の冊数に対してつけられるのが普通である。読本の多くは貸本

にされるが、読本は普通半紙本五巻五冊であるから、貸本屋の巻数本一組の見料決定の基準はこのへんにあったと考えてよい。したがって厚冊本は二組に分けられる場合もあった<sup>(16)</sup>と、読本が貸本形態で流通されたことや一回分の出版形態である五冊あたりに見料を支払ったことを指摘している。

寛永期に出現をみた貸本屋は、それからほぼ一八〇年を経て、馬琴が登場する文化・文政期にはどのようなように成熟していたのであろうか。こういった観点から貸本屋の位置・役割をみようとする場合、例として頻繁に引かれるのが山東京伝の『双蝶記』(文化十年(一八一三))の次の序文である。

舅といふ字を縁にして、此草紙を婿をたづぬる嬪にたとへて見るに、絵は則顔姿なり。作は則意気なり。板元彫は紅白粉なり。摺仕立は嬪入衣裳なり。板元は親里なり。読くださる御方様は婿君なり。貸本屋様は媒人なり。……聞ぐるしきことおほければ、読んでくださる婿君のお気にいらぬがちなるべし。所を貸本屋様方のお謀人口にて、かやうくの娘がござる、顔かたちはいひぶんなし、心ばへはすこしおろかな生れなれど、其かはりには、舅姑のことばを背ず、婿君を大事にして、律義一へん所帯形気の娘でござる、先見合をして見給へと、拙をおもひ、あしきをよきにとりなして、すゝめこんでくださらば、縁どほき此娘も、よき婿君にありつくべし。野猪も伏猪といへばやさしく、馬鹿も結構人といえば聞えがよし。是則力とたのみ奉るお媒人の貸本屋様のいひなしによる所なり。然則ハ板元の親里の喜びおほく、祝儀の小謡千秋万歳の千箱の玉をしこためて、追摺の御注文、冊くの声をたのしむに至るべし。(17)

草紙(嬪)を、文字(舅)を通して(縁にして)読者(婿)に読んでもらえるという。つまり、草紙を出版する版元(板元)は作品(嬪)の親であり、貸本屋は作品(嬪)と読者(婿)を結ぶ媒人(仲人)である。仲人の貸本屋の役割、能力(口)は、作品(嬪)を高く評価し読者(婿)に提供することである。それによって版元(親)は、次々に作品の注文がやってくるのを飲むようになるという。この比喻は出版文化における貸本屋の役割が、日常生活の結婚という家と家とを結びつける

儀礼に類比（アナロジー）されるほど深く日常生活に溶け込んでいることをうかがわせる。いわば貸本屋が、日常の文化・娯楽生活を円滑に運ばせる紐帯として欠かすことができない存在となっているのである。それを前提とするならば、貸本屋の行う宣伝活動が大きく取り上げられていることに注意する必要がある。

これは、貸本屋の宣伝効果がきわめて大きく、それによって「追摺の御注文」という追加文の出版が行われるほど増冊販売に威力を発揮したことを意味しており、上記のように、書物の宣伝効果を重要な要素として京伝が捉えていることを理解できる。経済成長に伴って購読者層が一層拡大したことにより、出版文化はさらに発展し、それと同時に広告の重要性が認知されることとなった。京伝の言説はそのことを証言しているといってもよく、その宣伝活動において大きな役割を担ったのが貸本屋であった。広告は、まさに需要層の拡大に対して最も有効な情報媒体となっていたことが理解される。

こうしてみると、江戸時代後期の書物の出版に関しては、版元が作者の作品を印刷・刊行し、貸本屋がその宣伝をするとともに、読者に書物を提供するといった分業システムを取っていることがわかる。文化事業はこうして印刷・刊行・宣伝・販売と分業化され、そのうち宣伝・販売を分担したのが貸本屋であったが、時には貸本屋が直接に書物を出版、刊行したこともあったとみられる。<sup>(18)</sup> 流通経路の独占であるが、このことが馬琴の読本に関係して起こっていることが注目される。高木元によると、貸本屋が版元として出版に関わるのは、作家馬琴・挿絵師葛飾北斎の組み合わせの場合が多いとされる。特に馬琴作品を主に出版した貸本屋をみると、

- ① 貸本屋・衆星閣角丸屋甚助―『新編水滸画傳初編初帙』（文化二年九月）、『その、ゆき』（文化四年正月）、『新編水滸画傳初編初帙』（文化四年正月）。
- ② 貸本屋・山青堂山崎平八―『美濃舊衣八丈綺談』（文化十年十一月）、『南総里見八犬傳』（文化十一年十一月）、『南総里見八犬傳第二輯』（文化十三年十二月）。
- ③ 貸本屋・平林堂平林庄五郎―『繡像復讐石言遺響』（文化二年正月）、『椿説弓張月前編』（文化四年正月）、『敵討裏』

見葛葉』(文化四年正月)、『椿説弓張月後編』(文化五年正月)、『椿説弓張月續編』(文化五年十二月)、『椿説弓張月拾遺』(文化七年八月)、『椿説弓張月殘編』(文化八年三月)、『青砥藤網摸稜案』(文化九年正月)、『青砥藤網摸稜案後年』(文化九年十二月)。

④ 貸本屋・木蘭堂榎本惣右衛門、同平吉―『三七全傳南枸夢』(文化五年正月)、『阿旬殿兵衛實實記』(文化五年十一月)、『常夏草紙』(文化七年十二月)、『三七全傳第二編占夢南枸後記』(文化九年正月)、『絲櫻春蝶奇縁』(文化九年十二月)、『皿皿郷談』(文化十二年正月)。(19)

とある。このことが何を意味するかといえば、おそらく馬琴・北斎の絵入り読本の人気が高く、それだけ売れたということであろう。それゆえ貸本屋は継続的な利益を確保するため、作品の長編化を求めた。また、読者がその作品に対して長く関心と興味を維持することを期待した。本論で扱う『椿説弓張月』、『南総里見八犬伝』も、版元としての貸本屋が出版、流通したからには、同様の事情があつたのであろう。貸本屋の意向が作家に影響を与え、作者もそれを意識したことがうかがえる。しかし、だからといって作者の主體的な創作力を過小評価してはなるまい。むしろ、作者の創作力と貸本屋の意向とが相俟って馬琴読本の長編化が可能だつたわけである。鈴木重三は合巻における長編化を時代ごとに区分し、読本というジャンルとの関係を述べている。

私見の時代区分ではあるが、合巻勃興期(文化四―十四年)の敵討物から歌舞伎物・お家騒動物への推移とか、爛熟期(文化元―天保十四年)の情話巷説取材から支那種だねの翻案への転機及びこれに対抗する日本古典の翻案、そしてこれに伴う短編から長編への移行、衰退期(弘化元―慶応三年)における読本抄録の流行と、先行作の趣向を混淆濫用した大長編作の盛行、という合巻展開の歴史は、他面、対読本意識の消長を物語るものでもあつたといえる。(20)

前田愛はこれを書物流通の観点から探り、次のように述べている。

貸本屋はこの怠惰な読者のところへ期限（読本は十五日（村田幸吉氏談）人情本は三日（『英対暖語』））がくるとこまめに、継本にくる。この継本の制度、つまり読者が自動的に続編を受け取る体制が長編の読本や人情本の続刊を容易にしているのである。<sup>(21)</sup>

商品としての書物という観点に限って言えば、たしかに前田のいうように、読本、人情本などの作品が長編化されたのは、外部の貸本屋という流通構造下での継本という体制によるものといえる。すなわち、前田の観点を踏まえるならば、江戸後期作品の長編化には貸本屋の大きな役割が見られるといえる。また、鈴木が指摘しているように、合巻の長編化を読本との対抗意識から探り、ジャンル間の衝突として捉える見方もまた、貸本屋に続く江戸後期の長編化を説明する鍵になっている。

長編作品の外部的な側面としての継本という書物流通を認めた上で、馬琴はこの継本という体制に沿うために、どのような長編構想を取っているのかという点が筆者の問題意識の発端である。本節においては以上のように、長編化における外部の状況、ジャンル間の競争などが明らかとなった。

#### 第四節 書物（新刊・続刊）の広告

書物を商品として認めるとすれば、経済利益の追求という目的が浮上する。利益増加のためには、商品の宣伝、広告という商売戦略が必要となる。現代における新聞、テレビなどのメディアによる宣伝、広告のシステムは、江戸時代にはまだ存在していなかったが、江戸時代後期、メディア機能の広告役割は、書物によって担われていた。商品として出版された書物に新刊、続刊、売葉、店の宣伝・広告が載せられるようになったのである。商業出版が盛んとなり、職業作家の登場によって、書物を媒体にして利益を増やすことが重要な意味を持つことになった。林美一は、『式亭三馬『錦温石奇効報条』』『伊勢

名物通神風』、山東京伝『玉屋景物本』、十返舎一九『色摺新染形』、滝沢馬琴『句全伽羅柴舟』、為永春水『寿こがねの大帳』<sup>(2)</sup>など、江戸後期の職業作家たちが書物を通して商品を宣伝していたことを指摘している。商品の広告をすることで、書物が担う商業的な役割はさらに大きくなっていった。

まず、書物の宣伝・広告が、いつから始まったのかを確認しておこう。長友は最初の書物による広告について、次のように述べている。

延宝二年六月鶴屋喜右衛門刊『役者評判蚰蜒』<sup>やくしやひょうばんげりぢぢぢ</sup>の巻末には「追付役者通鏡綱目出申候」、同年八月刊『新野郎歌垣』には「後より出るやらうきやらのつえといふ書に詳しく記すべし」、天和三年正月刊『難波の兒は伊勢の白粉』には「三芝居子供推量物語三巻続、附り悪ふ言ふて芸にならぬ事」と次第に広告らしさを整え、元禄十二年十一月刊『福寿海』には女性の手紙の形式で「辰の年役者きぬふるひと申新板、紙数百枚ほど、来年早々」に刊行、御無心ながら各々様の御求めを頼んでいる。これは書名・内容・刊行時期、購読者対応等、広告要件を充足している。雑俳では元禄十五年閏八月万屋彦太郎刊『俳諧替狂言』に『俳諧鎧武者』（刊行は不詳）、同年九月柏原屋清右衛門刊『当世俳諧楊梅』に『俳諧梓神子』、同十六年霜月野村長兵衛刊『友ちから』に「神板俳諧書出来之分」十四種の蔵板月録を揚げ、この種の広告の初めとなっている。<sup>(23)</sup>

こうした書物による宣伝・広告が、京伝、馬琴などの職業作家が旺盛な活動を行った文化・文政期から盛んになったことは、二人の書いた多くの書物からうかがえる。京伝が書いた『双蝶記』刊記の広告の中で、書物に関する広告だけを参照してみよう。

ざっげきかうころく  
雑劇考古録

いちもくせんこしう  
一名一目千古集

前編大本五冊近刻

永寿堂近刻絵入読本并絵草紙合巻目録

大晦日かけ取物語 絵入読本

全部五冊

山東京伝

山東京伝作

実方雀物語 絵入読本

全部六冊

柳川重信画(24)

この刊記の広告から作者、挿絵画家、近刻の書物、書物の冊・形式などがうかがえる。馬琴の『椿説弓張月』後編の末尾にも、自分が書いたものに関する広告がみられる。

○曲亭主人著述平林堂藏版目録

鎮西八郎

椿説弓張月

為朝外伝

前編六冊発販

後編六冊発販

拾遺六冊近刻

敵討裏見葛葉

全五冊

繡像綺譚石言遺響

全五冊(26)

書物の新刊・続刊のための広告は、江戸後期の作品の奥付の前後に頻繁にみられ、高木はそれを「商品としての書物」、「出版予告」、「企画流通」などと分類している。(25)特に京伝、馬琴をはじめとする職業作家の書物には、新刊・続刊の広告が見られないものがないほど、広告は一般的な形式となっている。こうしてみると江戸時代後期において書物は娯楽的な読み物であるだけでなく、新刊・続刊などの広告誌の機能まで果たしていたのである。

## 第五節 売薬・店の宣伝

江戸後期の書物流通形態を考える際に、売薬は欠かせないものである。なぜならその売薬の流通形態は書物のそれと同様であったからである。三馬、京伝、馬琴などの作家は、書物に店の宣伝文や薬の広告を載せていた。それは兼業の一環でもあり、書物のコマース機能も明確に現している。その売薬の流通方法は、前述した貸本屋と同様に、行商の販売形態から始まっている。ここから、行商が江戸時代において流通の普遍的パターンであったことがうかがえる。書物と薬の購買が難しかった庶民にとって、その流通形態は有効であったともいえるだろう。

江戸の庶民の間では、行商もさかんであった。今日のこる富山売薬をはじめとして、田代売薬・大和売薬などが、その代表的なものだ。なかには、香具師とよばれる野武士あがりのものが、特定のルートをつくって、かなりの売薬を流通させていった例もある。多くの庶民たちは、まだまだ経済的には余裕がなかったので、こうした行商にたよることが、

売薬に限らず多かったようだ。(27)

このような売薬は本屋、貸本屋、職業作家たちによって頻繁に行われた。この点に関して長友は、次のように論じている。

江戸時代に作者が、また貸本屋も含めた本屋が、製薬や売薬、また売薬の取り次ぎをしていたことは、本の巻末広告や貼り付けの報条等で知られる。娯楽読物の本は、当時からメディアの機能を果たしていたのである。作者の売薬は、山東京伝の読書丸、式亭三馬の仙方延寿丹（京都田中宗悦製の取り次ぎ）・江戸の水、曲亭馬琴の帰脾湯・神女湯などが有名である。これらは大坂の本屋も取り次ぎ、売っていた。(28)

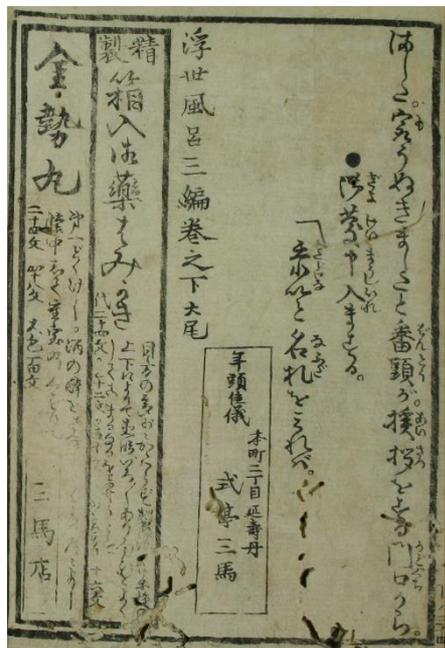
江戸後期の作家たちはどのような薬を販売し、広告していたか、具体的な例をあげてみよう。式亭三馬は『浮世風呂』第四編巻之中において、自分の店で作った薬を宣伝しており、また「秘方天女丸」や「婦人万病飲」のような婦人用の薬も売っていた。

#### 金勢丸

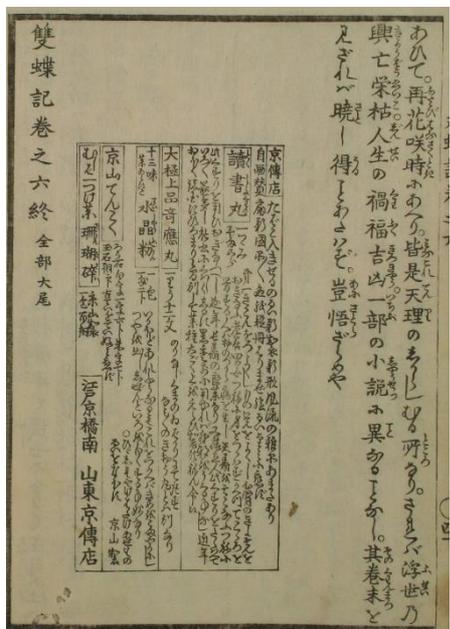
一包百文半包五十文酒をよくのましめもろくのどくけし気つけはら一道の秒薬其外諸症に能あり別して淫事にするしありすべて即功ある奇薬也

本町二丁目 三馬製(29)

○秘方天女丸 月やく不じゆんを治す名方、くわいにんをやすむ妙薬、とし子にて多病なる御方御用ひ無病と成なり。  
○婦人万病飲 つぎむしのくすりまくらさげ、其外婦人の諸びやう一さいによし。(30)



【図三】『浮世風呂 第四編』「金勢丸」



【図四】『双蝶記』「読書丸」

京伝も「山東京傳烟草入店」という商店を営業しながら作品を創作したのである。彼の作品である『忠臣水滸伝』（前編、寛政十一年（一七九九）・後編、享和元年（一八〇一））は、前期読本と後期読本の境になるものである。まだこの作品には、店の商品、薬に対する宣伝はみえず、続刊の広告だけが奥付に書かれている。彼の読本である『復讐奇談安積沼』（享和三年（一八〇三））には、「朱子読書丸」、「小児無病丸」、「山東京傳烟草入店」などの広告がみられる。文化六年（一八〇九）に刊行された『浮牡丹全伝』の奥付には、「京伝店商物口上」、「きれぢかみたばこ入類」、「きせる類めづらしきしんがん」などが書かれ、丸薬と一緒に自分の店の宣伝までしている。次は京伝の作品に頻繁に広告された「読書丸」という薬の宣伝文である。

読書丸 一包み壹匁五分 第一氣根を強くし、物覚をよくし、心腎の虚損を補ふ。老若男女常に身を使はず、却つて心

を勞する人は自ら病を生じ、天寿を損ふ。常に此薬を用ひ補ふべし。延年長寿の良薬なり。又旅立人、此薬を蓄へて色々益多し。能書に詳しく記す。暑寒前に用ゆれば、外邪を受くる事なし。近年多く諸国にひろまり候間、別して薬種大極上を選び、製法念入れ申し候。(31)

馬琴の書物にも薬の広告、宣伝などが載せられているのが見える。次は『南総里見八犬伝』に載せられている様々な薬の宣伝文である。

#### 曲亭家方賣劑畧目

○巻端半頁の餘帑あるをもて營生要緊の旨を録して恭しく四方の君子に告奉ること左の如し

家傳神女湯 一包百銅 こはこの作者が家傳の良方婦人諸病の神薬にしてわきて産前産後ちのみちに即功あり。

さるにより相傳五世に及て家に難産夭折の婦人あることなし。用ひやうはつばらにつゝみ紙にしるしつ。ちかき比はいよゝますくその功拔群自餘の賣劑にまされるよしにて求め給ふ君子少からず。いと歡しきことになん。

つぎ虫の妙薬 一包六十四銅 半包三十二銅 婦人毎月つきやくになり給ふときつぎむしにいためらるゝに用ひて甚妙也。又産後におり物くだりかぬるによし。すべて月やく不順に功あり。

精製奇應丸 大包〔二百粒余入〕代式朱 中包〔三十六りう入〕代一匁五分 小包〔十一粒入〕代五分〔但五分より下小うり不仕候〕

世にきおふ丸彗しといへども製方等閑にしてやくしゆに極品をえらまざれば奇應丸の名ありといふともきおふ丸の功のうなし。こゝに製するところ薬種のあたひをいとはず分量すべて法にしたがひ製法尤つゝしめり。是をよのつねの奇應丸にくらぶればその功百倍万倍也。

諸病針灸ほどこし療治 毎月七日 廿七日

是まで廿三日なりしを廿七日とす。朝四ツときより。所望の人々は入來せよ。いさゝかも謝物はうけ不申。こは孩児が宿願によりその師小坂先生出席点誌す。

右製藥弘所並に施療 江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店向 瀧澤氏精製「曲亭」

取次所 △大坂心齋橋筋唐物町南へ入 書林河内屋太介 △江戸芝神明前 書肆いつみや市兵衛

○招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり此印なきは偽劑に係る(32)

以上、江戸後期の書物によるコマール機能に着目し、三馬、京伝、馬琴の薬に関する宣伝・広告文を考察した。この考察から、売薬という商業手段による書物のメディア機能が一層明らかとなった。また、書物と売薬が同じ流通形態によって行われたことを通して、書物の商品としての認識がより顕著になったといえる。

## 第六節 おわりに

本章では、江戸後期の商業出版、商業作家、書物流通機構、書物による広告などについて考察した。「職業作家」馬琴の原稿料、貸本屋による書物の流通形態、書物(新刊・続刊)の広告、売薬・店の宣伝にあらわれた商品としての書物は、現在の言い方を用いるならば、メディア機能の役割を果たし、近世の流通経済にもつながるものとなった。このような書物の商品性に関する認識が重要であるのは、その商品性が、商業作家の作品構想まで支配することになったからである。特に江戸後期の本格的な商業作家であった馬琴は、商品としての書物や書物のメディア性を認識し、その認識は彼の作品構想ないし構成に影響を及ぼした。

筆者はこれらの点に留意し、第二章からは、江戸後期の出版経済、書物流通の発展の影響を受けた馬琴が、自分の作品を長編物として執筆した際、いかなる方法をもって購読者の興味と関心を維持させたのか、その際の販売戦略とはいかなるも

のであったのかに注目していきたい。長編の構成及び構想のモチーフを、以上の観点から明らかにしたいと考える。

【注】

(1) 商業出版はいつから始まり、発展していったのか。この疑問にこたえる前に、まず印刷文化の発展過程を探ってみよう。長友千代治はその印刷形式の変容、その中でも書肆版の普及と流布について詳しく指摘している。それを簡略に整理してみると、仏教経典類、五山版、禅僧、漢籍の詩文類は、中世の檀林（学問所）から整版印刷の形式で出版された。その整版印刷に対し、キリシタン版、漢字仮名まじり本の活字印刷、文禄・慶長の役の時に伝来した古活字版が盛んに印刷された。その後、伏見版（木活字）、駿河版（銅活字）の官版に対して、嵯峨本のような私版が中心となり、江戸時代初期の上流階級や上流町人を読者にして古典復興が行われた。このような私版は営利目的であり、本屋が関与した書肆版が主となり、その書肆版の生成は読者の誕生にも深くつながる。その書肆版は読者層の拡大に合わせ、読みやすく大量出版を可能にするために、整版印刷が適合であった、と述べており、その時期を寛永初期と捉えている（長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、二〇〇一年）。その上で今田洋三は、寛永期の出版文化に対し、

① 仏書の開版が寺院工房から出版業者の手に移ったこと。② 日本古典の解放の進展したこと。③ 漢籍類の開版活動が盛んになったこと。④ 仮名草子や俳諧書など新しい作品が続きつぎと開版されたこと。⑤ 説教正本・浄瑠璃本を主要作品とする業者が登場したことである、と五つの特徴をあげている（今田洋三『江戸の本屋』日本放送出版協会、一九七七年、三十～三十一頁）。その寛永期における出版文化の発展は、本稿で扱う貸本屋の起源や商業出版の開始という面で、重要な転換期であった。

(2) 中嶋隆「西鶴とメディア―『日本永代蔵』異版をめぐる出版状況」『江戸文学と出版メディア』笠間書院、二〇〇一年、一五六頁。

(3) 曲亭馬琴著・徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』岩波書店、二〇一四年、四一頁。

(4) 佐藤悟「馬琴の潤筆料と板元―合巻と読本」『日本文学研究論文集二二一 馬琴』若草書房、二〇〇〇年、七頁。

- (5) 服部仁「天保初年に於ける馬琴の年収」『学習院大学国語国文学会誌』十八号 学習院大学国語国文学会、一九七四年、二二二頁。
- (6) 麻生磯次『滝沢馬琴』吉川弘文館、一九五九年、五八〜五九頁。
- (7) 『滝沢馬琴』五八頁。
- (8) 麻生磯次「馬琴の原稿生活」『国語と国文学』至文堂、一九五四年、二頁。
- (9) 高木元「小説の原稿料」『研究資料日本古典文学』第四卷 近世小説』明治書院、一九八三年、三六二頁。
- (10) 服部仁(5)の掲載論文、二八頁。
- (11) 長友千代治『近世貸本屋の研究』東京堂出版、一九八二年、十九〜二十頁。
- (12) 長友千代治『江戸時代の図書流通』思文閣出版、二〇〇二年、一一五頁。
- (13) 長友千代治『近世の読書』青裳堂書店、一九八二年。
- (14) 石川了「貸本屋」『研究資料日本古典文学』第四卷 近世小説』明治書院、一九八三年、二二二頁。
- (15) 同書。
- (16) 『近世貸本屋の研究』五九頁。
- (17) 水野稔編『山東京傳全集』第十七巻 ペリかん社、二〇〇三年、四五一〜四五二頁。
- (18) 高木元「江戸読本の形成―貸本屋の出版をめぐる―」『文学』岩波書店、一九八八年、八月号)、前田愛「出版社と読者―貸本屋の役割を中心として」『近代読者の成立』(前田愛著作集第二巻 筑摩書房、一九八九年)に、板元としての貸本屋の出版について論じている。
- (19) 高木元『江戸読本の研究』ペリかん社、一九九五年、三七〜四一頁。
- (20) 鈴木重三『絵本と浮世絵』美術出版社、一九七九年、四五頁。
- (21) 『近代読者の成立』二一八三頁。

- (22) 林美一校訂『江戸広告文学』未完江戸文学刊行会、一九八二年。
- (23) 『江戸時代の書物と読書』一九一頁。
- (24) 『山東京傳全集』第十七巻 六三三〜六三四頁。
- (25) 後藤丹治校注『日本古典文学大系六 椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、四一二頁。
- (26) 高木元「江戸読本の新刊予告と〈作者〉―テキストフォーマット論覚書」『日本文学』日本文学協会、一九九四年一〇月。
- (27) 吉岡信『江戸の生薬屋』青蛙房、一九九四年、六三頁。
- (28) 『江戸時代の図書流通』二九五頁。
- (29) 神保五彌校注『浮世風呂 戯場粹言幕の外 大千世界楽屋探』岩波書店、一九八九年、二五一頁。
- (30) 花咲一男『江戸売薬志』近世風俗研究会、一九五六年、一一〇頁。
- (31) 山東京伝『双蝶記』の本文末に載せられている「読書丸」の宣伝文である。、『山東京傳全集』第十七巻 二九七頁。
- (32) 高木元によると、この本文は馬琴が刊行後に校正を加えた馬琴旧蔵の初板本(国会本)を参照しつつ、架蔵板本に拠った翻刻テキストデータであるという。高木元『南総里見八犬伝』(<http://www.fumikura.net>)

## 第二章 『椿説弓張月』の読本の世界——〈話型〉と「勸善懲悪」を通して

### 第一節 はじめに

江戸後期においては、専門作家の出現、貸本屋の興隆、読者層の増加などにより、執筆とは文人が教養のために書く行為ではなく、売文商売に繋がる行為となった。馬琴は、本格的な商業作家としてそのような時流の中に登場する。彼は、長編読本と長編合巻の作家として著名になるわけだが、すでに前章で考察したように、貸本の出版まで担った貸本屋のみならず、職業作家がもつとも意識するのは、自分の作品に対する読者の興味であり、人気であっただろう。そして人気が出たとなると、いかにその作品を長期に渡って創作し続けるか、貸本屋はいかに利潤を挙げ、作者はより豊かな原稿料をいかに確保するかという点が、意識の対象であったにちがいない。

馬琴が読本のなかで力点をおいたのが、後期の史伝物であり、その嚆矢となった作品が『椿説弓張月』である。これは、山東京伝の代作期を経て、彼が読本作家として一人立ちするきっかけとなった作品でもある。この長編小説の成功によって、馬琴は江戸後期を代表する作家となり、その後、作品のおおむねが長編物として書かれた。ここに本章の問題関心がある。それは、商品としての読本の流通経済と読本の創作との相関ということである。馬琴時代、すでに創作は個人の主体の問題に止まらず、経済的な利潤の追求という他者的な力が無視され得なくなっていたのである。

さらに、従来の通説によれば、馬琴の読本は「勸善懲悪」と因果応報の原理に貫かれた作品であると言われている。とりわけ、この「勸善懲悪」は江戸時代の儒学（朱子学）のイデオロギーという観点から分析され、馬琴の読本もまたそれに即する観点で論じられてきた。つまり作品の内容に沿う分析というより、固いイデオロギー的解釈が主であったのである。

しかし江戸時代が前近代社会だからといって、その社会を単純に儒教社会と決めつけるのは、果たしてどうであろうか（ただし、仏教が近世においても限定的に影響を与えていたことは否定していない）。というのは、これから問題にしようとして

いる「勸善懲悪」という用語は、確かにいかにも儒教の教化思想のように見える。けれども、たとえば中村幸彦は馬琴の読本の魅力を『八犬伝』が代表する、冴えた悪の描写の見え始めるのも、この『弓張月』である」と論じており<sup>(1)</sup>、その「悪」とは儒教の概念では捉えられない幅を持っていることがわかってくるためである。いわゆる馬琴の「悪」は、非儒教的な社会的文脈の密接に結びついている。特に本論が注目するのは、馬琴の時代、とりわけ文化文政期を中心にして、西洋の大型蒸気帆船（いわゆる異国船）が日本列島の各地沿岸に出没し、主要な港湾に強制的に着岸するといった事件が頻繁に起こるようになったという点である。このような異国船の出没が、当時の社会的文脈を形成し始めたことに注目したい。筆者はかねてより、中村幸彦のいう「悪の描写」が、この西洋の衝撃による社会的文脈の形成と深く関係するという点に注目している。その代表ともいべき馬琴の作品が『椿説弓張月』である（『弓張月』における「悪の描写」については、第二部三章を参照）。ところが、この『弓張月』の執筆は、馬琴が「勸善懲悪」という用語を自己の作品構成に自覚的に結びつける以前に行われたものであった。しかしこの作品における「悪」の造型は、直線的に「勸善懲悪」の形成に結びついていくと考えられる。そしてその形成過程こそ、馬琴の「悪の活写」なのである。したがって、その過程をたどることが本論の目的ということになる。

本章では、このような課題を背景として、馬琴が作品を長編化するために、どのような技法と構造を利用したのかを追究しようと思う。特に〈話型〉と〈勸善懲悪〉に焦点を当てて分析を行っていききたい。この課題を扱ううえでも、馬琴の最初の史伝長編小説である『椿説弓張月』を対象にするのは適当であろう。

## 第二節 馬琴の長編構想と中国明代小説——「話」を媒介にして

『椿説弓張月』は、その内容から言っても『保元物語』を下敷きにして記されたとされている。ただ、さらにその上に、麻生磯次は『江戸文学と中国文学』のなかで、中国の小説『水滸後伝』の影響に関して、「唐山の演義小説に倣ひ、多くは

憑空結構の筆に成るとあるやうに、支那小説に脚色を借りたもので、殊に為朝が琉球に渡つてからの事蹟は主として水滸後伝に趣向を求めたものである<sup>(2)</sup>と指摘した。徳田武は『弓張月』が一代記物である点に注目し、中国の長編演義小説『狄青演義』との影響関係について論じている。<sup>(3)</sup>だが大高洋司は「後藤丹治が力を尽された古典大系版の注釈に、『水滸後伝』からの直接の投影がひとつも指摘されていないという結果は、やはり重んずべきものではなからうか。……筆者は、『弓張月』執筆時、馬琴の手許に『水滸後伝』は置かれていなかったと想像する。琉球での物語は『水滸後伝』がなくても、十分にこのようなものとして執筆することが可能である<sup>(4)</sup>と指摘している。本論文では、プレテキストの問題については後述する。したがってひとまず置くとして、以上の指摘から、本論文全体のテーマにつながる『椿説弓張月』の長編化構想に対し、中国の長編白話小説からの影響を重視することはできないと理解できるのではないだろうか。ただそれだからといって、日本の中世以前の物語伝統をことさらに重視するということではない。むしろバランスの問題として、本作品の長編化に關しては、白話小説の影響だけでなく、もっと日本の中世以前の物語伝統を考慮すべきであると思う。

そこで、本論文では『椿説弓張月』の長編化構想について、その筋立からも析出される〈話型〉を中心にして考えてみたい。〈話型〉とは昔話研究の用語で、昔話の構成要素の単位を指す語であるが、これが中世の説話や物語にも認められることは周知の事実となっている。この〈話型〉に關しては、単なる作中の構成要素を指示するだけでなく、作品全体を貫く主題として捉えることも可能である。関根賢司は「物語作者は、〈話型〉のヴァリエーションを生産するだけにとどまっていられない。〈話型〉をなぞるのではなくて、〈話型〉を受肉化すること、〈話型〉を登場人物たちの内面へと解体していくこと、〈話型〉を表現の領域に解き放つことによつて、〈話型〉を物語の主題・思想へと奉仕せしめることこそが、作者の責務でなければならぬ<sup>(5)</sup>」と、作品の主題・思想における〈話型〉に重要な意味付けをしている。馬琴の讀本は一回ずつの「話」で構成されているが、その四、五回の「話」の分量が重なつて讀本的な〈話型〉を形成しているのである。

この〈話型〉は、宗教的あるいは説教的な縁起などの口承性にかかわる。これは、エクリチュール書記化されたかたちで当代にまで伝

えられてきた雅なる文学には理解を示せない、多くの新興町人層に対して、その心の奥に存在する宗教心と結びついて共有されていたと考えられ得る。馬琴の読本は、彼らにも共有されている〈話型〉を媒介にして、珍奇な物語内容が理解されるよう、趣向化されていたという点で注目される。馬琴の創作にとってこの〈話型〉は、プレテキストの問題とともに、みずからの作品を、拡大する大衆読者（＝新興町人層）に理解されるようにする（享受されるようにする）手段であった。この点に、あらためて注意しておきたい。

馬琴の長編構想の読本、たとえば初期の『弓張月』や後期の『八犬伝』などのうちに、中国の演義小説『水滸伝』『水滸後伝』などの影響が認められるのは通説となっている。最もわかりやすいところでは、『八犬伝』は「輯、冊（巻）、帙、号、套、回」という形式を取っているが、これは中国の『水滸伝』『三国志演義』が、章回小説と呼ばれる段落区分の仕掛けとして、「話」の筋立を「章、回」などの形式で区切りをつけることにならったものである。中国小説で、「話」の構造を元に「章、回」で区切るのは、「話」の語り（＝講談）が大衆に聞かれる際に、興味を持続化させ、「話」の適度の量である一回ごとに面白さを盛り込み、趣向を早く伝えるための仕掛けであったとされる。『八犬伝』の段落形式に「回」があるのは、その叙述が基本的に「話」であり、読者の興味を持続させる適度の分量で区切りをつけるという考え方がそこに取り入れられた結果だということになる。

この中国小説は、江戸の読本にどのような影響を及ぼしたのであろうか。そこには二つの影響が認められると考えられる。一つは出版における分冊出版という形態である。二つには、江戸の町人読者における読本の享受形態として、〈読む／聞く〉という集団享受形態の普及が考えられる。これらの特徴の背景には、出版・販売・流通を担う版元とともに、流通の多くを担う貸本屋の存在があり、それが出版と享受の両者に深く関係していると推測されるのである。

この後者の読本の享受形態についても、形式化された〈読む／聞く〉という享受形態の影響が大きかった。これは、中国明代小説が、原型として、講釈における講釈師と聴衆という大衆芸能の形態が取り込まれたためである。中国明代小説は、宋・元時代における大衆芸能としての「話」の語り物、すなわち講釈の台本が原型であったとされる。もともと、原型に近

い書記本は話本と呼ばれたのであるが、それは講釈師によって口演されてきた説話（「話」）を台本とし、記録され始めたものである。演芸としての講釈ということから、一定の時間内で口演を終える必要があり、「話」の筋立を何回かに分けて口演が行われた。それが話本に「章、回」という段落をもうけるという形式性をもちいたわけである。この話本が次第に読み物として定着し、話本小説と呼ばれるようになった。話本小説における「章、回」の区切りに関しても、聴衆（読者）が「話」の展開に興味を持続できる講釈＝口演のボリュームが原型であり、それが話本の「章、回」の叙述量へと引き継がれていったわけである。さらにいうと、「話」には聴衆の受けによって人気を博したものが出てくる。すると講釈師もその「話」の類型（ヴァリエーション）を作り、反復して口演したとされる。これが中国白話小説を通じ、江戸期の読本において、物語世界の〈反復〉という創作法に影響したと思われる。つまり、「話」には口演（＝講釈）性とヴァリエーション（反復）性が結びついているということである。江戸の町人層読者が読本を享受するに当たり、このあり方は、知識人読者が読本を音読し、下級町人層はそれを耳で聞いて楽しんだという享受形態を一般化させるうえで、それなりの役割を果たしたということを考慮してよいのであろう。

馬琴の長編構想の読本でも、このような中国明代小説の「話」が物語世界を語る文体に影響を与えたといつてよからう。ただしこの点を、「話」の口演（＝講釈）性だけで決めつけることはできない。そこには日本中世の語り物文芸の語り文体が、その物語内容とともに読本の文体に入り込んでいったという点も大きい。さらに馬琴読本には、民話的な〈話型〉を物語世界の核とし、そこにさまざまに「受肉化」することで〈反復〉されるものが多いという点ことにも着目できる。おそらくこの特徴には、中国明代小説の「話」の類型（反復）性が影響していたとも言えよう。

これまで、中国明代小説を「話」という観点から考察してきた。そしてそこには、口演（＝講釈）性と類型（反復）性が析出された。ところが、「話」にはいまひとつフィクション性が析出される。このフィクション性について、馬琴自身が注目していたことを示す言説が見える。たとえば、最初の長編読本『弓張月』のうちに、すでにその影響が認められる。扉の口絵に続く自序の中に、その原型となる言説が提示されているのである。

この書保元しよほうげんの猛將八郎もうせう爲朝じせきの事蹟のぶを述だん。その談唐山だんもろこしの演義小説えんぎしょうせつに做ならひ多おほくは憑空結構ひやくうけつこうの筆ふでに成なる。閱者理外みるものりぐわいの幻境げんきやうに遊あそぶとして加かなり。(前編序) (6)

ここで馬琴は、この読本は中世の軍記物語『保元物語』の爲朝の忠実さと説話とを主要な筋立(「事跡」)とするが、本文は「演義小説」(たとえば『三国志演義』など)の語りの方法に習うと語っている。その目的は、単なる史実の語りではなく、「憑空結構」、すなわちフィクションによる「話」の構成によって、読者を「閱者理外の幻境に遊ぶ」ことにあるというのである。まさに「話」は〈史〉の事実性、あるいは世間の束縛からの逸脱に求められていることがわかる。「話」のフィクション性が求められたという点には、過去の〈学〉の伝統など知らない大衆読者を楽しませたい、あるいは世間を束縛と感じている町人層に逸脱の開放を味わせたいという意図が強く押し出されている。その目的は、後篇卷一の備考にも、

コノ弓張月ユミハリツキハ、唐山モロコシノ演義エンギニ擬シ、專作モツハラツクリ設タル物語ナレド、今アゲツラフコトノミハ、例レイノ寓言クウゲンニアラズ。只世タビヨノ童子等ドウジラニ、爲朝タメトモノ武徳ブトクヲ知ラセマホシクテ、漫スマロニ筆フデヲ走ラスルノミ。(7)

と語られている。ここから、爲朝の事実と説話に、まったく別個の「話」のフィクション(「作り設タル物語」)を増補することで、奇想天外な伝奇小説に語り直そうとしているのがうかがえる。そしてこの言説で注目されるのは、この読本が「例ノ寓言ニアラズ」と断言されていることである。「寓言」とは他の物事にことよせて意見や教訓を述べることである。もしその教訓性に、後期の読本『八犬伝』に見えるようになった「勸善懲悪」を重ね合わせるとすれば、『弓張月』にはまだ「勸善懲悪」の道徳的な教訓性は意図されていないということになる。

しかし『弓張月』に見られる馬琴の執筆目的には、これまでの言説と相反し矛盾するというほどではないが、乖離すると

いつてもよいような言説もまた認められる。拾遺の冒頭部分には次のようにある。

古人言あり曰く、稗編小説は、蓋し正史の文を演べて、而して之を家喻戸曉せんと欲す。坊間野史の諸書は、乃ち風を捕へ影を捉へ、以て市井の耳目を眩ます。孰れか社撰無稽反つて人の觀聽を乱すを知らんと。今弓張月の一書は、小説と云ふと雖も、然も故實を引用し、悉く正史に遵ひ、並びに巧みに一事を借り妄りに一語を設け以て世人の惑を滋くせず。故に源あり委あり、徴すべく據るべし。(拾遺序)(8)

問題は冒頭の一文「稗編小説は、蓋し正史の分を演べて、而して之を家喻戸曉せんと欲す」にある。「稗編小説」とは稗史小説ともいわれる演義小説、すなわちこの『弓張月』のことである。この一文は、その読本の位置づけについてなのであるが、それは「坊間野史の読書」と比較されていることに注意する必要がある。「坊間野史」を対立させた場合、「正史」に近づけようとしていることがわかる。そうすれば、さきの「憑空結構」「専作り設タル物語」とは矛盾するように見られることもあるのではないか。馬琴はなぜ、このように語る必要があつたのであろうか。

そこには、「話」が読者に新たな物語世界を開いて見せるという馬琴の確固とした自負を認めることができる。「話」はけっして「正史」ではない。その性格はすでに述べたように、口誦性(＝語り文体)、類型性(＝単純性)、フィクション性にまとめられる。馬琴による「話」の自負は、これまでの「正史」すなわち雅と文(学)の教養から疎外されていた町人層(庶民層、大衆層)が、経済的実力を付けてきたことで新たな文化・文芸への参加を欲望し始めたという背景に裏打ちされていた。そこには、伝統文芸の多くが雅と学を重んじた教養の高い人々に独占されていたという面があつた。このような伝統的で高尚な雅と学は、町人層には縁遠かつた。「話」という方法は、そのように伝統から疎外されていた大衆的な町人層を、新たな文化・文芸へと参加させるにふさわしい入口を提供するものであつた。それを馬琴は「家喻戸曉」といったのである。したがってさきに指摘した一文の矛盾は、伝統的な雅と学を媒介させるのではなく、語りと単純化、そしてフィクションを

介し、文化（「正史」）への参加における方法の差異を無視したところに生じたものであった。したがって馬琴は、自己の読本を「正史」に近づける権威化の目的で著しているのではないことがわかる。町人の文化への欲求は、新たな文化の形成に向かうはずであった。ただ馬琴は、それにはまだ自覚的でなく、「正史」への参加の方法に新たな道を見出した。それが「話」への自負だったのである。

白話小説は、本来大衆に向かって口演として語る、市井に話題を取った「話」である。これは、日本では口誦文体による読本にあたる。これが「小説」というものであり、小説（「話」）を語るというのは一種の芸能で、口演者の巧みな語りを聴衆が娯楽として聞いて楽しむというものであった。馬琴は、中国小説の背景に芸能性が存在することを十分に理解していた。そこには、伝統的で高尚な文芸・芸能を重んじた上流の知識人だけでなく、そのような雅なる文芸・芸能などに縁遠かった江戸の庶民（新興町人層）に楽しんでもらうことで、新しい文化へと参加してもらおうという目的もあった。それが馬琴にとって「正史」の文に従い稗編小説を演べることである。つまり自らの作品における雅俗の共賞を目指していたのである。

馬琴は、「正史」の概念をズラし、新興町人層と協同で作り上げる新しい文化こそ、従来の閉鎖的な伝統文化に代わって「正史」を引き継ぐものと意識していたかもしれない。そういう「正史」の意味の拡大は、保守的な馬琴のことであるから、意図しなかったに違いあるまい。おそらく彼は、伝統的な雅に属する「正史」の枠組みを借用し、そこに珍奇な趣向をこらして新興町人層の読者に受け入れやすくし、さらには文語を避けて口語を中心にする「話」の口演性を利用して、雅と学の教養からは疎外されていた新興町人層の読者にとっても聞きやすく、あるいは読みやすとしたのであろう。

馬琴は、その演義小説の形式と文体を、次の長編読本『南総里見八犬伝』にも取り入れ、新たな創作の中心的方法として利用した。そのことはこの読本の肇輯の序に「肇輯五巻は、里見氏の安房に起れるよしを演（のぶ）。亦是唐山演義の書、その趣に擬したれば、軍記と大同小異あり」と述べていることから知られる。まさに馬琴は、「演（のぶ）」と言葉から、「正史」と稗編小説の双方を、自らの作品に巧みに反映させようとしたのではないだろうか。

また、馬琴が白話小説の「話」を「章、回」に区分するという構成を取り入れたということには、江戸時代の出版事情

が大きく影響している。すでに第一章で論じたことであるが、江戸時代に出版された本は、貸本屋を通して一般読者に読まれてきた。馬琴にとっても、貸本屋との関係が深かったことはいまでもない。馬琴と貸本屋の関係に対し、大高洋司は「馬琴はまず貸本屋を念頭に置いて読本を書き、京伝は必ずしもそうではなかった。……馬琴に準じ、力関係においても本屋の発言力が一層増大する、といったケースが一般的と予想される」<sup>(9)</sup>と述べ、馬琴読本における貸本屋の影響力を強調している。この関係が本章にとって重要なのは、貸本という形式によって読者がテキストを読む（あるいは語ってくれたものを聴く）時間が限られるということである。つまり、そのために「話」の全体を読むことができないとすれば「話」を細分化するほかにないことになる。そこに「章、回」という区切りが必要になったと考えられるわけである。

「章、回」の構成を取ったことの背景には、板元∥貸本屋の小規模な資本と技術力の限界から当時の出版能力が関係することで、商品としての価値が大きく関わっていたという点がある。まず出版能力としては、馬琴長編の読本を一挙に出版することはまだ難しかった。そのため、分冊形式による小規模出版の販売しかできなかった。そこにはもちろん、購読者の適正な値段付けがかかわっている。そのことが商品としての価値とも関わる。つまり、分冊形式の販売は作品への興味の増大、あるいは持続がなければならない。それが商品としての価値を保つということに通じよう。たとえば読本に人気が出た場合、逆に「話」を拡大・増幅することで、読者の興味をつなぎ止める必要もあったと思われる。そこで、より機能的に作品を売るという目的のもとに「話」の類型性・反復性が求められたという事情も考えられるであろう。

中国の白話小説の原型になる「話」の内容と形式には、語られる文芸の伝統が貫かれている。貸本屋を通して、表現の限界性といった事情が、そのような「話」の内容と形式にかかわるとすれば、そのことこそが馬琴小説の長編化と深く関係しているのではないだろうか。それが、馬琴読本の長編化構想と〈話型〉の関係として、本論文で問われることになる。

馬琴は白話小説の「話」の内容と形式にこだわっていた。それは眼で読むというよりも耳で聞く物語の伝統を意識するということであった。野史ではなく、正史に基づいた話を創造し、しかもその正史は中国のものではなく、その時代、一般の人々によく知られていたものであるということが重要であった。これこそ、大衆読者に享受されるにふさわしい文芸の構造

であったということは、すでに言及しておいた。この目的こそ、中国のある一つのジャンルを踏襲して何かを再生産しようとするのではなく、巧みにアレンジして日本的なもので蘇らせているということではないだろうか。

中村幸彦は「実際、弓張月につけば、かかる構成と性格の設定である為に、一事件一人物は、その出現と終末が悉く明らかになっていて、各々一箇の紡錘形を形成する。それらの小紡錘形がいくつか相寄って、又、中、大の紡錘形を作り、全巻がその悉くを収めて最大の紡錘形で終るのである。云われる京伝の絵巻物的構成に対する馬琴の建築的な構成とはこれであるが、その構成の美事さを初めて示したのが、弓張月であった。かかる構成方法と性格の設定あってこそ、読本の第一の特色である」<sup>(10)</sup>と述べて、本作品が小↓中↓大へと次第に大きくなり、長編化の秘密をはらむ理由を説明していて、これが作品全体の「建築的な構成」になっていると指摘している。中村は『弓張月』における「建築的な構成」を「小説錘形」で捉えているのに対し、論者は〈話型〉で作品の構成方法を探ってみたい。また、小さなモチーフが次第に大きなモチーフへと肥大していくという認識はとらず、まさしく〈話型〉の反復と連鎖とが、本作品の長編構想につながっていると考えて考察をおこないたい。

このように、完結性をもつ「話」の伝統を考慮したテキスト、貸本屋から本を借りて読む時・発生する時間の制約といった点が、馬琴の章回小説にも大きな影響を与えている。作品のテキストはその条件に従うことになる。その条件下で、馬琴はどのような趣向と技法を利用しながら本作品を長編化していったのであろうか。本論文では、『椿説弓張月』におけるストーリーを支える、あるいは貫くとも言える〈話型〉の反復と連鎖を検討し、後期読本の長編化構想を論じていきたい。

### 第三節 『椿説弓張月』における物語と〈話型〉

前節で見たように関根賢司は、〈話型〉を演繹的方法で捉えており、〈話型〉はまず物語を帰納する方法として、主題そのものと捉えられてよいと論じている。<sup>(11)</sup>だがそれだけではなく、逆に物語とは〈話型〉を「受肉化」(演繹)したものであ

る。とすれば、物語から〈話型〉、すなわち主題に帰納することだけが物語論ではなく、〈話型〉は、物語作者の訴えた「主題」に「奉仕」する構成要素として考えられねばならないのである。〈話型〉を主題に縮めるだけでは、貧しい概念となるだけである。その束縛から解放し、物語の構成というレベルで考えようと関根は主張していることになる。この見解は、本論が繰り返して強調してきた、馬琴による構成機能をめぐる解釈と一致するといえる。構成機能とは、主題主義であるというよりも筋立主義であるというのが本論の見解である。

ここからさらに論を進めるまえに、いま一つ、〈話型〉を享受論的観点から捉えた見解を見ておこう。江戸の町人層における文芸の享受方法と理解力がどのようなものだったのかと問う場合、娯楽の目で楽しむ見世物や舞台演芸以外の多くは、耳から聞く文芸、すなわち宗教的あるいは説教節的な法語系文芸か芸能的語り物文芸であった。つまり、音読による〈読む／聞く〉という享受方法が一般的であったといわれる。雅なる文芸は、豪華な装丁本が示唆するように、高級武士層という限られた範囲でしか流通していなかった。したがって、江戸の町人層が文芸を享受する余裕をもつようになったとき、耳で聞く文芸の理解の上で、その享受は、心底に存在する宗教心性と結びついた〈話型〉に媒介されて行われたと考えられる。新たな物語は、つねに伝統的な物語の枠組みに即するかたちで理解されていった。だとすれば、馬琴の読本についても、町人層に共有されている〈話型〉を媒介にして、その「珍奇」な物語内容が理解されるように、趣向化・筋立化がなされていたと考えられるのである。馬琴の創作の上では、日本古典だけでなく、中国の史伝小説をプレテキストとする物語構成法が大いに利用された。とりわけこの〈話型〉を「受肉化」した構成法が、拡大する町人層読者に享受されるうえで、もつとも有力な手段であったことにあらためて注意しておきたい。

このように、馬琴の読本にとって〈話型〉は、物語の構成機能を担うとともに、読者の読本享受に当たって物語内容と読者の理解とを媒介するはたらきをするものであった。それでは、これらの物語群の構成を担う〈話型〉とはどのようなものであったのだろうか。

『弓張月』は、『保元物語』の為朝説話とは全く異なり、京都における為朝の物語である。ただそれでも、為朝と筑紫の

結びつきは史実ゆえに無視し難い。父為義は、院政の大立者信西に憎まれた為朝をかばったうえで、為朝をひとまず筑紫へと遣わすことにした。為朝の流浪が始まることになる。

筑紫の豊後に着いた時、為朝は黄金の牌（札）がついた鶴を助けて大切に面倒を見る。やがて夢の啓示を受け、鶴を持って肥後国へ赴く。ここで、肥後の在地土豪と思われる阿蘇三郎平忠国とその娘の白縫という新しい人物が登場し、白縫が飼っていた猿が白縫の下女若葉を殺す。忠国は大いに怒り、この悪猿を殺した男を婿にすると断言する。しかし猿は文殊院の小寺に逃げ籠もってしまったために、殺生を禁ずる寺のこと、弓を引いて猿を殺すことが禁止される。そこで、為朝は一計を案じて、鶴を放し、高い塔に昇っていた猿を落して殺し、忠国に賞でられその娘白縫と結婚することになる。為朝は白縫を妻に迎え、忠国の後楯を得て、その武勇をもって隣国を支配しようとする。そのために、九州の武士達は味方になったり、敵になったりする。為朝は敵対する者を討ち、一年の間に九か国を征服し、人々は鎮西八郎と呼ぶようになった。

この話から話素を析出する形で見ると、

- ① 主人公が土地にその足を踏み入れる。
- ② その土地に侵入し、脅威となっている怪物・怪異が主人公の前に現れ、その旅を妨害しようとする。
- ③ 主人公は妨害する怪物・怪異と対決する。
- ④ 主人公はさまざまな武勇と智力をふるって怪物・怪異を退治する。
- ⑤ 主人公は旅を続け、次の土地に足を踏み入れる。

という話素が取り出せる。このような〈話型〉が物語をつらぬいて物語を〈反復〉〈連鎖〉させていくのであるが、為朝が旅を続け、村里（村落共同体）に入ってきたら、なぜ怪物が出現して旅の行く手を妨げるのかが改めて問われる。このようなパターンは『西遊記』に近似している。いったい怪物はどこから現われて来るのか、そしてまた怪物と村里の関係はどのよ

うなものなのだろうか。物語ではもはやその理由を語ることはない。ここではこの点に触れておこう。説明を必要としないということは、読者もその理由がわかっているからだといえる。つまり、この作者と読者の間の了解の背景にあるのが〈話型〉であった。〈話型〉は近世の町人層にとって心奥に潜んでいる宗教的要素を多分に含む物語的知にほかならないからである。語られる物語がこの物語的知を活性化させることで、何もかもが語られなくても、物語の理解は導かれたのである。このように見てくると、馬琴の物語群はまさに関根がいうように、〈話型〉を受肉化しているともいえる。だからこそ、為朝に敵対する怪物は、民話の残る土地の森や沼地に棲み着く邪悪霊を原型にして、それを大きくスペクタクル化したモノとして肉付けされているとができるのではないだろうか。

しかし、もし単に村里を訪れた英雄（為朝）と、村里を襲う邪悪霊（怪物）との間で戦いが起こり、英雄が怪物を打ち倒し、村里の安寧を取り戻せるという単純な神話のリメイクだけを馬琴の物語群が伝えるのであれば、まだそれほど民話や昔話から離れていない江戸の町人層読者の好奇心を魅くことはできなかったと思われる。そのために馬琴は、当時流行していた歌舞伎や繁華街の見世物小屋に現れる、異形なモノに象徴される珍奇な趣向を盛り込むという工夫をする必要があった。当時あって流行の珍奇さといえ、見世物小屋の出し物のデフォルメであり、歌舞伎的・スペクタクル的な舞台装置であった。まず前者についていえば、馬琴の当時、江戸の繁華街に立ち並ぶ見世物小屋で見られるような、幻術・妖術を怪物の身に付け足すことが考えられる。事例を挙げて見よう。

○藤市の家へ、夕ぐれ毎に獣の皮をもて来て売る、五十あまりの男ありけり。……件の男、この春のころより皮をもて来て賣るに、いかにして獣をば取やらん、皮に鏝の痕もなし。……爲朝聞給ひて、「さればこそ怪物なれ。彼が来る時に、わが弓弦の断るゝ事、既に数回に及べり。わが弓は五石にあまりて弦もいと太やかなれば、おのづから断んやうなし。（琵琶湖の西岸、前編十一回）<sup>12</sup>

○大に嗥りてよろめき出るを見れば、頭より尾に至て六七尺もあるらんとおぼしき、山猫にてぞありける。この猫長女に脇を刺れながら、なほ死もやらでありけるを、衆人終に打殺して、海へ沈め侍りき。この嶋には山牛野馬、猫鼠の外に絶て獣なしそが中に、一種山猫と呼做すものあり。大き五尺に餘りて足は短く尾は長しこの猫ふかく山中に躲れて、常には人の眼睛にかゝらず。折ふし岩端などに彼が食残したる、鳥の毛あるを見るのみ。しかれども飢るときは、里に出て食を竊み、動もすれば小児を含去りて、食ふことあれど、かゝる事はいと希なり。(女護嶋、後編十七回) (13)



【図一】『椿説弓張月』前編十一回



【図二】『椿説弓張月』後編十七回

たとえば引用の前者を見ると、「さればこそ怪物なれ」と為朝が断言しているのは、目につけた獵師の体軀が巨大だったり、異常に醜悪だったりしているからではない。「いかにして獣をば取やらん、皮に鏝の痕もなし」といつているところからして、その獵師が不思議な幻術を操って獣を取ったと察知されたためである。ここから幻術・妖術が、「怪物」と結びついていることがわかる。そのことは後者の例でも認められる。引用の後者の「山猫」が怪物である理由とされるのは、日ごろ喰い残しは見せても、その姿を村里の人に見せることがないからである（「常には人の眼睛にかゝらず」）。やはり幻術がからんでいることが暗示されていよう。

これが第一の見世物小屋的趣向だとすれば、第二の趣向は、歌舞伎的なスペクタクル的場面描写の中で、怪物が同じく幻術・妖術を操り、為朝を危機に陥れるような場面にしばしば見られる。その場面では、近世の歌舞伎の舞台装置ごときスペクタクル風な趣向と通い合う仕掛けが語られる。とりわけ主人公（役者）の装束の華麗さと大仰な振舞、おどろおどろしい体軀の怪物が見せる派手な躍動、といった視覚的イメージを豊かに盛り込む叙述（＝語り）が展開される。おそらく、読本を耳で聞く読者に対し、スリリングでスペクタクルな場面描写を心の中に思い浮かべさせるように興じさせたのであろう。馬琴の読本を、地方土着の話や語り物芸能から離陸させたのは、まずもって時代の状況に対する民衆の関心に対する読本作家としての鋭敏な情報処理能力であるとともに、以上のような江戸という都市において、人気を博していた見世物小屋的デフォルメと、舞台芸術における視覚的イメージの豊かなスペクタクル場面を、趣向として大胆に取り込んだその新しさであったといえよう。

また『弓張月』の〈悪〉の造型で注目すべきなのは、筑紫下向物語と伊豆八丈島配流物語における邪悪靈的怪異・怪物の造型であった。その物語の構成は、いかに時代の関心を趣向として取り込めるであろうか。ここでは、異国に対する民衆のアンビバレンとな好奇心に反応するかたちで、その畏怖心が〈悪〉に置換され、異国の〈悪〉に結びつけられている。その結合とは、ある土地に伝わる話を〈話型〉における異界（＝異郷）表象へと移行させ、筋立てとして肉付けすることであった。その〈話型〉の中で、特に人の住む土地を脅かそうとして異界を出て襲来してくる邪悪靈と人（英雄）との闘争が、原

型となっていたと言える。民話は、英雄が邪悪霊との対決を経て悪霊を退治することで、土地の安泰が回復するとともに、退治してくれた英雄が、土地の守護神として鎮守に祭られるという話型でつらぬかれている。

しかし馬琴読本が示唆しているのは、邪悪霊がそこから現われ出てきた当の異界（異郷）を読者に印象づけることであつた。それは〈話型〉を世界構造として認知させることだつたともいえる。『弓張月』はそのような世界構造としての、また物語の原型としての〈話型〉を素材にして、（1）神の位置に、目的地の辺境へと旅する英雄為朝を据えた。（2）物語的趣向から、また世界構造との関係において、邪悪霊の〈悪〉の要素をめぐり、異界の幻想のうちに当代の視覚的芸能をふんだんに取り込み、馬琴の物語とした。たとえば、異界から現われてくる怪物の巨大化が目につくが、これは英雄為朝の巨大性に對抗させるためで、相互に影響し合つて〈悪〉が巨大化していく。ただし本論では、その巨大化に際しては異界（異郷）との結合があり、異国への畏怖心を強調しようとする当代性が付与され、馬琴読本にはたらいたのではないかとも見ている。次には、悪なる怪物に付け加えられたものとして、さまざまな呪術・妖術が挙げられる。これは読本の叙述（語り）だからこそ可能な、幻術・妖術の可視化という読本の趣向にもとづくものであり、それがここでは怪物の見世物小屋的デフォルメと呼ばれている。これによつて為朝の戦いは、スペクタクルに溢れた場面構成に仕立てられるようになった。このデフォルメとスペクタクル的な描写的語りにより、〈悪〉の造型は、これまでよりもいっそう醜悪で怪奇なものを好む当代的趣向に合致したということができよう。これこそ、当代の町人層読者＝聴き手を怯えさせるとともに、喜ばせる効果を持つものとして構想されたのである。

このまとめを受けて〈話型〉と「懲悪」の関係を、あらためて世界構造、すなわち世界観の媒介を含め、どのように捉えるべきなのかという問題に移行しよう。以上のような『弓張月』の悪の造型について確認しておく、その悪人造型の特徴は、醜悪で巨大な体躯を持つて、為朝の旅の行く手をはばもうとし、通過する村里に出現してくるモノであつた。これは〈話型〉に出現してくる邪悪霊的怪物に近似する点である。それに対し、たとえば、のちの『八犬伝』に典型的に見える馬琴の〈悪人〉造型は、領国あるいは王朝の君臣関係の中に入り込んでおり、奸智と策謀をもつて君臣関係を混乱させ、みずから

君主の地位を奪い取ろうとはかる人物である。これは、これまで見てきた〈悪〉の造型とはまったく異なっており、〈話型〉が筋立や人物類型とも深く関係していることが分かる。

その一方で、〈話型〉の構造についても注意を払いたい。たとえば高橋亨は「多くの場合、〈話型〉（タイプ）はプロットやモチーフと混用され、様々によばれているのだが、その原型は、異郷（異界）との交通をどのように幻覚して語るのかにあると言えよう」<sup>(14)</sup>というように、「異郷（異界）との交通」を背景にした二次元的世界観の下で、その世界観が〈話型〉の枠組みとして用いられている点に、注意を促している。馬琴の物語世界と世界観の関係という課題は〈話型〉のコスモロジーとしての二次元的世界観で終わるというわけではない。その背後には馬琴の時代、異国船の出没をまのあたりにするようになり、江戸町人層に視野が拡大し、異国（西洋）への畏怖と憧れへと増幅されて、アンビバレント性を喚起するようになったということがある。その高揚する関心を受け止めたのが戯作者らであろう。彼らを実際に見たことのない中で、異国はいかに表象すべきなのであろうか。手許にはおそらく、当時までに伝来していた関連書物や世界全図、地球儀などといった乏しい情報しかなかった。神話・民話の〈話型〉に表出される異次元世界は、異国という異次元世界に類比（アナロジー）されたと考えられる。戯作者馬琴も、庶民の内面に潜在する伝統的な「異界」（「異郷」）への憧れを異界の表象へと結びつけた。江戸の町人層は、「異界」表象を介し、この日本列島の外部へとあこがれを向け始めたのである。

こうして、世界観には新旧が混在するようになっていった。西洋伝来の世界全図や地球儀などにもとづく地図的世界観が、これまでの仏教的・儒教的世界観と拮抗するまでに台頭し、〈知〉の転換期を迎えようとしていたのである。ただここではあくまでも、〈話型〉のコスモロジーとしての二元的世界観が、馬琴読本の物語世界にとってどのような役割を果たしているかということを追求するに留めたい。

その二次元的世界観と結びつけられたのが善悪論である。馬琴読本の物語世界では、善がこの人間世界と、悪が「異界」と結びつけられていた。次元を異にするそれぞれの世界に善悪が分かれ、したがって絶対的となる。それがやがて「勸善懲悪」を支えていくことになる。その見通しからいえば、〈話型〉の二次元的世界観と地図的世界観や異国とを媒介したものが、

「異界」から出現して来る怪物・怪異であった。そこで、怪物の棲息する「異界」が構成要素となる〈話型〉の立場から、馬琴読本の物語を考察しなおすことにしよう。たとえば、筑紫下向物語の悪猿退治の物語を事例として見たい。その事例の内容は以下のようである。

筑紫の豊後に着いた時、為朝は黄金の牌（札）がついた鶴を助けて大切に面倒を見る。やがて夢の啓示を受け、鶴を持って肥後国へ赴く。ここで肥後の在地土豪と思われる阿蘇三郎平忠国とその娘の白縫が為朝を歓待する。やがて白縫が飼っていた猿が白縫の下女若葉を殺す。忠国は大いに怒り、この悪猿を殺した男を娘白縫の婿にすると断言する。しかし猿は文殊院の小寺に逃げ籠もってしまったために、殺生を禁ずる寺のこと、為朝は弓を引いて猿を殺すことが禁止される。そこで、一計を案じ、鶴を放して高い塔に昇っていた猿を落し、それを為朝は素早く射殺し、忠国に賞でられその娘白縫と結婚することになる。為朝は白縫を妻に迎え、忠国の後楯を得て、その武勇をもって隣国を支配しようとする。そのために、九州の武士達は味方になったり、敵になったりする。為朝は敵対する者を討ち、一年の間に九か国を征服し、人々は鎮西八郎と呼ぶようになった。

このような物語に沿って〈話型〉を析出すると、そこからは貴種流離譚の〈話型〉が取り出せる。具体的にその要素を抽出すると、①筑紫という周縁に放逐された為朝はその地の土豪に身を寄せる。すると、②悪猿が現われ土豪の家に危害を及ぼす。③為朝が智謀をもって悪猿を退治する。④それを喜んだ土豪が娘を為朝に与える。⑤白縫と結婚した為朝は九州（九か国）を抑え、統治することになるというものである。しかしこのように析出された〈話型〉は本来『保元物語』の為朝説話には見出すことができない。この〈話型〉を普遍化してみると、①貴種は中央から周縁に放逐される。②悪なる霊的存在が周縁に混乱をもたらす。③貴種はその試練（苦難）を克服する。④周縁（異国）の王に喜ばれてその娘と結婚する。⑤貴種は王の娘と結婚し、地方を統治し、文明化させるといふふう 요약されよう。

『弓張月』の主要なプロットをこの〈話型〉の側から見ると、興味深い点が浮かび上がる。『弓張月』のストーリーラインを見てみよう。為朝が上京し、京の宮廷において乱暴を働いたため、筑紫に下向を命ぜられる、京都政界の混乱、保元の乱、崇徳上皇方の敗北、為朝の捕縛、伊豆八丈島配流物語、そして最後に琉球新王朝樹立物語が続く。かくして、そこには確かに「忠からの放逐」「周縁における試練・克服」「中心への帰還」「中心の退廃と再生」「中心の再生の失敗」「中心からの追放」といった貴種流離譚の〈話型〉が析出される。大きな物語の全体が〈話型〉でつらぬかれていくわけである。ところが、すでに論じたように、物語群を構成する一つ一つの小説がそれぞれに「忠からの放逐」「周縁の混沌」「周縁における試練と克服」という〈話型〉を反復・連鎖させていた。つまり部分にも〈話型〉が浸透していたことを示唆する。〈話型〉が全体と部分に繰り返されているのである。

このような〈話型〉による構成ということは、『弓張月』の全体と部分がすべて、語りⅡハナシの集積として構成されていることをうかがわせる。これは、江戸時代に執筆された『弓張月』が史実から遠く隔たっていて、もはや語りⅡハナシでしか伝承されていなかったと考えるよりも、読者との関係において、語りⅡハナシという物語構成が選ばれたということを示していよう。それは原拠（プレ・テキスト）とした『保元物語』に、おそらくまだ記憶されていた史実の重みが残っているのとは、大いに異なる状況なのである。

徳田武は、『弓張月』では貴種流離譚の〈話型〉を意識的に援用した物語が意図されていると述べる。彼によれば、「第二回から、『弓張月』は、高貴な人間が遠国を流浪する悲哀を描く貴種流離譚の形をとっていることが明らかになってくる。第一の要素は、貴種が父や兄弟、親しい者から疎外されることである。……『弓張月』で山雄と重季がともに身代わり死して為朝を救うのは、これまたこの説話要素を踏まえたものであり、こう見てくると、馬琴が貴種流離譚の型を守って話を構成しようとする明確に意図していることがわかる」<sup>(15)</sup>と指摘される。つまり、時代がはるかに隔たれば、史実はすでに忘れられ、史実をハナシとして成型する〈話型〉が為朝像を形成していったと考えられる。この点は、この徳田論からも推察しうる店である。

貴種流離譚とは、幼い神や英雄が、本郷を離れて流浪し、様々な試練を経て、動物・女性などの助け、知恵の働き、財宝の発見などによって困難を克服して尊い地位に上がったり、あるいは死後、神となったりするというものである。すでに見てきたように、『椿説弓張月』には〈話型〉として、為朝という貴種の放逐、周縁での苦難、貴種の中央への帰還、放逐された地域に新たな文明を創造する、などが表れていた。貴種流離譚は世界の様々な物語文学で見られる〈話型〉であるが、その貴種流離譚という〈話型〉について、関根賢司はこう述べている。「折口信夫の創出した〈貴種流離譚〉という概念は、日本文学の基本的な要素、モチーフのひとつをあらわす名辞であったが、物語研究の領域では、天人女房譚や難題求婚譚、致富長者譚などならば物語のパターンのひとつ、〈話型〉として考えられるようになってきた。物語のプロットを構成するさまざまな話素（モチーフ）のひとつとしてではなく、物語を構造的に把握するための概念として用いられたのである。貴種流離譚という捉えかたを手がかりとして、日本文学の悲劇性を考察するか、物語の基本的な様式性を追究するか、研究の指向のちがいでそれはあったのだから、折口学の名彙が曖昧化されたということではあるまい」<sup>(16)</sup>。関根はこのように、研究の指向による貴種流離譚の変容を指摘する。この関根論で注目すべきは、この〈話型〉は折口以来ハナシの要素と認識されてきているが、この術語が広く使われるようになる、次第に概念が拡大していったという点である。それは誤用ということではない。なぜなら、もともとこの術語は、分析される話素に厳密化されていたわけではないからである。むしろこの術語は、物語（ハナシ）を「構造的に把握するための概念」として用いられることも可能なのである。

馬琴は、この貴種流離譚の〈話型〉を本作品の重要な要素とし、『保元物語』における為朝の物語を再構成し直したのである。〈話型〉によって産み出される物語は、すでに触れたことであるが、庶民がそれを宗教的心性の基層として共有する場合、その町人層の好み・理解に合致する。その限りで馬琴は、為朝の物語に奇想性を加えていったとしても、町人層読者の好みに新鮮な（珍奇な）驚きとして、その奇想性を投げかけたのである。このような〈話型〉が、『椿説弓張月』では主人公為朝の流浪による地理的空間の拡大と絡み合い、さまざまな空間で反復され、登場人物を差し替えることで物語を連鎖させていく。その反復と連鎖が、本作品の長編化の重要な構造となっているのである。

この〈話型〉の反復は、為朝が琉球に渡り、その地に新しい王朝を樹立するに至るまで続く際に、新たな英雄の島渡りという〈話型〉を加える。それは貴種流離譚の〈話型〉とは異なるが、まったく別個というよりも、その流浪の変型として捉えられる。流浪する為朝はさまざまな地域で苦難に落ち、それを乗り越え、そしてその土地出身の女性と結婚する。このようなストーリーは、貴種流離譚と島渡りの〈話型〉との交錯として捉えられ、それらが反復されることで物語を長編化させていく。つまり、筑紫を旅立ったあとの為朝は、伊豆の大島、女護嶋・男の嶋（鬼が嶋）、琉球の順で島渡りに流浪していくが、これは①に当たる周縁への放逐に、流浪と島渡りの〈話型〉が結びついたプロットであると言えるだろう。

#### 第四節 『椿説弓張月』における「勸善懲悪」

もともと馬琴の『弓張月』に見られる「悪」は、前代から続く昔話・民話の世界観を規定する人間世界／異界（異郷）の二次元的世界観と結びついていた。つまり「悪」が、異界に棲息する怪異・怪物と結びつけられていたのである。ところが、その民話的世界観に新旧の世界観が影響を与えるようになって来た。このように多次元化した世界観と「悪」の関係が、馬琴の読本の空間構成を規定することになり、『弓張月』の後半になって「異国」が悪と結びつくといった趣向を見せるようになる。これは、読者の異国への関心に対応し、それだけ読者の〈知〉が拡大されたことを示唆している。本論は、このような異国への関心が高まった時期に、馬琴読本の「勸善懲悪」を改めて読み取ることにした。したがってここからは、プロットを支える「勸善懲悪」のもつ構成機能を考察することが課題となる。

しかしあらためて考えると、「勸善懲悪」という言葉が馬琴読本に現れてくるのは意外に遅い。読本としては後期に属する『南総里見八犬伝』第三輯の序に、「勸懲」という用語が使われているのが初出とされる。その言葉が、善悪という道徳的価値を表す概念を含むことから、当然教化目的を持つ主題への言及と断定され、その概念が一举に馬琴読本のすべてをつらぬいていると決めつけられるようになった。明治初期、坪内逍遙の馬琴批判は、馬琴の前近代性を「勸善懲悪」に置き換え、

徹底的に批判するものと化した。この評論は、いわばその批判を媒介とし、近代の文芸の高尚性を前近代文芸の通俗性から画する定説となった。この評論は、近世文学の卑俗性に対する断固たる批判を含むが、これはその後の馬琴研究史をつらぬく権威ある定説となり、現代に至るまで通用している。だが、馬琴読本と「勸善懲悪」の関係を問う立場を反省するならば、果たして「勸善懲悪」が馬琴読本のすべてを覆う、教化目的を持つ主題なのか、という根本的な前提が問われるべきなのではないか。そしてこの問いは、近年まで投げ掛けられることがなかったのではないだろうか。

近年では高木元が、教化目的説に限られた定説に対して疑問を提出している。その中で彼は、「勸善懲悪」について「むしろ読本の構成上要求された原理で、作者と読者を結ぶ暗黙の約束である。(仮説された理法)として機能したのではなからうか。ならばこの原理は因果応報観を介して複雑にからまる長編の作品世界に秩序を与え、文学的にも調和のとれた構成の美を発揮せしめたと考えられるのである。……こうしてみると、「悪の活写のための隠れ簑として勸懲を建て前とした」などという解釈は論外としても、読本という伝奇宇宙を創出するに当たって、勸善懲悪は必要欠くべからざる小説原理であったとみることができよう」(17)と論じている。「ここで彼が指摘する「小説原理」とは、「勸善懲悪」が、かならずしも主題として機能していただけでなく、構成を成り立たせる原理としての機能をも持っていたのではないか、という主張である。その構成する機能が「長編の作品世界に秩序を与え」「調和のとれた構成の美」に寄与するのである。馬琴の「勸善懲悪」が、読本の「構成上の原理」であると指摘されることにより、「勸善懲悪」とは道徳的教化を意味する主題である、とする従来の通説は、大きく乗り越えられ得るだろう。しかもその「原理」は、「作者と読者を結ぶ」とされる。したがって、主題に力点を置くよりも、どのように物語を構成していくのが読者の関心を魅くのだという点に馬琴が気づき、そしてそこに力点が置かれていたという捉え方がここでなされており、これは魅力的である。物語が何を目的にしているかというよりも、どのように物語の面白さを語るかに読本の魅力があるということである。しかし高木は、その構成機能を持つとされる「勸善懲悪」が、物語内の筋立や趣向にどのように機能しているかについて、作品に即して具体的に分析することは行っていない。

ただそれでも、道徳教化の目的というリゴリスティックな側面だけではなく、場面に描かれる対象や叙述の美しさ・面白

さといった審美的な価値を交えた構成そのものが持つ魅力に向けて、「勸善懲悪」の意味を拡大させようとしているところは、新たな方向性を切り開こうとする高木の意欲を見出すことができる。馬琴の時代は、歌舞伎や浄瑠璃など舞台芸術が最も爛熟した時期であり、まさに何を目的にするかではなく、どのように演出するかが問われる時代であった。とすれば、読本だけが時代の潮流から逸脱していたとはとうてい思われない。高木はその見通しの上で「勸善懲悪」を再検討しようとしたと考えられる。本論も、その当時の娯楽世界の状況を考え、それとはまるで無縁な教化目的説とともに、馬琴読本がすべて「勸善懲悪」に覆われているのだろうかという疑問を持つようになったものである。つまり上述したものが「勸善懲悪」論の定説だとされる一方で、『弓張月』の〈悪〉の造型を分析し、後期の『八大伝』の〈悪人〉造型を検証することを通じて、両者の間には〈悪〉をめぐって大きな断絶があることに気づいたのである。

『弓張月』にも多くの悪人が登場してくる。しかしこの悪人について、馬琴の創意は認められない。むしろ、善人と悪人との明確な区別の下に物語が構成される『太平記』における、悪人⇨逆臣の系譜に連なる既成の悪人造型が踏襲され、そこにとどまっている。それに対して馬琴が創意を發揮した〈悪〉の造型は、悪人という人間ではなく、怪物・異人・怪異といったモノ的存在であり、モノ的存在が主人公の為朝の行動・行為を妨害する邪悪として出現する。物語構成において、彼らは確かに善人に闘いを挑む〈悪〉なのである。そしてそのストーリーを結末までたどると、モノ的存在は善人によって倒されて終わっている。まさに「懲悪」を実現しているといえる。しかし、そのことが果たして教化目的を持つ主題になっているといえるだろうか。モノ的存在が倒されたところに教化的目的があると言っても、そこには無理があるろう。物語の面白さは、モノ的存在の異形・怪異であり、為朝との闘いの大仰な仕掛けにある。このことは叙述からすぐにわかる。まさに何をでなく、どのようにという点が重要なのである。

本論では、この〈悪〉の造型を『弓張月』の物語構成との関係で検討したい。その検討の中で注意を払うのは、馬琴がこの〈悪〉を造型するに当って、なぜ『太平記』的な君臣関係の中に忠臣（善）と逆臣（悪）とを輩出させるといった趣向を取らず、むしろもっと素朴な民話や昔話の〈話型〉に内包される二次元的世界観と結びつけたのか、ということであった。

怪物・異人・怪異は、われわれ人間の住む、この世界とは異次元の時空間に棲息し、そこからこの人間世界に侵入、あるいは侵犯して、人間世界に混乱と暴力をもたらすという発想に注目したためである。馬琴は読本読者の〈知〉の程度に合わせてこのような昔話や民話の〈話型〉を借用したのであるか。そこには読者の拡大という事実と、庶民的読者は文芸の伝統から切り離されている（断絶している）という事実を考えるべきであろう。

これまで「勸善懲悪」、とりわけ「懲悪」のプロットを焦点にして〈話型〉と関係づけ、論じてきた。この節の最後に当たって〈善人〉の側に立って、〈善人〉の為朝をめぐり、彼が〈悪〉を倒したあと、どのような結末が想定されていたのかを考えておきたい。その場合、筑紫下向物語にあつては、話型に支えられる筋立が強く表面に現われており、〈悪〉を倒した為朝はその土地を去って行くために、その後の村落がどうなったのかについてはそれほど叙述されることはない。次の伊豆八丈島配流物語に関しても、京都から八丈島までの物語については、その前の物語の影響が残っているが、八丈島への島渡り以後に繰り返される為朝島渡り物語には、話型の影響は、確かに見られるものの、それ以外の新しいモチーフが付け加わっていることを看過すべきではなからう。

まず注意すべきなのは、この島渡り物語に入ると、〈善／悪〉の対立構造に〈英雄／怪物〉といった話型の対立構造が重ね合わされていた物語の構成に、それとは少し異なる要素が加わるといふ点である。この点は、〈悪〉なる怪物を倒したあと、の為朝造型に多く認められるようになる。次の事例から見よう。

○為朝大嶋を管領し給ひてより、民に耕作蠶飼を教へ、みずから山野徜徉にして業をすめ、善をあげて不能をあはれみ給ひければ、洲民よろこびて父母のおもひをなせり。さる程に為朝は、三宅、新嶋、神津、利嶋、御藏、すべて五の嶋をも打従へ、数十艘の船を造らせて、往返國司に異ならず。（前編十四回）<sup>18</sup>

○我今彼等を教化して、男女を一ツに住し、伊豆七嶋のうちに加へば、後の世に益あるべしとおぼして、殊さらに言葉をや和げ、ふかく憐み給ひしかば……。 （後編十七回）<sup>19</sup>

為朝による大島以下の伊豆七島や女護島、男の島といった架空の島々への島渡りの目的は、征服・支配・開墾、そして産業振興と野蛮な因習打破、それによる文明的統治といった征服と文明化の過程である。その事例を、たとえば最初の引用例の伊豆大島で見ると、〈悪〉を滅ぼし、島を「管領」した為朝は、島の住人に「耕作蠶飼を教え」、さらには開墾の手が加わっていない未開の地には牧畜の「業」を奨励し、その上で「善（人）」を顕賞して弱者救済に務め、島民の人心掌握をおこなっている。この叙述での為朝は、配流されて来た罪人ではなく、あたかも京都から任命され、下向してきた「国司に異な」ることなく、地方に遣わされた代官のごとく、未開の土地と住人とを開墾・教化している。ここに新たな要素が認められる。それまでは、乱暴な若者の延長上に怪物・怪異と戦う英雄為朝の造型が続いてきた。しかしそれが配流以後になると、倒すとか打ち破るとかいったいわば悪の破壊者としての為朝ではなく、野蛮と未開が覆う島に、あたかも〈中心〉の京都から派遣されてきて島々に文明と開墾をもたらす、建設者としてのイメージが加上されることとなったのである。これは、新たな要素の加上ということができよう。

『保元物語』において為朝は、伊豆八丈島に配流されたあと、伊豆国の国司の命に服することなく、伊豆七島を次々と征服・支配していったために、京都からの命令で伊豆国の国司の率る官軍の討伐を受ける。したがって、馬琴にあって為朝像は変容しており、『保元物語』とは大きな違いを見せることになる。『弓張月』の為朝は、この配流物語群以後に増補された架空の島々への島渡りを〈話型〉とし、〈中心／周縁〉という二項対立構造を、儒教的世界観である〈中華／夷狄〉といった華夷思想に重ね合わせたうえで構想されている。その際、文明の〈中心〉から派遣されてきた代官が夷狄の野蛮を打破し、〈中心〉の文明に浴させるという、夷狄の中華化（文明化）のパターンがモデルとなっているということができよう。

以上の事例からもわかる通り、為朝の島渡り物語には、すでに日本列島に属する島々（伊豆七島）と、「異国」に属するような島々（女護島、男の島）といった地図的世界観に対する、意識の強烈な介入が認められる。そのうちの後者には、馬琴を始めとして初期の黄表紙に執筆されていた異国遍歴小説のモチーフが引き継がれているのであろう。しかしその初期物

語と異なる点は、すでにいずれの島も、征服・支配・文明化といった過程を経ていることである。すなわち京都を〈中心〉とし、地方を〈周縁〉とする儒教的世界観に向けて、〈知〉の転換期の文脈に寄り添おうとする趣向がここには見られるのである。

## 第五節 おわりに

本章では馬琴の『椿説弓張月』の長編化構想を、〈話型〉の反復と連鎖という点に着目して考察を行った。馬琴はその趣向として稗史小説を採用しているが、もつと根本的な構造として、その稗史小説が持っている「話」の構造を取っている。また、稗史小説が描こうとした正史としての話を日本のものから探し、本作品では為朝説話がその正史としての話となっている。このように本作品は、為朝説話から長編化のための「話」の構造を採り入れ、そこから析出された貴種流離譚をベースにして〈話型〉を作っているのである。

この為朝という貴種の放逐、周縁での苦難、周縁の女との結婚、貴種の中央への帰還、周縁と中心における新たな世界創造などが、〈話型〉である。そこでは、主人公の空間移動、逸脱という方法が用いられ、様々な登場人物において同じ〈話型〉が反復、連鎖されていく。そのような〈話型〉の反復と連鎖、悪人物語を取り入れることによって本作品は長編化し、記された。これは、近代の人物の心理、情景描写などによるストーリー展開の仕方とは異なり、〈話型〉に沿った展開の仕方である。また、様々な地域を舞台にした点は、近世の空間認識の拡大と新しい地域に対する民衆の興味などに対応したものである。作品舞台の拡大もまた、本作品の長編化にとって大きな役割を果たしている。このような〈話型〉の反復と連鎖、空間認識の拡大は、本作品が長編化して記される上で重要なモチーフとなっている。

また、その『弓張月』における〈話型〉は『今昔物語』に見える「話」の構造のように完結した話で終わっている。『弓張月』前編、第四回の悪猿の話を見ると、白縫に愛されていた猿が人間を殺し、最終的には殺されることになる。そして猿

を退治する鷲の恩返しの話が続く。(20) 一方『今昔物語』巻第二十九「鎮西猿打殺鷲為報恩与女語第三十五」では、猿が人間の子を連れ去り、その子を攻撃する鷲を退治して恩を返し、教訓的なたちで終わっている。(21) 『弓張月』とは異なる結末で、猿と鷲の性格が逆になっているが、その内容が持つ完結性と〈話型〉は同様であると思われる。しかし、仏教説話における教訓性とは違って、馬琴は読本で退治されるべき悪の存在として描き、より物語性を強調しているのである。

さらに、本章ではこのような〈話型〉が「勸善懲悪」と結びつき、それが作品の長編構想をも貫いていたということも考察した。「勸善懲悪」、とりわけ「懲悪」のプロットを焦点にして〈話型〉と関係づけ、〈善人〉の為朝と〈悪〉の造型についても検討を行った。

【注】

- (1) 中村幸彦 「椿説弓張月」の史的 position 『中村幸彦著述集』第五卷 中央公論社、一九八二年、四三五頁。
- (2) 麻生磯次 『江戸文学と支那文学』三省堂、一九四六年、一七五頁。
- (3) 徳田武 『椿説弓張月』と『狄青演義』 『国語と国文学』至文堂、一九七八年。
- (4) 大高洋司 『椿説弓張月』—構想と考証 『日本文学研究論文集集成二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年、一五四頁。
- (5) 関根賢司 『物語史への試み』桜楓社、一九九二年、一〇六頁。
- (6) 後藤丹治校注 『椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、七三頁。
- (7) 『椿説弓張月上』二三五頁。
- (8) 後藤丹治校注 『椿説弓張月下』岩波書店、一九六二年、一二九頁。
- (9) 大高洋司 「読本と本屋—京伝と馬琴の場合」 『国文学 解釈と教材の研究』學燈社、一九九七年 九月号、八三頁。
- (10) 中村幸彦 「椿説弓張月の史的 position」 『日本文学研究資料業書 馬琴』有精堂、一九七四年、一七五—一七六頁。
- (11) 関根賢司 『物語史への試み』桜楓社、一九九二年、一〇六頁。
- (12) 『椿説弓張月上』一六八頁。
- (13) 『椿説弓張月上』二六三—二六四頁。
- (14) 高橋亨 「物語学にむけて—構造と意味の主題的な変換」 『物語の方法—語りの意味論』世界思想社、一九九二年、八頁。
- (15) 徳田武 『椿説弓張月』—作品鑑賞 『図説日本の古典十九 曲亭馬琴』集英社、一九八〇年、九六頁。
- (16) 関根賢司 『物語文学論』桜楓社、一九八〇年、十三頁。
- (17) 高木元 「勸善懲惡」 『研究資料日本古典文学 第四卷 近世小説』明治書院、一九八三年、三六三頁。

- (18) 『椿説弓張月上』二二四頁。
- (19) 『椿説弓張月上』二五六頁。
- (20) 『椿説弓張月上』一〇二～一一四頁。
- (21) 馬淵和夫・稲垣泰一・国東文麿『今昔物語集 四』小学館、二〇〇二年、三九七～四〇二頁。

## 第三章 曲亭馬琴の「懲悪」と読本の世界——『南総里見八犬伝』における「悪」の問題

### 第一節 はじめに

曲亭馬琴による長編構想の読本『南総里見八犬伝』における「勸善懲悪」は、馬琴と結びつけられてよく知られている。しかしこの語は長らく、道德教化の主題とみなされるのが通説となってきた。「勸善懲悪」についての注目すべき先行研究としては、日本文芸における「勸善懲悪」の意義を論じた濱田啓介「勸善懲悪」補紙<sup>(1)</sup>、馬琴の「勸善懲悪」を演劇とのかかわりで述べた大屋多詠子「勸善懲悪」<sup>(2)</sup>、山東京伝と馬琴の「勸善懲悪」の差異を論じた大高洋司「京伝、馬琴と「勸善懲悪」」<sup>(3)</sup>がある。さらに『八犬伝』研究としては、高田衛『完本 八犬伝の世界』<sup>(4)</sup>、川村二郎『里見八犬伝』<sup>(5)</sup>、諏訪春雄・高田衛編著『復興する八犬伝』<sup>(6)</sup>などが著名である。

本論ではその『八犬伝』を馬琴の時代における商品流通経済の形成、それにとまなう読本の商品化、それを産み出す出版形態と、貸本屋を媒介とした江戸の町人層読者の読本享受形態、そして読者の読本理解度から考察していく。これらの構造が歴史的規定を受け、『八犬伝』の物語内容を機制してきたとすれば、「勸善懲悪」に関しても、これを単に儒教社会の教化作用として解釈するのは単純に過ぎるのではないか。もつと『八犬伝』を規制している構造のなかで解釈すべきではないだろうか。

このような問題意識を基に、『八犬伝』の物語世界を、いくつかの視座から可能な限り多元的に考察してみたい。そのためにまず、『八犬伝』が中国明代小説からどのような影響を受けたのかをめぐり、「話」の性格を媒介にして比較考察することを試みたい。その上で馬琴読本のオリジナリティがどこにあるのかをめぐり、示唆を与えられればよいと考える。そうすることにより、「勸善懲悪」が絶対的善悪論から導出されていることが明らかとなる。そしてその善悪論は、道德教化を目的にするというよりも、物語を成立させる構成機能として働いているということが浮き彫りとなるだろう。このような過程を

追求しようとする際、直線的にその過程をたどるのではなく、時代的に規定された関係構造を絶えず踏まえつつ、その過程を辿るという方法を探りたい。そのため時には、江戸の町人層読者の間で読本が享受されることへの貸本屋による媒介の実態や、物語内容の〈反復と連鎖〉をつらぬく民話風の話型を分析するといった方向に向かうことがある。

ところで、さきほど述べたように、時代的に規定された関係構造と、『八犬伝』の物語内容との関連で物語内容を読み取ることを目指すなら、構造と物語との間を媒介するのが絶対的善悪論であり、その善悪論が道徳教化論と結びついた「勸善懲悪」であることについて、本論で考察することになる。その絶対的善悪論とは、すでに前章で論じたように、『弓張月』の物語が内包している〈話型〉を構成する二元論的世界観であった。その世界観に善悪の価値が結びついていたわけである。それでは、なぜ馬琴は二元論的世界観に着目したであろうか。本論は、その背景に、馬琴の時代、これまでの伝統的世界観（中華思想にもとづく華夷的世界観）に対立するかたちで西洋伝来の地図的世界観が現実感をもって台頭してきたことを指摘する。そして世界観の衝突と対立があり、並行現象が見られて、〈知〉の転換があったことを主張したい。多元的世界観の衝突への驚きが見られ、そのような〈知〉の拡大が馬琴読本に多元的世界観（『弓張月』では二元論的）を意識させていったと考えるわけである。〈知〉の転換期といわれる時代にあつて、この歴史的規定の枠組の中に、関係構造と物語内容の関連があることに着目したのである。

本章で対象とする『八犬伝』には、多元論的世界観はもはや見られない。あくまでも南房総安房国という領国を物語世界とする、一元論的世界が枠組をなしている。しかし二元論的世界観と善悪の結びつきは、実は『八犬伝』の人物造型、すなわち善人と悪人、とりわけ悪人造型に集約されている。『八犬伝』においても、絶対的善悪論に支えられた「勸善懲悪」はつらぬかれていたのであつて、善人は善人、悪人は悪人として物語構成を分割する。悪人は父子、母娘といった血筋関係の間を、そして悪の靈魂（「玉」）が生まれ代わり死に代わる人物たちの間を遊離、憑着していく。そのような物語構成は、どうあつても二元論的世界観の縮図継承とみてよく、この悪人造型こそが馬琴に独自なものなのである。本論では、この悪人造型を焦点化し、物語内容を考察する予定であるが、世界観にまで言及することはしない。しかし『八犬伝』であつても、そ

の時代に規定された関係構造と物語内容の相関を論じる際に、その相関を歴史的に限定する（知）のレベルにおいて、馬琴の「異国」への驚異があつたことには注意しておかねばなるまい。

このような大きな歴史的規定を考慮しつつ、以下『八犬伝』の物語の構成と悪人造型の関係、近世的な分冊出版と江戸町人層の享受形態との関係が、どのような関係構造を構築していくのかを見ていくことにする。その際、「勸善懲悪」、それに〈反復と連鎖〉という方法論とキーワードを基にしたい。

## 第二節 分冊出版と物語形式

『八犬伝』の構成と近世的出版形態との関係を課題とすると、『八犬伝』の構成が「輯、冊（巻）、帙、号、套、回」という区切り形式を取っていることがまず眼につく。ここで注目されるのが「回」という区切り形式であり、『八犬伝』は長編構想を意図した物語でありながら、内容的にはほぼ四、五回で八犬士の一人を主人公とする物語として完結する。この場合、「完結」というのは、その物語が〈始め〉〈中間〉〈終わり〉という構成単位を備えているということの意味する。つまり主人公（犬士）の登場（あるいは悪人の登場）―犬士と悪人の戦い―犬士の勝利（悪人の死）という物語構成を取るということである。そのような物語構成が〈連鎖〉して長編構想に帰属するわけで、自己同一性を保ちながら、それ自体で相対的に独立した物語となる。ただしすべてがそうであるわけではなく、その変形（ヴァリエーション）もあるのだが、おおむねこのように四、五回程度で完結する小物語が一つの単位をなす。この構成が出版形態と結びつくのである。

ここで『八犬伝』が出版された刊行年と出版形式をみると、

- ・文化十一年（一八一四）肇輯五冊第十回
- ・文化十三年（一八一六）第二輯五冊第十回

- ・文政二年（一八一九）第三輯五冊第十回
- ・文政三年（一八二〇）第四輯五冊第十回
- ・文政六年（一八二三）第五輯五冊第十回
- ・文政十年（一八二七）第六輯六冊第十一回
- ・文政十二年（一八二九）第七輯上帙四冊第八回
- ・文政十三年（一八三〇）第七輯下帙三冊第四回
- ・天保三年（一八三二）第八輯上帙五冊第九回
- ・天保四年（一八三三）第八輯下帙五冊第九回
- ・天保六年（一八三五）第九輯上帙六冊第十二回
- ・天保七年（一八三六）第九輯中帙七冊十二回
- ・天保八年（一八三七）第九輯下帙上五冊第十回
- ・天保九年（一八三八）第九輯下帙中五冊第十回
- ・天保十年（一八三九）第九輯下帙之下甲号五冊第十回
- ・天保十一年（一八四〇）第九輯下帙之下乙号上套四冊第八回、中套五冊第八回
- ・天保十二年（一八四二）第九輯下帙下編上五冊第六回、中五冊第十回
- ・天保十三年（一八四二）第九輯下帙下編之下五冊第六回、第九輯下帙下結局編五冊第七回

とある。かくして『八犬伝』の出版形態を見ると、ほぼ一年から三年おきに二、三回程度のボリュームの叙述が「冊」となり、五冊十回程度、すなわち二つの小物語を掲載した叙述量のものが分冊出版されたことになる。全体を平均して見ても、大体それが通常の出版形態だったようである。『八犬伝』が出版され始めた天保十一年（一八四〇）から十三年（一八四二）

までは年二回、この五冊十回分の「分冊」が出版、販売されたことがわかる。最初はこのように半年の間隔だったのであるが、それがやがて一年から三年の間隔を置くようになっていった。近似的な出版形態が現代の長編小説といかに異なっているかが見てとれよう。ただそれでも、このような馬琴読本の区切り形式、および〈話型〉がつらぬく物語内容の〈反復〉という単純化と繰り返しには、中国明代小説（白話小説 演義小説）の「話」の影響や、馬琴の時代、経済的実力をそなえた江戸の町人層の台頭にもなう読者層の急速な拡大が関係する。そのような大量需要に対応する供給方法として、貸本屋が出版、販売と読者の間に介入し、読本の享受形態を機制するようになり、それらが商品流通経済に組み込まれて、読本が一挙に商品化されるというプロセスが辿られるのである。このことは、前代からの進化として評価する必要がある。

第二章第二節では、「話」の性格を媒介にして馬琴読本を中国明代小説と比較し、そこからこの読本がどのような影響を受けたのかを見た。その上で、では馬琴読本の創作性がどこにあるのかについても概観した。そこで本章では、あらためて江戸時代の後期という歴史的規定において、馬琴読本がどのような位置を占めるのかに考察を移したい。馬琴読本、特に長編構想を持つ『八犬伝』を事例にした場合、近世における分冊出版形態と結びついた読本の商品化は、『八犬伝』の物語内容にどのような機制をもたらしたのであるか。商品と文芸の両者を媒介したのは江戸の町人層読者である。もともとこの際、読者という実体を想定するよりも、現代の読書法として一般的な〈黙読〉による個人的享受とは異なった形での〈読む／聞く〉という集団的享受形態に焦点を当てるべきであろう。このような書物（テキスト）の形式と内容、および享受形態という三つの要素から成る構造を、これ以後考察していこうと思う。

そこでまず、近世における分冊出版と作者（家）の関係から始めよう。いったい馬琴は、長編読本『八犬伝』の分冊出版をどのように受け取ろうとしていたのであるか。その課題からすると、『八犬伝』肇輯五卷十回の結尾に、作者自身が次のように語っていることが参考となる。

さは巻数に定めあり、また張数にも限りあり。毎編これを過すときは、売買に便宜ならずといふ、書肆が好み推辞がた

し。よりにて余稿は巻を更て、明年かならず嗣出さん。大約こゝに演る所は、この小説の発端のみ。これより下は八犬士の、やゝ世に出べき事に及べり。この後又年を歴て、八子八方に出生し、聚散時あり、約束ありて、竟の里見の家臣となる、八人の列伝は、前後あり長短あるべし。まだ其処までは效果さず、年をかさね、巻をかさねて、全本となさん事、曩に予が著したる、弓張月の如くなるべし。閱者幸に察せよ。(7)

この言説から読み取れることは次の二つである。一つは分冊出版が作者の意向というよりも、版元（書肆）の商品販売動向によるということである。二つは作者の作品執筆が版元の意向に媒介されて、すでに商品流通経済に巻き込まれているということである。たとえば「毎編これを過すときは、売買に便宜ならず」とあるのは、分冊出版、販売分のボリューム（分量）が版元によって決められていることを示唆している。おそらく、商品としての読本の販売動向を目的として、版元、作者、それにか貸本屋がギルド的仲間意識を共有していたのではないだろうか。また、版元が読本の企画、原稿依頼と承諾、版組み・口絵のデザイン、出版だけでなく、販売と流通に深くかかわっていることもうかがえる。この仲間組織が既述のごとく販売する読本分冊の分量決定にまで口を出し、しかも、その販売人気によって次回の分冊分の原稿依頼をするかどうか決定されていることが、この言説の背後にうかがわれる。かくして馬琴としては、その販売動向による作品の人気度を気に懸けつつも、「八人の列伝は、前後あり長短あるべし。まだ其処までは效果さず」と吐露する。つまり八犬士の武勇の物語をどう展開させるのか、その後の構想はまだ十分にまとまっていけないのである。とすると、「余稿は巻を更て、明年かならず嗣出さん」というのは、あくまで願望である。したがって続編が出るかどうかに関して、馬琴は購買者の人気度に細心の払っていることがわかる。それはまた版元の願望でもあった。それゆえ作者と版元とが意識を共有していたこともうかがえる。

ただし次の原稿依頼が「明年かならず」なのか、「年を経て」なのかはわからない。というのは、読本執筆は単に作者馬琴の創作力の問題というだけではないからである。おそらく、版元や貸本屋といった仲間組織による購読者の関心や嗜好などの情報を媒介に、それが読本執筆の動機へと結びついていったものと思われる。つまり馬琴は、初回の分冊分を執筆するに

当たって、初回分の〈小物語〉の構想は持っていたにしても、いま見るがごとき長編構想の大スペクタクルの全体構想はある程度、持っていたのである。『八犬伝』の八犬士の場合、最初から、『水滸伝』のように各人物を主人公とする物語の構想はあったに違いない。しかし、馬琴の発案が主であるとはいえ、それに応じるかたちで版元、貸本屋などの仲間組織からの依頼があり、それぞれの分冊分毎に註文分の原稿を執筆し、分冊を重ねていくことで長編構想を実現していったというのが、『八犬伝』の完成本の成立過程ということになる。つまり、出版される分だけの原稿が執筆されるということであり、おそらく馬琴は自らの原稿について、註文のたびごとに分冊形式に対応しつつその構想を練ったということになるだろう。もちろん、長編構想の種本がなかったわけではない。通説によれば、たとえば中国の演義小説『水滸伝』の影響が認められるという。『水滸伝』では一〇八人の義勇の士の列伝が並べられていて、その一人一人の義勇の（小）物語が〈連鎖〉するという構成を取っている。八犬士と呼ばれる八人の忠義の士が代わるがわるに登場し、それぞれが悪人と対決しこれを打ち倒していくという構成は、列伝体ともいえるものであり、『水滸伝』を模倣したものと見なされている。両者の類似点は、この列伝体という形式と武勇をプロットすることだけであって、長編構想それ自体は、南総安房国を支配した里見家の歴史に拠ることだけであつたといえる。つまり、馬琴が長編構想のすべてを担わなければならなかつたということである。

分冊という出版形態は、その間隔が一年以上という場合がある。したがって読本としての構想を長期にわたって維持することは困難であろう。あらかじめ原稿を執筆しておけばと考えられるかもしれないが、当時の馬琴にとっては『八犬伝』だけに専心してはいられなかつた。原稿料の安さゆえに、売文作家として一家を養っていくためには、別に依頼されるさまざまな執筆をこなさねばならなかつたのである。それゆえ、原稿依頼があつてからあらためて分冊分の（小）物語二編を構想するというのが馬琴の執筆生活だつたといえる。作品が商品化されることにより、原稿料で生活を営む、いわゆる読本作家が出現するようになった。その一人が馬琴であつて、もしかすると、創作にとつては不利にはたらくと思われる分冊出版に対応させた物語構成手法もまた、読本作家の商業的な戦略に関係したかも知れない。

では、読本の分冊出版と物語内容の関係について論を進めよう。この関係にも購読者の〈知〉のレベルがかかっている

とすれば、物語構成の単純化と、分冊と分冊の間の長い空白期間への対処が要請されたことは容易に予想されよう。その対処に対応すると思われるのが、〈反復と連鎖〉であり、それとかわるかわるかたちでの〈話型〉の活用であると思われる。分冊出版は、読者に困難をもたらす可能性がある。それは読者の〈知〉のレベルに関して、長編構想の分割により、ストーリー（プロット）と登場人物の造型における自己同一性が断絶され、その断絶が読本の物語世界への興味を失わせてしまいかねないという点である。それを防ぐための〈反復と連鎖〉から説明しよう。『八犬伝』は広く知られているように、南総安房の国主里見家の再興をめぐる勇士（八犬士）の列伝とみてよい。この点についてはすでに触れた。列伝体に従い、『水滸伝』のように八犬士が次々と入れ代わるように小物語に登場し、それぞれの犬士が対立する悪人と戦い、打ち勝って、小物語はそれ自体で完結する。この類似した物語構成が〈反復〉されるわけだが、それに変化をつけるのは、犬士と悪人の組み合わせが次々と交替していくという点である。

ただ単に犬士が交替していくということだけで、〈連鎖〉が成立するわけではない。初期の長編構想の読本『弓張月』の〈反復〉の物語群では、為朝という主人公が〈中心〉の都から〈周縁〉の地方・辺境に旅するというプロットがつらぬかれていた。旅の途次において次々に怪物や異人が出現し、物語がつらなるといふ構成が採られたため、その構成では怪物や異人の遭遇から始まる物語が次々と〈反復〉するのに際し、主人公がその怪物や異人を倒して旅を続けるというところに〈連鎖〉の構成が成立していたわけである。では、この後期の長編構想の読本『八犬伝』にあつて、〈連鎖〉の方法とはどのようなものであつたのか。このようにあらためて問うたとき、浮上してくるのが日本文化の伝統となつている霊魂信仰、とりわけ遊離魂の観念である。たとえば八犬士と結びついた連鎖の原理は、物語の冒頭において、里見家の当主義実の娘伏姫が、流寓する山中で死の床に臥したとき、守り本尊としていた数珠を空中に放り上げると数珠玉が飛散し、そのうちの仁義礼智信忠孝悌の八つの玉が、折りから各地に生まれて来た八人の赤児に取り憑いて八犬士が生まれ出るといふプロセスで成立する。このプロットを霊魂遊離の観念から見ると、伏姫の霊魂が八つに分裂して遊離魂となり、それぞれが八人の赤児に憑依したということ、八犬士はいつてみれば八つの遊離魂の化身として生まれ出たということになる。中国明代小説『水滸伝』の

列伝体に関係することで八犬士の列伝体物語が生まれたとみられるならば、まさにその靈魂信仰が〈連鎖〉を形成することになるわけである。したがって里見家再興という史的モチーフが長編構想を大きな枠組み（フレーム）として小物語群を支えているという通説は、本論からすれば、これまで論じてきた〈反復と連鎖〉よりも二次的な〈連鎖〉の原理とみなされる。

この靈魂信仰は、八犬士の側だけに見られる〈連鎖〉の原理にはとどまらず、八犬士に対決する悪人の側にも見られる。毒婦の系譜といわれる玉梓の物語と船虫の物語とは、毒婦玉梓の物語の結尾で馬琴が「この玉梓の怨念は里見家に長く祟ることになり、その悪念は子孫に纏わりつくようになった」（肇輯六回）<sup>(8)</sup> という言葉によつて媒介されている。やがて次の毒婦船虫の物語が導き出されるため、その二つの毒婦の物語の間にも遊離魂觀念がつらぬいていることを、読者も読み取ることになる。それゆえその間に〈連鎖〉の原理がはたらいていると考えられる。ちなみに、このような悪人を話題にしたことは、さらに小物語の単位ということに論を及ぼさせる。つまりその単位が悪人の側に置かれており、このことは「始め」―「中間」―「終わり」の構成要素からわかる。まず「始め」は悪人の登場に置かれる。次に「中間」は、悪人の奸計とその実行、時には暴力の行使、それによる犬士を始めとする善人の苦境が占める。そして「終わり」は、悪人の死（殺害・追放）による犬士ら善人による苦境の克服が該当する、という構成になっているのである。このように、悪人が焦点化されて自己完結性を見せていることにより、小物語は物語の単位となることが明瞭となる。

本来主人公であるはずの八犬士は、体制イデオロギーともいえるべき仁義礼智信忠孝梯の化身という限界を破れない。これに対して、悪人像はその奸智と謀略、欲望の追求と快楽によつて反社会的・反道徳的な破壊者であり、それによつて新しい反封建的人間像をかたちづくろうとしている。この点は魅力的である。『弓張月』からこの『八犬伝』に至るまでの間に、この悪人像の追求が馬琴の作品構成の中心をなしていたことがうかがえる。神話的・民話的話型の構成要素ともいえるべき邪悪靈を原型とする怪物・異人が『弓張月』における〈悪〉の造型であったのに対して、生まれながらに奸智と謀略をたくましくし、本能的欲望を剥き出しにする『八犬伝』の〈悪人〉の造型は、対照的に並行するものである。これら是对立するものではない。『弓張月』の朦朧という過渡的悪人像は、邪悪靈的異人性を等身大として人格造型へと内面化されている。それ

を媒介にすると、〈悪〉から〈悪人〉への形成過程があったことが透視されよう。いわば生まれながらに邪悪靈的な性格を秘めた〈悪〉が、領国の君臣関係の内部に入り込むことによつてみずからの内部にひそむ悪を剥き出しにする。これによつて『八犬伝』の悪人は造型がなされ、〈悪人〉としての人格を獲得していったといえる。そこにはすでに言及した靈魂信仰を背景にした遊離魂の觀念がうごめいている。悪人はあくまでも悪人であつて、けつして善人に交わることがないのである。絶対的善悪論とは、〈話型〉に内包される二元的世界觀に善悪論が結びついて生成してきたものなのである。

### 第三節 『八犬伝』分冊出版と〈反復と連鎖〉

これまで『八犬伝』をめくり、近世的文芸空間と物語内容との関係構造を考察してきた。この節では視座を代え、物語内容を焦点に据えて『八犬伝』の物語論を論じることにした。まず長編構想の読本と分冊出版の関係について、あらためて確認することから始めよう。五冊十回程度の叙述量から成る分冊はほぼ二篇の小物語を収めているが、筋立のクライマックスで中断し、次回に続く結果を読者に期待させるという連載方法を取ることはできない。前回分の分冊と次回の分冊の間隔がきわめて離れているからである。分冊はそれ自体で読み切り（自己完結）で出版されねばならなかった。だが読み切りで終わってはならない。長編構想に自己同一していくため、〈連鎖〉させていかねばならないのである。〈連鎖〉の原理は、大きな構想では南総安房国主里見家の家伝（資料）による歴史形式（史伝形式）であり、小物語の数珠状のつながりの方法で、「玉」（＝魂）の〈連鎖〉である。「八つの玉」を憑着させた八犬士が、代わる代わる小物語に登場することが善の連鎖の論理であるとするれば、たとえば毒婦の魂が、その毒婦が犬士に殺されると、その魂は毒婦の身体から遊離して新たな女性に憑着していく、という毒婦の系譜が悪の連鎖の論理ということになる。この二つの〈連鎖〉の論理がからみ合つて、『八犬伝』における物語の〈連鎖〉を形づくっていくのである。

このような物語の〈反復と連鎖〉が、長編構想に物語を自己同一させていったのである。したがつて〈反復と連鎖〉こそ

が購読者に次回の分冊の物語展開を期待させたというべきであろう。繰り返すことになるが、分冊形式は現代の連載とはまったく異なっていたのである。

『八犬伝』は、歴史を素材とする壮大なスケールの物語の中で、このような「勸善懲悪」が〈反復〉される小物語を〈反復と連鎖〉させていく。それが『八犬伝』のおおまかな構成ということになる。このような構成において、まず絶対的善悪論はどのように実現されているのか、次に、矇雲の悪人造型の過渡性からその異界性を稀薄化させた『八犬伝』の〈悪人〉への造形はどのようになされているのか、この二つの課題を追求することが本節の課題となる。そのため、その具体例として毒婦玉梓が悪人として活躍する小物語を取り上げてみよう。以下にはまず粗筋をもって、その物語内容を紹介する。

安房の国主・里見家の重臣神余光弘は、主君里見義実から平群の滝田の城をまかされ、安房の領地の半ばを統治していた。光弘は重臣であるだけでなく、安房国の権力を主君とともに掌握する権勢家として羽振りをきかせていた。このような主君の寵愛に心おごった光弘は、色と酒にふけり、側女として迎えた玉梓という淫婦を溺愛していた。それゆえ玉梓もまた光弘の寵愛をよいことに、光弘の家臣の賞罰まで勝手に決めるなどの潜越行為をおこなった。そのために、忠臣は去り、玉梓におもねる人物ばかりが城に残っていた。こうして里見家の領国の半分が、〈悪人〉の支配する国となるという危機に陥ることになる。

ここまで粗筋をたどっただけでも、安房国の〈内部〉の家臣の中から、善人と悪人が明確に区別されて出現するという絶対的善悪論にもとづく構想が見てとれる。『弓張月』の〈悪〉の造形にあつては、ほとんど〈悪〉が〈外部〉から襲来してきていたが、『八犬伝』になると、〈悪人〉が〈内部〉から出現してくるという明確な違いを見せることになる。したがって〈悪人〉は外部の霊的怪物と結びつくのではなく、まずは一国の主従関係の中に胚胎してくる。馬琴が人間の内面に〈悪〉の契機をとらえる方向に向かったということを示唆する。ここに『八犬伝』の〈悪人〉の造形が成立したのである。家産的主従関係の〈内部〉において、主君の寵愛をめぐり、従臣の間に争いが起こる。その根底にあるのは権力欲であったり、男女の情慾にかられた欲望の過剰によるものであったりする。すなわち道徳的な墮落に伴い、自己の支配する領国において、治政

のための仁徳とは相容れない、領民を苦しめる〈悪〉の行為を為す。馬琴にとって〈悪人〉の造形は、まずは一国の主従関係という政治的秩序において、その秩序に従うかどうか、つまりは為政の徳を守るか叛くかという主従関係の中から輩出してくる。しかしこれは重臣光弘の場合であって、その側女となった玉梓の悪人像についてはさらに分析が必要である。

その玉梓は「奸智」にたけた山下定包という光弘の家臣と密通するようになり、「毒婦」と称される悪人像を鮮明にしていく。ここで注意したいのは「奸智」という言葉が示唆する〈悪人〉のカテゴリーである。定包という人物は、盛んに酒宴を催して主君の光弘を喜ばせながら、ひそかに主君を殺害して国主からまかされた領地の支配権を奪うべく、「奸智」をはたらかせるわけである。その定包の謀略を察した「百姓」（領民）の朴平と無垢三は定包を討ちとろうとしたが、運わるく主君の光弘を殺してしまう。そのために逆に二人は謀叛人として討ちとられ、騒動はかえって悪人定包に有利にはたらく、定包は国主の安堵を得て安房半国の城主となる。滝田の城を玉下城と改名し、玉梓を本妻に迎えるとともに、光弘の妾は全部我がものにしてしまう。

奸智、謀略といった人間の知恵が悪にはたらくとき、『八犬伝』はそのような人物を〈悪人〉のカテゴリーに入れることになる。本来知恵というものは善悪にはたらくものである。したがって、智謀、智略にたけるという場合、善臣の徳として称賛されることはいうまでもない。とすれば、知恵をはたらかす人間の善悪が悪の方向に傾けば〈悪人〉と規定されることになる。しかし、これまで馬琴の人物造型で見てきたように、これが人間類型化されるためには、悪と人間の結びつきの固定化が求められる。善人は善人、悪人は悪人という善悪の固定化、この絶対的善悪論が分冊による出版と対応して馬琴の人物造型となったことはこれまで論じてきたところである。ただ初期の『弓張月』の〈悪〉が外部の「異界」と結びついてきたのに対して、〈悪〉が人間の内部に潜在する方向に向かうとき、馬琴における〈悪人〉の造形が形成されていったわけである。馬琴はどのような叙述をもって固定化をおこなおうとしたのか、玉梓と山下定包の造型を見てみよう。

光弘は、こゝろ驕りて色を好み、酒に酩りて飽ことなく、側室媵妾多かる中に、玉梓といふ淫婦を寵愛して、内外の賞

罰さへ、渠に問て沙汰せしかば、玉梓に賄賂ものは、罪あるも賞せられ、玉梓に媚ざれば、功あるも用られず。是より家則いたく乱れて、良臣は退き去り、佞人は時を得たり。……柵左衛門定包は、陽に行状を慎て、陰に奸智を逞し、営利を謀る癖者なれば、初より玉梓に、佞媚ずといふことなく、渠が好む物としいへば、価を厭ず贈る程に、漸々に出頭して、口才主君を歓せ、酒醺を催し、淫楽を勧め、剩玉梓と密通して、尾陋の挙動多かりけれども、光弘は露ばかりもこれを暁らず、いく程もなく定包を、老臣の上にをらせ、藩屏の賞罰大小となく、皆任用たりければ、その権山下一人に帰して、主君はあるもなきが如し。(肇輯二回)⑨

玉梓は、その出自が不明なまま、いきなりこの物語へ登場してくる。その特徴は悪の性格の規定から始まる。すると玉梓はその登場の最初から「淫婦」と称される一方で、「玉梓に賄賂ものは、罪あるも賞せられ、玉梓に媚ざれば、功あるも用られず」とあって、その金銭への欲望の痛烈な持ち主としても性格づけられている。主従関係の中にその性格をもつていわば投げ込まれるとき、彼女は悪の性格をそのまま主従関係に持ち込むことになる。そのため、情欲と貪欲が、主従関係の間にあつた忠誠と思愛という封建道徳を犯していき、当然のことながら主従関係がまったく乱れることになる。物語が登場人物の性格を作っていくのではなく、性格が逆に物語を機制していく。つまり、玉梓は物語の始発から「悪人」に規定されて登場してくるのである。それは山下定包についてもまったく同じである。それゆえ二人の「悪人」は、その情欲の過剰さを割り付けられることで、本性的に「悪人」とされる。その性格規定は物語の展開のなかで、終始まったく変わることがない。儒学的道徳観においてであれば、玉梓と定包に見られる情の過剰に関しては、その抑圧を通じ、道徳の実現が果たされるべきである。したがって彼女は、それに背くものとして排除されるにちがいない。それゆえ二人の「悪人」は、いわば情の過剰の人格的表現ともいってもよい。そのとき想起されるのは、忠義の勇士としての八犬士の出自である。とすれば、『八犬伝』の善人には、まさに義理／人情といった町人層の心性を支配する対極的価値観がその前提にある。つまり善人と悪人の登場人物は、それぞれにその過剰として造型されているということになる。そしてまた義理／人情という対極的価値であるがゆ

えに、彼らは絶対的善悪を実現しているのである。

さらに粗筋をたどって玉梓と定包の悪人像を追求しよう。安房の国主でありながら、折から領国の為政の実態を調べようとして、身分を隠しつつあちこちの領地を流浪している里見義実は、安房定包が城主におさまっている領地にたどり着く。

そこで鯉を釣るために毎日川辺に出るが、鯉は釣れず、金碗孝吉という、かつての光弘の忠臣でいまは浪人の身となった人物と出会う。義実はその孝吉から、定包と玉梓の悪行を聞き、挙兵をして滝田の城を攻める計画を立てる。そこで定包が大酒宴を開いている時、義実の軍勢は城の傍まで攻め寄せてきた。あわてて必死に抵抗を続けていた定包だが、城に残っていた光弘の忠臣の戸五朗がその喉を突きさし、戸五朗の従者鈍平が首を切り落として殺した。城は陥落し、義実の前に引き出された玉梓の美貌にみんなは驚き、そのために義実は助命を必死に求める玉梓を許そうとした。だが、孝吉は国主の命に従わず、彼女の首をはねて殺した。また一方、定包のほうは国主の命によって処刑される。(肇輯二回〜六回)

物語の結末は二人の悪人の処刑をもって終わっている。ただしその場面は、『弓張月』の逆臣武藤太と忠重の処刑場面と異なっている。その場面の一部を比較してみよう。まず、毒婦玉梓・逆臣定包の処刑場面は次のようである。

「物ないはせそ、牽立よ。」と金碗が令を受、雑兵四五人立かゝりて、罵り狂ふ玉梓を、外面へ牽出し、懸て首を刎たりける。かゝりし程に八郎は、更に仰を承りて、賊主定包・玉梓等、鈍平・戸五郎が頸もろ共に、滝田の城下に殺梟たり。現積悪の報ふ所、斯あるべきことながら、今更にめざましとて、観るもの日毎に堵の如し。(肇輯六回)<sup>(10)</sup>

これに対して武藤太の処刑では「或は太股、或は臀、灸所を除て打釘に、死んとして死もやらず。活んとするはなほ難く……苦痛の声も霜に鳴、虫のごとくによはりゆく」(前篇十二回)<sup>(11)</sup>とある。ここにはサディスティックでグロテスクな処刑のリアルな描写が描き込まれている。平凡で平板な日常生活の中に閉ざされた人生を送る江戸の町人にとって、非日常的な罪人の処刑は、感性を激しく刺激する一種の祝祭性をもっていたといえる。だからこそ処刑は刺激的でなければならな

った。グロテスクでサディスティックな描写は、平板さに押しつぶされていた町人の感性を、強烈に揺り動かしたにちがいない。倒錯の異常性が武藤太の処刑場面をつらぬいている。

一方、『八犬伝』の玉梓・定包の処刑場面はそれほどグロテスクではない。彼らの処刑は「現積悪の報ふ所、斬あるべきこと」と言われているように、因果応報の実現という用語がもちいられている。馬琴の絶対的善悪論と結びつけてこの場面を解釈すれば、悪人が善人に悔峻することはありえない。彼らの罪科を減じて悔峻を待つという余地などないのである。悪人は処刑という手段によって、この世（人間世界）から放逐・追放される以外にはありえない。その論理の帰結がこの場面ということになる。この結末をいま、馬琴の「勸善懲悪」の主題を支える絶対的善悪論で解釈したのであるが、この「勸善懲悪」が、小物語の構成を成り立たせる機能を持つことからの解釈も見逃してはなるまい。

最初の「勸善懲悪」を主題とする毒婦玉梓の小物語は、毒婦（淫婦）と、その夫となる定包を悪人として設定している。彼ら悪人夫婦は主家である里見家に対し、主従関係をめぐって内紛を惹き起こし、それに対して朴平と無垢三、また金碗孝吉、戸五朗、鈍平といった旧主の忠臣らが善人として登場し、彼らの悪を抑えようと奮闘する。その間に善悪が入り乱れることはなく、終始固定的に区別されている。そこには、善悪いずれともつかないような読者に、善悪を迷わせるような人物が登場しはしない。善人が悪人に、また悪人が善人に悔峻するということも起らない。つまり、善人と悪人の造型が物語の当初から固定していて、筋立をわかりやすくしている。筋立としては、その両者の間に旧主の仇討ちという闘争があり、その関連で『八犬伝』の歴史的枠組みが長編構想を支えている。里見家再興の物語の主人公里見義実がここからみ、最後には善が勝って悪人はすべてこの世から放逐され、「勸善懲悪」の主題を実現させる。

以上が、毒婦玉梓の小物語を主題と構成機能の内面から分析した結果である。構成機能と関連させていえば、これが、本論文で規定する出版形態における、読み切り一回分の〈小物語〉の単位と考えられる。注目したのは、その小物語が悪人を中心に成り立っていることである。すなわち、〈はじめ〉にあたるところで、悪人の定包と玉梓の二人が登場する。そしてその悪人二人が殺戮されることで物語は〈おわる〉。この物語では悪人を中心に〈はじめ—中間—おわり〉が構成されていると

ころから、毒婦玉梓の物語といふことができる。叙述量としては、これが二回から六回の計五回にわたって語られ、大体その程度が読み切り物語の分量と言つてよい。

善人の八犬士は、本来八つの玉でつながれていたのだが、その系が切れて個々ばらばらになったわけで、彼らの自己同一性は八つの玉にあるといえる。とすれば、もともと分冊出版に規定された「読み切り」小物語が長編構想の歴史物語と結びついていく自己同一性は、この善人の自己同一性によって担保されていなければならないのである。悪人は悪人として多彩であればあるほど〈反復〉という、とかくマンネリ化しやすい小物語の規制を大きく逸脱させるはずで、それだけ趣向に富んだ物語となり得る。しかし馬琴の悪人造型としては、そこにやはり自己同一性が求められているという点に大きな特徴がある。

『弓張月』の〈悪〉の造型では、〈悪〉は「異界」（異郷）と結びつくことで、〈悪〉としての自己同一性を保っていた。〈悪〉にとつて「異界」は、〈悪〉の根拠として物語の内部に置かれていた。ところが、『八犬伝』の悪人造型に関しては、最初の小物語では、〈悪人〉と規定されるだけで、その根拠は示されていなかった。叙述はその人物の性格に求められているかのごとくである。しかし、もしそうであれば、性格は物語の状況変化によつて変化の可能性を孕んでいる。悪なる性格は善に変化する可能性がある。つまり、悪を性格で規定するとき、馬琴の絶対的善悪観が崩れる危惧がつねに孕まれることになる。したがつて絶対的善悪論からすると、〈悪人〉の自己同一性は、「異界」に求められるのと同様に、〈外部〉に求められねばならないというわけである。馬琴はその〈外部性〉をどこに求めたのだろうか。次の引用箇所を挙げてみよう。

大塚匠作が女兒亀篠は、前妻の子なりしかば、番作には異母の妹にはあれど、心ざま、父にも弟にも似ざるものにて、親同胞の寵城を、想像る気色もなく、況いて継母の千辛万苦を、露ばかりも念とせで、生ころつきし此より、結髪化粧に、春の日を長しとせず、情郎としのびあふ日は、秋の夕を、短しとせる、嗚呼の淫婦なりといへども、生ぬなかとて母親は、仇なくこれを懲さず、傍いたく思ふのみ、いとゞ多病になりけり。されば亀篠は、同郷なる、弥々山墓六といふ破落戸と、ふかく契りて、その情鯨膠もて接たるごとく、皮なくば君とわれ、比日連理に身をなして、霎時もほ

とりを離れじ、と思ふ心は日にまして……。 (第二輯第十六回) (12)

これによれば、大塚匠作を父に持つ亀篠の「淫婦」としての資質は、母子の血筋によるとされているかのようである。というのは、同じく大塚匠作を父とするが、異母弟である番作が善人であるのに、彼女だけが「父にも弟にも似ざるものにて、親同胞の寵城を、想像る気色もなく」とあるように、悪女とされているからである。つまり父子の血筋は善人であるに、母子の血筋が悪女とされているのである。子が悪であるのは、性格によるのではなく、「前妻」が悪女で、その血筋をひいたからということになる。性格の基層に悪の血筋を据えようとしていることがこの叙述からうかがえる。善悪の差異が血筋によって規定されるということは、その外部性において絶対的善悪観によるのであり、この観念は、実は『弓張月』の悪人嚆雲国師にもすでに見えていた。亀篠と墓六は、八犬士として始めて登場する大塚信乃と、名剣の村雨丸をめぐって対立する悪人である。では墓六の悪人性についてはどうか。「破落戸」と性格規定されていて、その悪人性ははっきりしているが、それだけであれば、最初の小物語と変わらない。しかし毒婦（淫婦）亀篠と結ばれて悪人夫婦となったというモチーフは、そのまへの毒婦玉梓と結ばれて悪人夫婦となったモチーフと類型である。ここから、山下定包と墓六の同一性が想像される。その背景には毒婦（淫婦）との悪人夫婦という、悪人のユニットとしての造型があり、これは本作品の特徴的なパターンを形成することになる。玉梓と定包との関係が、今度は大塚匠作の娘である亀篠を淫婦とし、夫となる悪人墓六を伴うことで、これまた悪人夫婦というパターンを取って繰り返し登場するのである。そしてこの悪人夫婦もまた、里見家の再興をはばむ混乱と暴力をもたらすことになる。

このような類型はけっして形式の問題ではない。ここで毒婦玉梓が処刑される場面の最後の語りを見てみたい。そこには「この玉梓の怨念は里見家に長く祟ることになり、その悪念は子孫に纏わりつくようになった」（肇編第六回）(13)とある。「怨念」あるいは「悪念」は、靈魂信仰にあつては実在するモノであり、それは親から子へ、さらには子から孫へと伝えられると信じられていた。物語の最初でその悪によって処刑された玉梓の靈魂は、次に生まれてきた亀篠に伝染・転生したの

である。亀篠に伝わった「悪念」は、その次には夫となった藁六に感染していく。それが靈魂信仰の論理であったといふことができる。こうして血脈と靈魂の転生、感染といった暗い民俗的土着な信仰が言葉に表現され、〈悪人〉の系譜を形成していく。

こうして物語の場面に登場してくる善人と悪人は、それぞれ筋立とプロットの〈外部〉に根拠を持つことにより、善人は善人、悪人は悪人として、小物語の舞台に登場し、互いに死闘を繰り返す。最後に善人（八犬士）が悪人を倒すところでひとつの物語は締め括られる。これが「読み切り」の物語なのである。その物語を構成している人物には、馬琴の絶対的善悪論が透らぬかかっている。その結末が「勸善懲悪」の主題を完成させる。これが物語としての自己同一性を担保することになるのであり、また物語を〈反復〉させることにもなる。さらに言えば、こうして〈反復〉される小物語は、善人と悪人が絶対的善悪論で透らぬかれ、善人の勝利を通じて「勸善懲悪」を実現することにより、長編化する歴史物語へと自己をリンクさせていく。これが物語の〈連鎖〉という馬琴に固有な方法であった。

#### 第四節 絶対的善悪論から「勸善懲悪」へ

前節では、近世的な分冊出版、物語内容、町人層の享受形態、この三者の関係構造を、いくつかの観点から考察した。この関係構造において、長編構想に帰属する小物語の〈反復と連鎖〉が三者の関係を透らぬいていることが析出された。そしてさらに、〈反復と連鎖〉を支えているのが〈話型〉と、そこに内包されている靈魂信仰であるということまで追求した。〈話型〉には二元的世界観も内包されていて、馬琴はその世界観に善悪論を結びつけることで、絶対的善悪論を見出した。この絶対的善悪論は、読本の物語世界の構成方法であって、馬琴本人の日常生活の実践道徳ではなかった。その点はいま一度確認しておきたい。

「勸善懲悪」という言葉が『八犬伝』に現われてくるのは意外に遅い。後期の長編読本『八犬伝』の肇輯と第二輯にも確

かに多様な悪人が登場しているのだが、「勸善懲悪」に結びつくような言葉は見当たらない。ところが、第三輯の序になって初めて「勸善懲悪」に関連する言葉が現われてくる。そのことと関係のある言説を挙げてみよう。

昔者震且有鳥髮善智識。推因弁果。誘衆生以俗談。醒之以勸懲。其意精巧。其文奇絶。乃方便為經。寓言為緯。是以其美如錦繡。其甘如飴蜜。蒙昧蟻附不能去焉。既而所有之煩惱。化為屎溺。遂解說糞門。則不覺到獎善之城暫時為無垢之人云。不亦奇乎哉。余自少愆事戲墨。然狗才追馬尾。老於閭巷。唯於其勸懲。每編不讓古人。敢欲使婦幼到獎善之城。嘗所著八大伝。亦其一書也。(13)

ここに見られる「勸懲」「獎善」という言葉は、馬琴が初めて「勸善懲悪」という言葉を使った例と認められる。この言説全体に見られる教化的文脈から、馬琴はこの言葉に道徳的教化性の意味を付与しているのであり、したがって『八大伝』の主題を明示したものとみなされる。それに対し、第二章第四節で取り上げた高木元がこの通説に反駁するかたちで、この言説のうちの「推因弁果」に注目した。高木によれば「勸善懲悪」は教化を目的とした主題論が主ではなく、むしろ物語構成を成り立たる機能を主に論じたものと解釈される。

本論は高木説を支持するものだが、引用の馬琴の言説を別の観点から読み取ること高木説を補強したいと考える。本論が着目するのは「俗談」と「寓言」の対立構造である。「俗談」についてはまず「其美如錦繡。其甘如飴蜜」とあるが、これは美とか欲望や快樂とかの表現に価値を見出す比喩であろう。その価値が庶民の心を魅了し、愛着が生まれる(「蒙昧蟻附不能去焉」)。ある意味で、このような文脈に認められる否定的表現は、近世に入り文芸が世俗の外部から内部に表現価値を見出すようになったための結果である。しかしその価値を知らながら、馬琴は「寓言」を選んだ。「寓言」とは本来俗談を「方便」として「法」を伝える重層構造の法語に系譜する言葉であり、中世以降仏寺の僧徒によって語られてきた仏法の構積である。「方便」の具体が「俗談」である。「既面所有之煩惱」と捉えられるように、こうして美と欲望の表現は聴衆(読者)

にあらゆる「煩惱」を生むことになる。しかし馬琴は、それを「寓言」（語のレベルでいえば喩に当たる）とし、価値の転換をおこなう（「化為屎溺、遂解説糞門」）。世俗的な美と欲望の価値は、世俗外の「法」や真理の価値に対していえば、仮象であり、流行するものにすぎない。それが「法」や「真」の不変なるものに及ばないことはいうまでもない。馬琴はこの法語の重層構造を取り入れ、「法」に代えて「勸懲」を据えたのである。引用の言説は、「話」に対して「寓言」の価値を認めるといった論理を展開したものであるといえる。

このように、「話」に対して「寓言」の価値が重視されるという内容からすれば、引用の言説は主題論ではなく、まさに（物語）構成論であることがわかる。本論はあえてそのことを、この言説に見えない中国明代小説の「話」との対比に求めたい。おそらく馬琴が「勸善懲惡」を「寓言」の重層構造に捉えようとしたのは、「話」と「寓言」の間の価値的差異を意識したからであろう。第二部第五章でより詳しく論じることであるが、馬琴は儒者の自負を持ちながらも、もう一方で平田国学流の中華説をも信ずる。彼は、いわゆる中華漢字文化圏という世界観において、日本は中国とともにその文化圏を対等に担っており、それぞれが独自の文化を誇っているという自負を持っていた。この点は、彼が「話」よりも法、真理に近い「寓言」説にこだわったことからも見えてくる。本論は、中国明代小説と、この『八犬伝』における物語構成の差異を、馬琴がことさらに強調しなかったと考える。したがって中世以来の法語では「法」による陶冶に目的が置かれていたものの、馬琴がそれを「勸懲」という善悪論に入れ代えたものと考えられる。しかしこの言説は、あくまでも物語構成論の独自性に主題を見出すものであり、「勸善懲惡」はその構成論に加上されたという位置づけであることに注意しなければならない。

馬琴の「勸善懲惡」論はこのように解釈され、確かに読本の主題と認めることができよう。ただそのような通説は、そこにとどまっているだけであれば、明治初期の坪内逍遙が馬琴批判において痛烈に非難した人間類型論を、一歩も越えられないことになる。それは近代的な人間心理の可能性に価値を置くからこそその批判だったのである。近代から前近代を批判することは、もはや批評方法としては乗り越えられているはずである。馬琴の読本は、馬琴の時代の中で読み取られねばならない。馬琴の時代が、伝統的世界観から地獄的世界観への（知）の変革期に当たっていることについてはすでに言及した。こ

の言説は、この〈知〉の変革期に対応しているのではないだろうか。江戸の読本を中国明代小説と比較してその差異を論じようとすれば、馬琴が自己の読本を中国の文化伝統から切り離してその独自性を追求したあり方は、伝統的世界観（中華漢字文化圏）から地図的世界観（中国の「異国」化、日本文化の独自性の追求）への〈知〉の転換という時代の思潮の中に置かれると言えるのではないだろうか。

そのような視座から言えば、なぜ馬琴が「勸善懲惡」を、後期読本である『八犬伝』第三輯の序言になってことさらに公言（印刷）したのかについて考えてみる必要がある。戯作者として円熟期に入っている馬琴が、そこでこと新しく教化目的の主題論を語っていたのかどうか、まず考察する必要がある。本論と同じ問題意識に立つわけではないが、第二章第四節であげた高木論は、通説を超える新たな見解だといえる。ただ高木が、この「推因弁果」を「因果応報」の観念とただちに読み替えたことには納得できない。どちらも仏教用語であり、因果の法則を説明するものであるから、その点で違いがあるわけではない。ただその因果律のどこに重心を置くかで違いが生じており、この点が無視されていると言わねばならない。「推因弁果」とは、因を推して果を弁ずることであり、ある原因（「因」）によって事件（出来事）が生起・展開・終息する。その結果（「果」）がその原因の善悪によって規制されることになる、という意である。これは、人物の行為の原因と結果の間には因果律が支配しているという説明の方法である。それに対して「因果応報」とは、善因善果、悪因悪果という二項対立で説明できるように、善悪それぞれの因果律によってそれぞれにふさわしい報いを受けるという意である。ここでは、因果律（＝物語）そのものというよりも、「応報」という結果の功利性が強調される。高木がこの応報観を、物語（読本）を構成する原理として位置づける場合、物語の結末に実現される報いに対する読者のカタルシスを重視することになるのではないだろうか。因果応報観は、王朝期以来の古典の物語形式の作品にあって、ほとんど伝統的な構成論となっていると言わざるを得ず、そのどこに馬琴読本の個性が認められるのかという疑問に答えることはできない。

それに対して「推因弁果」という仏教語は、「推」と「弁」という語が示唆するように、ある原因によって事件が生起・展開・終息する際に、それを一語で「推」と言う表現である。それによってどのような結末がどのように現われるか、が「弁」

である。とすれば、たとえその根底に因果律がはたらいていても、重心は事件の生起・展開・終息（「果」）という物語性にある。馬琴の長編構想が、小物語の〈反復と連鎖〉にもとづいていること、その小物語に「推因弁果」と「勸善懲悪」という物語構成の重層構造を成り立たるための機能であること、これこそ、引用の言説の主題であったというのが本論の主張である。あえて図式的にいえば、「推因弁果」は中国明代小説の「話」の構造であり、馬琴はそれを「俗談」に一致させた。馬琴はそれを受容し、それに接続させるように「勸善懲悪」という構成と主題の重層構造へと物語論を移行させた。しかし善悪論に構成機能を求めることが可能かという疑問がつけまとうことは否定しようがない。ただ「勸善懲悪」における馬琴の善悪論がきわめて特異であることには、『八大伝』執筆の頃、仙台藩の医師の娘、只野真葛の『独考』という草紙の善悪論を彼が読んだということが大きく影響しているのではないだろうか、と想起される。次節では真葛の『独考』での議論を中心に、馬琴における「勸善懲悪」について考察してみよう。

## 第五節 「勸善懲悪」に関する只野真葛への反論

真葛の『独考』に「心のかたち」という章段があり、その一節に次のように記されている。

唯、「義」といふ字に当る心のかたちは、胸に集てつよくはる、俗に云かんしやくなり。さるを、よきことにはりたるを「義」といひ、あしきことにはりしを「暴」といふは、字のうへには善悪のたがひあれど、人の体内におきてはおなじ事なりけり。文字はよき心もて生し人の作しこと故、悪人の体内はしらざりけり。真葛癖をさらんと修行せしにより、おのづから心のかたちの腑分をして、是を明らめたり。さていはん、同じ心に善悪の二名有によりて、まよへることあり。『独考』「心のかたち」(14)

これは、真葛が自己の体験に即して述べた「善悪」論である。この体験によると、一個の人間の「心」（＝精神）がかかえもつ規範的意識が外部における人間関係の差異に忠じて、あるいは「善」（＝義）として、またあるいは「暴」（＝悪）として表現されるという。この真葛の内面的規範論からすると、善悪という価値にもとづく行為・表現も、その当初においては内面にうごめく感情の段階であり、まだ価値以前の内面の動きにすぎない。それが外部への行為・表現となるとき、内面の規範意識が作用して、あるいは善、あるいは悪の行為・表現となる。「よきことにはりたる」とか「あしきことにはりし」という判断は、内面の規範意識にもとづいているだけである。したがって、「義」と「暴」という外部に現われる行為・表現としては差異をもつが（「字のうへには善悪のたがひあれど」）、その差異は精神（＝心）が外部の状況に反応した主観的判断にすぎない（「人の体内におきてはおなじ事なり」）。それゆえ、真葛はそのあとで「同じ心に善悪の二名有によりて、まよへることあり」と語っている。善悪という（価値の）差異は、あくまでも内面の主観的判断によるものである以上、人間はつねに善悪の判断に迷うことがあるという。この真葛の内面的規範論を延長していけば、一個の人間の内面（＝「心」）において善から悪へ、あるいは悪から善へという墮罪と回心のドラマが起こることが想定される。価値判断が主観的であるというのは、善悪という価値が相対的なものにすぎないという点に由来するからである。

馬琴がこの真葛の「心のかたち」論を読んだのは、ちょうど『南総里見八犬伝』執筆の最中であった。本論が前掲の「善懲悪」説の背景にこの「心のかたち」論を据えるという仮説を立てるのは、真葛の善悪論が馬琴のそれとまったく対立していると考えられるからである。それでは、馬琴の善悪論とはどのようなものであるか。第二章では、『弓張月』における〈悪〉から〈悪人〉への造型論でさまざまに論じておいた。だがそれを『八犬伝』がどのようにに継承しているのかについてはまだ言及していない。あらためて馬琴の善悪論を正面に据えて論ずることにしよう。いうまでもなくその善悪論が「勸善懲悪」へと延びていくはずだからである。いわば本論における「勸善懲悪」の形成論となるのだが、その過程で重要な契機となったのは、この真葛の「心のかたち」論だと考えられるのである。

馬琴は『八犬伝』の執筆に追われるなかで、時間を割いて真葛の『独考』に全面的に反論する『独考論』を執筆・刊行し

ている。彼は、真葛の「心のかたち」論に反対する見解をしめし、次のように語っている。

又考へに、「字はよき心をもちて生れし人の作りし故、悪人の体内をしらざりけり」といはれしは、絶倒すべし。字は蒼頡さうけつが作りしといへど、必一人の手になるにあらず。そはとまれかくまれ、善人は悪人の肚裏はらのうらをしるものならずば、聖賢は何ものぞ。善人か悪人か、聖賢果して、悪人の胸中をしらずば、何によりて善を勧め、悪を懲こらすのよしを教ん。暴悪の君は良善の諫言を聴きかず、奸悪の徒は善人を誣しひて悪人なりといひし事、和漢に多かり。かゝれば善人は、悪人の肚裏はらのうらをしるものなれども、悪人はなかくくに善人の肚裏はらのうらをしらざるなり。〔『独考論』「第四 心のかたち」(15)〕

この馬琴の反論で注意すべきは、「善人は悪人の肚裏をしるものならずば」という確定条件である。この一節全体の文脈は「聖賢(善人)」と「悪人」は互いに理解し合えることのない、それぞれ別個の人間存在だということである。それがそのまま人間を類型化することになる。馬琴の善悪論は、規範意識による価値などというものではない。「善人」と「悪人」が相互に移行することは、先天的差別にもとづく類型なのである。このような馬琴の〈知〉は、真葛の内面的規範にもとづく善悪論と真向うから対立する。真葛の考えを相対的善悪論と呼ぶことができるならば、馬琴の考え方は絶対的善悪論と呼ぶことができよう。ただこのように比較してみると、馬琴の善悪論があまりにも極端であることはいなめない。真葛の善悪論は、経験に裏打ちされた日常実践の道徳論を背景にすると言える。一方馬琴のそれは、日常実践の道徳といえるのだろうか。この点が気にかかるのだが、どうも馬琴が日常的に実践していたとはいえない一文が見える。「暴悪の君は良善の諫言を聴かず、奸悪の徒は善人を誣しひて悪人なりといひし事、和漢に多かり」がそれである。これは明らかに「和漢」の文芸に見える物語内容を道徳的に捉えた言葉である。その類推は次の「勸善懲悪」の言説からも証明できよう。

○すべて作り物語は、善人を悪人に作りかへず、貞女をもて淫婦にせず、懲悪勸善を忠くするを作者の本意とすべし(16)

○昔の孝子順孫、忠臣貞女を誣て、悪人に作り易べからず。其善悪を転倒せば、縦新奇といふいへども、勸懲に甚害あり。(17)

〔南総里見八犬伝』九輯卷三十三自評〕

「すべて作り物語」というのは、戯作者の執筆経験を述懐するもの言いである。そのあとに絶対的善悪論が披瀝されるとすれば、それが物語構成の経験則にあつたということになる。その経験則はこの『八犬伝』にも表明されていた。善人が悪人に変節したり、悪人が善人に悔悛したりするという善悪の「転倒」が筋立の中であつたとして、たとえその筋立が読者に「新奇」な感動を与えたとしても、「勸懲」をそこなうことこの上もない、というのである。ただ「勸懲」を道德教化の意味にとり、この言説を理解しようとする矛盾したことになる。というのは、もし悪人が善人に悔悛したとすれば、それは「勸善」の結果であり、また読者に「勸善」の感動を伝えることになるからであつて、それを「甚害あり」というのは矛盾だと逆にいえるからである。それゆえに「勸懲」というのは道德教化の意味ではないということになる。そうすると、「善人を悪人に」作りかへず」という言い方が気になる。これはあるいは筋の途中で善人がいつのまにか悪人に「作りかへ」られていることをいったものかもしれない。つまり、そのことによつて物語内容の構成が崩れてしまい、読者に混乱を与えてしまうことを、馬琴はもっとも嫌がったのではないか。

このように解釈してみれば、「勸懲」は物語構成の方法ということになる。むしろ二次的に「善を勧め、悪を懲らし」という道德的教化が求められたといえる。このことは「勸善懲悪」という言葉の成立に絶対的善悪論が大きく関係していることを示唆するものである。

馬琴の絶対的善悪論は、あくまでも読本の物語構成における方法論であつた。したがつて「勸善懲悪」がその絶対的善悪

論を内府している以上、やはり物語構成を成り立たせる機能が第一次的であって、道德教化的側面は二次的な加工であるというのが本論の結論である。その絶対的善悪論、具体的にいえば「善人を悪人にして誣ず、悪人を善人につくりかへず」という物語構成を支える絶対的善悪論は、すでに第二章で論じた『弓張月』における為朝の筑紫下向物語、伊豆八丈島配流物語といった〈反復〉する物語の構成に原型が見えていたものである。これらの物語は、為朝の旅を妨害する怪物や異人がつねに外部から人間世界に侵入してくるという構成を〈反復〉する。そのような構成の背後にある世界構造としては、〈悪〉の怪異・怪物が棲息する異界（異郷）が想定され、それが善人（人間）の住む世界の外部にあることを前提とする。この神話的・民話的な〈話型〉に内包される二元的世界構造が、絶対的善悪論へと延びていったと考えられるのである。

このような絶対的善悪論に従えば、悪（人）は悪なる世界に棲むから悪（人）なのであり、そのような悪（人）と善人はけっして変換することができない。つまり善人の中に入り込んだ悪（人）の存在は、かならず善人によって善人の中から排除されねばならない。たとえば『弓張月』の結末を見てみよう。前王朝を滅亡させた異人（悪僧矇雲）が主人公の為朝とその子舜天によって殺害されるというのがその結末である。

矇雲吭碎て、篋ぶかにぐさと射込ままへば、しばしも堪ず馬上より、仰さまに挫と墮。為朝得たりと馬より飛をり、彼宝劍をとりなほして、九刀刺撤し、怯むところを押伏せて、首を弗と搔落し給へば、天俄に結陰、大雨盆を覆すがごとく、四面野干玉の闇となりて、しばしば善悪もわからざりけり。（残編六五回）（18）

矇雲という悪僧は、地底の異界から出現した異人であるがゆえに、琉球国の王朝を倒して大きな混乱をもたらす。この出現においても、〈悪〉は異界と結びつけられている。王を追放したあと、矇雲は王を潜称して琉球を支配するが、琉球は矇雲の支配によって異界へと反転する。〈悪〉の存在する世界は異界だからである。琉球の救援のため再度琉球に渡った為朝父子は矇雲と戦い倒すことに成功する。それが引用の場面である。ここでは矇雲が殺戮される瞬間の場面描写に注目したい。そ

の描写は、単に一人の悪人が殺されるというよりも、その殺害が世界の崩壊と結びついたものとなっている。「天俄に結陰、大雨盆を覆すがごとく」という大きな描写は、世界全体が一端崩壊し、暗黒へと回帰したかのようなものである。しかしこの描写は、異界へと反転していた琉球が、朦朧の死とともに善人の住む人間世界へとふたたび反転する予兆として表象されていると考えることもできる。悪（人）は善人の中から排除されねばならない。それが絶対的善悪論による物語構成の結末である。そこに「懲悪」という道德教化的側面が稀薄であることも確認しておきたい。

『弓張月』の物語構成の段階では、このように構成機能を担った絶対的善悪論に道德教化的側面が加工されることで、「勸善懲悪」という方法論となり、かつ教化論でもあるような言葉が成立したとみるのが本論の見解である。もしそうだとすると、道德教化的側面が加工される契機が何だったのか、それが次の問題となる。このような形式的観点からすると、注目されるのが前節で論じた真葛の『独考』という草紙の存在であり、それに対する馬琴『独考論』に拠る反論である。馬琴の「勸善懲悪」の形式にとって、特に道德的教化的側面の加工をめぐる馬琴の反論がどのような契機になったのかについては、言及しておく必要がある。

馬琴の反論は、真葛の「心のかたち」という章題に向けられたものである。とりわけ「字のうへには善悪のたがひあれど、人の体内におきてはおなじ事なりけり」、また「文字はよき心もて生し人の作しこと故、悪人の体内はしらざりけり」に対して、馬琴は「かゝれば善人（＝聖賢）は、悪人の肚裏をしるものなれども、悪人はなかくに善人の肚裏をしらざるなり」と反論している。ここに焦点を当ててみよう。真葛のいう「字」とは、規範として表現された道德項目を示唆する。真葛は自己の生活経験に照らしてこう述べる。一個の人間の「心」のうちには「善悪」以前の主観的価値観があるだけであって、個人はそれに従って行為する。その行為に対して外部の規範があてはめられて「善悪」という価値判断がなされる。しかしそれでも「悪」を犯す人はなくならない。主観的価値が規範として表現された道德項目と違ってしまふからである。それは「悪」を犯す人の責任というよりも、規範としての道德項目を作った「聖賢」が「悪人」の主観的価値観が理解できないために生じたものである。この真葛の理解に対して、馬琴は反対の立場を取り、次のように述べる。道德律を作った「善人（＝

聖賢)はかえって「悪人」の主観的価値観を十分に理解し、彼らにも守りやすい、幅のある道德律を作った。それにもかかわらず、「悪人」はそのような幅のある道德律を作った「善人」の意図を汲むことをせず、悪を犯すのである。その例として馬琴は「暴悪の君は良善の諫言を聴かず、奸悪の徒は善人を誣て悪人なりといひし事、和漢に多かり」と言う。ここで文芸作品のプロットにおける「善人」と「悪人」の劇的葛藤が取り上げられていることには注意しておきたい。

このように説明してくると、真葛と馬琴の善悪論は次のように図式化されよう。この点興味深い。

真葛

儒教的イデオロギー

馬琴

善／悪

「字」、規範としての道德率

善人／悪人

生活経験(内面的規範)

外面的規範論

読本・物語世界(人間類型論)

二人の認識は、真葛が善／悪という抽象的一般的概念で徳性を捉えているのに対し、馬琴が善人／悪人という人間類型論で徳性を捉えているところに大きな差異を見出す。馬琴は、儒教の規範としての徳目は儒教の規範としての徳目に媒介させ、真葛の規範内面論に反駁する道德的立場としている。本来物語構成の方法論として論理化されていた絶対的善悪論は、真葛の「心のかたち」に見える規範内面論への反駁を通して、道德的教化論としての性格を得ていったのである。真葛の「心のかたち」論は、規範化された徳目がいかに人間性を束縛するリゴリスティックなものであるかに生活経験を対峙させ、これを批判したものである。それは儒教そのものへの批判の一環であった。儒者を自負する馬琴にとって、真葛の儒教批判は、善悪の価値を主観化することで曖昧にさせてしまうものと見えたにちがいない。

馬琴の反論は、直接に真葛の主観的善悪論に対峙しようとするものではなく、儒教的イデオロギーを形成する規範としての道德律を媒介にしたものである。これはむしろ、儒教的道德律に対して文芸(読本)がどのように協力できるのかを模索し、その成果を真葛の主観的道德論に対する反論としようとしたものだと言える。そうだとすると、善悪という二つの方法

によつて「物語世界」を構成する馬琴読本は、さらに善悪の闘争というヴィジュアル的にデフォルメ化する方法を加えることで、「善」の価値性、「悪」の反価値性をデモラル化したかたちで読者に訴えることができたと言えよう。本論は「勸善懲悪」を、従来の通説とは異なるかたちで理解しようとしているわけではない。道德教化的側面は、単純なヴィジュアル化を通じて読者（江戸の町人層）の実用に供することができる。このことに馬琴は気づいたと主張したのである。

このように論じてくると、真葛の主観的善悪論に反論する馬琴の言説は、物語構成がそのまま道德教化という実用性をもつということへの馬琴自身の確認を示すものだと言える。このような馬琴の「勸善懲悪」論は、自己の読本とは異なる他ジャンルの草紙類や演劇の批評にも援用されることになる。たとえば歌舞伎の演目、前代の元禄期の西鶴、近松に系譜する浮世草子、人情本といったジャンルに対しても、馬琴は自己の「勸善懲悪」論をもつて次のように批評する。

○仮令歌舞戯などいふものは、人情をうち出して、善人に似たる不善人も善人の部へ入れ、貞女に似たる大淫婦も貞女の部へ入れ、よろづ人の気をとることを第一にすれば、見るものも又戯の字に引きあててこれを咎めず。これより甚しきことも往々あれど、勸懲を宗とせし唐山の小説などには絶えてなし（19）

（『胡蝶物語』前編卷三）

○お染久松。三勝半七かこと。夕霧伊左衛門が所訳。梅川忠兵衛が道行などさへ。さらく無理とは思ふものなく。憐な事じやと感に堪しに。それよりぐつと立あがり。譬に引くものもない。貞女烈女と思ふたる。おかる女郎や。小浪御寮の身のうへも。罨梓てよく聞ば。義理に称ぬ事多し。（20）

（『胡蝶物語』前編卷三）

馬琴が批評の対象にした作品は、男女の主人公が「義理」と「人情」のはざまに落ち込んで善悪の批判を見失い、内面に

おける葛藤の破綻によって、やがて悲劇に終わるといふ筋立である。それはほぼ一般的のだが、その構成と筋立が江戸の町人層には好評だったようである。読本作者の馬琴にとつても、同じ文芸に携わる者として無視しえなかつたのであろうか、彼は引用に見えるような批評を書いている。「歌舞伎」というのは、当時大いにはやっていた『仮名手本忠臣蔵』や近松門左衛門の浄瑠璃台本の演目だったようだが、「人情をうち出して」「義理に称ぬ事多し」と馬琴が批判しているように、舞台上の登場人物の男女は色恋と金銭欲に絡め取られて「人情」に引きずられ、「義理」に背かざるをえなくなるといった演目だったようである。それに対して馬琴は、「善人に似たる不善人」と批判するのだが、これはたとえば『曾根崎心中』の忠兵衛のように、もともととかく「人情」に惹かれがちな気の弱い性格の登場人物を、皮肉な目指しで見つめた言葉なのである。観客は気の弱さを「善人」とみなすかもしれない（「善人の部に入れ」）。しかし「人情」にほだされて「義理」を破るとすれば、その行為において彼は「不善人」にほかならない。ここに、内面の主観的な善悪批判に迷い、行為として悪をおこなうという人間の弱さがあり、それゆえ客観的な行為によって善悪を判断すべきだという主張がある。これはまさに、真葛の見解に反論する馬琴の絶対的善悪論の立場と重ね合わさるものである。

しかし馬琴の考えを離れていえば、善人は、相手の苦境に同情して「義理」を破るなら、当然法の咎めを受ける。善人でありながら悪へと落ち込んでいくという心理劇が「歌舞伎」の世話物狂言から読み取れることも確かである。人間はその内面において善から悪へと墜落することがある。このような内面の揺れには、真葛的な相対的善悪論が認められるのに対し、「善人に似たる不善人」と類型論で批評する馬琴の絶対的善悪論が、きわめてリゴリスティックに映ることも確かである。馬琴が「歌舞伎」の世話物狂言の男女を「善人に似たる不善人」「貞女に似たる大淫婦」と非難するのは、人間の内面における心理の変化に価値を認めているためではない。それは、人間の外面に現われる行為に文芸上の価値を認めねばならないという馬琴の読本肯定論にほかならなかつた。ここに読者作者の意地が見える。その意地は次の引用にも認められる。

稗史伝奇の果敢なきも、見るべき所は、勸懲に在り。勸懲正しからざれば、誨淫導慾の外あらず。或は善人不幸にして、

悪人の惨毒に死辱を曝す事なども、作者宜く憚るべし。こも勸懲に係ればなり。(21)

(『南総里見八犬伝』九輯卷三十三自評)

引用の後者の「誨淫導慾」というのは、歪んだ欲情があふれるの意で、さきほどの「貞女に似たる大淫婦」に意味が重なりと見てよい。そうであれば、「脚色」とは「歌舞戯」の世話物狂言に見るような、「人情」と「義理」の間の葛藤劇を指すということになる。つまり、この『八犬伝』はそのような「脚色」を借りなくても、「勸善懲悪」の構成と主題(道德教化的)とがそこにすらぬかれている。これが馬琴の自負である。つまり馬琴読本は、「歌舞戯」の世話物狂言とはまったく別個のジャンルであって、構成とプロット、そして主題においてそれと交差することはないと断言しているのである。ただそれでも(「歌舞戯」の)「脚色」に彼が言及せざるをえないのは、江戸の町人層の間では「人情」と「義理」の葛藤という世話物狂言がもてはやされていて、無視できないという事情があったためである。しかし馬琴は、そのような葛藤が「善」か「悪」かで苦悩することへと展開するために、「勸善懲悪」の善悪の単純化を曖昧にしよう(「勸懲正しからず」こと)になることを危惧する。善悪の曖昧化に人間性を見ようとすることは、反社会的な無秩序を助長することにほかならない。馬琴は『独考論』で見るごとく、あくまでも儒教イデオロギーを守ろうとしていたのである。

## 第六節 おわりに

以上、論じたように『八犬伝』では、歴史小説風の筋立と「勸善懲悪」を大きなモチーフとし、それを小物語のプロットが(「反復と連鎖」)によって実現していくことで長編構想が成り立っている。その中でも、小物語がほぼ四、五回分の叙述量で「始め」、「中間」、「終わり」を持つ完結したプロットを構成する。ここに馬琴の読本の特徴がある。長編の構想をもつ歴史小説の中で、次々と繰り返される完結した話を読者に読み切らせることが、購読者の興味を惹くとともに興味を持続させ

る効果をもっていることはたしかである。その個々の「読み切り」の構成ごとに、一方で馬琴に独自の「勸善懲悪」の持つ構成機能が貫かれている。これが、分冊出版においても読者の興味を持続させていく物語構成となる。ところでその構成機能は、善人は善人として、悪人は悪人として固定化させるものだと述べた。もつとも固定化とは、善人のカテゴリーの固定化であるというべきかもしれない。善人は忠義の勇士の八犬士であり、一小物語ごとに次々と入れ代わって登場し、それぞれの小物語の主人公を演じ、悪人を倒したところで物語は終わる。これが小物語を〈反復〉させるとともに、大きな物語としての自己同一性を担保する一単位となっているのである。

馬琴読本の物語構成と道德教化の両者を担う「勸善懲悪」と、それを支える絶対的善悪論とは、近世の分冊出版や江戸の下級町人層の〈知〉のレベル、そして〈読む・聴く〉という享受形態や、それに馬琴の時代における世界観の転換などとの関係構造に規定された歴史的所産である。本論ではこのことを、さまざまに考察してきた。しかしながら馬琴読本が、近代文学の開始に当たり、西洋文学における自然主義文学理論を導入しようとした坪内逍遙の批判的となったことは文学史的によく知られた事実である。逍遙によれば、馬琴の造型した人物はまるで「勸善懲悪」の二分法によって差別化されたような人間類型であって、「悪人」はあくまでも「悪人」であり、「善人」はと言えば、まるで時代の道德の化身であるかのような「善人」という役割を変えようとしめない。逍遙は、そのように類型化された人物を〈外部〉の規範化された善悪で二分化された人工物にすぎず、人間の自然性とはまったく相容れないのだと述べ、その反自然性を激しく批判したわけである。

確かに近代的人間観からすれば、そうかもしれない。ただ馬琴の作家的立場によりそっていえば、「勸善懲悪」と、それを支える絶対的善悪論は、近世的文芸空間において必然的に形成されざるをえなかった。これが本論の主張である。「勸善懲悪」を近代文学観で裁断する以前に、近代と前近代の間の文化的空間の差異に注意を向けようとしてみたい。それが本論の試みだったわけである。

【注】

- (1) 濱田啓介「勸善懲惡」補紙』『近世小説・當為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年
- (2) 大屋多詠子「勸善懲惡」『江戸文学』第三四号、ぺりかん社、二〇〇六年
- (3) 大高洋司「京伝、馬琴と〈勸善懲惡〉」『京伝と馬琴』翰林書房、二〇一〇年
- (4) 高田衛『完本 八犬伝の世界』筑摩書房、二〇〇五年。
- (5) 川村二郎『里見八犬伝』岩波書店、一九八四年。
- (6) 諏訪春雄・高田衛編著『復興する八犬伝』勉誠出版、二〇〇八年。
- (7) 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝(一)』岩波書店、一九八四年、一七八～一七九頁
- (8) 『南総里見八犬伝(二)』一一五頁。
- (9) 『南総里見八犬伝(一)』三二～三三頁
- (10) 『南総里見八犬伝(二)』一一四～一一五頁
- (11) 後藤丹治校注『椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、一九三頁。
- (12) 『南総里見八犬伝(二)』二七八頁
- (13) 『南総里見八犬伝(二)』一一五頁
- (14) 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝(二)』岩波書店、一九八四年、三頁
- (15) 鈴木よね子校訂『只野真葛集』国書刊行会、一九九四年、二九二頁。
- (16) 『只野真葛集』三四五頁。
- (17) 『日本随筆大成』(第二期)一九 吉川弘文館、一九七五年、一九三二二頁。
- (18) 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝(九)』岩波書店、一九八五年、六頁

- (19) 後藤丹治校注『椿説弓張月下』岩波書店、一九六二年、三八四頁。
- (20) 服部仁編『夢想兵衛胡蝶物語』和泉書院、一九九七年、一四八～一四九頁。
- (21) 『夢想兵衛胡蝶物語』一五五頁。

第二部 曲亭馬琴における異国

## 第一章 曲亭馬琴の異国情報収集と考証——『白石叢書』の収集と校訂

### 第一節 はじめに

第一部では、江戸時代の出版文化と書物流通の発達について、またそうした書籍文化が曲亭馬琴の長編読本構成にどのような影響をもたらしたかについて論じた。さらに『椿説弓張月』と『南総里見八犬伝』について、「悪」という観点から、「内部」と「外部」（異界、異国）に潜む悪の存在に注目し、「懲悪」の問題について分析を行った。この第二部第一章からは、曲亭馬琴と彼の作品をめぐる、異国という観点から検討していく。江戸出版文化にあつては書物の収集と移動が頻繁に行われており、そうした書物の収集や友人からの貸し出しに、馬琴もかなり熱心であった。

本章では、異国を認識するため、また作品のなかで異国を描くために、馬琴がどのような異国情報源を持っていたかを中心に検討していく。彼の異国情報源として大きな位置を占めていたのは、新井白石（一六五七—一七二五年）の著作を集めた『白石叢書』であった。また馬琴は、その確認の作業を、内容の校訂と書入れ、つまり考証という学問的作業を通して行っている。そのため、彼が行っていた校訂と書入れを綿密に検証することが重要である。『白石叢書』には多くの異国情報が記されているが、本章では、馬琴が「異界」としての地域ではなく、「異国」として認識し始めた、琉球と蝦夷に関する書物について論じていきたい。

本章で特に注目するのは、馬琴が『椿説弓張月』を執筆していた時期と、新井白石の著作を集めた『白石叢書』を収集していた時期が、一部重なっているという点である。その時期が重なっていることのみが重要であるのではなく、『白石叢書』の琉球関連書物（『南嶋志』など）が、『椿説弓張月』に影響を与えていることも重要だと考えられる。この点に関して、大高洋司は「残篇には、「拾遺篇附言」の考証に基づいて、……物語の結末で、為朝自身もまた神となったことの根拠が示されている。参考文献については、『中山伝信録』に加えて、『南嶋志』等、新井白石の著作が全面に出てきているのが、特徴で

ある」<sup>(1)</sup>と、為朝の伝説化に『白石叢書』の『南嶋志』が用いられていると論じている。その他、播本眞一は、「文化五年九月の白石叢書購入読誌が「残篇」以降の馬琴の琉球認識に影響を与えているのは後藤注によっても明らかである」<sup>(2)</sup>と、『白石叢書』が馬琴の琉球認識にまで影響を及ぼしていると指摘している。後藤丹治が注釈を付けた『椿説弓張月』（日本古典文学大系）によると、『南嶋志』『琉球国事略』からの引用は、特に「残編」から多く見られ、「残編引用旧説崖略」の「羽羽（ハブ）」、「神社（ヤシロ）」などに関しては、馬琴は『南嶋志』の内容を引いて説明している。<sup>(3)</sup>以上のように、『白石叢書』の琉球関連書物が、『椿説弓張月』の後半構成と琉球認識に影響を与えていたことは明確である。

『白石叢書』には、詳細な校訂や書入れがなされており、それらを全体的に見ると、異国情報収集に熱心な馬琴の姿がみえてくる。とすれば、馬琴が執筆した作品にみえる異国像の背景に、異国に関連する情報を求めた痕跡があるのではないか。本章では、筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』を検討し、その痕跡を追求したい。具体的に言えば、馬琴がどこから異国の情報入手し、その情報源として、どのような書物や風聞を収集したのかを検証する。その情報源の一つが『白石叢書』であったという前提に立ち、本章では異国に関連して記された書入れや校訂をまず分析し、さらに琉球と蝦夷に関連する書物に記された記録を中心に、『白石叢書』の『椿説弓張月』への影響、馬琴の蝦夷認識を考察していくことにする。馬琴の〈異国〉に関する思想については、本論文は播本眞一論文と同じく、馬琴が〈異国〉について得ていた豊富な情報と、彼の〈異国〉に関する思想とのあいだには「乖離」が見られる、とする結論を導きだすことになる。<sup>(4)</sup>

## 第二節 異国の情報収集——『白石叢書』の収集

馬琴の異国情報の収集、考証活動が本格的に進むようになったことには、『白石叢書』の収集、校訂が大きく関連している。新井白石は江戸時代の儒学者、歴史家で、朱子学を信奉したが、現実的・政治的関心にもとづいた歴史や地理など実証的な学問の分野に多くの実績を残している。主な著作としては、日本古代史に関する『古史通』（一七一六年）、武家政治成

立史としての『読史余論』（一七二二年）、近世史としての『藩翰譜』（一七〇二年）、自伝ならびに同時代史としての『折たく柴の記』（一七一六年頃）などが代表作である。地理の分野では、『蝦夷史』（一七二〇年）『南嶋志』（一七一九年）などを著し、蝦夷地や琉球の地誌を作るとともに、日本に潜入し捉えられたカトリック司祭・シドゥティの訊問等に基づいて、『西洋紀聞』（一七〇九年）『采覧異言』（一七一三年）を著し、洋学の先駆者と称される。<sup>(5)</sup>『白石叢書』は三十卷三十冊・続二十二卷二十二冊から成り、新井白石の著書を集成したものである。編者・成立時期は未詳であり、江戸後期に成立したと考えられる。成立事情の異なる同名の叢書があり、『広白石叢書』『白石遺稿』『白石爛』『白石子』と題する叢書もある。『白石叢書』には、白石の主要な著作である『藩翰譜』『読史余論』『西洋紀聞』『東雅』『鬼神論』などは欠けている。内閣文庫蔵本（巻一・七欠。存五十冊。昌平坂学問所旧蔵）、静嘉堂文庫蔵本（続欠。存三十冊）、筑波大学蔵本（続欠。存三十冊。曲亭馬琴旧蔵）の系統が代表である。<sup>(6)</sup>また、東北大学図書館狩野文庫には、『白石叢書』（正統編、百冊）が所蔵されている。

馬琴の白石に関しての評価は高い。宮崎道生の指摘にあるように、「馬琴の白石評価は第一に……「経世の学」にあり、第二には優れた史学、第三には豊富な海外知識」において高かった。<sup>(7)</sup>馬琴の書簡には、以下のような白石に対する高評価が見られる。「儒にてハ白石、和学ハ翁、この外ニなつかしく思ふ人無之候。白石著述ハ、大ていあつめ候へども、翁の著述ハ多からず」<sup>(8)</sup>【現代語訳】儒学では白石、和学（国学）では本居宣長、このほかに思い浮かぶ人はいない。白石の著述は大体、集めているが、宣長の著述は多くない。<sup>(9)</sup>（天保二年（一八三一）十月二十六日、篠斎宛）<sup>(8)</sup>【現代語訳】は本論文著者による。以下同様）、「白石先生御信仰のよし、たのもしく奉存候。儒流にて、尤有用の学者ニ候間、老拙も壮年より信用いたし候」<sup>(10)</sup>【現代語訳】白石先生を深く尊敬しているということですが、大変、心強く思います。儒学者としては、もっとも役に立つ学問をされている学者ですので、私も壮年より信頼しております。<sup>(11)</sup>（天保三年（一八三二）二月八日、桂窓宛）<sup>(9)</sup>と、白石を儒学の第一人者として高く評価しており、和学においては本居宣長（「翁」）を尊敬していたことがうかがえる。さらに、白石の「信仰」「儒流」を「有用の学問」として認めており、その学識はもちろん、現実的な学問として信用してい

たこともわかる。

『白石叢書』に関しては、書簡における以下の言及が注目される。「文化中、価金五両にて有方より小子買取、年々手透くに校訂致、秘藏致候愛書に有之候へども」【現代語訳】文化（一八〇四〜一八一八）年間に、金五両で、ある方から私が買い取り、毎年、暇な時に校訂をし、秘藏していた愛読書でありますけれども（天保十一年（一八四〇）十二月十四日、篠斎宛）<sup>(10)</sup>、「実ニ稀なる珍書に候間、全部三十二卷、文化中金五両にて買取、其後年々校訂致、秘藏第一の愛書ニ御座候」（現代語訳）【本当に稀で珍しい本ですので、全三十二巻を文化年間に金五両で買い取り、その後、毎年校訂をした、私の秘藏している書物の中でも一番の愛読書であります。（天保十二年（一八四一）正月二八日、桂窓宛）<sup>(11)</sup>と、「秘藏」「愛書」「珍書」として、高い評価を示している。

馬琴は、白石の著作を一冊ごとに買い求めていくうちに、叢書として購入することを決意するに至っている。宮崎の指摘にもある通り、馬琴が『白石叢書』をまとめた形で入手したのは、文化五年（一八〇八）九月のことである。<sup>(12)</sup>馬琴自身はこの入手時期について、『白石叢書』目録後の書入れに「文化五年秋九月、購得是書於坊賈」<sup>(13)</sup>【現代語訳】文化五年秋九月、この本を町の本屋で買い求め」と記している。それ以前から、『藩翰譜』『読史余論』などの白石の著作を、単独の形では所蔵していたようだが、一揃いの『白石叢書』を手に入れたのは、一八〇八年である。大高が指摘している通り、これは『椿説弓張月』前編六巻刊行の二年後である。叢書の目録は、異本によって様々あり、その内容も、またヴァラエティに富んだものである。馬琴の白石に対する高評価を時代背景から考えれば、宮崎の指摘にある通り、馬琴が二十代であった天明時代（一七八一〜一七八九年）になると、それまで「学界に君臨していた徂徠学を抑えて、白石の学問が最高度の評価」を受けるようになったことも、大きく作用していると考えられる。<sup>(14)</sup>

本章では、『白石叢書』のうち、異国について記された巻に注目する。宮崎、播本の指摘にある通り、馬琴は白石の異国情報をすべて肯定しているわけではなく、『白石叢書』に含まれている異国情報のすべてが、白石が書いたものと判断していたわけでもなかった。<sup>(15)</sup>そこに記された異国に関する記述箇所には、馬琴によって朱筆で修正されたり、補足情報が書き込

まれたりしている箇所が散見される。このような書入れは、馬琴の、より正確で豊富な異国情報を得たいという気持ちのあらわれであるとみることができるだろう。実は、後述する通り、馬琴が白石の作でないと考えたもののなかに、実際には白石の作であることが明らかになっているものもあり（『蝦夷之記』）、逆に、馬琴が白石の作だと判断したもののなかに、別人の作のものもある。<sup>(16)</sup> 本論文では、これら馬琴の誤認のケースも含めて、馬琴の異国への旺盛な知識欲の表れと考えたい。

馬琴が所蔵していた『白石叢書』については、三宅米吉<sup>(17)</sup>がその存在と所蔵場所を指摘して以来、宮崎道生<sup>(18)</sup>は新井白石との関係を中心に捉え、播本眞一<sup>(19)</sup>は馬琴の異国認識の資料として使用している。また、前述したように、大高洋司<sup>(20)</sup>は、『白石叢書』の収集が完了した時期が文化五年（一八〇八）であり、『椿説弓張月』の執筆時期と重なっていることから、『白石叢書』の異国情報と馬琴作品との結びつきを重要視している。大高は、馬琴が『椿説弓張月』の後半（続編、拾遺、残篇）で琉球を描いた際には、中国清朝の官吏、徐葆光による清皇帝への琉球事情報告である『中山伝信録』（一七二一年）とともに、新井白石の『南嶋志』などの著作が、大きな役割を果たしていると指摘している。また、大高は、『椿説弓張月』は前編、後編、続編、拾遺、残編で構成されているが、その続編の刊記の「附録」や残編の序に、『南嶋志』『白石叢書』卷十七）、『琉球国事略』（卷二十七）などの記述がみられることから、叢書の情報が後半の構想に影響を与えていると主張している。

馬琴が所蔵していた『白石叢書』は、巻一の表紙に「巻一 新井家系 同附録 輶記 古画之序」と所収書名があり、「曲亭蔵本」という朱印が押され、『白石叢書一』と題がつけられている。巻一の冒頭には、「天爵堂叢書目録」（天爵堂は白石の号のひとつ）という題目があり、その下に、馬琴の所蔵であることを示す「瀧澤文庫」、「曲亭蔵本」という印が押されている。それから順番通りに、巻一から巻三十までの三十冊、五四の書物名があげられている。

次にあげるのは、筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』の目録であり、その巻ごとの書物名である。『白石叢書』の巻一には、全巻の目録が記されているが、実際の巻の題目とは異なる場合がある。題目の中の一字のみ違う場合もあるが、すべて違う場合もあり、ここでは実際の巻における題目を（ ）に入れて併記した。以下の一覧作成においては、論者が筑波大学

図書館所蔵本を綿密に調査し、宮崎論文を参照して作成したものである。(21) 馬琴は、題目に自筆で補注を加えており、これは「」に入れて記載した。宮崎が指摘している通り、「馬琴の識語により」以下の三十冊に対する校訂は、「文政五年四月二十六日から六月三日にかけて」施されたことが分かっている。(22)

「天爵堂叢書目録」

滝沢文庫 曲亭蔵本

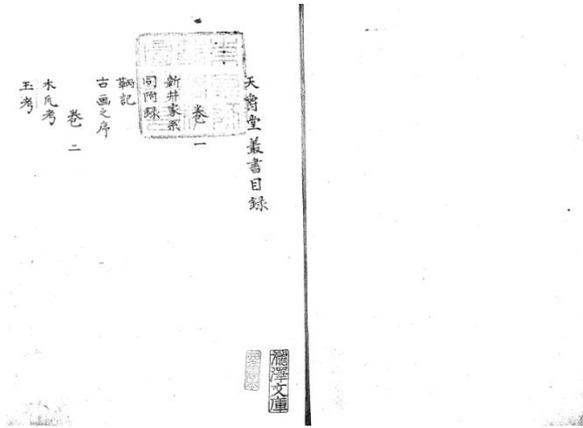
- 卷一 新井家系 同附録 鞞記 古画之序
- 卷二 木瓜(瓜)考 玉考 俳優考
- 卷三 楽考 起証文考証 聖像考 近(准) 呈按 決獄考
- 卷四 人名考 他名河川通用考(地名河通考) 准后准三后考
- 卷五 癸巳三月議 觀楽筆談 江関筆談
- 卷六 東音譜 御系譜 冠服考
- 卷七 紺珠 神書
- 卷八 神書
- 卷九 国書跋(復)号記事
- 卷十 関原正譌(関ヶ原正譌 此下二通脱簡) 白石與鳩巢書簡自公之書拔〔是編逸〕
- 卷十一 軍器考余〔宇治田忠郷〕
- 卷十二 朝鮮聘使録〔唐世濟〕
- 卷十三 奥羽海運記 日本行程考(記) 白石遺稿
- 卷十四 白石書韓(翰)

- 卷十五 蝦夷風土記〔葛西質〕
- 卷十六 蝦夷之記（蝦夷記）〔作者未詳〕
- 卷十七 南島志
- 卷十八 白石遺文
- 卷十九 白石著述目録 国喪正議
- 卷二十 蝦夷志
- 卷二十一 経邦典例序例 黄白問答（田制考序 貨幣考序 車輿考序 冠服考序 樂無考序 職官考序 方策合編序  
以上経邦典例序例 黄白問答）
- 卷二十二 新室手簡
- 卷二十三 長久手簡（記）〔記者不詳〕
- 卷二十四 朝鮮通交録〔此非白石著述享保中成於對馬人之手者也〕
- 卷二十五 小牧戦話〔記者不詳〕
- 卷二十六 殊号事略 外国通信事略（右骨董録 五事略一）
- 卷二十七 琉球国事略 本朝宝化（貨）通用事略 高野山事略（右骨董録 五事略二）
- 卷二十八 采覧異言（上）
- 卷二十九 采覧異言（下）
- 卷三十 北海随筆〔非白石著述記者未詳〕同附録（終）<sup>23</sup>

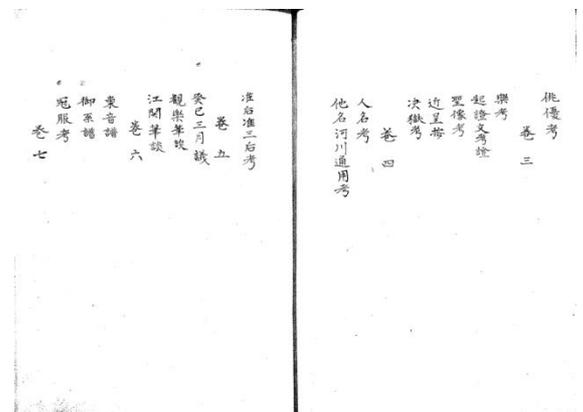
『白石叢書』の題目のいくつかには、「作者未詳」、「記者不詳」、「非白石著述」と馬琴によって書入れがなされている。叢書中には、白石の著作ではない、と馬琴が判断したものも存在することを示している。訂正の朱筆（書入れ）の多い巻が、

そう判断されているようである。馬琴にとって、『白石叢書』の情報や知識の信頼性は、白石の著作であるか否か、という点にかかっており、異国情報の正確性を新井白石の権威に求めていると言つてよい。

『白石叢書』の目録を見て言える大きな特徴は、異国に関する書名が多く見られることである。特に、朝鮮に関しては『朝鮮聘使録』『朝鮮通交録』、琉球に関しては『南嶋志』『琉球国事略』、蝦夷に関しては『蝦夷風土記』『蝦夷之記』『蝦夷志』『北海随筆』、さらに西洋に関しては、『外国通信事略』『采覧異言上』『采覧異言下』などの書物が目立つ。このような叢書所収の多数の書物から、馬琴は島国日本の周辺、あるいは彼方に存在する異国情報を正確に収集しようとしていたことがうかがえる。



【図一】『白石叢書』目録



【図二】『白石叢書』目録

『日本古典文学大辞典』で挙げられている『白石叢書』の三つの系統を、論者が調査して比較してみると、馬琴所蔵の『白

『石叢書』を通して、他の叢書には欠如している巻の題目を推測することができる。まず、静嘉堂文庫蔵本『白石叢書』の目録を見ると、以下のようなものである。

新井先生叢書目録

静嘉堂蔵書

- 巻第一 新井家系 同附録 軼記 古画之序
- 巻第二 木爪考 玉考 俳優考
- 巻第三 楽考 起証文考証 聖像考 近皇(呈)按 決獄考
- 巻第四 人名考 他名河川通用考 准后准三后考
- 巻第五 癸己三月議 觀楽筆談 江関筆談
- 巻第六 東音譜 御系譜 冠服考
- 巻第七 將軍宣下卅一度儀不同次第 朝鮮信書式 謹對 史疑 那須国造碑釋文
- 巻第八 紺珠
- 巻第九 神書
- 巻第十 国書復号紀事
- 巻第十一 関ヶ原正譌 白石與鳩巢書簡白(自) 公之書拔
- 巻第十二 軍器考余
- 巻第十三 朝鮮聘使録
- 巻第十四 奥羽海運記 日本行程考 北海隨筆
- 巻第十五 白石書譜(翰)
- 巻第十六 蝦夷風土記

- 卷第十七 蝦夷之記
- 卷第十八 南島志
- 卷第十九 白石遺文
- 卷第二十 白石著述目録 国喪正議
- 卷第二十一 蝦夷志
- 卷第二十二 経邦典例 黄白問答
- 卷第二十三 新室手簡
- 卷第二十四 長久手簡
- 卷第二十五 朝鮮通交録
- 卷第二十六 小牧戦話
- 卷第二十七 殊号事略 外国通信事略
- 卷第二十八 琉球国事略 本朝宝化通用事略
- 卷第二十九 采覧異言
- 卷第三十 采覧異言(24)

静嘉堂文庫蔵本『白石叢書』は、その目録が馬琴旧蔵本とほぼ同じであるが、『白石遺稿』(卷十三)、『高野山事略』(卷二十七)が入っていない。『北海随筆』は、馬琴旧蔵本では、卷三十であるが、静嘉堂文庫蔵本では卷第十四になっている。卷第七の「將軍宣下卅一度儀不同次第 朝鮮信書式 謹對 史疑 那須国造碑釋文」は、馬琴旧蔵本にはないもので、同類の『白石叢書』であっても、所蔵の場所によって異なっている。馬琴旧蔵本と静嘉堂文庫蔵本は、続編の二十二冊が欠けている。次の目録は、昌平坂学問所旧蔵の内閣文庫蔵本であり、馬琴所蔵本、静嘉堂文庫蔵本が三十巻のみであることに対し

て、『白石叢書』の全巻がまとまっている。

白石叢書

浅草文庫 書籍館印

- 二 文廟御遺詔 木瓜考 玉考 俳優考
- 三 楽考 田地問目 起請文考証 聖像考 決獄考
- 四 白石遺稿（人名の考 地名河川両字通用考 国郡ノ名ノ字ノ事 准后准三后ノ事）
- 五 癸巳三月議 觀樂筆談 江関筆談
- 六 東音譜 御系譜 経邦典例卷之六冠服考上
- 八 紺珠 世諺問答
- 九 紳書
- 十 国書復号紀事
- 十一 関原正譌 白石与鳩巢書簡自書之書拔
- 十二 本朝軍器考余
- 十三 正徳朝鮮聘使録附言 朝鮮国聘使録
- 十四 奥羽海運記 日東行程考 北海随筆
- 十五 白石書翰
- 十六 蝦夷風土記
- 十七 蝦夷之記
- 十八 南島志
- 十九 白石先生遺文

二十 白石先生著述書目 国喪正議

二十一 蝦夷志

二十二 序文集（経邦典例序 田制考序 貨幣考序 車輿考序 冠服考序 樂舞考序 職官考序）黄門白石問答

二十三 新室手簡

二十四 長久手記

二十五 朝鮮通交総論

二十六 小牧戦話

二十七 骨董録（殊号事略 外国通信事略 中華并外国土産）

二十八 骨董録（琉球国事略 本朝宝貨通用事略 高野山事略）

二十九・三十 采覧異言

### 続白石叢書

一 年中式令論 白石先生学訓

二・三 武人訓

四・五 文字考

六・七 新復手簡

八・九・十 新安手簡

十一・十二・十三・十四・十五 古史通

十六・十七・十八・十九・二十・二十一 退私録

二十二 白石先生遺稿（26）

内閣文庫蔵本『白石叢書』は、卷三十までは、馬琴旧蔵本、静嘉堂文庫蔵本と卷の順番は多少違うが、ほぼ同じ書物である。内閣文庫蔵本『白石叢書』に欠けている卷一と卷七は、馬琴旧蔵本、静嘉堂文庫蔵本と比べてみると、卷一は「新井家系 同附録 軼記 古画之序」、卷七は「將軍宣下卅一度儀不同次第 朝鮮信書式 謹對 史疑 那須国造碑釋文」であると推測される。

馬琴は『白石叢書』卷一の書物目録の次に、叢書に関する解説を記している。それは『白石叢書』に関する説明、以前から一冊ごとに所蔵していた白石著作についての説明、未だ収集していない書物名、購入時期、白石著本人が書いたものかどうかなどについての馬琴の見解を記したものである。馬琴の自筆になる解説を次に掲げる。「」は馬琴による割注であり、馬琴自筆文字の活字化、および現代語訳は本論文著者による（以下同様）。

○解云、白石先生著書、是他余所蔵、藩翰譜十三卷、讀史餘論〔第一上中下第二上下第三上下、共二〕七卷、折燒柴之記三卷、軍器考〔図説〕共二十四卷、詩集一卷、餘稿三卷、東雅二十卷、〔合本十冊〕古史通四卷、古史通或問三卷有之、東雅已下、誤書尤甚、敢欲與善本相易、因却而求古寫本、既久而未得也、○削去叢書中非先生著述者、換以此八部書、則其數三十部如舊、<sup>(26)</sup>

【現代語訳】○解（馬琴）云、白石先生の著書として、この他に私が所蔵しているのは、『藩翰譜』十三卷、『讀史餘論』（第一上中下、第二上下、第三上下、あわせて）七卷、『折たく柴の記』三卷、『軍器考』（『軍器考図説』とあわせて）十四卷、『詩集』一卷、『余稿』三卷、『東雅』二十卷（十冊）、『古史通』四卷、『古史通或問』三卷である。『東雅』以下は、誤りの多い本である。なんとか善本と取り換えたいと思い、古写本を長年探しているが、いまだ手に入れることができないでいる。○『白石叢書』の中で、先生の著作でないものを削除し、この八部（『詩集』と『余稿』『古史通』と『古史通或問』をそれぞれ一部と教えるか）

の書を替りに入れると、著作の数は、最初と同じく、三十部となる。

○文化五年秋九月、購得是書於坊賈、而繙閱之際、忽有失望者、何者、集中若軍器考餘、朝鮮聘使録、蝦夷風土記、蝦夷之記、朝鮮通交記、北海隨筆諸篇、非是白石著述也、撰者叨剽入後人之筆記、以混乱玉石、豈非可恨耶、異日及書肆來、舉前言質問之、且責以揣利欺人之衷、書肆謹對曰、君之言寔是也、如僕市井小人、奚能辨玉石之有、雖然、此亦有以也、譬如東垣十書中、雜以海藏等之著書、顧、撰者竊以類鳩之耳、雖有魚目混於隋珠之嫌、而莫非奇書珍籍、君其海容焉、余以其言之有理、不敢擇、咸藏于書箱 滝沢解識<sup>(27)</sup>

【現代語訳】○文化五年秋九月、この本を町の本屋で買い求め、繙読した際、たちまちに失望させられた。なぜかといえ、この本のうち、『軍器考余』『朝鮮聘使録』『蝦夷風土記』『蝦夷之記』『朝鮮通交記』『北海隨筆』諸篇のごときものは、白石の著述ではない。撰者が後の人が書いたものを、むやみに採り入れたのである。それにより、玉石混合となった。どうして恨まずにいられようか。後日になり、書肆がやって来た。このことを問いただし、かつ、利益のために人を欺いた事を責めた。書肆が畏まっていうことには、「あなたのおっしゃることは、まことにもっともなことです。ただ、私のような教養のない一般の庶民は、玉と石を区別することができないのです。そうはいっても、これもまた理由のあることです。たとえば、『東垣十書』の中に李東垣の著書に混じって、王海藏等の著作が入っているように、選者の意図とは違って、隋珠（隋の国宝であった珠、転じて天下の至宝）に魚の目のようになつたらならないものが混ざってしまう弊害があるとしても、奇書珍籍でないわけではありません。どうかご容赦ください」。私は、書肆の言にも一理あると思ひ、敢て、白石の著作を選別することをせず、すべてを本箱に収めた。滝沢解識す。

この馬琴の解説風の書入れにおいて興味深い点は、前述したように、『白石叢書』の中でも、特に白石自身が執筆した書

物かどうか注意をはらっていることである。白石の著作ではないと判断した場合、馬琴は「非是白石著述也」と書いている。これは、白石の学識とその權威を信頼していた馬琴が、白石の著述であるかどうか、極めて敏感であったことの証であろう。馬琴の判断によると、『軍器考余』『朝鮮聘使録』『蝦夷風土記』『長久手簡』『朝鮮通交録』『小牧戦話』『北海随筆』の八冊が、白石の著述ではないと考えている。また、『長久手簡』と『小牧戦話』についても、目録の部分に「記者不詳」という書入れがあることから、白石の著述ではないと判断されたことがわかる。

未覽異言

卷二十九

未覽異言

卷三十

北海随筆 非白石著述  
記者未詳

同附録

解云白石先生著書是他余所藏。藩箱譜十二卷、  
讀史餘論第一上中下、至七卷、折燒塔之記三卷、  
軍器考四、十四卷、詩集一卷、餘稿三卷、東雅二  
十卷、古史通、古史通政向三卷、有之東雅  
已下諸書、是數欲與善本相取、因却而家古焉、本既久、  
未得也。○則云、書中非先生著述者、概以此八部書、則  
其數三十部、也。

【図三】『白石叢書』の書入れ

文化五年秋九月、購得是書於坊賣、而審覈  
之際、忽有失望、何者、集中若軍器考餘、朝  
鮮聘使録、蝦夷風土記、蝦夷之記、朝鮮通交録、  
北海隨筆諸篇、非是白石著述也、撰者叨荆入  
後、之、筆、以混亂玉石、豈非可恨、異日及書  
雖來、幸前、善、備、列、之、且、責、以、揣、利、歎、人、之、更、書  
肆、謹、對、曰、君、之、言、實、是、也、如、僕、亦、井、小、人、安、能、辨  
玉、之、石、雖、然、此、亦、有、也、譬、如、東、垣、十、書、中、雖、以  
海、藏、等、之、書、者、願、撰、者、竊、以、觀、鳩、之、耳、雖、有、魚、目  
混、珠、之、嫌、而、莫、非、奇、音、殊、雅、君、其、海、藏、等、余  
以、其、書、之、有、記、不、敢、揮、或、藏、于、書、箱、濼、澤、解、滅

【図四】『白石叢書』の書入れ

叢書の中で、異国に関する書物は、本論文著者の検分の結果、十一冊である。馬琴の異国知識は、『白石叢書』から得たものが多いことは間違いないだろう。さらに、白石の異国情報の正確さとその学識を信頼していた馬琴にとっては、白石本人の著作であるかどうか、大きな問題であったに違いない。白石本人が著したものがどうか拘るのは、それだけ、馬琴

自身もまた正確な異国情報を求めていたからであろう。ただしここで注意しなければならないのは、白石の著述かどうかについての馬琴の判断が、必ずしも事実には照らして正確ではないことである。<sup>(28)</sup>たとえば、馬琴が作者不詳とした『蝦夷之記』は新井家蔵本『蝦夷』と同じ内容であり、白石著書と見なすべきである。<sup>(29)</sup>ここでは、馬琴の誤認もまた、異国情報を求める馬琴の旺盛な知識欲の結果であると考えておきたい。

### 第三節 『白石叢書』における馬琴の書入れと校訂——異国に関する書物を中心に

馬琴は、先に述べたように、『白石叢書』の誤字や間違った情報などに朱筆を入れ、丁寧に校訂している。また、異国名などに関しては、振り仮名をつけており、各巻の末には、校訂した時期などの校訂記録を詳しく記している。

次に検討するのは、『白石叢書』の異国に関する書物に記された、馬琴の書入れや校訂の記録である。巻末の馬琴の書入れは、宮崎道生の論文<sup>(30)</sup>を参考にし、本論文著者が補充を行った。宮崎道生は『白石叢書』に書かれた馬琴の書入れを四種に分けて分析している。それは(一)偽書の指摘、(二)書肆批判、(三)叢書以前に購入した白石著作、(四)白石評価である。さらに頭注については、(一)白石の誤りの指摘、(二)荻生徂徠<sup>(31)</sup>の門下、服部南郭<sup>(32)</sup>の批評、(三)荻生徂徠と太宰春台<sup>(33)</sup>への酷評に注目して論じている。宮崎の分析を受けたうえで、本論文著者は、叢書に記された異国関連記録に注目し、整理の都合上、『白石叢書』のうち異国に関する書物に対する馬琴の書入れの原文(手書き文字から本論文著者が活字に起こしたもの)と、その現代語訳(本論文著者による)を、ここで一括して提示する。琉球、蝦夷に関するものについては、別節を設け、より詳細に分析する。

(1) 卷十二 朝鮮聘使録

○「長保楽」末注―解云、是一條、一本無、蓋非君美誤筆、傳写蛇足也<sup>(34)</sup>

○卷末―解云、是書與國書復號紀事〔在叢書第九〕參攷、則精疎自曉然也、唯恨未得看善本焉、雖卽施点莫奈誤脱耳（一）は割注（35）

【現代語訳】○「長保楽」末注―解（馬琴）曰く、この一条は、諸本の一本には存在しない。おそらく君美（白石）が誤って書き落としたものではない。書写の際に、余計なことが書き足されたのである。

○卷末―解（馬琴）曰く、この本と『国書復号紀事』『白石叢書』第九を参照すると、すなわち、その精疎はおのずから明らかである。ただ、いまだ善本を見られていないのが、残念である。訓点をつけたと云つても、どうして誤脱がないと云いきれるであろうか。

(2) 卷十五 蝦夷風土記

○「革頼多」頭注―按ズルニニ舊図ヲ一、革頼多即チカラトノ嶋、由尺ハ乃チウツシヤ崎是也、革頼多由尺ハ同地異名耳。革頼多、今俗ハ曰フニ革来武勝ト一（36）

○「祭祀」中注―梨泥疑泥梨轉倒蓋泥梨猶地獄云也（37）

○卷末―蝦夷風土記一卷、蓋非白石之著述、或云、寛政中葛質所作、撰者謬剽入白石叢書中、甚不可也、披閱者應亮察耳 讀書間人訓点（38）

【現代語訳】○「革頼多」頭注―古地図をみると、「革頼多」はすなわち、「カラトノ嶋」であり、「由尺」はすなわち、「チウツシヤ崎」がこれにあたる。「革頼多」も「由尺」も同じ土地の異名である。「革頼多」は、今、俗に云う「革来武勝」のことである。

○「祭祀」注―「泥梨」は、「泥梨」が転倒したものか。思うに「泥梨」はちやうど「地獄」のようなものである。

○卷末―『蝦夷風土記』一卷は、おそらく白石の著述ではない。或人の曰く、「寛政ころの葛質（葛西因是）

の著作を、撰者が誤って『白石叢書』の中に挿入したものであろう」とのことである。大変よくないことである。披き読む者が、察するほかない。読書間人、訓点す。

(3) 卷十六 蝦夷之記

○「蝦夷之記卷三」中注―著無車固一揆之事

志尾写利蝦夷風土記ニ作ルニ洪舍利ニ著無姿因同書ニ作ルニ車骨車院ニ未レ知ラ孰レカ是ナルヲ(39)

○卷末―壬午五月九日校訂 読書閑人 蝦夷之記終 一部四卷全

是書非白石著述、撰者剽入諸白石叢書中者何也、雖事迹係實録、文言俗悪不可讀、加之、傳寫訛舛亦甚矣、因施雌黄僅似成語者、原本正徳元年所録、記者未詳云 玄黙敦牂暑月端玖 読書間人識(40)

【現代語訳】○「蝦夷之記卷三」中注―著無車固一揆の事

「志尾写利」は『蝦夷風土記』では「洪舍利」となっている。「著無姿因」は同書では、「車骨車院」である。どちらが正しいかは不明である。

○卷末―壬午五月九日校訂 読書閑人 蝦夷の記終わり、一部四卷全本。

この本は、白石の著述ではない。撰者がこれを『白石叢書』に入れたものである。内容は事実の記録であるが、文章は俗悪で読むにたえない。さらに、写し誤りが非常に多い。よって、添削を加え、なんとか意味の通るようになった。原本は正徳元年に記されたもので、著者は未詳である。平穩な壬午年の六月九日に読書間人、記す。

(4) 卷十七 南嶋志

○「大島」中注―大船二百隻云云、解云、比レハニ他処ノ船数ニ可シレ疑フ也、二百ハ比レ二十之誤写耳、(41)

○卷末―余嘗以謂。是書與清徐葆光中山伝信録比較。則非但有異同耳。其文簡而易通曉。其言而無臆説。其勝也亦遠矣。

是本年来蔵奔而未違校正。頃徽雨淫霖。茅舍無客。因凭紙窗下。校訂點裁以爲畀兒孫兩三日。而方卒業。余素景仰先生學術。其遺書所藏。豈一朝吏。兒孫倘有嗜讀書者。校點亦與是書俱遺焉。文政五年壬午夏五月十二日 滝澤解識(42)

【現代語訳】○「大島」中注―「大船二百隻……」、解(馬琴)曰く、この他にもところどころ、他の箇所の数と比べるとはつきりしない。「二百」は「二十」の誤写である。

○卷末―私が以前から思っていたのだが、この本と清の徐葆光の『中山伝信録』を校合すると、ただ異同があるだけでなく、その文章は簡略でわかりやすく、その言葉には憶説が交らず、そのすぐれていることはるかに上である。この本は長年秘蔵し、いまだ校正するいとまがなかった。このごろ、梅雨の長雨が続き、私の自宅に客もなく、明り障子の窓の下で、ひじつきにたれかかり、子孫に残すために、校訂し、訓点をつけること三日、ようやく作業が終わった。私はもともと、先生の学問を尊敬し、その書物を所蔵してきた。それはにわかのことではない。子孫にもし読書を嗜む者がいれば、私の校合と訓点もまたこの本とともに残ることであろう。文政五年壬午夏五月十二日 滝澤解記す。

(5) 卷二十 蝦夷志

○中注―盎中ハ、解按スルニ、盎ハ盆也、又盛ナル貌。此レ據ルニ莊子ニ所謂鼓盆ニ一者歟。(43)

○卷末―蝦夷志一卷、勿齋先生所著、其文也簡、其言也約、而無遺漏焉、近為蝦夷志者、剽竊模擬、猶且添蛇足而已、後人之精細、烏知不如先生之簡約耶、蓋先生博聞強記、著述以百數、可謂蓋世之通儒作家之巨擘也、余以衰病故懶惰益甚、頃雨窗岑寂、筆硯生塵、因校訂是等之書以消日云 時文政壬午臯月十日 瀧澤解識(44)

【現代語訳】中注―「盎中」は、解(馬琴)按ずるに、「盎盆」のことであり、盛んな様子のことをいう。こ

こは『莊子』にいう「鼓盆者(妻に死別した者をいう)」のことか。

○卷末―壬午五月校訂し、また訓点を施す。滝澤解

『蝦夷志』一卷、勿齋先生（白石）の著作であり、その文章は簡潔で、その言葉は要点のみであるが、遺漏はない。最近書かれた『蝦夷志』は剽窃や模倣が多く、さらに言わなくてもいいことを書き添えてあるばかりである。後の人の詳しい文章も、白石先生の簡潔な文章に及ばないことが、どうしてわからないのだろうか。私が思うに、白石先生は博覧強記であり、著述は百余り、天下の通儒・作家の第一といふべきである。私は、病に衰え、ますます怠惰になってしまった。ちかごろ、窓の外では雨が降り静かである。筆や硯には埃がつもっている。そこで、これらの本の校訂に日を費やしたのである。時に、文政壬午年五月十日 滝沢解記す。

(6) 卷二十四 朝鮮通交録

○卷序―朝鮮通交録一卷、非新井先生著述、而剽入白石叢書中者誤矣 瀧澤解識

是書、記者ノ名氏ヲ審ニセサレトモ、觀ルニ對馬人ノ手ニ成レルモノナリ、コレ極メテ古實ヲ考ル者ニ裨益アリ、只恨ム、何人カ白石ノ名ヲ肩シテ叢中ニサシ入レタル、最モ嗚呼ナルワサニソ有ケル 壬午夏五月下浣再識<sup>(45)</sup>

○「朝鮮通交ノ次弟」中注―海東記諸國輿地勝覽 海東諸國記<sup>(46)</sup>

○卷末―聘使名目毎年朝鮮ヨリ清國へ遣ス使者ノ名目ナリ

「謝恩使」注―冊封ノ謝礼ノ使者ナリ

「皇曆使」注―曆ヲ受ル使ナリ

「費咨官」注―御沙汰聞ナリ

「告訃使」注―凶事ヲ告ル使也

壬午夏五月二十二日校訂<sup>(47)</sup>

【現代語訳】○卷序―『朝鮮通交録』一卷は、新井先生の著述ではない。『白石叢書』に挿入されているのは、誤りである。滝沢解、記す。

この本の作者の名前は明らかではないが、見たところ、対馬の人の著作であろう。これは、故実を考える者に、極めて有益な書物である。ただ残念なことに、誰かが白石の著作として叢書中に入れてしまった。大変ばかげたことである。壬午夏五月下旬、再び記す。

○「朝鮮通交ノ次第」の中注―海東諸国紀、東国輿地勝覽（朝鮮時代の地誌）

○卷末―「聘使名目」とは、毎年朝鮮から清国へ遣わす使者の名目である。

「謝恩使」注―冊封の礼をする使者である。

「皇曆使」注―曆を受け取る使者である。

「賚咨官」注―命令を受ける使者である。

「告訃使」注―訃報を告げる使者である。

壬午夏五月二十二日、校訂す。

(7) 卷二十六 外国通信事略

○卷末―文政五壬午夏五月二十五日校訂畢、但清國州縣、文字傳寫訛舛未詳者、異日拋大明一統志及廣輿志、當比較以就正焉。瀧澤解識。(48)

【現代語訳】○卷末―文政五年壬午夏五月二十五日、校訂終わる。ただし、清国の地名は、文字の写し誤りのわからないものは、後日、『大明一統志』および『広輿志』に拠って、校合し、訂正する必要がある。滝沢解、記す。

(8) 卷二十七 琉球國事略 本朝寶化通用事略

○「琉球國事略」卷末―壬午五月二十五日校訂 鬻齋解(49)

○「本朝宝化通用事略」中注卷末—新伊西把弥亞ノヒスハシ 漢人刺亜イキリス 竟大里亞井タリヤ (50)

○「本朝宝化通用事略」卷末—壬午夏五月二十六日校訂 鬻齋解 (51)

【現代語訳】○「琉球国事略」卷末—壬午五月二十五日、校訂す 鬻齋解 (馬琴)

○「本朝宝化通用事略」中注卷末—ノバ・イスパニア イギリス イタリア

○「本朝宝化通用事略」卷末—壬午夏五月二十六日、校訂す 鬻齋解 (馬琴)

(9) 卷二十八 采覧異言上

○「采覧異言叙」中注

—解按スルニ、邏馬ローマハ、外國通信事略ニ、カラマト訓セリ、コノ邏馬人ノ名ヲ、ヨハントイヒケリ、後ニ刑セラレタルヨシ、同書ニ見エタリ、コヽニ、ヨアントアルハ、乃チヨハンノコトナルヘシ、外國通信事略ニ、邏馬ヲカラマト假名ツケシ、カラマハロウマノ誤寫ナルヘシ、軍器考ニハ、ロウマト讀セタリ。(52)

○卷末—此余秘藏之寫本也、今茲壬午夏日草堂無吏、因披閱之際、施點裁訓詰以昇兒孫也耳、時臯月二十九日卒業於第一第二卷、明旦陸月朔識 瀧澤解瑣吉甫。(53)

【現代語訳】○「采覧異言叙」中注

解(馬琴)、按ずるに、「邏馬」は、『外国通信事略』では、「カラマ」と読みが付いている。この邏馬人の名を「ヨハン」という。後に処刑されたことが、同書に書かれている。ここに「ヨアン」とあるのは、この「ヨハン」のことであろう。『外国通信事略』は、「邏馬」に「カラマ」と仮名をつけているが、「カラマ」は「ロウマ」の誤写であろう。『軍器考』では、「ロウマ」と読ませている。

○卷末—これは私の秘藏する写本である。いまこの、壬午の年の夏の日、家の内には特にする仕事もなく、よって、この本を披き見る際、解釈し訓点を施して子孫に残す。時に、五月二十九日、一卷と二巻に訓点をつけ

おわつた。翌、六月一日の朝に記す。滝沢解瑣吉甫。

(10) 卷二十九 采覧異言(下)

○「齊狼島」中注

―扶南傳、見新唐書列傳第一百四十七下〔卷二百二十二下〕、盤盤傳、見右全卷、曰、其臣曰勃郎索濫、曰崑崙帝也、曰崑崙勃和、曰崑崙勃諦索甘、亦曰古龍、古龍者、崑崙聲近耳、〔盤盤傳摘要〕解畧注。(54) (一)は割注)

○「榜葛刺」中注

―解云、鳩ニ有リニ一種、俗ニ云フニ榜葛刺鳩ト、チカコロ近 舶來之物、今ハ罕ニ于此ニ。(55)

○「邏羅」中注

―解云山田二左衛門本末、今可考者、唯有邏羅紀事一卷耳、此是智原五郎八者、當時於彼國、所錄也、所謂白石先生別考者、吾未得觀也。(56)

○「滿刺加」中注―龜龍解按鰐魚翻譯名義集謂殺子魚者是欵(57)

○「呂宋」頭注―解云、ルスンハ東呼而已於本邦即曰マニラ国云。(58)

○卷末―白石先生所著、采覧異言五卷乃校訂點裁、為使讀于兒輩、老眼頗苦細書、四五日而方卒業、時文政壬午夏六月初三日、江府城北市隱 鬻齋瀧澤解識(59)

【現代語訳】○「齊狼島」の中注

―「扶南伝」は、『新唐書』列伝第四百四十七下〔卷二百二十二下〕に見える。「盤盤伝」もまた同じ巻に見える。

「盤盤伝」を引用すると、「其臣曰、勃郎索濫、曰、崑崙帝也、曰、崑崙勃和、曰、崑崙勃帝諦索甘、亦曰、古龍、古龍者、崑崙聲近耳」とある(「盤盤伝」抜書)。以上は、解(馬琴)に拠る略注。

○「榜葛刺」中注―解(馬琴)云わく、鳩は一種類おり、俗に「榜葛刺(ベンガラ)鳩」という、最近、輸入されたものは、現在ではまれである。

○「邏羅」中注

―解（馬琴）、云わく、この山田二左衛門<sup>(60)</sup>の詳細について、今、参考となるべきは、ただ『邏羅記事』一卷があるのみである。これは智原五朗八という者が、当時、彼国において、記録したものである。本文にいう白石先生の別考については、私はまだ見ることができていない。

○「満刺加」中注―「龜龍」、解（馬琴）按ずるに、「鱈魚」であり、『翻訳名義集』にいう、「殺子魚」がこれにあたるのではないか。

○「呂宋」頭注―解（馬琴）、云わく、「ルスン」は東部をこう呼ぶのみであり、国全体は、すなわち「マニラ国」という。

○巻末―白石先生の著した『采覧異言』五巻の校訂と訓点は、子どもたちに読ませるためにしたものである。老眼のため、細かい字には非常に苦しんだ。四五日にして作業が終わった。時に文政壬午（五年）夏六月三日、江戸城北、市井の隠者、饗斎滝沢解記す。

(11) 卷三十 北海随筆 同附録

○巻末―北海随筆非白石先生著述、不可入之于白石叢書中、是徒羨先生之才者之所爲歟、或後人誤認以爲先生著述耳、戊辰冬識<sup>(61)</sup>

○「同附録」(終)

―文政五年壬午六月三日一校畢

解按北海随筆上下二卷為全本、錄於此者、下卷而耳。是全書亦在吾文庫中矣可併見<sup>(62)</sup>

【現代語訳】○巻末―『北海随筆』は白石先生の著述ではない。『白石叢書』のうちに入れるべきではない。こ

れは、門人が先生の才を羨んで行ったしわざか、或は後人が先生の著述と誤認したものであろう。戊辰年冬記す。

○「同附録」(終)

—文政五年壬午六月三日、一通り校正終わる。

解(馬琴)按ずるに、『北海隨筆』は全部で上下二巻であり、ここに収録するのは下巻のみである。この完本も、また私の蔵書中にある。あわせて見るべきである。

以上、(1)から(11)までの引用とその現代語訳で明らかだが、馬琴は、各巻の内容を精読し、国名、文字の間違い、国名の読み方、内容の再確認などを丁寧におこなっている。そして彼は、蝦夷の反乱や朝鮮の官吏など、異国の政治問題や国家制度に関心を持ち、それに関する校訂を施してもいる。馬琴の知的好奇心は、日本領土であるかどうかの認識が未だ確定していなかった琉球、蝦夷を含め、隣接国の朝鮮、さらに西洋までに及んでいたのである。馬琴による『白石叢書』の校訂や書入れは、馬琴が叢書の内容を丁寧に読み込んでいたことを示しており、それはまた、白石の知識や情報を積極的に取り入れようとしていた証でもある。

ただし、馬琴の異国知識は、『白石叢書』から得たものが多いことは間違いないだろうが、それだけではないようだ。日記を見ると、馬琴は、日常的に異国に関する情報に触れていた時期がある。彼は、日常的に異国に関する書物を借りて筆写したり、異国の風聞に関心を持っていたりしている。そこからも、彼の異国への興味はもちろん、『白石叢書』の収集と同じく、収集と考証という専門的な作業を行っていたことがうかがえる。

では『白石叢書』から得られた情報は、作品の中ではどう利用されたのであろうか。それは、読本創作にどのように影響したのであろうか。これらについて知るためにも、『南嶋志』や『琉球国事略』が、『椿説弓張月』の後半構想にどのような影響を与えているかに注目すべきであろう。次節では、叢書の中で、琉球と関連がある『南嶋志』と『琉球国事略』を中心

にして考察してみたい。

#### 第四節 『白石叢書』と琉球——『南嶋志』と『琉球国事略』

本節では、異国の情報源として、彼が収集に熱心であった『白石叢書』のうち、『南嶋志』と『琉球国事略』を中心に考察してみたい。『白石叢書』の収集が終わった時期は、『椿説弓張月』の拾遺以下の後半の執筆時期と重なっている。したがって、異国情報と作品の結びつきが見えてくるのではないかと考えられるからである。さらに、馬琴自身も、「白石叢書」ハ、愛書中之愛書にて、琉球之事、また異国通商之事杯、是ニよりて益を得候事多く候得ば、只今金子急用之事も無之候に手ばなし候事ハ、今更おしくおぼえ候（天保十二年（一八四一）閏正月九日、篠斎宛（代筆））<sup>63</sup>【現代語訳】「白石叢書」は愛読書中の愛読書で、琉球の事や、異国との貿易の事など、これによって、知ったことも多くありますので、緊急にはさしせまってお金が必要というわけでもないのに、手放してしまったことを、今更、惜しく思っています」と、叢書を通して「琉球之事」、「異国通商之事」の有用な知識を得たと認めている。その具体的な内容の引用箇所がなくても、馬琴は、白石の琉球認識を受け継いでおり、『椿説弓張月』の特に後半の構想において、琉球を日本の一部と考えることの正統性を示す証左を得ていたと考えてよい。

ここでは、本論文第二部第三章での、『椿説弓張月』における琉球表象分析に先立ち、馬琴の『椿説弓張月』前半における為朝琉球行きと、拾遺以下の後半の琉球表象とで、用いられている資料が異なっていることという事情を、大高、播本論文を参照して確認する。大高は、『椿説弓張月』前篇口絵に続く、馬琴の自序にあたるつぎの文章で、馬琴が為朝の「琉球渡航の文献的根拠」を重視していることを指摘する。その自序を見ると以下のようなものである。

為朝琉球へ渡り給ひしといふ説、原何の書に出ることをしらず。しかれども神社考に云、「為朝八丈島より鬼界に行、

琉球に亘る。今に至り諸島祠を建て島神とす」といふ。……為朝逝去のち、球人祠をたて、神號して舜天太神宮といふ」といへり。(64)

『弓張月』前篇においては、第五回における八丁礫紀平治による琉球の地理・風俗・言語などの知識を披露する場面における情報は、ほとんど『和漢三才図会』からのものであり、前篇構想の段階では、『弓張月』を『和漢三才図会』の……記述に向けて収斂させるべく、『弓張月』全体を構想」していたと、大高は指摘している。(65) 前篇において馬琴は『和漢三才図会』により、為朝と舜天を同一人物とみなしていた。ところが、その後『中山伝信録』を入手、為朝と舜天は別人物であることが明らかとなる。つぎに挙げる後篇巻の一卷頭の「備考」を参照して、大高は馬琴が前篇自序を訂正せざるを得なかった事情について分析している。その「備考」を見ると、

余嘗元史類篇、中山傳信録等ヲ閱スルニ、琉球中興ノ主。舜天王ハ、スナハチ為朝公ノ子ナルヨシ、其書ノ注二見エタリ〔傳信録コレニ同シ〕。(66) (一) は割注)

である。『中山伝信録』により、為朝と舜天は父子であり、琉球の新王朝を設立するのは、為朝ではなく舜天であることが明らかになった。そのため、馬琴は『弓張月』後半の構想を、当初のそれから大きく変更せざるを得なくなった。大高はこの経緯について、「前篇においては為朝＝舜天とする『和漢三才図会』の記述に従って枠組みの後半を定めていたのだが、後編においてこれを改めた」としている(67)。

『弓張月』の構想変更に大きく作用した『中山伝信録』であるが、『白石叢書』中の『南嶋志』『琉球国事略』に対する馬琴の評価は、『中山伝信録』に対する評価よりもさらに高い。先述のように、『白石叢書』の収集時期は、本論文第二部第三章で取り扱う『椿説弓張月』の、拾遺以下の後半の執筆時期と重なっている。そしてその物語が琉球を舞台にし、馬琴が参

考文献として挙げていることから、『椿説弓張月』残編の序)、『南嶋志』(『白石叢書』巻一七)や『琉球国事略』(巻二十七)の書物との関連性が指摘されている。そこでまず、『椿説弓張月』について詳しく各編の起草、脱稿の時期や刊記を見ることから始めたい。下記の表は、大高洋司の作成した表に基づいており、本節での議論は大高論文に多くを負っている。(68)

- ・前編 起草—文化二年(一八〇五) 一月上浣、脱稿—文化二年(一八〇五) 一月
  - ・後編 起草—(巻之一—三) 文化四年(一八〇七) 三月下旬、(巻四—六) 文化四年(一八〇八) 一月
  - ・続編 起草—文化五年(一八〇八) 三月下旬、脱稿—文化五年(一八〇八) 年八月一日、刊記—文化五年(一八〇八) 一二月
  - ・拾遺 起草・脱稿—(拾遺編五冊残編五冊合して十巻は。文化六年(一八〇九) 己巳の冬日。僅に三巻を草す。(下略)、刊記—文化七年(一八一〇) 八月
  - ・残編 起草—文化七年(一八一〇) 三月、脱稿—文化七年(一八一〇) 年五月一日
- 刊記—文化八年(一八一二) 三月

大高による各編の年次の記載を一覧して見ると、馬琴は『白石叢書』を、『椿説弓張月』の拾遺以下後半の執筆中に当たる文化五年(一八〇八) 九月に購入している。とすれば、『椿説弓張月』の琉球物語群のなかで、為朝が登場し活躍する拾遺や残編は購入後に執筆されたことになり、そこには、『白石叢書』の影響があったと思われる。中でも、直接的に作品に影響を与えたのは、『白石叢書』に収集された琉球に関する『南嶋志』『琉球国事略』である。『椿説弓張月』では、典拠となった多数の白話小説や古典作品の名称が、本文中に書入れられている。『南嶋志』『琉球国事略』についても、続編の刊記の「附録」に、「琉球国古来称呼、南嶋志を和解す」(69)【現代語訳】琉球国の、昔から今までの呼び名は、南嶋志をもって解釈すると書入れがある。既に、続編の次に執筆される予定にしていた拾遺にも、『南嶋志』や『琉球国事略』を典拠としようとして

いたことがうかがえる。さらに、残編の序の部分には、

○弓張月拾遺編、上帙五冊、前月既に刊行す。その残編五冊、こゝに刻成て、初て全部す。……この編乃日本後紀、類聚国史等の旧説より、南島志、琉球事略……大明一統志等の諸説を考、密に取て、もてこれを載す。

○林太夫が事は、琉球事略及南島志に出たり○往古琉球を、多嶺嶋と唱たるよしは、往々国史に見ゆ、亦鬼が嶋ともいへり。「南嶋志に本つく」(71)「割注」

と記されていて、明確に『南嶋志』や『琉球国事略』からの影響があることを示している。(71)琉球の別名を「鬼が嶋」としていることも、興味深い。既に第二節で触れているが、この二書の書き込みを見ると、第三節で述べたように、『南嶋志』は、「大島」を論じた部分に、「大船二百隻云云、解云、比レハニ他処ノ船数ニ一可シレ疑フ也、二百ハ此レ二十之誤写耳、詫云他本亦作二百如是」(『現代語訳』「大船二百隻……」、解(馬琴)曰く、他の箇所船数と比べるとあやしい。「二百」は「二十」の誤写である。)と書かれているのだが、その『南嶋志』の巻末には、以下のように、馬琴自身の評価が記されている。

余嘗以謂。是書與清徐葆光中山伝信録比較。則非但有異同耳。其文簡而易通曉。其言而無臆説。其勝也亦遠矣。是年来蔵弃而未遑校正。頃儻雨淫霖。茅舎無客。因凭紙窓下。校訂点裁以爲昇兒孫兩三日。而方卒業。余素景仰先生學術。其遺書所蔵。豈一朝。兒孫尙有嗜読書者。校点亦與是書俱遺焉。文政五年壬午夏五月十二日 滝沢解識(72)

【現代語訳】私が以前、この本と清の徐葆光の『中山伝信録』を校合すると、ただ異同があるだけではなく、その文章は簡略でわかりやすい。その言葉には憶説が交らず、そのすぐれていることはるかに上であると思つた。この本は長年秘蔵し、いまだ校正するいとまがなかった。このごろ、梅雨の長雨が続き、私の自宅に客も

なく、明り障子の窓の下で、ひじつきにもたれかかり、子孫に残すために、校訂し、訓点をつけること三日、ようやく作業が終わった。私はもともと、先生の学問を尊敬し、その書物を所蔵してきた。それはにわかのことではない。子孫にもし読書を嗜む者がいれば、私の校合と訓点もまたこの本とともに残ることであろう。文政五年壬午夏五月十二日 滝沢解記す

白石の『南島志』を、第一級の琉球資料である徐葆光『中山伝信録』（中国の地誌。一七二二年）と比較し、「是書與清徐葆光中山伝信録比較。……其勝也亦遠矣」としているところから、白石の『南島志』に対して、馬琴が高い評価を下していることがわかる。『椿説弓張月』の琉球物語群、その後篇六卷以降の典拠として重視された『中山伝信録』と対等な、あるいはそれに勝る書物として捉えているのである。『琉球国事略』には馬琴の書入れが少なく、巻末に「壬午五月二十五日校訂鬻齋解」（鬻齋は馬琴の雅号で、解は馬琴の名である）と、校訂の時期だけを記している。おそらく、この本には、校合するにふさわしい異本が、馬琴の周囲にはなかったであろう。

『南嶋志』『琉球国事略』には、白石の琉球観が詳細に記されている。その二つの書物は、為朝とその息子舜天王を琉球王朝の始祖としており、中国最古の地理書『山海経』が誕生した古代から、琉球が日本の一部であったことを認めている。

按流求古南倭也 南倭北倭 並見山海経 而南倭復見海外異記 二書蓋皆後人所作 雖然其書並出魏晉之際 如其所傳亦既尚矣 美嘗按東方輿地 經短緯長 限之以海 莫有海内可以容南北倭者 若彼流求蝦夷之地 接我南北 相去不遠

(73)

【現代語訳】考察するに、流求は古代の南倭である。南倭と北倭は、ともに『山海経』に書かれている。そして南倭はまた『海外異記』にも書かれている。二つの書は、ともに後世の人の著作であろう。しかし、それらの書は、ともに魏・晋の頃の出版であり、そこに伝えられていることもまた、すでに古いことなのである。私

は以前、東方の地図をしらべたことがある。東西に短かく、南北に長く、海によって区切られており、海の中に南倭と北倭とをいれる余地はなかった。かの流求と蝦夷の地は日本の南北に接しており、それほど遠くはへだたっていない。南倭・北倭とは、流求・蝦夷なのである。(74)

白石は、中華世界の周辺に棲息する奇怪な生き物たちを描いた『山海経』で言及される「南倭」とは、日本の一部としての琉球であるとしている(『山海経』『和漢三才図会』などに登場する奇怪な生物と、馬琴らの遍歴小説の関係については、第二部第三章を参照)。馬琴は、そうした白石の「南倭思想」に大きく影響されており、風間誠史も、

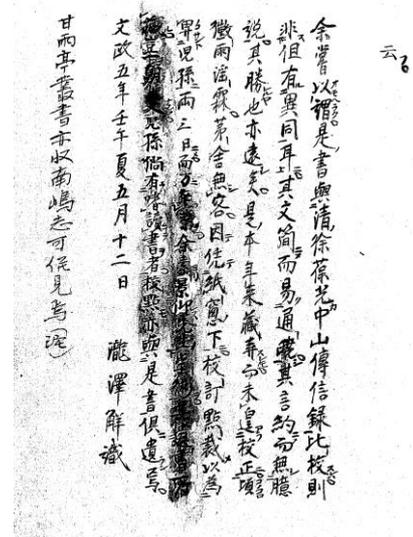
『南嶋志』の特色は、古来琉球は日本の一部すなわち「南倭」であり、中国の古文獻に「倭」のこととして載せるもののうち、日本の風土に合わないものは「南倭」すなわち琉球のことだとするとところにある。それを証明するために、極力古い時代の記述に日本と琉球の関係を求めようとしているのである。(75)

と論じ、馬琴の作品(例えば『椿説弓張月』)が、琉球を日本の一部とする、白石の日琉同祖説に影響されたものであると示唆している。(76)

馬琴は、『椿説弓張月』の前半の構想では、為朝の琉球到来という始祖説を大きなストーリーの枠組みとして用いており、琉球創始の神話が日本と同様であることを示す。もともと、こうして琉球を日本の一部として認めた上で、異なる言葉や習俗を持つ異国であるとする。だが馬琴は、そのような現実の琉球を踏まえた物語を展開しているのではない。むしろ、後半において為朝が登場する場面は、目立って少なくなる。代わって、異界の住人としか言いようのない悪人の矇雲国師を登場させ、為朝を超える能力を持つ存在として描くのである(第二部第三章を参照)。



【図五】『南嶋志』の表紙



【図六】『南嶋志』の書入れ

つまり琉球は、「為朝を描くための琉球」ではなく、架空の神秘・神話的な場になってしまっているのである。琉球は日本の一部であるが、日本とは異なる異国であるという矛盾を孕んだ表象をするためには、琉球は中国ではなく、日本の一部（南の倭）であるという白石の「南倭思想」を参照することが、有効な方法であったのであろう。

### 第五節 馬琴と蝦夷——蝦夷関連書物を中心に

前節では、馬琴の琉球認識と『椿説弓張月』における異国琉球について論じた。馬琴は、南端の島々である琉球については、作品の主な舞台にしたり、白石の著作を含む様々な琉球関連の書物を集めたりしていたことが確認できた。本論文では、その際、馬琴が、日本の北端に関してはどう考えていたかについてはまだ論じていない。そこで、本節では、このことを検証する。

後述する通り、馬琴は松前藩士との交流が深く、蝦夷はもちろん、ロシアの情報が彼の許に入っていたことは確かである

う。また、『白石叢書』にも蝦夷関連の書物があり、馬琴は、琉球関連の書物に対すると同様、これに詳細な書入れをしたことも、彼が北方情報通であったことを裏付ける。『白石叢書』の中、蝦夷関連書物としては『蝦夷風土記』『蝦夷之記』『蝦夷志』『北海随筆 同附録』の四冊がある。ただし前述のように、『白石叢書』のうち蝦夷関連の書物に関し、本文と巻末の書入れにおいて、馬琴は、その四冊とも内容に貧弱なところが多く、白石の著作ではないと指摘している。叢書が提供してくれる蝦夷の情報は確かに多く入っているものの、馬琴の信頼は、それほどではなかったと思われる。なお、宮崎の指摘にある通り、馬琴の『白石叢書』についての「真贋鑑別は必ずしも徹底したもの」ではない。しかしながら、そこに馬琴の深い学識と、知を追求する真摯な姿勢が認められるのである。(77)

馬琴と松前藩とのつながりは、馬琴の息子である宗伯(幼名は興継、一七九八〜一八三五)を通じてなされたようである。宗伯は、鈴木良知(78)の門下で、医学を勉強し、売薬を含む医療は、滝沢家の収入源として大きな支えになった。松前藩の松前道広(79)は、馬琴作品の愛読者として知られ、その縁で、文政三年(一八二〇)に宗伯は、道広の医師として職を得ることになった。それについては、「卅三 興継神田に卜居、并に松前家の出入医師になる事」(80)で、馬琴が詳しく記している。

その後、馬琴は、松前藩との付き合いのなかで、異国の書物を借り受けるなど、蝦夷を含む異国に関連する情報を得ることになる。彼が松前藩を通して得た情報は、『馬琴日記』に以下のように記されている。

○昨夕六時比、松前勘定方大野幸次郎より使札。右は近比駿州へ漂流の唐船事、委細に御聞被成に付、未及聞候はゞ、詳しくたづね可申旨、申来る。(文政九年(一八二六)正月廿九日)(81)

【現代語訳】昨日の夕方、六ツ時、松前藩の勘定方、大野幸次郎から手紙があった。手紙には、「最近、駿河国へ漂流した唐船の事について、松前藩主から詳細を聞かれたが、自分は詳細を聞いていないので、詳しく聞いてほしい」ということを言ってきた。

○昼前、松前内大野藤次郎(マツ)より使札。右は、此節紅毛人参着に付、長崎やへ罷越、めづらしき儀も、及承候はゞ、御隠居御聞被成度よし。(同年、三月九日)<sup>(82)</sup>

【現代語訳】昼前に、松前の内大野藤次郎より手紙が来た。手紙には、「今回、紅毛人(外国人)が来たので、もし長崎屋へ行つてめづらしい話を聞いているならば、松前の隠居が聞きたいと言っている」とのこと。

○谷文二より、昨日たのみこされ候一封、今日、以多七、返之。蝦夷へ文通は禁止に付、外へたのみ可然旨、予代筆にて、手紙そへ遣し、うけ取書とりおく。(同年、十二月十九日)<sup>(83)</sup>

【現代語訳】谷文二から、昨日頼まれた手紙一通を、今日、多七(人名)を遣わして、返却させた。「蝦夷への手紙を送ることは禁止されているので、他に頼んでほしい」という旨を、私が代筆した手紙をつけて送った。受取書は保存しておいた。

このほかにも、「漂流の話」「オランダ人の長崎入り」「蝦夷への文通禁止」などの記事が見える。また、文政十二年(一八二九)の日記にはこうある。

○法連より今日宗伯へ被貸候写本二部の内、文化二年漂流人四人ヲロシヤより帰朝の口書写し、六十頁餘閱之。(文政十二年(一八二九)、正月十三日)<sup>(84)</sup>

【現代語訳】今日、法連が宗伯(馬琴の子)へ貸してくれた写本二点のうち、文化二年に四人の漂流者がロシアから帰国した際の口述書の写しを六〇ページほど読んだ。

○法連被貸候魯西亜へ漂流人之口状、今日写しかゝり候処、多用二付、僅ニ五丁写し、(同年、正月十五日)(85)

【現代語訳】法連から貸してもらったロシアへ漂流した人の口状、今日写そうとしたが、用事が多く、わずかに五丁写した。

○昼後より、魯西亜聞見録上冊、廿三丁写之。(同年、正月十六日)(86)

【現代語訳】昼食後、『魯西亜聞見録』上巻を二三丁写した。

ここには、「ロシア人の漂流のこと」「魯西亜聞見録」の書物なども見られる。日記の冒頭部には、松前からの使札があったことが記されている。このように、馬琴の日記には松前との交流の記述が多くみられ、彼が蝦夷に関する多くの情報を得ていたものと推測される。

以上のように、馬琴は最南端の琉球と同様、最北端の蝦夷に関して興味を持ち、様々な情報ルートを持っていたことがわかる。それはなぜだろうか。高橋圭一は、読本と実録の関係を論じた際、『北海異談』という実録を挙げ、馬琴も所蔵していたと指摘している。(87)『北海異談』は、一八〇六年と一八〇七年に、ロシア帝国から派遣されたニコライ・レザノフが日本側の北方拠点を攻撃させたレザノフ事件(88)に触発され記された架空の実録であるが、アリューシャン列島に漂着し、サンクトペテルブルグで女帝エカチェリーナ二世(89)に謁見、一七九二年に帰国した大黒屋光太夫(90)の漂流とロシア渡航の記事には、詳細で事実の部分も見える。

この書の後半には、一八〇七年の秋、ロシアと幕府が海上で戦闘する話が出てくる。もちろん架空の話であるが、馬琴は、「この書、虚実なかばし候事これ有り候へども、当時の秘説をよくも書きつめ候ものかな」(91)【現代語訳】この書は、虚実が半分ずつではあるが、当時の秘説をよく書き集めていることである。(天保四年(一八三三)七月十三日、篠斎宛)と、これが「当時の秘説」、すなわち幕府の鎖国政策下では公にできなかった情報であることを特記している。



たことが確認できる。これに等しい熱心さでもって、彼は列島の南端にある琉球の情報を収集し、関連書物や文人会の人脈を介して薩摩藩からも情報を得ている。これは馬琴の異国情報の収集の意図にかかわる。すなわち、彼の異国への関心は、単に好笑的関心や、読本作家としての素材集めのためという目的にとどまらなかった。それはやはり、現実の異国の圧力が、鎖国日本を脅かしていた状況に対する、江戸期の文人としての、ある意味で当然の反応だったのではないだろうか。

## 第六節 おわりに

本章では、馬琴の『白石叢書』についての考証作業をめぐる検討を通して、彼が日々、積極的に異国知識や異国情報を獲得しようとしたことが確認できた。馬琴が行った収集、考証活動は、単なる個人的な趣味ではなく、緻密な知的作業であり、長編読本の執筆を支える根幹とも言える。また馬琴が収集、考証したのは、異国や異文化についての事柄が多く、彼はそれをより正確な情報、知識として収容しようとした。特に、『白石叢書』を購入したことが、馬琴の異国に対する関心を高めるきっかけの一つとなったことは間違いないだろう。このことは、それ以降、馬琴が兔園会（第二部第四章参照）を結成し、珍説珍奇類の話を求め、特に異国に関する話を追求したことからもうかがえる。しかしながら、播本が指摘する通り、馬琴が得ていた異国に関する豊富な情報と、彼の異国に対する考え方とのあいだには、乖離が存在する。異国に関する情報を豊富に得ることが、必ずしも世界観の改変にはつなげていないのである。異国に関する知識が蓄積されると反比例するかのよう、作品における馬琴の世界表象の方法は、伝統的で旧来的な知の枠組みに回帰していったかのようである。このような異国への興味や関心は、本格的かつ直接的には、作品に反映されることはなく、現実的な異国表象は、幻想的な異国表象や伝統的な異国表象へとその場を明け渡していくのである。

【注】

- (1) 大高洋司『椿説弓張月』論——構想と考証——『日本文学研究論文集成二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年、一四一～一四二頁。
- (2) 播本眞一「馬琴と異国」『江戸文学』ぺりかん社、二〇〇五年、一四九頁。
- (3) 後藤丹治校注『椿説弓張月下』岩波書店、一九六二年、二七五～二七七頁。
- (4) 播本前掲論文、一六一頁。
- (5) 日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』第一卷 岩波書店、一九八三年、八九～九〇頁。
- (6) 『日本古典文学大辞典』第五卷、一九八四年、五四頁。
- (7) 宮崎道生「新井白石と滝沢馬琴」『新井白石と思想家文人』吉川弘文館、一九八五年、二七四頁。
- (8) 柴田光彦・神田正一編『馬琴書翰集成』第一卷～第六卷・別巻、八木書店、二〇〇二年～二〇〇四年。『馬琴書翰集成』第二卷、八一頁。
- (9) 『馬琴書翰集成』第二卷、二七一頁。
- (10) 同書、第五卷、二〇〇三年、七〇頁。
- (11) 同書、七六頁。
- (12) 宮崎前掲論文、二七八頁。
- (13) 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』卷一 五丁裏。
- (14) 宮崎前掲論文、二六九頁。
- (15) 宮崎前掲論文、二七七頁。播本前掲論文、一五五～一五七頁。
- (16) 宮崎前掲論文、二八五頁。

- (17) 三宅米吉「馬琴と白石」『文学博士三宅米吉著述集』上巻、目黒書店、一九二九年、六五二頁。
- (18) 宮崎前掲論文、二六七～二九五頁。
- (19) 播本前掲論文、一四九頁。
- (20) 大高前掲論文、一四一～一四二頁。
- (21) 宮崎前掲論文、一五一頁～一五二頁。
- (22) 宮崎前掲論文、一五二頁。
- (23) 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』。なお、筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』には頁数が記載されていないため、本論文では巻数と丁のみを記載する。
- (24) 静嘉堂文庫蔵本『白石叢書』。
- (25) 昌平坂学問所旧蔵 内閣文庫蔵本『白石叢書』。
- (26) 『白石叢書』巻一 五丁表。
- (27) 同書 五丁裏。
- (28) 宮崎前掲論文、二七七頁。播本前掲論文、一五五頁～一五七頁。
- (29) 宮崎前掲論文、二八五頁。播本前掲論文、一五五頁～一五二頁。
- (30) 宮崎道生「滝沢馬琴の蒐集校訂本『白石叢書』」『国学院大学大学院紀要』第一六輯、国学院大学大学院、一九八四年、六七～七〇頁。
- (31) 一六六六年～一七二八年、江戸中期の代表的な儒学者。漢文を訓読で読むことの限界を認め、中国音による直読なども奨励したことなども、江戸儒学の後世への飛躍をあらかじめ見通した見識であったとされる。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第二巻、吉川弘文館、一九八〇年、七八九頁。
- (32) 一六八三年～一七五九年。江戸時代中期の儒学者、漢詩人。江戸で柳沢吉保に歌人としてつかえ、荻生徂徠に学ぶ。

吉保没後、私塾をひらく。経世論の太宰春台に対して詩文の南郭として徂徠門下の双璧といわれた。『国史大辞典』第十一卷、六二九頁。

(33) 一六八〇年〜一七四七年。江戸時代中期の儒学者。荻生徂徠門下には文芸の方面に傾く者が多かった中で、儒学の基本をなす経学の分野での代表的な後継者として、一般にも認められている。『国史大辞典』第九卷、一五三頁。

(34) 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』卷十二 二十丁裏。

(35) 同書、卷十二 四十丁裏。

(36) 同書、卷十五 九丁裏。

(37) 同書、卷十五 十九裏。

(38) 同書、卷十五 四八裏。

(39) 同書、卷十六 二一表。

(40) 同書、卷十六 三四裏、三五表。

(41) 同書、卷十七 十二裏。

(42) 同書、卷十七 五十表。

(43) 同書、卷二十 十裏。

(44) 同書、卷二十 二九表。

(45) 同書、卷二十四 一裏。

(46) 同書、卷二十四 九表。

(47) 同書、卷二十四 四三裏。

(48) 同書、卷二十六 三六裏。

(49) 同書、卷二十七 十四裏。

- (50) 同書、卷二十七 二二裏、二二表。
- (51) 同書、卷二十七 二六裏。
- (52) 同書、卷二十八 二表。
- (53) 同書、卷二十八 三二裏。
- (54) 同書、卷二十九 十二裏。
- (55) 同書、卷二十九 十五裏。
- (56) 同書、卷二十九 二二裏。
- (57) 同書、卷二十九 二二裏。
- (58) 同書、卷二十九 三二裏。
- (59) 同書、卷二十九 五一裏。
- (60) 山田仁左衛門（通称長政）のこと。播本は、「仁左衛門は、朱印船貿易時代、慶長末ころ暹羅（タイ）にわたって貿易に従事した後、国王の信任をえて暹羅の政治にたずさわったとされる。正確な伝記は不明」としている。播本掲論文、一五九頁。
- (61) 『白石叢書』卷三十 十八裏。
- (62) 『白石叢書』卷三十 二四裏。
- (63) 『馬琴書翰集成』第五卷、二〇〇三年、二六四頁。
- (64) 後藤丹治校注『椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、七三頁。
- (65) 大高洋司前掲論文、一一三頁。
- (66) 『椿説弓張月上』二二七頁。
- (67) 同書、一四四頁。

- (68) 大高洋司前掲論文、一四三頁。
- (69) 『椿説弓張月下』一二五頁。
- (70) 同書、二七二頁。
- (71) 「林太夫が事は、琉球事略及南島志に出たり」とされている『椿説弓張月』の林太夫は奄美群島の加計呂麻島の島長である。
- (72) 『白石叢書』卷十七。
- (73) 原田禹雄訳注『新井白石 南島志 現代語訳』榕樹社 一九九六年、一二五頁。
- (74) 同書 三六頁。
- (75) 風間誠史『椿説弓張月』の「琉球」『相模国文』第三三号、相模女子大学国文研究会、二〇〇六年、五五頁。
- (76) 渡辺匡一「日琉往還——為朝話にみる差異化と差別化、同一化の歴史」『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、二〇〇一年。六三頁。
- (77) 宮崎前掲論文「新井白石と滝沢馬琴」二八六頁。
- (78) 一七六一年〜一八一八年。医者、本草家。儒医として伊勢桑名藩・山城淀藩に仕える。著作に『医海蠡測』『傷寒論解故』『本草紀聞』などがある。市古貞次他編『国書人名辞典』第二卷、岩波書店、一九九五年、六一七頁。
- (79) 一七五四年〜一八三二年。江戸時代中期、後期の大名。松前資広桜の長男で、一七六五年、十二歳で峻夷告地(北海道)前藩主三代となる。このころロシアの南下が顕著になる。藩政をおろそかにして遊興にふけり、幕府の内命で一七九二年、隠居した。上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『講談社人名大辞典』講談社、二〇〇一年、一七八四頁。
- (80) 滝沢馬琴著・木村三四吾他編校『吾仏乃記 滝沢馬琴家記』八木書店、一九八七年、一八六頁。
- (81) 柴田光彦新訂増補『曲亭馬琴日記』第一卷、中央公論新社、二〇〇九年、二二頁。

- (82) 同書、二二二頁。
- (83) 同書、三二頁。
- (84) 『曲亭馬琴日記』第二卷、二〇頁。
- (85) 同書、二二頁。
- (86) 同書。
- (87) 高橋圭一『実録研究——筋を通す文学——』清文堂、二〇〇二年、二五九頁。
- (88) 一七六四年～一八〇七年。ロシア宮廷侍従長、露領アメリカ会社の総支配人、第二次ロシア遣日使節。日本との通商の必要性をアレクサンドル一世に進言し、津太夫ら漂流民の護送と通商要求のため、一八〇四年長崎に来航。ラクスマンにつづき幕府の通商拒否にあい半年後退去。途中、部下に日本の北辺を攻撃させた。『国史大辞典』第十四卷、七二六頁。
- (89) 一七二九年～一七九六年。ロシアの女帝。一七六二年、近衛連隊の力を借りて不人気のピョートルを退位させ、息子の摂政を務めるのではなく、みずから統治すると宣言した。ジェニファー・アグロウ編纂『世界女性人名大辞典』国書刊行会、二〇〇五年、七二頁。
- (90) 一七五一年～一八二八年。江戸時代、ロシアの修交使節に伴われて鎖国後公然帰国した最初の漂流民。幸太夫とも書く。『国史大辞典』第八卷、七三六頁。
- (91) 『馬琴書翰集成』第三卷、七九頁。
- (92) 『馬琴書翰集成』第二卷、二四三頁。
- (93) 播本前掲論文、一五七～一五八頁。

## 第二章 異国遍歴小説における異国と異界——「女護が島」表象を中心に

### 第一節 はじめに

江戸時代の後期に入ると、日本の近海に異国船が出現し、異国から開港や貿易を要求されるようになった。江戸期において、日本が経験したことの無い異国との頻繁な接触は、鎖国政策を支配原理としていた幕府に脅威をもたらし始め、幕府は異国という文化的・政治的に相違する世界が実在することを改めて認識し、その対処を考えるようになった。

その一方で、江戸の人々は、鎖国政策で渡航が厳しく制限されており、異国についての情報や知識を得ることは、容易ではなかった。彼らが異国を知ることができるのは、当時中国から伝来した、あるいは中国を経由して西洋からもたらされた、一部の百科事典・類書や地理書などによるしかなかった。そこから得た異国像は、中国、朝鮮、琉球などの、日本周辺の実在する国々と、イギリス、ロシア、イタリアなどの、実在はするが現実味の薄い異国と、穿胸、長脚、長臂などの現実には存在しない想像の国々とは混在したものであった。

このような時代に、江戸の人々の人気を得たのが、異国巡りを主な主題とした異国遍歴小説であった。これらの作品においては、現実に存在する異国と想像上の異国とが混ざり合っており、主人公は、奇妙奇怪な怪物たちが存在し、不可思議な風俗をもつ異国を巡りながら、冒険をする。江戸の人々は、その小説を通して異国の情報を獲得し、また異国への好奇心を満たしたのである。このような異国巡りの物語を成立させる条件となっていたのが、鎖国体制にも関わらず、中国から（あるいは中国を経由して、中華秩序に属さない国々から）、様々なルートを通して近世日本に到来していた、異国情報である。馬琴は、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』（一六〇二年）や、ジュリオ・アレーニの『職方外紀』（一六二三年）に基づいた地理書類などによって、例えば南アメリカ大陸のアマゾン川流域やタタール地方などの、中華文明から遥かに遠い地域についての情報を獲得していた。さらに、そこで得られた異国に関する情報は、ヨーロッパに植民地化される両インド（アジ

アのインド亜大陸と、西インド諸島)や南アメリカなどの現実の土地に関するものもあれば、「女人国」などの架空の土地に関するものもあった。(第二部第四章を参照)<sup>(1)</sup>

重要なことは、こうした状況の中で記された馬琴作品や、それに類似する遍歴小説における世界の表象の方法は、異国、特に幻想の異国の過剰さを抑制しようとするものだったという点である。本章では、馬琴の遍歴小説である『風見草婦女節用』(二七九九年)と『庭莊子珍物茶話』(一七九七年)、それらに先行する類似した異国遍歴小説(平賀源内『風流志道軒伝』(一七六三年)と遊谷子『異国奇談和莊兵衛』(一七七四年))を取り上げ、特に女だけが住む島「女護が島」の伝説にかかわる表象の特徴を分析する(第二部第三章で詳細に論じる『椿説弓春月』の女護が島(一八〇七―一一年)についても触れる)。『兎園小説』(一八二五年)で、馬琴が亀屋久右衛門「銀河織女に似たる事」に付した解説に見られる、「アマツハコ 瑠璃作搦」という女性だけの国については第二部第四章で詳しく検討することになるが、本章は、その第四章における検証作業の準備過程の役割ももっている。まず、江戸期の遍歴小説における現実と幻想の異国に関する主要な源泉の一つである『和漢三才図会』(一七二二年)について述べつつ、遍歴小説においてはその異国の幻想性が教訓や相対化によって抑制される傾向があったことを確認する。そして馬琴作品を含む遍歴小説における「女護が島」表象について分析し、幻想の異国がその異国性を剥奪されてゆく様を確認する。なお、江戸期の遍歴小説についての研究は、野田寿雄、板坂則子、小谷信行、川村湊、佐藤至子、風間誠史、播本眞一によるものなど数多いが、本章ではこうした先行研究に多くを学びつつ、特に「女護が島」表象に焦点を絞って論じることとする。<sup>(2)</sup>

## 第二節 幻想の異国とその馴致

遍歴小説とは、通常の人間の空間的大きさを超えつつ人間に近似する存在の生きる場、人間の倫理に反すると考えられる行為が許されている場、想像を超えたテクノロジーが支配する場など、現実にはありえない不思議の国を遊歴する主人公の

冒険を描いたものである。こうした作品は、世界各地に見出される。ヨーロッパでは、この種の遍歴小説としては、ジョン・スウィフトの『ガリバー旅行記』（一七二六年）が特に有名である。<sup>(3)</sup> 日本での最初の遍歴小説としてあげられるのが、舎楽齋鈍草子『見外白宇瑠璃』（一七五八年）であり、ほぼヨーロッパの遍歴小説と同じ時代に刊行されている。<sup>(4)</sup> この作品は、主人公が地下の蟻の国や竜宮などの異界を覗き見するという内容である。その後、遍歴小説として著名な平賀源内『風流志道軒伝』や遊谷子『異国奇談和莊兵衛』が登場してくる。特に後者の影響は大きく、それを模倣した多くの遍歴小説が記されるようになった。<sup>(5)</sup>

本章では詳述しないが、馬琴の『夢想兵衛胡蝶物語』（前編一八〇九年、後編一八一〇年）も、これらの作品の系譜に連なっているとと言えるだろう。さらに、馬琴読本の代表作『椿説弓張月』も、源為朝が大島・鬼が島・女護の島・琉球などの島をめぐる異国遍歴小説となっている（ただし、異界表象も混在している）。

本章において重要な視点は、これらの遍歴小説には、相矛盾する要素が不安定に併存しているように見えるということである。すなわち、荒唐無稽で見世物的な娯楽的要素と、日本国内の悪徳を戯画化し風刺する、道徳主義的態度である。いわば、幻想の異国が現実を引き戻されるのではないかということである。本節では、まず遍歴小説の奇想天外な要素の源泉の一つである『和漢三才図会』について触れる。次に、こうした奇想天外さが遍歴小説において現実に引き戻される傾向について触れる。

異国を旅する主人公を描いた遍歴小説が流行する以前、異国情報は、中国から伝来した百科事典・類書と地理書に起因するところが多かった。そこに記録された異国には、実在する国々はもちろん、大人国、小人国、不死国などの不可思議な国々が混在し、江戸の「外」として理解されたのである。その百科事典中で、江戸の人々に大きく影響を与えたのが、日本の類書としてよく知られている『和漢三才図会』（寺島良庵編、一七二二年序）である。

以下は、以後の遍歴小説にもよく作品の材料として利用されてきた、『和漢三才図会』による異国の特徴を本論文著者がまとめたものである。これらの特徴は、本章の三節以降で論じる作品においても重要である。

○穿胸 (せんきょう、チエンヒョン)

—『三才図会』(人物十四卷)によれば、穿胸国は盛海の東にある。人々は胸に竅あながあいている。尊者は衣を着けず、胸の竅に竹木を通し、卑者に擡かたがせる、とある。(6)

○長脚 (あしなが) 長股

—『三才図会』(人物十四卷)によれば、長脚国は赤水の東にある。その国の人は長臂国ちようひと近い。人々は常に長臂人を背負って海に入り魚を捕る。思うに長臂人の身体は中人のようで臂の長さは二丈。これから類推すれば長脚は三丈ぐらいであろう、とある。(7)

○長臂 (ちようひ、チャンピイ)

—『三才図会』(人物十四卷)によれば、長臂国は焦僂国しやうきやうの東にある。その国の人は海の東にいる。その人々は手を垂れると地まである。昔ある人が海中で一つの布衣の袖を拾ったが、それは一丈余の長さがあつたという、とある。(8)



【図一】『和漢三才図会』穿胸



わしあか 長股  
長脚

月云長脚國在赤水東其國人與長臂國  
刀人入海捕魚蓋長臂人身如中人而臂

【図二】『和漢三才図会』長脚



ちようひ  
長臂

△長臂國在焦僂國東其國人  
刀入在海中得一布衣袖各長  
尺臂長脚二丈三丈者難信謂

【図三】『和漢三才図会』長臂

このような、天竺（インド）、中国、日本から形成される三国世界の辺境には、穿胸、長脚、長臂などの異形のものたちが棲息する幻想の異国が存在するという世界観は、『和漢三才図会』や、その主要な典拠である中国明代の『三才図会』（一六〇七年）にオリジナルなものではなかった。古くは、中国古代の戦国時代から秦朝代・漢代にかけて成立した、中国最古の地理書『山海経』に見られたものである。武部健一が、『山海経』研究の歴史とその現代的意義<sup>(9)</sup>で述べているとおり、日本では『山海経』の存在は早くから知られていた。清少納言『枕草子』にも、その二〇段に「手長、足長」への言及があるが、<sup>(10)</sup>それは『山海経』を元にしたのではないかと推測される。江戸期の画家・俵屋宗達の『風神雷神図屏風』の雷神の描かれ方にも、『山海経』の影響が認められるとされ、同じく江戸期の『奇怪鳥獣図鑑』（作者、制作年代不明）には、『山海経』に由来すると考えられる七十六種の中国怪物が描かれている。<sup>(11)</sup>このように、元来は『山海経』に由来する幻想の異国表象は江戸期の日本にも流入していたのであり、この時期に記された遍歴小説もその影響を受けていたと推測してもよいだろう。

ただし遍歴小説においては、こうした奇想天外な異国表象のみが強調されたわけではなかった。例えば、本章で論じる平賀源内『風流志道軒伝』、遊谷子『異国奇談和莊兵衛』、馬琴の『庭莊子珍物茶話』『風見草婦女節用』などで描かれる穿胸国、女人国などの不可思議世界を検討してみると、奇想天外な異国での冒険は、日本の現実への「諷諭」<sup>(12)</sup>の国と機能する場合が多いことが理解される。これらは「庶民らしい生活感覚から生まれてきた空想と教訓と風刺」を持っており、さらに日本もまた、風変わりな風習を絶対と信じ込んでいる滑稽な国々のひとつにすぎないという、「健康な相対感覚」<sup>(13)</sup>が働いていることがわかる。例えば、源内の『風流志道軒伝』では、主人公・浅之進が、儒教倫理に絶対の価値を置く仙人に説諭されて日本に帰国するように（「是よりはやく国に帰り、道に志（す）」と云（ふ）文字を取（つ）て、志道軒と名を改め、浅草の地内において、をどけ咄に人を集め、浮世の穴をいひ盡して、随分人を戒<sup>いまむ</sup>べし」）、<sup>(14)</sup>どの作品でも、最終的には、主人公

たちは異国から日本に帰国し、作品は日本の倫理道徳と価値観を最上とする枠組みに回収される。佐藤至子は、野田寿雄『近世後期の異国遍歴小説』に言及しつつ、中世には異郷に「ロマンティックな理想像」が投影されているのに対し、近世には異郷が「現実化」される傾向があることを指摘している。野田によれば、異郷は「単なる仮託の世界と化し、そこに現実を投影することによって、現実を滑稽化するという諷刺性」が目立つようになる。「現実諷刺」と「教訓」が『風流志道軒伝』とそれ以降の遍歴小説の顕著な傾向として指摘できるのである。(16) また、途中で展開する異国遍歴物語では、例えば異形の者たちの国では日本の美貌が醜となるというように(「生(き)た日本人の見せもの、手に入(れ)て這す様なちつぽけな美男」、(16)) 作品が公式的に表明している日本の民族的・文化的・生物学的優位性も、また必然的に相対化されるのである。このような、幻想の異国とその封じ込めについて、以下具体的な作品に触れつつ述べていくこととする。

### 第三節 平賀源内『風流志道軒伝』の「女護が嶋」

前述の『和漢三才図会』などに倣い、日本で創作された異国遍歴小説の原型となったのが、すでに言及した平賀源内『風流志道軒伝』(17)である。

主人公の志道軒は、仙人に与えられた団扇(「抑此団扇を以てあふけば、……飛(ば)んと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知(り)、幽微をみる。身をかくさんと思へば、忽に身へざる、奇妙奇代の重宝なり」(18))を用いて、「彼風来仙人の教にまかせ、是より日本はいふに及(ば)ず、唐・天竺より諸の外国までを、廻り見んとぞ思ひ立(ち)けり」(19))と異国への旅立ちを志す。そのために、彼はまず、江戸の遊郭、吉原を出発し、日本国内の、以下のところを旅する(本論文筆者によるまとめ)。そのほとんどが、遊郭街、すなわち「島」「国」と呼ばれた領域である。

○吉原―金川・大磯・御油・赤坂、吉田・岡崎・二丁町、古市・山田―浦賀・下田・鳥羽・あいつ、長嶋・田部・印南

―室津の泊・鞆・おのみち、みたらい・からうと・上の関―三國・新方・出雲崎、敦賀・今町・金澤―坂田かうやの濱、津輕に青森やすかた町、陸奥にもとめや・八丁の目、松前のゑさし<sup>(20)</sup>

その後、以下のような異国を訪問し、その国々の人々の外見、風習、儀式などを日本と比較して述べている。これは、主人公が旅をした異国とその異国の風習、様々な異国人の特徴などを、本論文著者が本文から引用してまとめたものである。

①大人国―何れも身の長二丈あまり、背におふたる子の形も日本人より大なれば、これこそ名におふ大人国ならんと思へども<sup>(21)</sup>

②小人嶋―人の大き一尺二三寸に過(ぎ)ず、一人歩行ば鶴に取(ら)るゝ故、四五人連にてあらざれば、通(り)得ざる程小さき国にて有(り)ければ<sup>(22)</sup>

③長脚国―体は日本人程なれども、足の長さ一丈四五尺なれば、此川水には流ざるも断なり<sup>(23)</sup>

④長擘国―手の長さ一丈四五尺にて、常に盗を事とすれば、此者どもをかたらひて<sup>(24)</sup>

⑤穿胸国―男女とも押(し)なべて、皆胸に穴あり。貴人他所へ行(く)にも、竹輿乗物はなくして、其胸の穴へ棒を通して、かきありけどもいたまず<sup>(25)</sup>

⑥例の羽扇に打(ち)乗(り)て、蝦夷・琉球はいふに及(ば)ず、莫臥尔・占城・蘓門塔刺・淳泥・百兒齊亞・莫斯科哥、琶刺敢・亞尔默尼亞、天竺・阿蘭陀を始として<sup>(26)</sup>

⑦うてんつ国・きやん嶋・愚医国(藪医国)、ぶさ国、しんござ国、いかさま国、樗蒲一嶋<sup>(27)</sup>

⑧朝鮮―人參のぞうすいを喰ふ事二月ばかり<sup>(28)</sup>

⑨唐土―清朝の主乾隆帝の住(み)給ふ北京になん至(り)けるに<sup>(29)</sup>

⑩女護が嶋―此嶋は女護が嶋とて、男は一人もなくして、女ばかり住(め)る国也。子を産(ま)んと思ふ時は、日本の

方に向(か)ひて帯をとき、風を請(く)れば、懐胎して又女子を産。王もあれども皆女なり。此嶋の掟にて、外より流(れ)来る人あれば、船より陸へ上る時、国中の女立(も)出(で)て、磯辺に草履を直し置(き)、其草履をはきたる者と、夫婦となる法なれども<sup>(30)</sup>

上記の異国についてまず言えることは、現実の異国(「蝦夷・琉球」「莫臥尔・占城・蕪門塔刺・淳泥・百兒齊亞・莫斯科哥、琶刺敢・亞爾默尼亞、天竺・阿蘭陀(モウル「ムガール」、チャンパン「リチャンパ、ヴェトナム南部」、ソモンダラ「スマトラ」、ボルネオ、百兒齊亞「ペルシヤ」、モスクワ、琶刺敢「不明、ビルマ?」、アルメニア、インド、オランダ)」「朝鮮、唐土」と、幻想の異国(「大人国」「小人嶋」「長脚国」「長擘国」「穿胸国」「女護が嶋」、人間の悪徳を「異国」の物語として描いたもの(「うてんつ国」「遊びにうつつをぬかす国」・きやん嶋「やくざ者の国」・愚医国(藪医国)、ぶさ国「田舎者の国」、しんござ国「いかさまの国」、いかさま国)<sup>(31)</sup>が入り交じっているということである。幻想の異国については、その住民が、日本で標準と考えられる人間のサイズと比較して、巨大・極小(「大人国」「小人嶋」)であること、身体の特定部分の長大・欠落がある(「長脚国」「長擘国」「穿胸国」)こと、生物学的法則(生殖)からの逸脱がある(「女護が嶋」)ことなどの特徴が指摘できる。本節では、平賀源内『風流志道軒伝』に現れる幻想と現実が入り組んだ異国の中で、馬琴の『庭莊子珍物茶話』や『和莊兵衛』、そして『椿説弓張月』と比較対照することが有益である、「女護が嶋(女人国(島))」を中心に検討したい。

まず、「女護が嶋」にたどり着くまでのストーリーを概説する。風間誠史によれば、主人公浅之進(志道軒)は、当時の江戸で名物講釈師であった深井志道軒(一六八〇年?—一七六五年)をモデルとしている。<sup>(32)</sup>この浅之進は、大人国(巨人の国)で「生(き)た日本人の見せもの、手に入(れ)て這(は)す様なちつぽけな美男」として、「生(き)の物を生で見せる」見世物にされる。<sup>(33)</sup>その後を訪れた小人嶋では、事態が逆転し、「人の大き一尺二三寸に過(ぎ)ず、一人歩行(あるけ)ば鶴に取(ら)る、

故、四五人連つれにてあらざれば、通(り)得ざる程小さき国にて有(り)ければ」という小人嶋の人々の姫君を「指にてちよつと引つまんで、印籠の中へぞ入れたる」<sup>(34)</sup>という暴挙に及ぶ。この点だけをとりあげても、浅之進が幻想と現実の両面を保持した存在であることがわかる。

浅之進の遍歴は続く。彼はインド(ムガール)、インドシナ(チャンパ)、スマトラ、ボルネオ、ペルシャ、ビルマ、アルメニア、オランダ、モスクワ、朝鮮、乾隆帝時代の北京を放浪することになる。これらの地名を見ると明らかであるが、『風流志道軒伝』では、現実の異国と幻想の異国が混在しているのである。

巻之五になると、浅之進と百人ほどの中国人男性は、女ばかりの島に漂着する。そこで、吉原国こくと呼ばれることの多かった吉原遊郭での男女関係が逆転した世界が展開する。ここで「島」という言葉に注目すれば、タイモン・スクリーチが、源内門下の蘭学者・戯作者であった森島中良(一七五四年―一八一〇年)の『新義経細見蝦夷』(一七八五年)にふれて述べている通り、「島」とは遊里を想起させることばでもあった。<sup>(35)</sup>

この「島」はどのような場であったのか、確認したい。まず、王も含めて、住民すべてが女のこの島では、住民たちは「男のほしき」<sup>(36)</sup>思いに取り付かれていたことが注目に値する。ところが、身分の高い者だけが、外来者の男たちを占有してしまっている。これは承認できないと、一般住民が示威行動を挙行して、王宮を取り囲む。こうした事態を打開すべく、浅之進の進言で、外来者男性たちが、日本の女郎屋のように店を出すことになる。その様子は、「四方には堀をほり、茶屋揚屋より諸商人の家々まで、不足なく建ならば、一方の入口には大門を拵くろむ(へ)て、廊中の男は外へ出(で)ざる為にとて、関所せきしょのごとくに番人を付(け)置き、……女ならば女郎といひ、また遊女などといへども、是は男の傾城けいせいなれば、其名を男郎なんろうと呼よび」<sup>(37)</sup>と、遊郭・吉原さながらである。ただし、ここでは、女が買い手で、男が売り手となっており、現実の吉原を逆転した世界であることに注目したい。この女護が島の描写では、現実世界の秩序をフィクションの世界において逆転させてみせることにより、現実世界の秩序が戯画化されている。また、「子を産(ま)んと思ふ時は、日本の方に向(か)ひて帯をとき、

風を請（こ）れば、懐胎して又女子を産（うむ）（38）という記述もあるが、この記述からは、神話性・幻想性と、女たちの性交への欲望という現実・卑俗性とが共存していると指摘できるだろう。

しかし、現実と幻想の逆転による享楽は長続きしない。この女護が島において、最初は勤めを楽しんでいた「遊男」たちであるが、次第に嫌気がさし、浅之進以外の男たちは、すべて「色青く瘦（やせ）おとろへ、こつくと咳（せき）の出るのを相図にして、無情の恋風にさそはれ、百余人の遊男ども、西方浄土（じやうじゆ）へくらがへす」、（39）つまり死亡してしまう。ひとりで多数の客を相手にしなければならなくなった浅之進が、「日頃面白かりし色遊（いろあそび）も、常になりてはうるさきものと、女郎治郎（やらう）の身の上までを思ひやり、あじきなき世の有様」（40）と思い悩んでいたところを、彼に魔法の団扇を与えた仙人が現れる。仙人は、浅之進が訪れたどの国よりも、日本が優れていることを学ばせ、色欲の空しさを悟らせるために、（現実・架空を含めて）諸国を遍歴させたのだと説く。結局、遍歴によって、〈正〉が強調される世界からひとまず解放されるものの、結局は、元の世界に帰することになる。これがこの作品のメッセージなのである。

#### 第四節 遊谷子『異国奇談和莊兵衛』の「女護が嶋」

次に、遊谷子『異国奇談和莊兵衛』について触れよう。馬琴が、『庭莊子珍物茶話』で主人公を「和莊兵へ」と名付け、『夢想兵衛胡蝶物語』の冒頭で「一日遊谷子（あるひいうこし）が著（あ）はしたる、和莊兵衛（わせうひやうべ）といふ冊子（そうし）を見て思（おも）ふやう」（41）とあるように（「発端」）、ここで取り上げる『異国奇談和莊兵衛』を意識していたことは間違いない。

『和莊兵衛』を要約すると、次のようになる。長崎在住の人である和莊兵衛は、「唐人紅毛（とうじんおらんた）のつき合（あひわか）和漢（わかん）をあへませ、ちんぷんかんぷんに」（42）暮らしている。ある日、海釣りをするうち、沖に漂流して不死国に漂着する。そののち、鶴や亀に乗って、自在国、矯飾国、好古国、自暴国、大人国（だいじん）、清浄国、長足国、金銀宝玉国、交響国などを訪れる。最初は、どの国に行つて

も感嘆するばかりの和莊兵衛であるが、ついには、どの国にも失望して別の国に旅立つ。そして、多くのエピソードに、「養生」（教訓）が付されている。

一例を挙げる。和莊兵衛は、すべての欲望が「自在」にかなえられる「自在国」を訪れる。そしてその沖合には女人国がある。

何でものぞみ次第にはさみ切て、衣服を調ることなり。自由なる事衣食の二つのみならず、聞及し女護の島も、即ち此自在国の領内にて、城下より二里ばかりの船渡しを越て行ば、男は一人もなく、女ばかりの国なり。しかも余国にすぐれて色白く、自在国の内なれば、雲の衣しやう花のすがた、何れ劣しは一人もなく、其うへ千びきの糸のくるしき賤の女の手業一として、するに及ばず。……身だしなみに打かゝつて居るゆへ、手足のじんじやうに、心ざまもやさしく、貞節なり。昔はやうく日本の方から吹風に身を任せしとかや。(43)

この引用をまとめると、「男は一人もなく女ばかりの国」であるこの島では、生活の苦勞がないために、女性たちは美貌でスタイルがよく、「心ざまもやさしく、貞節」である。さらに、昔は日本から吹く風で妊娠していたとされており、女護が島伝説の内容がよくわかると一節であると言つてよいだろう。

付け加えておけば、『三才図会』『和漢三才図会』『唐土訓蒙図彙』に由来するであろうそうした女人国伝説は、沢井某作『和莊兵衛後編』（一七七九年）にも引き継がれており、挿絵（【図五】）を見ても、同様の話であることがわかる。『三才図会』から多くの知識を得た『唐土訓蒙図彙』（一七一九年）の挿絵（【図四】）を見ても、井戸に自分の影を写している女人国の女性が描かれている。また、『和莊兵衛後編』での女人国は、「此国女ばかりなれば、家々に井をほり、我かげをうつし懐胎す。また海辺に出て南にむかひ、裸形に成て、風をあつればはらむといふ」(44)と、井戸に自分の影を写して、あるいは風

により妊娠する国として記されている。いずれも注目に値するだろう。



【図四】『唐土訓蒙図彙』女人国



【図五】『異国再見和莊兵衛後編』女人国

## 第五節 馬琴の女人国（女護の島）

馬琴には多数の異国遍歴物があるが、本節で注目したいのは、住民のすべてが女性という場所を主人公が訪れる、一連の女人国（女護の島）モチーフを含む作品である。

まず黄表紙『風見草婦女節用』では、女人国（女護の島）に吹く春風が島の一番娘、竹婦人と恋仲になるが、竹婦人に横恋慕する大嵐とその協力者に妨げられ、駆け落ちしようとする。いわば風が擬人化され、二人の恋の顛末が風に関連づけて語られているのである。

欧邏巴州大海の東に女人国あり、世にこれをにようご（女護）の島といふ、こ女ハ風を以て夫とするなり、兎の月を見て孕ミ、亀の蛇と交わるが如く、一年に一度南風が吹く時、若い女ハ身もちになるが習わしにて、夫婦の事を風婦と書き、子供ハ風の子といふ譬も此嶋の事と見へたり。（45）

この引用で重要なのは、女人国が、「欧邏巴州大海の東」にあるとされていることである。この女人国の話自体は、馬琴が入手した情報源を考えると、おそらく『三才図会』『和漢三才図会』を基にしているのであろう。しかし、その女人国の位置についてはヨーロッパ（欧羅巴）の東にあるとされており、『三才図会』に見られる地理観とは異なる。これは古代ギリシアで、女性のみからなる部族・アマゾン族が、ヨーロッパの東（かつてアマゾン海と呼ばれていた黒海沿岸）に棲息していたとする神話に由来する可能性がある。このことについて馬琴は、後に執筆した『兎園小説』で、亀屋久右衛門「銀河織女に似たる事」に解説を付し、「亜瑪作擲」について述べている。この点に注意したい。馬琴は、長きにわたり北京に駐在したイエズス会士マテオ・リッチの地理書『坤輿図説』にふれて、「韃而韃（タタール）のそばに、亜瑪作擲川が流れており、その西側には昔、女の国があった」と述べているからである（本第二部第四章を参照）。

なお、女人国の女性が風で妊娠するという神話は、この作品では、（女）「身もちになると風声になるから、じきに知れやす、モウく子供ハ嫌、子ハ三界のくび風でござります」（子供）「おいらハこんなものを貰ひました、とつさんが吹いて来たら廻して貰おうの、かゝさん「この島ではんさんをする時ハぶいぐ」と尻ばかりひつている、これ風の子の証拠也」（46）という箇所で、滑稽に活用されている。

次に、馬琴の黄草紙『庭荘子珍物茶話』について触れよう。これは、和荘兵へが穿胸国の男と手長島の女を連れ帰り、男は見世物とし、女は遊女にして大儲けをするという話である。主人公の名前は、遊谷子作品の「和荘兵衛」ではなく、「和藤兵へ」となっている。この作品では、和藤兵へが穿胸国と手長島を訪れる冒険は描かれず、もっぱら遍歴中に取得した材（穿

胸国の男と手長島の女)を、帰国後、どのように有効に活用するかが語られる。

むかし八文字屋が筆にあらはしたる和莊兵へが忤に、和藤兵へといふ船乗あり。ある時筑前船をのりて難風にあるとあらゆる島へを巡り、やうく五年めにてふるさとへ立かへりしが、しまへの話や珍物はおやぢ和莊兵へがいひふらしたれば、何とぞ手軽な金儲けがありさふなものと、島へを巡るうち、……第一の案じは女御の嶋の風ぶくろ、手長嶋のむすめ、穿胸国のむねにあなのあいた手合、たった三いろなり。これらはどんなあたじけない山師に見せても一足や二足が値打はありそうな代物なり。(47)

主人公の父、「八文字屋が筆にあらはしたる和莊兵へ」とは、遊谷子(「八文字屋」)の『異国奇談和莊兵衛』への言及と見られる和莊兵への息子である。主人公である和藤兵へは、島巡りをした父親の和莊兵へが、すでに島の「話や珍物」は持ち帰っているため、それを真似するだけでは面白くないと、それらの珍物で「手軽な金儲け」をしようとす。異国の島々を巡り、彼が集めたのは、「女御の嶋の風ぶくろ、手長嶋のむすめ、穿胸国のむねにあなのあいた手合」である。そして、「たった三いろなり」という表現からは、「珍物」と聞けば当時の読者や見世物の観客ならば「たった三いろ」以上の種類の「珍物」を期待するであろうと馬琴が予想しつつ、和藤兵への見世物商売の矮小さを戯画化していることがうかがえる。しかし、「たった三いろ」という多彩さに欠ける見世物ではあっても、欲の深い(「あたじけない」)山師的人物であれば、多少の金(「一足や二足」)は出すであろうと和藤兵へは予想したのであった。

もう一つ、興味深い箇所を引用する。馬琴は、当時の江戸に実在した見世物「銅(胴)人形」、別名「函法師」という名で知られた機械人形を踏まえて、以下のような穿胸身体開示展覧会とでもいうべきものを描いている。

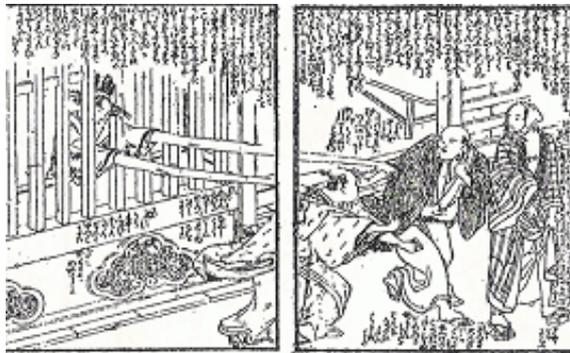


常の日本の遊女と変わりはない。ここで遊郭街である吉原が、しばしば「島」あるいは「国」と呼ばれていたことをもう一度想起しておこう。ここでの手長島出身の女は、日本の吉原という「島」、女のみが住む「国」の住民、すなわち女人国（女護の島）の住民に変身するのである。

『庭莊子珍物茶話』の結末部は、きわめて教訓的である。和藤兵への大もうけに嫉妬した麴相兵へは、和藤兵への商売の乗っ取りを計るが、和藤兵へ、穿胸国の男、手長島の女（転じて遊郭女護が島の女）の協同作戦により捕えられ、和藤兵へに「教訓」を与えられることになる。和藤兵へは、自分が突然大金を得たために、人に嫉まれ間違いを犯させることになったと反省し、それまでの穿胸国・手長国の見世物で儲けた金を三等分して、穿胸国の男と手長国の女に三分の一ずつ与え、故郷へ帰る旅費に充てさせる。つまり、和藤兵へは、自分が雇用した者たちに正当な賃金を与える、ある意味では、公正な雇用主として描かれている。このように、驚異はいわば終息してゆくのである。



【図六】『庭莊子珍物茶話』



【図七】『庭莊子珍物茶話』

ここまで、馬琴以外の著者によるものと、馬琴の筆になるものを含めて四つ（『風流志道軒伝』『異国奇談和莊兵衛』『庭  
莊子珍物茶話』『風見草婦女節用』）の遍歴小説を見てきたが、これらの作品における異国は、そこに住む存在が異形で、不  
思議な風習をもっていて、それに驚異の目が向けられることはあれ、それらの存在が脅威となるものではなかったことに  
注意したい。彼女／彼らの正体は、市井の日本人と、滑稽にも似通った者とされ、彼女／彼らの他者性や異質性からは、予  
め危険性が除外されている。異国は、幻想的な異界性を帯びているにしても、そこから脅威が到来する場ではないのである。  
さらに、異国やその奇妙な生物たちは、日本内部の悪習や悪徳を戯画化するための、寓意として登場させられている場合  
が多い。その意味では、これらの遍歴小説に登場する不可思議な存在は、奇妙にも身近な存在なのである。驚異に満ちた別  
世界を巡る、荒唐無稽で見世物的な娯楽的要素と、異様な姿や風習をもつ異国の姿に仮託して、日本国内の悪徳を戯画化し  
風刺する、道徳主義的態度とが、平行して表れているのである。

こうした道徳主義的態度は、異国遍歴物語を教訓的なものにしており、驚異に満ちた別世界の娯楽的価値を奪うものであ  
ろう。教訓化された遍歴小説はすでに、想像力が、この世の法則から遊離しつつ自由奔放に駆け巡ることができるような世  
界を描くものではなくなっているのである。

この論点については、本第二部第三章や第四章で再び論じることとしたい。特に第三章では、『椿説弓張月』における琉球  
の異国と異界との共存、そして前者から後者への反転という仕掛けを検討し、そこに、作家・馬琴における異国認識の特徴  
を見て行くことになるが、それに先立ち、ここで『椿説弓張月』の「女護が島」「鬼が島」遍歴について触れておきたい。

この作品の、いわゆる「八丈島渡り物語群」においては、遠く離れた異国や周辺地域のもつ幻想性・怪奇性を巨大化させ  
るような方向性が、まず注目に値する。一方同時に、異国やそれに近接した日本の周辺地域は、日本との多少の文化的違い  
を持つものの、根幹的には日本と変わらない世界であり、異国や周辺地域にまつわる伝説や神話は、訛伝の結果生まれたも  
のに過ぎないものであって合理的に説明できる、とする方向性が存在している。つまりこれらは、異国や周辺地域の異国性  
を強調する方向性と、異国や周辺地域と日本の同質性を強調する方向性である。前者では、異国・周辺地域の存在の、グロ

テスクで異界的な混沌と野蛮、怪物性が前面に出ており、概ね、為朝の敵方にこの方向性と属性が付与される傾向がある。これが極点にいたるのが、琉球物語群の「矇雲」表象である(第三章参照)。一方後者は、為朝の味方につく側の特徴となっている。異国や周辺地域出身で、為朝に味方する者たちについては、異様さや奇怪性が目立たないもの(あるいは、合理的に説明できるもの)とされ、異国や周辺地域の日本への同化が、「文明化」や、混沌・未開・野蛮の打倒、中心の秩序・文化・技術の伝授という恩恵として語られる。つまり、異国から異界的な要素が排除され、日本に同化可能なものとされるのである。

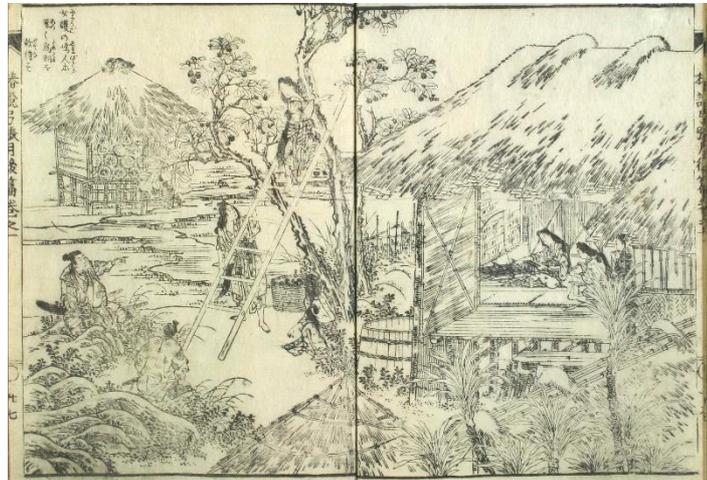
保元の乱に敗れた為朝は、伊豆大島に流罪され、そこで伊豆・工藤茂光の娘・鯨江を娶る。伊豆の島々歴覧中、「女護嶋、鬼が嶋」の噂を聞くが、為朝は、中国伝説に見える「女国」と「鬼が嶋」を、受け入れがたい迷信であると一笑に付す。

「扶桑の東に女国あり」とは、唐山の書にも見えたれど、こはうけがたき説なり。まいて鬼の住といふ、嶋ありとはおぼつかなし。……彼島も実の鬼の住むにはあらで、往還の艱苦なると嶋人の醜悪なるによつて、鬼といふ名を負せたらん。(5.2)

この伝説の真偽を確かめようと船出した為朝は、到着した島の海岸で、女たちが「草履の尻を沖のかたへさし向て、いくつともなく竝置しかば」(5.3)という様子を見た。女護が島伝説(平賀源内『風流志道軒伝』で、「外より流(れ)来る人あれば、船より陸へ上る時、國中の女立(ち)出(で)て、磯辺に草履を直し置(き)、其草履をはきたる者と、夫婦となる法なれども」(5.4)と述べられていた伝説は、現実のものであったのかと驚く為朝であった。そこで出会った女性は、不思議にも流暢な日本語を話す。前夜、夢のなかに現れ、為朝の到来を告げた耆婆明神が、その女性に日本語を教えたのだという。



【図八】『椿説弓張月』後編十六回



【図九】『椿説弓張月』後編十七回

為朝は、女護が島の伝説に対して、「女護にようごの嶋人しまびとは、南風なんふうに吹れて孕むはらとかいへど、こは物こゝろしれるものゝ、いかで實まこ言こととは聞きべき（56）」と疑念を呈する。それに対して、島の女性（男の島の、東七郎三郎の長女にようこ）は、次のように説明する。

泰の始皇帝の命で、徐福は不老不死の妙薬を探し「男おの童はらば、女めの童はらば五百人（56）」をつれて船出したが、不老不死の妙薬の入

手に失敗し、帰国した場合に受ける後難を恐れ、日本・熊野に留まることに決めた。随行した女の童はこの島に、男の童は別の島に放置されたのが、これらの島の始まりである。言い伝えに、「妹背の契は締べども男女ひとつに住ときは、海神の崇ありと」<sup>(57)</sup> いわれているため、男女別に住んでいる。南風に吹かれて妊娠するという伝説は、一年に一度「南風の吹日あれば海神の御許あり」<sup>(58)</sup>として男島の男が女島に渡り、男児が生まれれば男島に送り、女児が生まれれば女島で養育することが、誤って伝えられたものであろう。これが、長女の説明である。そして為朝は、琉球を巡る物語群においてと同様、〈周縁〉の混沌・未開・野蛮を打倒し、中心の秩序・文化・技術をもたらすことで、支配・統治する為政者のようにふるまっているのである。

以上、『弓張月』における女護が島や鬼が島に関するエピソードには、幻想性や奇想性が満ちあふれていることを確認した。しかし、このエピソードに登場する者たちも、どこか滑稽さをたたえるなどしており、人々を脅威にさらす真の〈他者〉とは言えないだろう。なぜならば、この人々は為朝の文明化政策にみずから進んで従う者として表象されているからである。その意味で、この作品においても、馬琴の異国認識の利用に目立った新奇性はないと言つてよいのではないだろうか。

本論の第一部でも触れた物語伝統の側面から見ると、「女護が嶋」に関する話は『今昔物語』から始まっている。『今昔物語』の巻第五「僧迦羅五百商人、共至羅刹国語第一」では「男一人無し。只女ノ限有り。」<sup>(59)</sup>と、女人国の存在が示されている。『今昔物語』での女人国に関する説話はスリランカ建国説話と関連しているが、江戸小説における「女護が島」伝説は、日本を相対化させる国、もしくは日本の優越意識を高揚させるための異国として描かれている。女人国の伝統は受け継がれているが、物語の中で異なるバージョンとして再生産され、説話とは異質な物語としての女人国で展開されたのである。

## 第六節 おわりに

幕府の鎖国政策下にあっても、主に江戸在住の一部の知識人を中心に、人々は、国を憂える危機意識から、異国に関する

情報を入手しようとしていた。こうした人々が入手した異国情報の中には、やがて彼らの手によって書籍にまとめられるものもあり、禁書令に触れない範囲内で、一般庶民にも、異国情報に触れる機会が与えられるようになった。彼らが異国を経験する方法としては、その当時の風聞や書物によるしかなかった。書物としては、当時、中国から伝来してきた百科事典・類書、地理書を参考に記された『和漢三才図会』『華夷通商考』などがある。そこに描出された異国像には、中国、朝鮮、琉球、一部の東南アジアなどの日本周辺から、遠くヨーロッパまでが含まれている。そして、こうした実在の国々と、前近代的な空想や幻想とが入り混じっていた。ただし、こうした知識を利用した遍歴小説においては、現実の異国はおろか、幻想の異国からもその異国性が除去され、馴致され、包摂される傾向があった。平賀源内、遊谷子、そして馬琴の作品における「女護が島」表象、性に関わる表象は、特にそうであった。馬琴の作品を含め、江戸期の異国遍歴小説は、空想・幻想による荒唐無稽な異国が、あたかも見世物小屋の怪奇と珍奇に満ちた内部をのぞき見させるかのように描かれている。その意図は、未知の世界に関する好奇心を刺激するという目的であり、もっと卑俗な形では、性的零囲気を漂わせることで、読者の感性的欲望を満足させるという目的に集中するものであった。しかし、そうした欲望は最終的には終息していく。付言するならば、このような傾向が、馬琴の作品ひいては馬琴の、そして馬琴のような知識人の、現実に存在する異国に対する態度とどのような関係があるかについては、さらに検討を重ねる必要があるだろう。

【注】

- (1) 本論文の第二部第四章、第六節「江戸のアマゾン伝説」を参照されたい。
- (2) 野田寿雄「近世後期の異国遍歴小説」『國語國文研究』第三二号、北海道大学国文学会、一九六五年。板坂則子「戯作のファンタジー」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、一九七九年。小谷信行「和莊兵衛の系譜」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』鈴鹿工業高等専門学校、一九九六年。川村湊「馬琴の島——馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年。佐藤至子「試練としての異国遍歴」『日本文学』日本文学協会、二〇〇一年。風間誠史『和莊兵衛』覚書——世界の外へ』『相模国文』相模女子大学国文研究会、二〇〇二年。播本眞一「馬琴と異国」『江戸文学』ペリかん社、二〇〇五年。
- (3) 小谷信行は宇田敏彦『『大人国余聞』——平賀源内と『ガリヴァー旅行記』——』（『江戸文学』第一三三号、ペリかん社、一九九四年）に依拠しつつ、平賀源内がスウィフトの『ガリヴァー旅行記』を読み得た可能性があったと指摘している。小谷前掲論文、一〇一頁。
- (4) 板坂則子「戯作のファンタジー」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、一九七九年、七〇頁。
- (5) 野田寿雄、板坂則子、小谷信行、川村湊、佐藤至子、風間誠史、播本眞一論文参照。注2に同じ。
- (6) 寺島良安著、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会三』平凡社、一九八六年、三三一頁。
- (7) 同書、三三三頁。
- (8) 同書、三三三頁。
- (9) 武部健一『『山海経』研究の歴史とその現代的意義』『成城国文学』二三三卷、二〇〇七年。
- (10) 「荒海の繪、生きたる物どのおそろしげなる、手長足長をぞかきたる」。池田亀鑑（他）校注『枕草子・紫式部日記』

日本古典文学大系一九、岩波書店、一九五八年、五七頁。

(11) 武部前掲論文、八四頁。

(12) 風間前掲論文、三二頁。

(13) 「庶民らしい生活感覚から生まれてきた空想と教訓と風刺を持った寓意小説といえるわけだが、もう一つ、海外の「国」に対して、「わが国日本」もまたそれらの複数の国々の中の一つにしか過ぎないという、健康的な相対感覚がそこでは働いているように思われる」。川村湊「馬琴の島——馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年、一一五頁。

(14) 中村幸彦校注『風流志道軒伝』(『風来山人集』日本古典文学大系五五) 岩波書店、一九六一年、二一九頁。

(15) 野田前掲論文、二頁。

(16) 同書、一九一頁。

(17) 以下の『風流志道軒伝』引用では、中村幸彦校注『風流志道軒伝』(『風来山人集』日本古典文学大系五五、岩波書店、一九六一年)を用いた。

(18) 『風流志道軒伝』一七〇頁。

(19) 同書、一八二頁。

(20) 同書、一八八〜一八九頁。

(21) 同書、一九〇頁。

(22) 同書、一九二頁。

(23) 同書、一九四〜一九五頁。

(24) 同書、一九五頁。

(25) 同書、一九六〜一九七頁。

- (26) 同書、一九九頁。
- (27) 同書、一九九～二〇〇頁。
- (28) 同書、二〇〇頁。
- (29) 同書、二〇一頁。
- (30) 同書、二〇九頁。
- (31) 風間前掲論文、三二一～三三三頁。
- (32) 同論文、三二二頁。
- (33) 『風流志道軒伝』一九一頁。
- (34) 同書、一九二頁。
- (35) タイモン・スクリーチ著、高山宏訳『大江戸異人往来』丸善、一九九五年、一四頁。
- (36) 『風流志道軒伝』二二〇頁。
- (37) 同書、二二一頁。
- (38) 同書、二〇九頁。
- (39) 同書、二二二～二二三頁。
- (40) 同書、二二三～二四四頁。
- (41) 国民図書編『夢想兵衛胡蝶物語』近代日本文学大系第十六卷、国民図書、一九二七年、三四七頁。
- (42) 岡雅彦校訂『和莊兵衛』(『滑稽本集一』) 国書刊行会、一九九〇年、九頁。
- (43) 同書、二二二頁。
- (44) 同書、『和莊兵衛後編』八一頁。
- (45) 林美一編輯・校訂「風見草婦女節用」『未刊江戸文学』第三冊、未刊江戸文学会、一九五二年、二四頁。

- (46) 同書。
- (47) 清田啓子「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙(四) 庭莊子珍物茶話」『駒沢短期大学研究紀要』第六号、駒沢短期大学、一九七八、六七頁。
- (48) 同論文、六八頁。
- (49) タイモン・スクリーチ前掲書、一七〇頁。
- (50) 清田前掲論文、六九頁。
- (51) 同論文、六九頁。
- (52) 後藤丹治校注『椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、二四六頁。
- (53) 同書、二四九頁。
- (54) 『風流志道軒伝』二〇九頁。
- (55) 『椿説弓張月上』二五三頁。
- (56) 同書、二五四頁。
- (57) 同書、二五五頁。
- (58) 同書、二五五頁。
- (59) 今野達校注『今昔物語集一』(新日本古典文学大系三三三) 岩波書店、一九九九年、三八九頁。

## 第三章 『椿説弓張月』における異国・異界としての琉球表象

### 第一節 はじめに

本章では諸地域の様々な事物が描写される『椿説弓張月』の中から、特に琉球王朝興亡物語群に注目し、その物語群において、琉球がどのように表象されているのかを考察する。約言すれば、馬琴の琉球表象は、現実的な存在としての異国と、伝統的で民衆的でもある想像力が生んだ産物である異界との混淆物である。それゆえ、この作品を読んでも、当時の時代状況における異国としての琉球を、真正面から把握しようとする馬琴の意図などは読み取れない。しかし、見方を変えていえば、『椿説弓張月』の琉球表象における異国性と異界性との共存、そして前者から後者への反転という仕掛けは、作家・馬琴における異国認識が過渡期にあったことを示していると言えるかもしれない。本章は馬琴『椿説弓張月』における琉球表象のこうした二重性を提示し、その意義を論じることを目的とする。なお、この作品に関する先行研究は膨大であるが、本章における議論は、特に石川秀巳の研究に負うところが多いことを明記しておく。<sup>(1)</sup>

### 第二節 『椿説弓張月』における琉球表象の特徴

本節では、『椿説弓張月』における琉球表象が、前編では異国として表象されるものの、後・続編においては異界となることを確認する。そして、その移行をどのように意味付けることができるのかを論ずることとする。

まず、作品の概要の把握もかねて『椿説弓張月』を四つの物語群に分類しておく。<sup>(2)</sup>

① 『保元物語』（保元の乱（一一五六年））を素材とする和漢混淆文の軍記物語。鎌倉時代前期までに成立。作者不明

における為朝を中心とする「保元合戦物語（群）」。

②（①よりも時代的に遡る保元の乱以前）為朝の傍若無人なふるまいに業を煮やし、父為義によって本国筑紫の領地への帰国へ命ぜられ、そこに向かう間に様々な妨害に出会うことになる「筑紫下向物語群」。

③保元の乱が崇徳上皇側の敗北に終わり、為朝は伊豆国に配流されることになったが、伊豆国下向の途中、様々な困難に出会うことになる「伊豆配流物語群」。なお、この小物語群は、伊豆の大島・女護島・男の島（鬼が島）へと為朝が島渡りする物語群となっており、そこから、「島渡り物語群」と呼ぶこともできる。

④島渡りの延長線に加えられた、琉球王朝史（『中山世鑑』（一六五〇年）など）を原型とする「琉球王朝興亡物語群」。この物語は、まさに異国の前王朝危機の救済からその滅亡、そして為朝を始祖とする中興王朝を成立させるという、新たな琉球国王朝興亡物語になっている。

本章で特に注目するのは、④の「琉球王朝興亡物語群」における異界表象である。すなわち、悪僧矇雲国師とその悪の一党が、琉球王朝や王朝の救援に赴く為朝らと戦う、闘争の物語群にともなう表象である。

まず『椿説弓張月』における異国としての琉球表象について、当該の一節を確認しよう。為朝島渡り以前の琉球が、日本とはまったく異なる異国であるという認識は、『椿説弓張月』前編第二回に登場する琉球出身で、早くから為朝の従者となっている紀平治の語りのうちに見て取れる。そこには「漂流（民）」という言葉と、日本沿岸への「着岸」というモチーフが見えるためである。

それがしは紀平治きへいじといふ狩人かりひとなり。祖父は元琉球国もとりゅうきゅうこくの人なりしが、一年漂流ひとせひやうりゅうしてその船筑紫ふねつくしに着つしかば、遂つひに日本やまとに留とどりて、肥後ひごの菊池きくちに奉公ほうこうせり。（前編二回）<sup>③</sup>

この引用においては、「漂流」と「筑紫に着き」という語句に注目したい。紀平治の祖父は、琉球出身であったが、「漂流」し筑紫に着岸、日本に留まったという経緯が語られている。その祖父の孫である紀平治は、九州は肥後の菊池が出身地である。その意味では紀平治は日本人なのであるが、祖父の出自のために、必然的に〈異国〉性を身に帯びさせられている。「漂流」と「着岸」といったモチーフは、作品の後半、為朝の「琉球王朝興亡物語群」の書き出しにおいても用いられている。

船中の徒、悉く魚腹に葬らるゝとき、讚岐院の冥助、白鶴の應報ありし事、為朝ひとり漂流して、球洲へ岸船し給ふこと、寧王女、廉夫人の薄命、矇雲国師の幻術、佞臣利勇等が列伝は、拾遺六冊に著して、来載梨棗にのぼせんとす。  
(後編三十回) (4)

この引用において、「船中の徒悉く魚腹に葬らるゝとき」に「為朝ひとり漂流して、球洲へ岸船し給ふ」というのは、為朝一人が長い距離を「漂流」し、ようやく「球州」(琉球)に漂着したということであり、それは日本(本州)から遙か離れた異国としての琉球に漂着するということを意味する。要するに、日本列島と琉球の距離を強調し、後者の異国性を強調しているのである。この異国の地、琉球の地に上陸したのちの為朝は、その琉球王朝の「寧王女」を始めとする多くの廷臣たちと接触することで、琉球王朝の滅亡に巻き込まれ、苦難に満ちた物語が繰り広げられることとなる。

琉球が日本とは異なる異国として表象される箇所は、作品の他の部分にも読み取れる。例えば、琉球に新王朝を立ち上げるに当って、為朝が息子の舜天丸に次のように覚悟を促すところにも見てとれる。

これよりして天朝へ参らず、胡越の思ひをなすといへども、今こそあれ後々は、亦必也、日本の属国となりなん。……君父の仇を忘れずは、この国には留るべからず。しかればこゝに王たるものは、舜天丸の外に、誰かあらん。(残篇六)

「これよりして天朝へ参らず」とは、舜天丸が琉球の前王朝を継いで王位に就いて以後は、日本の「天朝」に参仕(服属)することなく、それによつて天朝と「胡越の思ひ」のうちにある、すなわち天朝の意に逆らっている、との意味である。つまり父の為朝はわが子に、全くの異国に住むという思いがあつても独自の王朝として存続させねばならない、と命じているのである。いうまでもなく、王朝は王権がその母胎であり、この為朝の命令は日本と別個の王権を保持せよと訴えているわけである。この命令の背後には、琉球の旧王朝がまさに異国であるという認識があつたのだろう。

ここで、琉球の異国性に関わる帰属の問題、そしてその問題と関連する開闢神話について触れるため、再び紀平治の語る身の上話に戻ろう。紀平治は琉球国を紹介する際、「琉球」という国名の由来をその開闢神話と結びつけて語っているが、それは琉球出身の彼の祖父が語つて聞かせたものである。

時に八町礫紀平治、班をすゝみ出、「それがしが祖父は元琉球国の人なるをもて、彼国の事をば、父もをさくしりて、生平にかたり聞せ候ひき。まづその概略を申候べし。琉球いにしへ流虬に作る。地界萬濤蜿蜒として虬の水中に浮むがごとし。よりにこれに名づく。或はいふ開国の主、虬を伐て両顆の珠を得たり。故に流虬又琉球と名つくるの異説あり。(前編五回)(6)

この開闢神話における琉球という国名と神話の結びつきは、「虬を伐て両顆の珠を得たり」という龍蛇(「虬」は海中に棲息する龍のこと)信仰にもとづく。これによつて、琉球神話が日本の天皇系の日向神話と全く異なることがわかる。こうして馬琴は、琉球が異国であることを読者にあらかじめ知らせているわけである。

以上略述してきたように、馬琴が琉球を異国として捉えたとすれば、その異国表象はどのようなものであつたのか。次に、

それをたどっていくことにしよう。

まず、紀平治が為朝に教えた琉球語について考えてみよう。『椿説弓張月』に記された琉球語については、二つの叙述が注目される。その一つは、為朝が紀平治から琉球語を学ぶ場面である。

その言語日本に似て更に異なり。日をおでたといふ。月をおつきかなしという。仏をほとけかなし、神をかめかなし、水をおへい、火をおまつ、酒をおさけ、飯をめし、男をおけが、女をおいなご、父をせうまい、母をあんまめ、兄をすいぎ、弟をおつとう、刀剣をほうてう、衣服をいぶくといふ。その餘は枚挙に遑あらず。(前編五回) (7)

為朝は日本語と「似て更に異なり」と称される琉球語、日本語と似ていても異なる例が「枚挙に遑あらず」である琉球語を学んでいる。異国である琉球に渡る以上、その言語である琉球語を学ばねばならないのは当然である。琉球という異国の人々について知るためには、彼らがすべて琉球語によって統合されているからこそ、為政者はその言葉を学ばねばならない、という前提がここに垣間見える。

いまひとつの例としては、後編・続編の琉球に新王朝を樹立した為朝の息男舜天王の治績として、「舜天王の徳、三十六嶋に淳化し、民間にも母字を習ひて、日用の書記に便利あり。国に学校を置いて、和漢の文章に乏しからず」(8)と、琉球国における学校制度の創設と、そこにおいて「和漢の文章」が教育されていることが挙げられる。このエピソードからは、琉球という異国を「中華」の国たる日本に帰属させようという、王の政策が明白である。

この同化政策には二つの背景がある。一つ目の背景として、同化政策以前において、そもそも琉球は異国であったことを思い出しておきたい。二つ目の背景としては、この舜天王の為政には、琉球の運命にかかわるような大きな問題が潜んでいたということである。その問題とは、琉球語と日本語の同一論である。例えば、『中山伝信録』巻六にも、「琉球字母四十有七。名伊魯花。自舜天為王時始制。或云即日本字母」【現代語訳】琉球の字母は四七である。名はいろはである。舜天王の

時代に、始めて制定された。或いは曰く、即ち日本の字母である。(9)とあるように、この種の言語同一論は決して珍しいものではなかった。(10)舜天王は、琉球が中国の属国とされるか、あるいは日本の属国とされるかを考える際に、特に言語政策に注目し、「和漢の文章(言語)」を教育することで琉球の日本への帰属を考えていたのではないだろうか。そしてこれは、琉球が、そのような教育をすべき異国だと考えられていたということの意味するだろう。

次に、馬琴が琉球の官僚組織と地方行政制度(按司制度)に言及しているところを見てみよう。(11)

その都みやこを那覇なはと喚よび、王城わうじょうを奉神殿ほうしんぜんと号ごうし、漏刻門ろうこくもん、瑞泉池ずいせんち、中山牌坊等ちゅうざんぱうたうの諸関門しよかんもんありて、乾いぬひの山やまを八頭山ややまといへり。  
又東ひがしに天界等寺てんかいとうじ、西にしに圓覚等寺えんがくとうじあり。迎恩亭けうおんていは花瓶嶼くわびんしよの北きたにあり。……その国王こくおうを中山ちゅうざんと号ごうし、春宮とうぐうを中城なかくすくと稱せうし、  
后きさきを中婦君ちゅうふぎみと稱せうし、王子わうじをわんしと稱せうし、武士ぶしを親雲上はいきんと稱せうし、その次なるものを筑登ちくとうと稱せうす。又官名くわんみやうに按司親方等あんじおやかたとうの数品すひんあり。(前編五回)(12)

この引用に見られる琉球(那覇)表象に注意すると、前景化されているのは、王の居住する「王城」の境域(≡境界)を定めている四至に四大寺院が配置されているという叙述である。その延長上に領土が拡大されて、「関所」の存在が記され、琉球国の境界の画定が求められている。境界がいかに重要視されていたかがうかがえる。次には王朝の王族の尊称・身分制度が記され(身分制度がそのまま官僚機構を構成する)、その次に地方行政組織(按司制度)が記されている。これらの引用から読み取れる事項をまとめて、琉球国の国家制度を略記しておく。

①中国とも日本とも異なる独自の王朝国家を掌握する王と、彼が支配する領土が境界によって画定されている。王国には独自の開闢神話があり、その神話に根源性を有する「玉璽」が存在している。そしてそれが、王の権力の根拠になるとともに、その王の権力を行使する中央と地方の行政機構が整備されている。

②「王城」の境域の四至が設定されて、王権そのものを可視化している。その可視化が延伸されて「関所」が設定され、王権の及ぶ国境が確定されている。

③琉球に固有の言語が用いられ、言語が国民育成と国民統合を実現すると考えられている。そのため、言語教育とその制度（学校）が重視されている。したがって、その言語を使う者を「琉球人」と呼び、日本人とは区別している。ただし、舜天王はその言語教育に「和漢の文章」を採用させていることが物語のテーマの一つとなる。

④琉球にしか産出しない産物の取引に当って、日本と琉球の間に対等な取引が成立している。このことは、さきの「中華伝国の玉璽にひとし」とされる「玉璽」が日本・中国と同じようなレガリヤとなっているという言及からも、中華漢字文明圏において、琉球が日本・中国と対等な「異国」として存在しているということを示唆している。

このまとめを見るとわかることだが、馬琴の表象は以下のような意味において重要である。一つは、琉球においては官僚・行政機構が整備され、同一言語（琉球語）を使う人々がいること、そしてそのような人々を自覚的に育成・統合するために、学校教育の強化がなされていることが強調されているという点である。つまり、馬琴は日本と琉球の同一論などに触れつつも、琉球を、官僚・行政・教育組織を備えた、東アジア地域における日本や中国と同等の「国家」として表象しようとしているのである。また馬琴は、琉球がその国家表象の焦点に琉球独自の神話・玉璽・王系を持ち、日本や中国とは別個の王権を有していることも強調している。これは中華漢字文明圏において、日本や中国と差異をもつ別個の国家であることを示唆する。このような意味において、琉球は中国や日本のような確固たる異国として表象されているのである。

### 第三節 琉球表象における異国と異界

本節では、この作品、特に④「琉球王朝興亡物語群」における悪人である朦雲に注目し、異国として表象された琉球をめ

ぐる物語群に朦雲に代表されるような異界が、どのように絡み合っているかについて考察する。(13)

本章第二節で提示した『椿説弓張月』の物語群は①「保元合戦物語(群)」、②「筑紫下向物語群」、③「伊豆配流物語群」(「島渡り物語群」)、④「琉球王朝興亡物語群」の四つである。②の「筑紫下向物語群」と③の「伊豆配流物語群」においても、「異国」表象のみならず「異界」表象が見られる。二つの物語群には、異界の怪物との遭遇という主題がある。例えば、②の「筑紫下向物語群」では、筑紫の生国に下向する為朝は、その地への旅の途次、様々な地方の在地を通過する。その場所を確定することもできない異界から出現し、それぞれの土地を混乱に陥れていた怪物を退治・平定してゆく。旅路の途中で、為朝が出会う異界の怪物は、次のような者たちである。

狼おいかみの首くび軀むくろをはなれ、楠くすの梢こすゑに閃ひらめき登のぼると見えつるが、鮮あざ血ちさと溜しりつゝ、頂いただきの上うへより落おつる物ありて、大地だいちに撞たと響ひびしかば、主しゅ従じゆふたゝび驚おどろき怪あやしみ、押おし明あけがたの星ほしの光ひかりに、眼まなこを定さめて見み給たまへば、太ふとはこの楠くすの幹みきにも劣おとろまじく、長ながいくばくとも量はかりがたき、蟒蛇うわばみの吭のどへ狼おいかみの首くび嚼かつきつ。(都みやこから筑紫へ移動中、前編三回)(14)

白縫しろぬひの年とし來ころ畜かひ狎なれて、ふかく愛めづる一いつ隻ひきの猴さるありけり。この猴さるよく人ことの言こと語ばを解き得わけ、立たち舞まふことをも做なし得えたるが、年としを經へてその形かたちやゝ大おほきうなりて、今は八やちツ九こツの童わらわには勝まさるとも、劣おとるべうは見みえざりし。(筑紫、前編四回)(15)

出現する怪物は、蛇や猿のリアリズムとは異なり、醜悪さと巨大化によってデフォルメされた「蟒蛇」であり、「悪猿」である。注目してよいのは、それがグロテスクであり、さらには、そのような体躯が巨大化されデフォルメされているという点である。

③の「伊豆配流物語群」においても、グロテスクな描写が注目される。その一例を挙げてみると、ここで出現する怪異な存在に、当時、猖獗をきわめていた「痘瘡」(梅毒のこと)を擬人化したかと思われる異人(「翁」)がある。為朝が配流先に

下向する途中、琵琶湖に浮かぶ島にさしかかったところで出会ったのが、この「翁」であった。この「翁」が島民を長年にわたって苦しめてきたというとき、馬琴の時代の読者は、当時この「痘瘡」が流行していたことを思い出すことになったであろう。梅毒にかかった患者の異相のイメージを、この「翁」のグロテスクさと重ね合わせざるをえなかったのである。

為朝ためともかの翁おきなを佶きとにらまへて、「汝なんぢは是これ 水みづの怪敷くわいかち地の怪敷くわいかち。とく退出まかよ」と叱り給へば、翁おきな大いに怕おそれて、俵たはらの上に  
拝伏はいふくし、「僕やつがれは魍魅りみ罔もうりやう両たぐひの属たぐひにあらず。すなわち世よにいふ痘鬼もがさのかみ是これなり。……往古いにしへより痘瘡もがさをしらぬ嶋人しまひとの、俄頃にはかに  
これを病やむときは、非命ひめいの死しをなすもの多おほかるべし。汝等なんぢらふたゝびこの嶋しまへ来ることなかれ。さらは送りて得えさせん」と  
て、聽やがて船ふねに引ひのぼし、遂つひに大嶋おほしまへ将いて帰り、彼処かしこより又伊豆いづの国府こふへ送り給ひしとぞ。(伊豆の八丈島、後編十九回)

(16)

この「翁」、すなわち「痘瘡(神)」を為朝が追い払ったため、八丈島はこの病に冒されることがなかったといの後日談が続く。このことを踏まえて、川村湊は、「為朝島巡りの途中における単なるエピソードにし過ぎないわけだが、彼が痘瘡神を睨み帰すだけの験力のある武将であったこと、現実の政治的力だけではなく、宗教的、呪術的な能力をも兼ねそなえた(島の王)であったことが、ここでは告げ知らされているのである」(17)と述べている。これは「痘瘡」の翁が、外部から「島」に襲来して来る怪異であることを踏まえて、それを屈服させた為朝を「宗教的・呪術的な能力」を持つ超越性を持つ「王」として、物語を神話的宗教的話型から捉えたものである。つまり、馬琴は「現実の政治的力」を持つとともに、ある種の異界性とも言うべき呪術的能力も備えた存在としての為朝を表現しようとしたわけである。

さて、②と③の物語群においては、為朝の活躍の舞台は日本(本朝)内部に属する地方や周辺地域の、そして異界と縁の深い地域としての島々であった。次の琉球は、すでに確認したように異国として表象されている。ただし馬琴は、異国の地である琉球をめぐる④の「琉球王朝興亡物語群」においても、為朝を異界と関係づけることを忘れてはいない。まずは、こ

の物語群の筋立をまとめておく。

① 矇雲の出現―琉球国は、天孫氏王朝の支配下にあつて穏やかな日々を送っていた。ところが、その周縁の山中の墓地に打ち捨てられていた「(石)櫃」を通じて、宝を求める墓暴きがなされる。一人の異人が出現した。異人は異界から琉球国に侵入してきたのだ。矇雲は、そのまま山中にとどまつて仙人としての修行を積み、妖術のわざをみがく。

② 矇雲王朝の宮廷に入り込む―妖術をもって琉球王に取り入り、「国師」という尊称を得て宮廷の実権を握る。やがて、矇雲は秘めていた神器を王族や廷臣らに示し、みずからを王朝の正統と公言し、国王と王権をめぐつて争う。

③ 為朝、琉球国に漂着―寧王女と出逢い、王朝の危機を訴えられて救援を乞われる。為朝、宮廷に赴き矇雲国師に挑むが、矇雲や彼の配下の妖術に翻弄されて宮廷を脱出する。そのとき、寧王女はそれでも矇雲国師に抵抗するために、源家重代の宝珠を譲ってくれるようにと要求する。

④ 矇雲国師、王朝を滅ぼす―矇雲との闘争に敗れた為朝が琉球国を退去すると、矇雲国師は国王一族を琉球から追放し、みずから王位に就く。僭称王朝の樹立だが、矇雲は琉球の人民に圧政を施すだけであつたために、悪王として人民の恨みを買っていた。

⑤ 為朝、再度琉球国に来着―寧王女との約束通り、為朝は琉球へと再帰した。迎え撃つ悪王矇雲の妖術を防ぎながら死闘を演じたあげく、矇雲を捕え、その罪を裁いて、旧王朝の神器を奪い返して死刑に処する。寧王女に託けて置いた宝珠をもって、為朝は息子舜天丸を王位に就け、琉球新王朝を打ち立てる。

このように要約された筋立から馬琴の琉球表象の側面を挙げるとするなら、馬琴の世界観は、第二部第五章で検討する只野真葛の世界観におけるような諸国間の交易がもたらす普遍的認識を基にした世界観ではなく、〈現世／異界〉の二次元的な宗教的世界観を枠組みとし、その中に、異国としての琉球を組み込むというものだったと言えるかもしれない。

それでは、この琉球王朝興亡物語群における〈悪人〉矇雲の出現のありさまを見てみよう。

かくて君臣、やうやくに神を鎮め、睛を定めて、碎たる櫃を見るに、一朵の業雲、靉靆として立昇り、やがて地上をはなるゝと見えし。奇なるかな。隆準骨立たる異人、香染の法衣の、腐断離たるを被て、手には鍔たる金鈴を握もち、底石の上に結跏趺坐せり。(続編三六回) (18)

この引用において、「やうやくに神を鎮め」た場所は琉球国の境界をなす、いわば周縁の山嶺である。ここでは琉球王が、中国の皇帝と同じく、天神を祭っていたのである。そこは、地図的にも琉球国の境界だが、また宗教的にいっても、現世と異界との境界である。その聖なる地に置かれていた「(石)櫃」が碎け散って、「異人」が出現したということは、その出自が異界であることを暗示する。ただ、そこに集まっていた「君臣」には、その「異人」が神か怪異かの区別はついていない。それは「異人」は僧服を身にまとい、碎け散った「櫃」の「底石」の上に結跏趺座した姿で現われたとあるからである。このような矇雲の出現の仕方は、馬琴が琉球の世界を、人間世界／異界という二次元的世界観のもとに表象しようとしていることを示唆する。矇雲が出現する「(石)櫃」も、墓穴との結びつきを持つことで、いわば死を通路として矇雲が地獄から現われ出たという読みも可能である。こうした異人であるがゆえに、矇雲はその容貌と身体が異形性に満ちている。

その骨相、眉白く唇赤く、髻は黄にして面黒く、爪青くして指に半し、肉脱ては、雪の松の骨を見し、膚垢つきては、雨の竹の節も撓めり。人かと思れば人にもあらず、鬼と思れば鬼にもあらず。衆人ますく怪みて、こはそもいかに、と斗りに、うち覩てぞ居たりける。時に異人欠伸して、閉たる眼を潤と開くに、瞳の光人を射て、左手右手を見かへりつゝ、……。 (続編三六回) (19)

この醜悪なる異形表象の大きな特徴を言えば、なんといっても可視的描写のグロテスクさである。この引用でも、馬琴は矇雲の骨格・眉・唇・髪・爪・肌・眼光にまで及んで詳細を尽くしている。このように、矇雲は異形を呈しているがゆえに、「人にもあらず」「鬼にもあらず」という、生と死の境界にあるグロテスクな怪異として描かれることになる。それだけ強力な妖術を持っているということにもなる。

矇雲に対して、為朝はどうだろうか。彼も琉球王朝の側から見ると、海の彼方の異界から訪れて来た異人であるのかもしれない。『中山世鑑』の「中山王系」における海を渡って来た舜天王の父であるという為朝像は、そのような異人観による。このような為朝⇨異人観を受け入れながらも、馬琴の『椿説弓張月』は、為朝に新しい造型を与えている。約言すれば、地方を治める受領的為政者像としての為朝像である。例えば、八丈島に配流された為朝でいえば、配流の後しばらくすると、為朝は積極的に島々に渡って行く。それらの島々は、日本にとつての〈中心〉に対する〈周縁〉であつて、混沌と野蛮、そして暴力が支配する未開の地であつた。そうした地であつた島々に渡つた為朝は、征服し支配して、秩序を施し勸農殖産をおこなつて文明化する。その行動は、あたかも中心から派遣された受領（国守）、あるいは目代のごとくであつた。このような為政者像が、伝統的かつ民衆的な異人⇨英雄の為朝像に重ねられている。為朝は異界からやつてきた異形の異人でもあり、なおかつ琉球を独立の異国として成立せしめ（同時に日本に同化せしめ）るような英雄なのである。

このことをふまえると、異人であり英雄である存在が倒されると、それなりに秩序のある異国と奇怪な存在が跋扈する異界のバランスが崩れ、異界の〈悪〉の混乱が国を覆うことになることは納得できる。実際、矇雲が王朝を倒し国の支配者を握つた瞬間、その世界は異界へと反転し、悪の混乱が国を覆うことになるのである。馬琴の異国情報収集熱や考証熱にその起源の一つをもつ現実的存在としての異国は、最終的には矇雲の支配する異界に飲み込まれてゆくわけである。<sup>(20)</sup>

#### 第四節 曲亭馬琴の琉球表象とその認識

馬琴が琉球を本来「異国」だったと認知した根拠には二つあった。一つは日本と変わらない王朝型家政官僚形態を持っていること（同一性）、いま一つは日本とは言語と産物、それに王権が異なった異国であること（差異）、この二つである。前者についてはすでに前節で論じてきたところであって、王権の所在する境域が設定され、その延長上に国境が設定されていることが「異国」を表象する焦点であった。その領土の内部において、独自の王権とそれを支える官僚機構・地方行政機構（按司制度）が存在し、独自の言語文化と学校教育が整備され、その風土に特有な物産の生産と交易がおこなわれているという認識が『椿説弓張月』の琉球表象に見られる。その表象によって、馬琴が琉球を「異国」とみなしていたことがうかがえる。日本と比較するかたちで得られた家政官僚形態の〈同一性〉ということとはともかく、馬琴にあつて〈差異〉とはどのようなものとして認識されていたのか。そのような問題に対して、馬琴は日本と琉球の〈差異〉を、王権の構成要素の違いのうちに集中的に認識していた。その代表例が開闢神話の違いであり、「伝国の玉璽」の違いという王権のレガリヤの差異だったのである。

琉球の前王朝の「世系」は「天孫氏」であつて、前王朝の滅亡したあと樹立された王朝を「日本人皇後裔」といつているところからすると、前王朝の世系は日本とは無関係であつたに違いあるまい。それに応ずるかのように、馬琴は琉球人紀平治に開闢神話を語らせているのだが、それは「琉球」という国名の始源を語る竜蛇系の神話といつてよい。そこでは開国の英雄王が悪竜を退治し、その腮から「二類の珠」（「両顆の珠」）を得て即位したと語られている。これを日本の記紀神話と比較するならば、天皇家の系譜を語る日向神話というよりも、その始祖英雄に倒される出雲系の八岐大蛇神話と類似する。馬琴はその神話に日本皇室の天皇氏との差異を認めていたと思われる。この神話では、その文脈の延長上に「伝国の玉璽」として悪竜の腮から得た「二類の珠」を王権のレガリヤと認める紀平治の語りが記される。馬琴は国学的知識から、これが日本皇室の玉璽（三種の神器）とは異なることを認めていた。そのことは、彼が琉球の王権のレガリヤを「中華伝国の玉璽にひとし」といつているところからも傍証される。「中華」とは実在の中国帝国の尊称ではなく、高度に洗練された漢字文化を担う文明の尊称へと抽象化した。王権の交替とはまさしくレガリヤの交替だったのである。

それでは馬琴はどうして同一性と差異の概念を知ったのか。それはおそらく、地図的世界に分布する国々の観察と、蝦夷地をめぐるロシアとの外交関係情報に拠ったものと思われる。後者のロシア情報に対する対他的認識からは、さらに主権国家と領土・境界という概念を知ったと思われる。日本を「皇御国」という統一的国家像で理解できたのは、これもロシア情報をみずからに照射する対他的認識の結果であろう。つまり馬琴は、地図的世界観から同一性の論理を、それに対してそれぞれの君主の存在から独自の王権Ⅱ主権が存在するという差異の認識を得たものと考えられる。

江戸後期に入ると、異国との接触と受容によって知識人層の間にも異国への憧憬と畏怖が生まれるようになり、そのアンビバレントな感情が異国に対する知識欲を刺激した。そしてそれを満たすための需要、すなわち異国関連情報の書物や異国の奇異なるモノへの関心が活性化した。馬琴の異国認識も、一方でアンビバレントな感情をかかえながらも、いま一方でまだ伝統的な華夷思想を捨て切れなかった。つまり馬琴は、国家というものを同一性と差異とで認識することができたのだが、その世界観は従来の華夷的世界観による構造的差別に固執していた。「紅毛及諸蛮」を「夷狄」と見下す意識から、彼は脱け出すことができなかったのである。

その反映が、戯作者としての馬琴の「異国」表象に見てとれる。馬琴は、想像の物語世界において異国（「異界」「異郷」）としての琉球を描き出したのだが、同時に彼は、読者の異国への関心を惹きつける必要から、彼らの心の内奥にある異界（異郷）概念に応ずる形でしかそれを描き出せないことも理解していた。それゆえ、想像の物語世界とは伝統的異郷概念であって、人間世界に対する異界という神話的な二元的世界観は、あたかも中華に対する夷狄に類比できるものであった。馬琴にとって「異界」とは、読本世界に出現する悪の化身ともいうべき怪物・怪異が本来棲息しているところであり、かれらはそこから逸脱して人間世界に侵入し、混沌・暴力・暗黒・悪をもたらそうとする。その野蛮性こそ、「異界」の本質として「中華」Ⅱ文明に対峙するからである。

馬琴が『椿説弓張月』に表象した琉球は、「日本人皇」とは異なる王朝に支配されていた往時にあつて、その形態に関してはまさしく「異国」であった。ところが、「異界」から現われて出た矇雲国師が人間世界の叛逆者として前王朝を滅亡させた

とき、琉球は「異界」へと反転したのである。琉球は暴力と悪に支配され、混沌で覆われてしまった。そのような状況に陥った琉球に渡ってきたのが英雄為朝であった。為朝が息子舜天や忠実な従者たちと力を合わせ、矇雲国師を倒して新王朝を打ち立てたとき、琉球はふたたび「異国」としての秩序を回復することになる。

『椿説弓張月』の物語がそこで終わっていけば、異国の新王朝樹立に日本の武士が協力したということにもなる。確かに、馬琴の異国認識からすれば、琉球の前王朝はまったくの「異国」として認識されていたからである。しかし『中山世鑑』など琉球関連書物には、日本から渡った為朝が琉球の有力な按司から国王に奉載され、舜天王はその息子だったという伝説が記されていた。その伝説は、琉球を支配する日本人が渡って来て、支配の正当性を認められて王位に就いた、したがって琉球の領土日本に帰属すべきものだという領土支配を志向するものであった。

馬琴が蓄積した異国認識が馬琴の思想を開明的にしたわけではなかった。麻生磯次<sup>(21)</sup>や真山青果<sup>(22)</sup>が指摘しているように、馬琴が開国思想に反対の立場を取っていたということである。馬琴は本来、守旧的な考えの持ち主であり、いわばお上の政道からはずれることを惧れていた。馬琴が琉球を、現実には薩摩藩の支配下に従属していたにもかかわらず、もし完全な異国として描いたとすれば、それは幕藩制の秩序に反することになる。むしろ、馬琴は政道に則ったかたちで、琉球を物語の発端において異国として描きながら、ストーリーの進展とともに、その支配権が日本にあることを正当化する領土支配の物語として構想したのである。

では、『椿説弓張月』に描かれた琉球支配の論理はどのようなものだったのか。それを理解するには、続篇の「拾遺考證」が参考になる。それによると、馬琴は琉球の始祖が「阿摩美久」であることに注目している。その名は『中山伝信録』、『中山世鑑』などの琉球の開国神話に語られているのだが、馬琴はその名を介し、日本神話に結びつけていく論理を用いている。

又神代紀に、「海宮、海郷」とあるは、琉球の事なるべきよし、琉球談に注せられたり。……所謂海宮は、琉球の事也、  
といはんも、亦誣たりとせず。彦火火出見尊、海神の女、豊玉姫を娶て、海宮に留り住給ふこと三年、そのうち豊玉姫、

女弟玉依姫を將、風波を冒して海邊に到来、方産に、化して龍となる條下を考合するに、傳信録に、中山世鑑を引て、琉球開闢の祖を、阿摩美久といふ。三男二女を生む。長女を君々、二女を祝々といふ。一人は天神となり、一人は海神となる、といふを脗合するときは、神代紀にいふ海神は、阿摩美久、豊玉姫は君々、玉依姫は祝々なりといはんも、その義遠からず。(続篇の拾遺考證)(23)

この論理は、「異国」を支配するに当たりその王朝の開国神話を日本の天皇系の神話と結びつけ、それによって王権の根拠を天皇系譜に組み込むという操作である。馬琴は、その操作に支配の正当性を見出そうとしたといえるだろう。彼はこの論理を王権のレガリヤにも及ぼしている。琉球は最終的に、為朝の息子である舜天の支配下に置かれることになるというだけで物語が結ばれるのではない。とりわけ源氏家の新王朝樹立が宣言されるところに注目すべきだろう。その際に、琉球における「中華伝国の玉璽にひとし」とまで言われたレガリヤである二つの珠さえ、舜天王によって新しく替えられているのである。このことによつて今までの琉球王国の国家的独自性は破綻する。二つの珠は、日本から伝えられてきた「真鶴の宝剣」と「彼金の牌」という新たな「伝国の神器」に取り替えられてしまうのである。

さる程に舜天王は、諸の功臣を會へて宣ふやう、「夫虬龍は國の寇也。しかるにその珠をもて、璽とせんことしかるべからず。琉と球との兩顆の珠は、玉城の東岳に瘞て、その余殃を鎮め、今より真鶴の寶劍と、彼金の牌をもて、傳國の神器とし、永く子孫に遺さん、と思ふはいかに」と問たまへば、「衆皆しかるべし。」と回答しかば、……。 (残編六十八回)(24)

その「彼金の牌」には「康平六年三月甲酉源朝臣義家放焉」(前編三回)と書かれており、これが源氏家重代の宝器であったことがわかる。この宝器は源氏家を介して、琉球王朝は日本国の属領となることが暗示されるのである。

琉球の王朝が日本の王朝（皇族）から枝分かれした庶流であるという認識は、日琉同先祖論による日本の琉球支配の正当化に見るとき日本人の領土支配の意欲を、その背後に秘めているのではないか。それについて渡辺匡一は「舜天王統、源氏の系譜こそ、琉球の正当な統治者なのであった。……『椿説弓張月』の最終回において、舜天は生まれ変わって足利尊氏となり、日本を治めることになる。琉球王国の最初の人王は、なんと、日本の将軍だったのだ。『椿説弓張月』の空前の大ヒットは、琉球王国における源氏支配の正当性を、広く日本国内に浸透させる結果となった。琉球王国は、日本の属国に他ならないのである」<sup>(25)</sup>と、源氏による琉球支配の正当性を述べるところに馬琴の意図があったことを指摘している。しかし本章ではそこでとどめるではなく、むしろ国家が国家を支配するとはどのようなことなのか、その論理あるいは戦略に関心を抱く。そのとき想起されるのが、馬琴が国家の独自性を王権のレガリヤに求めていたということである。ただ、これまで取り上げてきた神話とレガリヤに見るように、王統の血筋の論理は馬琴の意図を超えている。したがって馬琴は、『椿説弓張月』のプロットに対し、王朝の交替という史実をさらに拡大して、異王朝を日本の皇室と一体化させるという支配論理を結びつけようとはしていないことに注意すべきであろう。

これに関して播本眞一は、『椿説弓張月』において、外国の脅威を実感する馬琴は日本の辺境に目を向け、白石の「南倭思想」によりつつ、宣長の皇国史観に従って儒教の革命を否定し、血脈の伝統による支配の正統性を語っていると思われる」と論じ、「宣長の皇国史観」によるところが大きいと指摘している。本章においてはすでに、馬琴の琉球支配の正当化は確かに白石の「南倭思想」による点が大きいということは認めている。ただ、国学系の用語にもとづく「皇国史観」によるという結論については再考する余地がある。宣長の学問に関して、馬琴は国学に固有の「膨張の論理」は認めても、その漢学否定の論理には、かなり批判的な姿勢を持っていた。馬琴は「皇御国」という用語を用いることで、理論的に天皇が日本の王権の正統な所持者であることを認めている。白石の影響で馬琴が南倭思想の影響を受けていたとしても、それは琉球を「異国」とは認めず、日本の領土と認めるという考えであった。一方馬琴が琉球を「日本の属国」とするのは、あくまでも琉球の開国神話とレガリヤを日本の記紀神話および日本の英雄の事蹟の内に組み入れることによる。馬琴はそのようなプロット

のうちに、白石の「南倭思想」を取り入れようとしたものと思われるのである。

## 第五節 おわりに

以上のように『椿説弓張月』においては、異界・異国表象が絡み合っている。「筑紫下向物語群」と「伊豆配流物語群」（「島渡り物語群」）の物語群において、為朝は日本国内の諸地域（特に島々）をめぐるわけだが、そこは現実の場所である場合も架空の場所である場合も、異形の存在に満ちている。いわば異界表象が、前半部分を支えているのである。「琉球王朝興亡物語群」の物語群を中心とする後半の琉球をめぐるエピソードにおいては、この琉球が日本から距離の離れた、独自の言語や制度を持つ異国であることが詳細に語られるものの、朦朧が王朝を倒し、国の支配者を握るエピソードにおける怪物的表現が物語を覆ってゆく。つまり『椿説弓張月』は、琉球を、虚構がないまぜになってはいるものの、現実の独自の存在である異国として表象してはいない。むしろ重要なポイントにおいて、琉球が完全にこの世ではない異界と結びつく物語になっているのである。つまり馬琴は、情報源が限られているため想像力に頼るしかない異国表象ではなく、そうした想像力が必要とされない伝統的な異形の者のあふれる異界表象として、琉球を描いたのである。

【注】

- (1) 石川秀巳「琉球争乱の構図（下）——『椿説弓張月』試論——」『山形女子短期大学紀要』第一七集、一九八五年。なお、本節においては以下の先行研究も参照した。石川秀巳「琉球争乱の構図（上）——『椿説弓張月』試論——」『山形女子短期大学紀要』第一五集、一九八二年。大高洋司「『椿説弓張月』論——構想と論証——」『読本研究』六上、一九九二年。「馬琴の島——馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集』二二 馬琴『若草書房、二〇〇〇年。風間誠史『椿説弓張月』の「琉球」『相模国文』第三三号、相模女子大学国文研究会、二〇〇六年。
- (2) 本節では『椿説弓張月』を四つの物語群にまとめたが、岩波古典文学大系ではこの作品を二部構成（一部日本、二部琉球）に区別している。また、長福恵理子（『椿説弓張月』論——三部構成論を中心に——『国語研究』〔愛知教育大学大学院〕第七号、一九九九年）は、一「保元の乱編」、二「伊豆、大島編」、三「琉球騒乱編」として区別している。
- (3) 後藤丹治校注『椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、八八頁。
- (4) 同書、四一〇頁。
- (5) 後藤丹治校注『椿説弓張月下』岩波書店、一九六二年、四一六頁。
- (6) 『椿説弓張月上』一一二頁。
- (7) 同書、一二三頁。
- (8) 『椿説弓張月下』四二四頁。
- (9) 長澤規矩也解題『和刻本漢籍随筆集』第十五集、汲古書院、一九七七年、七六頁。
- (10) 川村湊は、この作品の（本節でいうところの）「琉球王朝興亡物語群」に、「遙か後の時代の日本——琉球同祖、同一文化論の早い先蹤」を読み取ろうとしている。（川村前掲論文、一二九頁）
- (11) 赤嶺守『琉球王国』講談社、二〇〇四年、六一〜六二頁。

(12) 『椿説弓張月上』 一一一～一二二頁。

(13) 矇雲の異界性については、特に石川前掲論文「琉球争乱の構図(下)」の一二二頁以下に詳しい議論がある(ただし石川は異界という言葉は使っていない)。例えば、「矇雲出現に至る琉球争乱前史は、利勇らの陰謀という現実的な力と虬の靈の発する超自然的な力との絡みあいによって展開してきたと言える」(一二四頁)と述べている。

(14) 『椿説弓張月上』 九五頁。

(15) 『椿説弓張月上』 一〇四～一〇五頁。

(16) 『椿説弓張月上』 二七八～二八〇頁。

(17) 川村湊前掲論文、一一八～一一九頁。

(18) 『椿説弓張月下』 二三頁。

(19) 『椿説弓張月下』 二三頁。

(20) 石川前掲論文は次のように述べている。「矇雲はただ単に権力を奪取しようとするのではなかった。天孫氏のうち立てた琉球国の秩序を根本からくつがえし、原初の混沌状態へと引き戻そうとするのである。為朝の戦いとは、そうした混沌化を押しとどめるもの、琉球国、というよりは琉球世界そのものの存立に関わる、より原理的な闘争なのである」(一三五頁)。石川は現実世界とも無関係の異国性と矇雲に代表される異界性の「原理的な闘争」を強調している。

(21) 麻生磯次『滝沢馬琴』吉川弘文館、一九五九年、一七九頁。

(22) 真山青果『随筆滝沢馬琴』岩波書店、二〇〇〇年、一四四頁。

(23) 『椿説弓張月上』 四一六～四一七頁

(24) 『椿説弓張月下』 四二〇頁。

(25) 渡辺匡一「日琉往還——為朝話にみる差異化と差別化、同一化の歴史」『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、二〇

〇一年、六三頁。

## 第四章 異国と異界のはざままで——曲亭馬琴の考証随筆と『兎園小説』の異国・異界記録

### 第一節 はじめに

本第二部第一章においては、馬琴が白石の著作を通じて、西洋文明に関する情報に接したことを確認した。しかし、第二章と第三章では、彼がそうした情報を作品に十分に盛り込むのではなく、むしろ伝統的な異界表象を用いたり、現実的ではない幻想的な異国表象に傾注したりしたことを中心に論じた。ただし馬琴は、兎園会の活動や、その記録である『兎園小説』などの考証随筆においては、異国の文物に関する情報の集積を続けていた。この点は、先に触れたような知的自閉の姿勢とは矛盾するように見えるかもしれない。そしてその〈異国〉には、「女人国」のような神話領域に近接した異国もあれば、南アメリカやタタール地方といった現実の異国もあり、さらに北方から蝦夷を脅かしつつあったロシアも含まれていたのである。もともと、本第二部第三章で論じたことであるが、『椿説弓張月』に見られた巨大な悪が跋扈する〈異界〉の要素は、考証小説では影を潜め、『兎園小説』などの考証随筆にあつては、ふたつのレベルでの異国、すなわち不可思議なファンタジー・ワールドとしての異国と現実の異国とがいわば共存している。本章では馬琴の考証随筆と『兎園小説』を取り上げ、二種類の異国表象の絡み合いを分析することとする。

馬琴は数多くの読本や合巻を著したが、そうした文学作品以外にも、『羈旅漫録』（一八〇二年）『燕石雜志』（一八一一年）『烹雜の記』（一八一一年）『玄同放言』（一八一八年）『耽奇漫録』（一八二四年～一八二五年）『兎園小説』（一八二五年）『近世物之本江戸作者部類』（一八三四年）など、考証随筆、文人会での記録、評論集に至るまでの多岐にわたる執筆活動を行っていた。彼の文学作品については、白話小説との影響関係などに関して、多くの分析が行われているが、文学作品以外の執筆活動についてはそれほど研究が進んでいない。その中でも特に、馬琴の創作原理や作品構想を含め、彼の学問や思想への姿勢や見解を知るためには、考証という学問的作業を一貫して考察する必要がある。それゆえ、本第二部第一章では馬琴個

人の考証作業について述べたのであるが、本章ではグループによる共同作業も視野に入れ考えてみたい。そのグループの一つが、馬琴と山崎美成（一七九六年～一八五六年）らが発起人になって結成された兔園会であり、文政八年（一八二五）の一年間、毎月一回、全十二回の集会が行われた。その参加者たちの珍奇珍談をまとめたものが『兔園小説』で、その続編（外集・別集・余録・拾遺）とともに『日本随筆大成』<sup>(1)</sup>や『新燕石十種』<sup>(2)</sup>に収められている。

その内容は博物、奇談、凶録、異国記録など、当時の珍しい情報、風聞などが主であり、今日の情報誌、雑学事典のようなものに類似する。内容をよく見ると、メンバーが集まる目的は、面白く珍奇な話を収集して共有するのみならず、集めた話についてメンバーそれぞれの立場から解説や考証を行い、より正確な情報として共有することであったのがわかる。

本章では、従来主な研究対象とされていなかった『兔園小説』及び続編に収録された多様な話に注目し、特に、異国に関連する記録を中心にして、それら実在と虚構の事物が混在した異国表象について論ずる。特に、女性表象と「うつほ舟」の二つについては、詳細に論ずることにする。

## 第二節 馬琴の考証随筆と『耽奇漫録』

馬琴が考証随筆を著す以前、考証趣味の知的活動を展開する起点に位置しているのが、彼の京坂への旅行を記録した『羈旅漫録』（一八〇二年）である。この作品は、旅先の名物、奇談、方言、祭り、風俗などを記録したものである。その序文には、「遊歴中おのが目に珍らしとおもへるもの。悉これをしるす。古人の略伝○墓誌○珍書○風俗○異体○方言○妓院○雑劇○年中行事の異同○名所古迹○古人の墨跡等なり。序を得ず一覽せずといへども、その処を採得たる古墳等はしるせるもあり」<sup>(3)</sup>と書かれており、馬琴が旅行記の体裁を使いながら、「目に珍し」いモノや伝承の記録などに関心を向けていることがわかる。彼にとって、この旅は江戸という生活空間から逸脱した「外」の世界への最初の体験であった。馬琴は、

道中接した事物などに対し、自らの知識による簡略な註を付けている。

馬琴が、自らの考証趣味を本格的な考証作業として発展させるのは、収集した書物の分類を行い、「曲亭蔵書目録」を作成し、『白石叢書』の全巻の購入を終える文化五年（一八〇八）からであるといえる。大高洋司は馬琴の考証趣味が高まった時期を、文化五年の『白石叢書』写本三〇巻の購入、同年の『曲亭蔵書目録』の編成からであるとしている。<sup>(4)</sup> 播本眞一も、馬琴の校訂は「文政五年四月二十六日から六月三日にかけて」施されたとしている。<sup>(5)</sup> 『曲亭蔵書目録』は「いろは」、「家書部」、「書軸」（三部）、「群書類聚五十一冊」で構成されており、『馬琴日記』には、三度に及んで書き直しをしたことが記述されている。その後著された考証随筆『燕石雜誌』（一八一〇年）の「燕石雜誌引用書籍目録」、また読本『椿説弓張月』の「援引書目」にも、馬琴は数多くの参考書物（『参考保元物語』『和漢三才図会』『本草綱目』など全二十七冊）をあげており、随筆と読本創作の基盤を形成した典拠書を作品内部に提示している。これは引用や典拠の書物を選択、整理、参照するという、考証における初期の作業でもあった。<sup>(6)</sup>

本第二部第一章で論じたように、『白石叢書』の収集と校訂作業にあつて、彼は書物の収集と分類にとどまらず、より正確な情報として利用するための確認作業を施している。これは長い期間にわたる内容の校訂の産物であった。馬琴は新井白石を儒学の第一人者として尊敬し、彼の著述にも高い評価と信頼を表明していた。馬琴は当該叢書の内容を詳細に吟味しており、白石の著作ではないと判断されるものには、タイトルの下に「作者未詳」、「記者不詳」、「非白石著述」といった書入れを行っている。馬琴にとつて、『白石叢書』の情報や知識の信頼性は、白石の著作であるか否か、という点にかかっていた。ここでの馬琴の考証姿勢は白石に対する高い評価を媒介にして、文献信用の規準を定めることに基礎をおいているといえる。この考証趣味や考証的な姿勢は、やがて考証随筆の執筆につながっていく。特に、『燕石雜誌』は時間の法則、古歌、名の由来、方言、鬼、歴史人物、昔話などを、和漢の古書を引いて考証したもので、馬琴の創作に関連する記述も見られる。「巻之五」の目次には「毎巻に述るところ遺漏おほかり」と記されているように、「巻之四」までの記述の中から追加説明が必要ところが引かれ、補充の考証が加えられている。次はその随筆の冒頭に書かれた「概略」中、二箇所引用である。

○この書通俗を旨として、更に文辞を饒らず、要を提繁を芟、もつばら童蒙の為にしつ。事実の俗に遠きものあり。又俗に近きものあり。上は数百年前なる史伝より、下は近日の巷談まで、彼此となく抄録して、これに加るに愚考をもてす。実に訾を醸するの所為なり。(7)

○わが聞く所は、人の聞く所なり。わが観る所は、人の観る所なり。わが考る所は、人の考る所なり。かゝれば珍説異聞酷得がたし。わが一身の意匠に成て、これを十目の批評に献ず。もし曩編に暗合するものあらば、宜しく披閱者の筆削に任すべし。(8)

この引用文をみると、馬琴は「俗に遠きもの」から「俗に近きもの」、「史伝」、「巷談」まで、「珍説異聞」を求めており、易しい文章で（「文辞を饒らず」、子供でも分かるように書く（「童蒙の為」）ことを目指している。題材としては、昔の史伝から最近の噂話（「巷談」）までのものを、区別をつけずに「抄録」し、それに自身の解説を加えている。すべての人の意見が一致する事柄ばかり扱ってはいは、「珍説異聞」を得ることは難しいので、自分の判断で選択するが（「わが一身の意匠」）、これに対して皆様のご批評を乞いたいと述べられる。『椿説弓張月』序の「閱者理外の幻境に遊ぶとして可なり」(9)のように、読本と同様、考証随筆でも、彼が読者を意識していることがうかがえる。

馬琴は、既知であった文人の誘いを通じて文人会に参加するようになり、そこでもモノや話を対象にした考証作業を行っていた。その「会」とは耽奇会と兎園会であり、この会で展覧、披露されたモノや話、批評などを記録したのが『耽奇漫録』と『兎園小説』である。両文人会の参加メンバーはほぼ同一であり、儒臣・藩士・薬屋・医者など、多様な身分と職業の人たちである。耽奇会は考古・好事の者の集まりであり、その会員は「曲亭馬琴」、「山崎美成」、「関思亮」、「屋代弘賢」、「西原梭江」、「谷文晁」、「桑山修理」、「戸田美濃守」、「中村仏庵」、「亀屋久右衛門」、「荻生維則」、「滝沢興継（宗伯）」、「角鹿氏京師人」、「清

水俊藏」である。兔園会にも所属していた会員については、次節でより詳しく説明していく。  
耽奇会で出品された文物を、第一集から第二十集から見ると、以下のようになっている。

### 第一集

○後水尾帝宸翰 ○了慶画人丸之像 ○雪山藏獅子水滴（右 写山楼）○竹簪 ○広沢自画賛肖像 ○広沢書翰 ○人形  
原石人搦本 ○広沢仮字 ○紀貫之月字搦本（右 海棠庵）○はま矢 参河 ○はま 備後 ○後陽成帝宸刻宝船 ○殿  
枕図考 ○羽子板 下野（右 好問堂）○志道軒像 ○津軽亀岡所出土遇人 ○紅毛指環 ○近江水口張烟筒 ○鹿笛  
○赤穂義士親族御尋書上（右 松蘿館）○四天王寺古塔彫物 ○御香宮古門彫物 ○枕大全三冊 ○姿絵百人一首一冊  
○浮田升（右 梅園）

### 第二集

○宝亀勅願百万塔 ○元興寺五層塔古木 ○紺昏金泥写経 ○宋板大吉義神咒経 ○法隆寺仏像（右 好問堂）○帶玉  
○古玉虎耳髻 ○交趾磁甕枕（右 不忍庫）○有徳院殿御自画御自刻大黒天像 ○古制俎板 ○中山王書翰 ○大文字屋  
カボチャ之絵 ○僧白隠自書画粉引歌（右 松蘿館）○東大寺宝物図 ○妙心寺鐘銘 ○建武五年券書 ○延宝八年將軍  
宣下規式 ○古鏡（右 梅園）○松永貞徳肖像 ○古机図 久安二年 ○古印 ○竹林七賢古墨 ○広沢自刻筆架及石印  
（右 海棠庵）○慳貧汁注子 ○佐渡金掘之頭巾 ○日暮門彫物 ○武田信玄所持墨 ○武田家備立図（右 写山楼）

### 第三集

○つくくの御白御杵 ○漢青緑石研 ○法王ヤグラ題署搦本 ○蛇隠所図 ○元祖露考之酒器（右 不忍庫）○霧島山  
逆鉾図 ○甲斐三升量 ○仏像 ○南部曆 ○丸山権太左衛門肖像 ○長篠合戦絵屏風 ○石田三成掟書 ○唐鏡（右  
松蘿館）○太閤老分金 ○秀次公書簡 ○曲玉 ○風伯両師木像 ○雷斧石（右 好問堂）○古面 ○石剣 ○明朝木像  
楊柳観音 ○惺窩先生書牘 ○朝鮮扇（右 海棠庵）○呂洞實真蹟考 ○東壁所造横笛 ○甲斐大井平洞窟図 ○笙之頭

○大石良雄手簡摸本(右 護園) ○仏鬼軍 ○白川甲子山之碗 ○狩野笠 ○唐土笠 ○老狸画(右 写山楼) ○奴小万  
詠歌 ○順礼納札 ○亀女作人形 ○樽人形之絵 ○小説土平伝(右 梅園)

第四集

○鎮宅靈符 ○空也堂茶釜 ○知恩院瓦 ○芳野鯨桶 ○関ヶ原合戦画卷(右 梅園) ○太閤猿楽肩衣模造 ○整大字引  
札 ○口琵琶 ○天明浅間焼砂及図 ○善知鳥写真(右 松蘿館) ○崇源院殿御杯 ○義士原惣右衛門手簡摸本 ○琉球  
聘使記 ○東山殿乱舞之図 ○富士廟額字(右 護園) ○可翁華魚籃観音 ○諺文 朝鮮人仮字 ○佐渡金山之灯皿 ○清  
円尼手形 ○清円尼所蔵弁才天 ○菖蒲根化鯉之図(右 海棠庵) ○五鈷頭 ○会津雪帽子雪足袋 ○巨勢弘高苔蘿不動  
○五大尊之像 ○三春木馬(右 写山楼) ○鶴岡社蔵之経櫃 ○延喜式墨模造 ○漢銅器模造 ○牡丹石 ○物あらかひ  
○一朱金囊 ○妖怪書(右 不忍庫) ○善光寺如来印記 ○嵯峨清涼寺釈尊座盤 ○唐鍬花生 ○古流俳士短冊十六枚  
○豊太閤小田原古戦場砲丸 ○大谷刑部冑威糸 ○大銃図(右 好問堂)

第五集

○後桃園院御墨 ○合の折 ○清韓長老龐居士贊 ○諺文訳 ○尚齒会之記(右 不忍庫) ○玄猪御餅 ○貝多羅葉箱  
○春日神供台 ○筑前博多町兒翫獅子頭 ○流鏑馬之図(右 梅園) ○古額集 ○鄭成功尺牘墨本 ○国性爺狂言役割  
翻刻 ○もずの草ぐき ○古烏帽子 ○二福神印鈕(右 好問堂) ○寛永御上洛図 ○信長公上書案 ○法然上人名号石  
○ウンスンカルタ ○六十六部縁起 ○参河松応寺御廟之瓦 ○義士矢頭右衛門七之母孫江贈和歌并伝 ○古金銀六品  
(右 松蘿館) ○朝鮮飯器 ○宋板蔵経中所出 ○経瓦 ○北野神鏡搨本(右 写山楼) ○琉球楽童子帯 ○京師婦女た  
ぼさし ○京の細布 ○蝦夷人所造根付 ○鯨魚図(右 護園) ○養由基之像 ○天后聖母木像 ○天后伝記 ○天后堂  
聯 ○仏法僧鳥写真 ○十当銭 ○五匁銀 ○野州佐久山はま弓(右 海棠庵)

第六集

○菊のきせ綿 ○大友義鎮感状 ○建部伝内書 ○鏃石 ○水木辰之助の盃 ○古硯 ○文宣王像 ○一首篇題墨本(右

松蘿館) ○神嘉殿灯籠 ○近衛殿御日録 ○井伊直政書墨本 ○古縫物 ○大石良雄書牘印本(右 梅園) ○富士牧狩矢根 ○鹿笛 ○お花こまの札 ○謡こま ○大根おろし四種(右 好問堂) ○古渡華布百種 ○清馬天錫韃字 ○澄泥古硯 ○住吉丸船印 ○仮名葎(右 海棠庵) ○齋瓮 ○禁裏所用火櫃 ○著草氈 ○五瑞図 ○東大寺大仏蓮座葩(右 不忍庫) ○古狸画 ○鏝石管石 ○江戸儒医評判記 ○経瓦 ○卑下三件 ○世良田康氏陣扇図 ○慶安日光御留守令条 ○祝木 ○宮本武蔵木大刀模造 ○宮本武蔵肖像 ○唐土櫛笥(右 写山楼)

第七集

○日野有国卿印 ○古銅子母印 ○吉良氏首之請取 ○間光興名牌 ○義士懷中状(右 南無仏庵) ○和琴 ○洋琴 ○丸銅棒銅 ○燒物獅子 ○水木辰之助犬之所作図(右 梅園) ○古鎧 ○塩釜鉄灯籠搦本 ○蜷川親当肖像 ○和蘭銅板布帛製造図 ○随掃篇二卷 ○龜田窮樂書千字文(右 好問堂) ○徂徠翁火事頭巾 ○須磨琴 ○連琴 ○御能番組 ○当將軍家御年賀和歌(右 護園) ○伽梨勒袋 ○葱宝珠之銘 ○雉子車 ○天王寺風鐸 ○義士良雄書簡(右 松蘿館) ○小野道風書 ○建久曆 ○宇治橋断碑 ○神代杉糸卷 ○古鏡(右 台谷) ○明画蛮人図 ○東書堂法帖 ○白石英 ○雪山真跡仮字 ○雪機面贊布袋図 ○水口張烟管 ○魍魎手 水虎手(右 海棠庵) ○安永御社参役人附 ○佐々木玄龍書 ○袋冊子 ○朱籠 ○降地猷毛 ○先天硯(右 不忍庫) ○石都々伊 ○貝心葉 ○奥州磐城之古瓦 ○秋田水餅菓子 ○夷人画卷(右 写山楼)

第八集

○石劍頭図 ○香囊 ○一村亀藏扮源太図(右 好問堂) ○春日若宮島台人形 ○豆蒔人形 ○晋其角十牛自画贊 ○エレキテル(右 梅園) ○亀岡古磁器 ○蝦蟇五種 ○籠提灯夕、キ蠟燭(右 海棠庵) ○為朝征箭図 ○楠公軍令 ○沾徳評百韻懷紙 ○善知烏卵 ○名取川化石硯(右 曲亭) ○銅金嵌蓮花鉢盂 ○心越禪師手造木如意 ○念珠三串(右 仏庵) ○文房四賢 ○道光錢 ○道光年製磁器 ○天然石人丸像 ○天然猴像(右 不忍庫) ○駱駝図 ○歌舞伎古番附 ○薪水自画贊扇図(右 護園) ○長頭丸法華経 ○大坂合戦図 ○壳茶翁茶具(右 台谷) ○雷斧 ○吉備津宮鐵灯籠 ○

京師雨蛤店酒具 ○口琵琶異品(右 松蘿館)

第九集

○紀貫之土佐国府瓦 ○土佐茶臼銘同古鐘銘 ○出羽鳥海山練札 ○大友家旧物槍(右 海棠庵) ○吉祥院樓門葵御紋  
○立華図 花組 ○闕伽桶(右 不忍庫) ○小水磨写経 ○鶉車 鯛車 ○南京磁器 ○筑紫長刀(右 松蘿館) ○肉池  
○経瓦 ○箱館海浜図(右 護園) ○達磨木像 ○延宝四年曆 ○海獸図(右 曲亭) ○清人長袍雛形 ○奇石 ○袋法  
師画卷(右 梅園) ○人面瘡図 ○石牙 ○赤穂復讐文書写(右 護園) ○古鏡 ○勾玉 ○古鈴 ○石斧 ○石劍(右  
仏庵) ○槍 ○石卒都婆八枚 ○土佐画勸進餉図十二枚 ○妙海尼米字 ○鉄石軒寿字扇 ○又助手造搦本 ○坂上宗清  
寿字盃 ○山崎梅翁寿字盃(右 好問堂)

第十集

○車塚神鏡 ○永久曆 ○浪華合戦図(右 好問堂) ○重土器 ○焼絵 ○志道軒肖像(右 不忍庫) ○万歳職札 ○古曆  
○双六(右 松蘿館) ○新渡香袋 ○日野宰相書簡 ○鳥居清忠吉原絵(右 護園) ○寛延四年一枚絵 ○古田織部風呂  
炭之写 ○古鏝(右 海棠庵) ○弘法大師年忌奉加帳 ○琉球手巾 ○延宝中戲子肖像(右 著作堂)

第十一集

○聖徳太子御衣切 ○白玉印 ○筆筒(右 仏庵) ○葵形松搦本 ○天然硯 ○漢剛印模造(右 不忍庫) ○古証文 ○  
武鑑 ○魚化石 ○鹿角化石 ○古代一枚絵 ○古画美人十五幅 ○太郎稻荷参詣印鑑(右 松蘿館) ○袖貝 ○村松隆  
円真跡 ○赤根屋看板搦本(右 海棠庵) ○十日恵比須売物 ○唐土権衡 ○新金大吉小判(右 好問堂) ○越後弥彦神  
社神鉢 ○美作銅山箔石 ○佐渡金礦 ○雪具(右 曲亭)

第十二集

○公啓親王維摩像 ○住吉人形 ○土鈴(右 海棠庵) ○和琴名所之図 ○鎮西八郎箭図 ○達磨寺中興記 ○蘭物ひさ  
げ(右 不忍庫) ○天正年間大刀 ○徂来先生枕 ○青石印(右 仏庵) ○春日山古城図 ○弘法大師写経の硯図 ○唐

山庄書 ○鋸鉸の喙(右 著作堂) ○庄司甚右衛門書簡 ○寛文年間判事物 ○正徳比の櫛簪 ○応山公真跡 ○松風こま(右 松蘿館) ○大名慳貪 ○算盤 ○遊女大岸が文(右 文宝堂) ○綾蘭笠 紙形 ○秋田産ゆさの ○ホイナケ棒 ○古人形(右 写山楼) ○浄瑠璃物語古写本 ○烟管 ○紅毛磁器(右 好問堂)

### 第十三集

○御薫物包 ○握仏 ○貞享五年寺請状(右 海棠庵) ○巧婦鳥の巢(右 仏庵携) ○傾城局文書 ○奥村政信遊女絵本 ○垣下徒然草(右 曲亭) ○島津文書 ○円硯 ○古文書(右 護園) ○壳茶翁茶具之図 ○雪具五種 ○神事舞団扇(右 好問堂) ○鯛屋貞柳書翰 ○廿三夜木碑 ○掛面の形(右 文宝堂) ○石都々伊 ○暖帽 ○蒲生氏郷紀行(右 写山楼) ○王春廷墓表揚本 ○太平鐘 ○ヤニアカシ(右 不忍庫)

### 第十四集

○百太夫殿神号 ○古製鎖帷子 ○七賢套杯(右 不忍庫) ○那須資隆琵琶揚本 ○古琵琶揚本 ○永樂勅論躡(右 好問堂) ○文覚上人真蹟心経 ○古印 ○念珠(右 仏庵) ○清費漢源画鍾馗 ○古瓦卅余品 ○石品三百種(右 海棠庵) ○波枕 ○柏筵発句 ○浮世人形(右 文宝堂) ○謙信手簡摸本 ○奥村文角画本 ○伊勢神宮御田扇 ○秋田蒨押葉(右 曲亭) ○弥勒年号巡礼札 ○弘法大師色葉印本 ○行成卿真跡模刻(右 青李庵)

### 第十五集

○翁太夫面図 年号揚本 ○小原女の手巾 ○小判鮫魚(右 好問堂) ○板仏 ○犬手付帳并文書 ○月の御崎碑(右 文宝堂) ○志田大刀図 ○源為朝箭鏃 ○石墨 ○白隠書北野神号(右 琴嶺) ○大治四年書写経文 ○古竹 ○水飲器(右 海棠庵) ○宮本武蔵碑 ○沸泉卓 ○漢産瓦 ○名越拔雛形 ○秋田蒨葉揚本(右 不忍庫)

### 第十六集

○苔海 ○絵図 ○蟹殻(右 好問堂) ○冑の名号 ○狩野直信印 ○曾呂利自画賛(右 文宝堂) ○社鴟写真 ○佐渡のさき織 ○寿僧善修書(右 曲亭) ○唐人画印版十二天像 ○仁清作人形花瓶 ○古升(右 海棠庵) ○蝦夷産石磬 ○

花炭 ○相馬祭図(右 写山楼) ○渡辺幸庵書寿字 ○柘植彫根付 ○工藤祐経塚墓表(右 不忍庫) ○埴馬 ○土器(右 龍珠館)

第十七集

○墨柄 ○常宮鐘銘 ○清鄭資淳大小詩(右 不忍庫) ○花白河硯管図 ○古券 ○興国四年石帯金物(右 青李庵) ○筑後三毛郡埋木 ○古木仏 ○櫛(右 海棠庵) ○野有自画賛 ○釈阿像墨本 ○専斎助老摸造 ○豊太閤の印(右 琴嶺舎) ○建武二年古券 ○磁碗片 ○太申額 ○太申桜記一冊 ○略曆(右 好問堂) ○壳茶翁重風爐 ○慶長田券 ○天明年間浅間焼図(右 文宝堂) ○大清上官像 ○古銅鐸一口 ○雷斧(右 写山楼)

第十八集

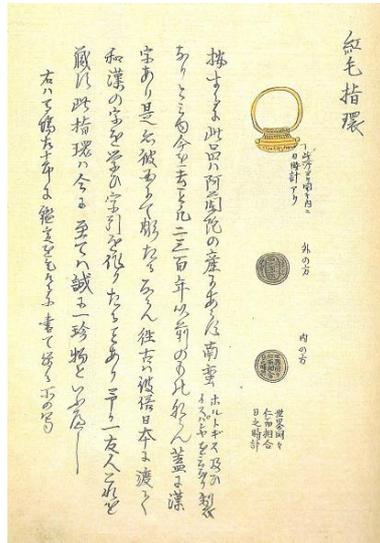
○小倉無隣発句 ○浅田氏書札 ○長船忠光短刀(右 不忍庫) ○南蛮芋頭水差 ○蓮華王院の欄間(右 龍珠館) ○真珠二顆 ○富士川の陽石 ○西行額文台(右 文宝堂) ○釜屋宮水難除護 ○大天狗銅印 ○狐の怠状 ○謡曲熊野古写(右 好問堂) ○明梅厓書墨本 ○蝦夷火繩 ○海馬(右 琴嶺舎) ○古松皮 ○僧定珍田券 ○広沢画賛(右 海棠庵) ○李家煙墨形模造 ○唐土枕 ○笏拍子摸造(右 写山楼) ○屈景山之書 ○徂来手沢二硯 ○漢龜硯滴 ○柳里恭之画 ○唐墨(右 護園) ○附録 十三夜汎舟賞月詩歌

第十九集

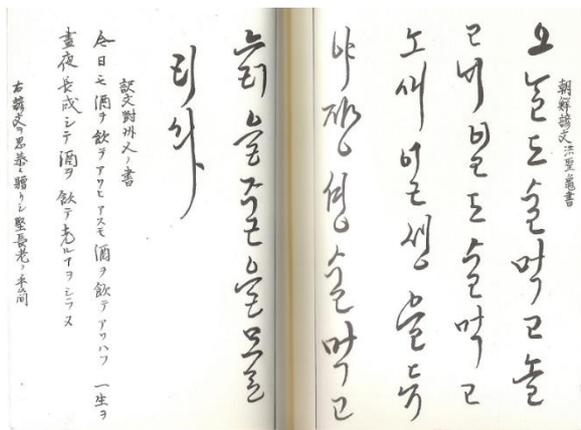
○上代甲之図 ○豊太閤馬印木匏 ○古刀并金物 ○大友宗麟感状(右 赤城携) ○貫之額字之搨本 ○周天球書墨本(右 青李庵) ○延宝年間道中記 ○浅間山焰焼荒地之図 ○撰津国古図 ○佐渡黒萩 ○出羽黒百合(右 琴嶺舎) ○在田寺経瓦 ○腰輿之図 ○扇屋夕霧小袖之裂(右 文宝堂) ○菊傘鉾 ○奥州柏木村の柏 ○武田信玄真蹟墨本 ○武田信虎居城之破風 ○奇妙曆(右 海棠庵) ○覽筥 ○模東京錦文 ○漢産歛硯(右 不忍庫) ○大石屋敷瓦 ○大石良雄自画鐘馗墨本 ○之華記一冊 ○元禄十六年鈔本義士復讐 ○赤城義臣絵伝 ○赤城義臣伝 ○院本碁盤太平記 ○忠臣略太平記(右 好問堂)

第二十集

- 近衛龍山公懷紙
- 古写太平記
- 瓶岡古陶器
- 暹羅国額
- 天然橋炮貝(右 台谷)
- 武田晴信感状
- 小野お通書
- 仙台附木(右 文宝堂)
- 応安文書
- 荏柄天神社彫物
- 那須山家所用旅籠
- 納豆筥
- 一万字千文
- 鳥追
- 草木花実写生(右 海棠庵)
- 蕎麦切箱
- 箸実
- 無人鳥凶(右 写山楼)
- 野作無名鳥
- 田女画賛
- 由布略説
- 苗場山真景
- 高道碑考
- 阿九二歌舞伎図
- 雑図五種
- 松前大福米(右 著作堂)
- 梅厓贈与三次郎書
- 駒形碑
- 月琴
- 明曆丁酉供養碑(右 不忍庫)
- 古壺
- 長柄橋柱古木(右 龍珠館)
- 加茂の藁馬
- 円鎖
- 宝船図
- 宝鈔廿一枚
- 荏柄天神神器
- 克信宝尽絵幅標寛文曆(右 好問堂)
- 甲斐管田社神器無楯鎧(客品)



【図一】紅毛指環



【図二】諺文訳

この耽奇会に出品された文物は、書画、書付、古作品、諸道具、物産、磁器、楽器、曆など広範囲に及ぶものであった。本章で注目する異国関係のものも存在しており、それは「蝦夷人所造根付」「中山王書翰」「琉球聘使記」「朝鮮扇」「諺文朝鮮人仮字」「朝鮮飯器」「南京磁器」「唐土笠」「紅毛指環」「紅毛磁器」「ウンズンカルタ」などである。

そこで披露された物と考証は『耽奇漫録』全二十集二十冊にまとめられ、山崎美成序・跋で一八二四年～一八二五年に成立した。また一八三二年、曲亭馬琴序の五卷五冊の写本も伝わっている。参加した会員はその珍品を鑑賞し、そのモノについての説明、由来などを記録するという考証作業がその場で行われた。次の引用文は『耽奇漫録』の山崎美成の序文と耽奇会の会則の「耽奇会約」である。

○ふるき世のみぞしたはしきとは、書よむものゝ常なりかし、さればとて、あがれる世のありさまを、いままのあたり見るべきものは、そのかみの物にしくはあらじ、かつは遠きから国にもあれ、その国にて造れるものを見たらんは、其くにてぶりはしらるゝ者なり、しかはあれど、ふるき物は日々にそこなはれ、遙けきものはつねに稀なるものなれば、いとえがたくなん、さるを好みを同じうする友の、これかれひめもたるも少からねど、折にふれ事によらざれば見ざるも亦おほかり、過しころ打かたらふことのついでにいへるは、各おさめたらん書に画に、および調度めくものゝ珍きを、月毎に数を定め、もち出て互にうち見つゝ、おのれへがおもひよれるふしをもいひ出なば、いかにうれしかるわざならずや、(山崎美成の序文)<sup>(10)</sup>

○古き書の闕たるを補ひ、年月の疑をも積き、考ありて拠正しきものは上なり、まことのものはいふべくもあらず、ならひ造れるものといへども、世のさまをしり、国のならはしを見るべきものは次なり、世に稀に、常に目なれざる物といへど、いたづらにえうなきものは、又その次なり、さて此目にのぞみて、公事ちゝははのことはせんすべなし、物見遊びの、私ごとまで至らざることを許さず、今この式をかたく契りて、猶すへがすへまでも、ゆめ違はざらんことこそ、

深くおのれがこひ願ふところにはありけれ（「耽奇会約」）<sup>(11)</sup>

山崎美成は序文において、古代を偲ぶには古物の鑑賞に勝るものはないが、古物は日々になくなっていく、手に入りにくくなっていくのが現状であるとしている。そこで、各自で持ち寄って鑑賞しようではないか、という会の発足の理由が語られる。会の規約は、公事や父母にかかわる用事はともかく、物見遊山のような私事で欠席してはならないという厳格なものであった。

この「耽奇会約」によれば、古い書で部分的に欠けてしまっているものには補足をしたという。また歴史上の出来事に関わる年月の疑わしい所には、説明を施したとされる。そして、考察の根拠が正しいものには最上の価値があるとす。さらに、考証に資するものであれば、たとえ模造品であっても価値があるとす、逆に「世に稀に、常に目なれざる物」であっても、古代を考える役に立たないものについては、それほど価値が認められることはない。つまり「物へのまなざし」よりも、考証という「物への解釈行為」とその結果として生まれる価値が、この会の志向した規定であった。その「物への解釈行為」から、「珍奇」という新しい価値が生まれるというわけである。白石良夫はこれに関して以下のように述べている。

このカタログ式書物のどこが面白いのかといえば、それは物品に対する〈珍奇〉の断定という点である。図録された物（モノ）をめぐり、会員諸彦の知識・想像力が駆使・総動員されて、その物品について〈考〉が加えられ、その物品に対して彼らの知識から断定される〈珍奇〉という新しい価値が導き出されるという点である。つまり、すべての物品は初めから〈珍奇〉なのではなく、〈珍奇〉というレッテルを貼らないかぎり、その物品の珍奇性は保証されないのである。要するに、耽奇会という会合の開催や会員諸彦による図録の回覧・借膳を通して〈珍奇〉感覚の確認が行われた、と私は考え、そこに面白さを感じたのである。<sup>(12)</sup>

この白石良夫の指摘をめぐり、本論文の立場から重要視したいことが二点ある。第一点目は、「物への解釈行為」が耽奇会という会合や、図録などの情報源の共有によって、知識人（「会員諸彦」）たちにより共同体的・集团的に執り行われるという点である。第二点目は、「物品は初めから〈珍奇〉ではなく」、知識人の共同体により、「〈珍奇〉というレッテル」を貼られて初めて、「珍奇性は保証」されると指摘されている点である。この点を本論文の立場から換言すれば、〈珍奇〉なものはそれ自体が希少価値をもつから貴重であるというよりも、〈珍奇〉なものを巡って流通する言説を分析することで、その〈珍奇〉なものが〈珍奇〉として珍重される、ということになる。つまり、知識人の知の枠組み、イデオロギー、世界観がうかがえるからこそ、研究の対象として重要なのである。

このモノをめぐる会は、珍しい話とそれへの考証が主になる会の結成につながっていった。それが兔園会である。この会での記録をまとめたものが『兔園小説』であり、話の内容は孝行物、博物、奇談、図録、異国記録など、その当時の珍しい情報、風聞などが主であった。さらにそのメンバーは、面白くて珍奇な話を収集して共有することだけで終始するのではなく、集めた話について解説や考証などを行い、より正確な情報として受容しようとした。このように、耽奇会と兔園会の二つの「会」では、モノや話を対象にした「珍奇」という新しい価値が導き出され、その知的交友は「考証」という方法で行われたのである。

### 第三節 珍奇珍談の収集グループ——兔園会

前述したように兔園会は、一八二五年、馬琴や山崎美成などが発起人となって設立されたものである。毎月一回メンバーが集合して珍談奇聞を披露し合う会で、正会員は十二人、客員は二人であった。兔園会が結成される前年、耽奇会（一八二四年五月〜一八二五年十一月、毎月一回、計二十回）という好古・好事家の集まりが結成された。この会は、参加者がそれぞれ珍品・奇物を持ち寄って披露するという観覧会で、馬琴の参加は一八二四年十一月からみられる。この耽奇会で披露さ

れた珍品の絵とそれに関する解説を収録したのが、『耽奇漫録』（二十集二十冊、一八二四年～一八二五年）である。（13）

その翌年、兎園会が結成されることになったわけだが、その経緯からして耽奇会の会員がほぼ全員参加することになった。今度は珍品・奇物のようなモノではなく、珍奇・珍談の話を披露し合い、それについて意見を交わして考証するという場であった。兎園会は、まず海棠庵（関思亮宅）で開催され、年末に著作堂（曲亭馬琴宅）で終わるまで、計十二回集会が行われた。馬琴の深い理解者として知られる篠斎（殿村安守）に宛てた馬琴への手紙は、集会の模様を知る手がかりとなる。

然ル処、尚又小説会と申事ヲ催し、去冬よりおなじ連衆にて、おのゝ随筆一編ヅ、稿しもちより、席上にて披講いたし、一会の稿本ヲ一冊にいたし、『兎園小説』と名づけ申候。これも毎月の事故、追々大巻に及び可申候。なれども、好事のみにて文気無之仁も多く交り候故、只実事ヲつゞり候のみにて、はかゞ敷説も見え不申候。なれども、連衆ざりの事故、禁忌に不管、当時之事といへども、つゞり出し候故、中にはおもしろき事も御座候へども、奇談怪談のみ多く、考はまれに御座候。（文政八年（一八二五）正月二十六日 篠斎宛）（14）

兎園会は「小説会」と言われ、参加者たちが「随筆」や「稿」を持ち寄って「披講」をする場であった。情報や知識のよきな専門的内容でなく、それぞれの周辺の「ハナシ」が求められた。また、その場で披露された話は「当時之事」や「おもしろき事」と、その当時流行したもの、あるいは「奇談怪談」のような不可思議なものであった。しかし馬琴は、引用から読み取れるように、披露された話については批判的な認識をしていた。それは「好事のみにて文気無之仁も多く交り候」とあるとおり、それぞれの好事による話の選択において、「はかゞ敷説も見え不申候」、つまり批判的分析が少ないという懸念である。「奇談怪談」ばかりが多く、「考はまれに御座候」と物事の筋道を立てて思い図る「考」が欠如していると馬琴は述べる。彼は、面白くて世に珍しい話であっても、その話の原型を求め、さらに「考」をめぐる考証などが行われることを望んでいたであろう。

兔園という名称の由来は、『大漢和辞典』<sup>(15)</sup>によると、「園の名。河南省商丘県の東。一名、梁園・修竹園。梁の孝王築く。漢の枚乗に梁王兔園賦がある」である。中国前漢代の梁の孝王が築いた園で、その名を用いた「兔園策」・「兔園冊」などもみられる。「兔園冊」とは「一書名。三十卷。唐、杜嗣先撰。又、十卷、唐、虞世南撰。二卑近な書物。自著の謙称。もと民間の村塾で児童に教授した書物を兔園冊といったことに基づく。一説に梁の孝王の兔園を孝王の死後に帝が民をして耕種せしめたが、其の租を記した簿書が皆俚語であつたからいふ」という。また、『日本国語大辞典』<sup>(16)</sup>にも「とえんの冊子」・「兔園冊」の名で現れる。これは「唐の杜嗣先の著で、古今の事跡、典故、成句等を分類編集したもの。一説に、唐の虞世南の著で、五代のころ、村塾の学童の読本として流行したという。本文は伝わらないが、俗語で記された卑近な本の称とされる」、すなわち、身近で通俗的な書物という意味である。

その「とえんの冊子」の用例としてあげられているように、馬琴は『曲亭伝奇花釵児』(享和四年(一八〇四))においては、「予頃数齣の戯文を述て、これを華人の伝奇に合し、遂に兔園の冊子なれり」<sup>(17)</sup>と、中国の伝奇風に書いた自分の戯文を「兔園の冊子」としている。このように、兔園会・兔園小説といった名称は、親しい身近な人々の集まりで披露されたその場の通俗的な雑談という意味を含む。これは、謙遜を込めた名称であるにしても、知識人サークルの内輪の会としての性格をよく表している。大高洋司は「兔園小説集」の解説で、兔園という題名は、「卑近で取るに足らない記録」の意だとして、「筆録者が実際に見聞し得る化政期の話を中心とするのが編集の目安」であり、「見聞をそのままに記して書き手の論評は控え目とするものが多い」と記している。<sup>(18)</sup>

その兔園会の会員には、どのような人物がいたのであろうか。既にその会員についての概説的な言及はしたが、<sup>(19)</sup>ここでは兔園会十四名のメンバーと馬琴(著作堂)との交友関係について、馬琴が記した書簡<sup>(20)</sup>などから詳述してみたい。以下、馬琴以外の十一人、好問堂、海棠庵、輪池堂、松蘿館、麻布学究、龍珠館、文宝堂、護園、遯齋、乾齋、琴嶺と、客員会員の二人、青李庵と晃樹について紹介する。

「好問堂」というのは山崎美成<sup>よしげ</sup>(一七九六年〜一八五六年)のことであり、彼は下谷長者町の薬種商長崎屋に生まれた人

物である。嘉永六年（一八五三）に、旗本かつ江戸寄合衆の鍋島直考の儒臣となる。和漢古今の文献を多く集めて著作を行い、書誌学での実績も遺している。馬琴とは「けんどん名義」<sup>(21)</sup>についての考証の議論で絶交している。山崎は「慳貪」を蕎麦切を指すとし、この匣は蕎麦切を運ぶための道具だったが、馬琴は饅頭を運ぶための道具とした。馬琴は『兎園小説』中巻で「けんどん争い」と題して、自分と山崎の論争書簡を挙げている。<sup>(22)</sup>天保四年（一八三三）七月二二日の日記にも「尚又、山崎美成、ある人の紹介にて、近日木村氏方へ罷越候よし。予と絶交の義も有之間、内々申入置候趣、申来ル。……美成事、絶交被致候とも不苦存候事、……」<sup>(23)</sup>とあり、山崎と絶交したことがここからも知られる。それゆえ、後に馬琴は山崎美成に関してかなり批判的な態度を取り、彼を「悪文人」<sup>(24)</sup>と称している。馬琴は江戸時代後期の国学者、狂歌師である北静廬（一七六五年～一八四八年）という人物を評価する際も、この山崎に比べて、「社中あり、されども、文才は一向になき人に御座候。長崎屋新兵衛美成事ト同様の読書の人にて、人の為に本箱代は重宝に候へ共、文才のなきはをしき事也。それ故、久しき狂歌師なれど、歌も下手也。舌談は、博学故人の耳を驚し候。やはり美成と同様之人物に御座候」（文政十年（一八二七）十一月二十三日 篠斎宛）<sup>(25)</sup>と批判的に述べている。そこから、山崎美成が「文才はなき」にも関わらず、「博学」な「舌談」家として、よく会員を驚かせていたことがうかがえる。

「海棠庵」とは関思亮（一七九六年～一八三〇年）のことである。彼は常陸土浦藩士で海内の法書を集め、『漢隸字源』などを藩校郁文館蔵版として出版し、これは広く教科書として使われた。馬琴は関思亮の父である関漢南との関係も深く、彼のことを「一友人」<sup>(26)</sup>と呼んでいる。書簡に「初春、関漢南父子・屋代ぬしのちらし蔵板、もらひ候まゝ、御とし玉のしるしに上ゲ申候」（文政十年（一八二七）三月二日 篠斎宛）<sup>(27)</sup>とあり、また「水戸様御作『告志編』一冊、一友人より借贖いたし候間、懸御目候」（天保四年（一八三三）十二月十一日 篠斎宛）<sup>(28)</sup>と記されている。ここから馬琴が、彼を通じて書物などを借りていることがうかがえる。

「輪池堂」とは屋代弘賢（一七五八年～一八四一年）のことで、彼は幕府の小吏、国学者である。馬琴と親交があった人物で、馬琴の外にも、成島司直・大田南畝・狩谷棧斎らとも交友があった。熱心に書籍の収集に努め、一個の学者としては

最大量の和漢書を所蔵して書庫を不忍文庫と名づけた。この書籍はのちに、阿波藩主蜂須賀家が藩政時代、長期間にわたり収集した和漢典籍の集書である阿波国文庫に納められた。<sup>(29)</sup> また彼は、『弘賢随筆』に『兎園小説』の一部分を筆写して載せていた。<sup>(30)</sup> 馬琴の日記や書簡においては、「屋代太郎」、「屋代氏」、「源弘賢」、「輪翁」、「輪池」などと呼ばれており、彼についての記述が多くみられる。彼が『弘賢随筆』に筆写した「うつほ舟の蛮女」図については、本章でのちに検討する。

「松蘿館」とは西原一甫（一七六〇年～一八四四年）のことで、柳川藩士である。彼は耽奇会のメンバーでもあり、朋誠堂喜三二（平沢常富。一七三五年～一八一三年。江戸時代の戯作者、狂歌師）とも親交があった。馬琴とは早い時期から交流があり、文化十年（一八一三）の書簡をみると、「友人西原梭江主人、嘗籠挑燈を蔵む。茶会にハ必教奇屋の路頭に用ふとなん。予をりく見る所也。……嘗菱川師宣が画きたる遊里の画卷物〔元禄年中のもの也。友人梭江主人所蔵。〕を見るに、しもべが引提たる挑燈左の如し」（文化十年（一八一三）五月頃 富教吉宛「挑灯考」（追考草稿））、<sup>(31)</sup> 「（一）」は割注）とあるように、馬琴は西原を通じて珍奇なものを見ることのできたことがわかる。

「麻布学究」とは大郷信斎（一七七二年～一八四四年）のことである。彼は越前鯖江藩儒で、麻布学問所・鯖江藩江戸邸学問稽古所の教授を務めた。馬琴とは書画会<sup>(32)</sup>での付き合いがあり、「近來の書画会ハ、必芸子ニ酌をとらせ候よしにて、丁子屋とりはからひ、五人やとひ候故、金老両三分費し候。酒食の惣世話人ハ、平林庄五郎にて、板木師・板すり等、大勢掌之。但、出席の名家ハ、儒者に琴台〔東条文左衛門〕・信斎〔大郷金蔵〕……」（天保八年（一八三七）四月二十日 牧之宛）<sup>(33)</sup> 「（一）」は割注）とある。このように彼は、名家の儒学者として扱われている。

「龍珠館」とは桑山修理（生没年？）で、彼は千二百石の旗本である。耽奇会の発起人とあるのは誤りだと言われている。<sup>(34)</sup>

「文宝堂」とは亀屋久右衛門（一七六八年～一八二九年）である。彼は飯田町の薬屋で、馬琴は彼にしばしば画図を描かせている。渡辺華山（一七九三年～一八四一年）は、身長二百センチを超えたという巨大な体躯の力士、大空武左衛門（一七九六年～一八三二年）を原寸大で描いている。馬琴は、それを自分が「友人」「文宝」に依頼して写し取らせたという経緯

について、書簡の中で「大男大空武左衛門事、定而御承知と奉存候。右写真の図、写し取申候。これは渡辺登〔画名華山〕が、石盤にて蘭人の伝ヲ以、全体ヲうつし取に、図取寸法に相違無之候。拙蔵は、それヲ友人文宝に写させ候ものに御座候」(文政十年(一八二七)十一月二十三日 篠斎宛)<sup>(35)</sup>と記している。

「護園」とは荻生維則(生没年不詳<sup>おぎゆういそく</sup>)で、荻生徂徠(一六六六年～一七二八年)の孫・鳳鳴(?年～一八〇六年)の養子、郡山藩の儒官である。馬琴日記に以下の記載がある。「薩州おくより、御内々にて、此度琉球人江みやげに被下之よし、御注文、『金魚伝』全部七通り、外ニ拙作新板もの取そろへ、さし出しくれ候様、いぬる日、荻生惣右衛門より、忝たのまれ候処、……荻生の娘、薩州のおくに給事候。此縁にて、荻生より忝方へ頼越され候也」(天保三年(一八三二)十二月八日 桂窓宛)<sup>(36)</sup>。馬琴とは書物や異国情報などを互いに共有していたことがわかる。

「遯齋」とは清水正徳(一七七六年～一八四八年)のことで、彼は儒者でかつ兵学に通じていた。彼は馬琴の書翰に『忠臣絵伝抄』、被成御覽候哉。此書ハ享保中出版之頃、程無絶板被せ候ゆへ、世ニ甚稀ニ御座候。……金壺両式分ニて買取、今以秘蔵致候。かいほうの蔵書の印杯御座候。儒生清水氏、右之作者片山氏ヲ能知候間、片山之略伝を書入させ置候」(天保十一年(一八四〇)十月二十一日)<sup>(37)</sup>とあるように、馬琴のために著者の略伝などを書いていた。

「乾齋」とは中井乾齋(生没年不詳)で、彼は三河吉田藩に仕えた藩儒であり、渡辺崋山・鈴木春山らとの交遊があった。「琴嶺」とは滝沢興継(宗伯)(一七九七年～一八三五年)で、彼は馬琴の長男であり、松前藩の医者を努めた。

客員会員は二人で、「青李庵」(角鹿氏京師人)は京都の以文会の会員でもあった。もう一人は、「晃樹」(西原氏柳河人)である。

兔園会の全メンバー十四人については、以上の通りである。会は儒学者・藩士・薬屋・医者など、多様な身分と職業の人たちのグループであるが、共通するのはメンバーが蔵書家・収集家であったことである。その中で、注目すべきは蘭学に造詣の深い渡辺崋山などと親交を持つ人物がいる一方で、「護園」こと荻生維則(徂徠)の場合のように、琉球や蝦夷、ロシアの情報入手するルートを持つ人物がいたことである。そこから、異国の情報、新しい物や話を入手するのに、二つの方法

があつたことがうかがえる。一つは書物であり、いま一つは人物ルートであつた。なお当時にあつて、書物はきわめて貴重なもので、蔵書家であるということは、いわば情報の独占者であつたといつてもよいほどである。彼らが集まつて情報を交換することの貴重さがわかる。この二つの手段を通して、各自が持ち寄つた話は全員の前で披露され、馬琴はそれらの話の中、興味を持つものについては解説や考証などを行い、記録したのである。兔園会の交友関係の中で、馬琴は発起人の一人であつた山崎と絶交したこともあつたが、馬琴にとってメンバーとの交流は、様々な新知識を得られる重要な情報源としての場であつたことは確かであろう。

#### 第四節 江戸後期の雑学集——『兔園小説』集

兔園会の十二回の集会で、披講された珍奇珍談を十二巻にまとめたのが、『兔園小説』（十二巻、文政八年（一八二五））である。馬琴は自分の愛読者である小津桂窓に送つた手紙に、『兔園小説』のことを「奇談奇説」、「集録の奇書」などと書いている。馬琴自身の解説（桂窓への手紙）には、以下のように記されている。

此『兔園小説』ハ、往年篠齋子出府之節、草稿のまゝ、半分程御めにかけて候。只今ハ二十巻に成候。内十二巻ハ、社友毎月うちより、奇談奇説をしるし、もちつどひ候て集録の奇書也。十三会にて断絶二付、十三巻めより老拙独撰いたし、追々増補、今年迄ニて二十巻に及び候。被成御覽度思召候ハ、来冬御出府之節、可懸御目候。黙老へハ不残かし候て、彼人写しとり候。いろくめづらしき事御座候奇書ニ御座候。（天保三年（一八三二）二月八日 桂窓宛）<sup>38</sup>

この手紙からは、兔園会が中止され、十二回で集会が終わっていること、十三回からは、馬琴自らの編集によつて『兔園小説』の続編が続けられたことがわかる。そして『兔園小説』は、「奇談奇説」、「奇書」、「めづらしき事」を集めた集会の記

録書として述べられ、集会所が断絶した後も、その「奇」なる「ハナシ」への拘りが維持されていることもわかる。なお十三回以降からは、新しい三人の会員、鈴木分左衛門、山本庄右衛門、南無仏庵が加わり<sup>39</sup>、前述の手紙に「十三巻めより老拙独撰いたし」と書かれているように、馬琴の編集によって『兎園小説外集』(二巻、文政九年(一八二六)二月から同十年(一八二七))という続篇が、馬琴を中心に続けられた。

外集の後に続いた『兎園小説別集』(三巻)、『兎園小説余録』(二巻)、『兎園小説拾遺』(二巻)という続編は、馬琴単独の編集であり、文政末から天保はじめにかけて記された。それについて大高洋司は、「題名は同一ながら、後の三集は前の二集とは異なる編集意図による、馬琴の個人的な筆録集と看做すべきであろう。しかし当時の江戸文人の巷説に対する旺盛な好奇心は、いずれの集からも窺い知ることができる。同時に本書は文人たちの交遊記録であり、馬琴の伝記資料としての価値も高い」<sup>40</sup>と述べている。大高は、共同執筆の『兎園小説』集と、馬琴個人によって編集・執筆された『兎園小説』続編とが、馬琴研究の資料として同等の価値を持つと評価する。

また馬琴の日記には、「昼八半時過、渡辺登来る。余、対面。閑談数刻。兎園別集下冊并に正徳金銀御定書一冊、小ぶろしき共、かし遣す」(文政九年(一八二六)四月十九日)<sup>41</sup>とあり、渡辺登こと渡辺畢山に『兎園別集』を貸していた事実を確認できる。馬琴は、会が中断された後も、世の「奇」なる「ハナシ」を収集することをやめようとしなかった。もともと「奇談奇説」にいう「奇」とは、世にも不可思議という意味であるが、その内実は、これまで見聞したことのないこともある。

これまで見聞したことのないことといえば、当時、江戸周辺の海辺に現われるようになった異国の商船、そしてそれらが持つて来た文物がその一つであった。そのような船が難破することによって海辺に漂着した異国人も、その一つであろう。さらには、江戸から遠く離れた地方の民話・伝承譚なども伝えられたことであろう。兎園会のメンバーにとって、情報が量と質ともに大きく飛躍したことがうかがえる。これまで江戸の府内を流通する漢籍などにはぼ限られていた情報ネットワークが、日本全国をつなぐネットワークに拡大したのであった。馬琴がその記録集を「奇書」と呼んだのも、それがより広い

驚異的な世界につらなる情報の集積だったからである。

## 第五節 珍奇な女性に関する記録

そもそも、『兔園小説』においては、女性に関する記事が多い。その内容は、孝女、烈女、貞女、世間の常識を超えた女性などに関する話である。以下、女性に関する記事をまとめておく。

- ・ 第一集 「文政六年夏の末、沼津駅和田氏女兒の消息」(海棠庵)
- ・ 第二集 「賢女」(輪池堂)、「銀河織女に似たる事」(文宝堂)
- ・ 第三集 「あやしき小女の事」(文宝堂)
- ・ 第六集 「松前の貞女」(輪池堂)、「北里の烈女」(同)
- ・ 第七集 「古墳女鬼」(文宝堂)
- ・ 第八集 「變生男子」(文宝堂)
- ・ 第九集 「遊女高尾」(輪池堂)
- ・ 第十集 「濃州の仙女」(輪池堂)、「鶴の稻附供大人米考」(同)、「真葛のおうな」(著作堂)
- ・ 第十一集 「越後烈女」(輪池堂)、「うつろ舟の蛮女」(琴嶺舎)、「品革の巨女」(同)
- ・ 第十二集 「瑞竜が女兒」(琴嶺舎)

これらには、超常現象や怪物性が女性と結びつけられているもの(「變生男子」)、通常、女性に期待される能力や行動様式を超越した女性について述べたもの(「賢女」「真葛のおうな」「越後烈女」)、そして異国の女について述べたもの(「うつ

る舟の蛮女」「銀河織女に似たる事」が含まれている。なんらかの意味で、普通や常識を超えた女性が〈珍奇〉として列記されているのである。プラスの意味であれ、マイナスの意味であれ、〈珍奇〉な女性たちを陳列する中に、「真葛のおうな」が含まれていることは意味深長である。なお、「真葛のおうな」こと只野真葛と馬琴との論争については、本第二部第五章で詳述する。『兎園小説』の「真葛のおうな」についても、そこで合わせて論じることにする。

博物、奇談、凶録、異国記録など、その当時の珍しい情報、風聞を集めた『兎園小説』に挙げられる例外的な女性たちのうち、その身体の巨大さゆえに注目された女性に「品革の巨女」がある。馬琴の息子である琴嶺が、後述する「うつろ舟の蛮女」項目の直後に書いているものである。『兎園小説』でどのような女性が珍奇であり、「稀」であると見なされていたかの一例をみたい。

品川駅の橋の南なる「こゝを橋むかふと唱ふるなり。」鶴屋がかゝえの飯盛女に、名をつたといへるは、その年廿歳にて、衣類は長さ六尺七寸にして、裾をひくこと一二寸にすぎず。膂力ありといえども、そのちからをあらはさざりしとぞ。世に稀なる巨女なれども、全体よくなれあふて、しなかたち見ぐるしからず。……当時その手形を家蔵にありしものあり。……その病にて身まかりにきといふ……湯島なる天満宮の社地にて、おほをんなのちからもちといふものを見せしことあり。……よのつねのをんなより一歳、大きなは偉きかりしが、品川のつたが手形にくらぶれば、いたく見劣りて、さのみ多力なるものとは見えざりき。彼品川のおほをんなは是なるべしと、おもはする紛らしものとしられたり。かばかりはかなきうへにだも、贖物いで来たる。油断のならぬ世にこそありけれ。(42)

ここから、馬琴や琴嶺が身を浸していた、珍奇なもの・「稀」なるものを珍重する文化の一端が見て取れる。つたという女性は体格が並外れて大きい女性であったが、均整はとれていた。彼女の手形を馬琴（琴嶺の「家蔵」（父））に贈った者があつたため、琴嶺はその大きさをよく知っていた。周りの人が、珍しいものを見れば馬琴のもとに届けようと考えるほどに

まで、馬琴の珍品好みはよく知られていたことがわかる。琴嶺はのちに湯島の天満宮で、見世物になっている別の女性を見物にいったが、家にあつたつねの手形から推測できるつねの大きさに比べれば、ずっと見劣りのする女性であった。つね（かの品川のおほをんな）が有名であったため、客にこの湯島の女性をつねと混同させようという「贋物」ペテンが仕組まれたのであろう。「油断のならぬ世にこそありけれ」と琴嶺がいうように、江戸の見世物文化は「贋物」が横行する世界であった。だからこそ、兔園会で行われていたような綿密な考証が必要とされたのであろう。

つぎは異国の情報と関係づけられた記事について述べてみよう。播本眞一は『兔園小説』の中で、「孫七天竺物語抄」（山崎美成、『兔園小説』第十一集）、「うつろ舟の蛮女」（琴嶺舎、同第一集）、「漂流人帰国」（中井乾斎、同第十二集）、「唐船漂着の記」（屋代弘賢、『兔園小説外集』第二集）、「カピタン献上目次」（屋代弘賢、同第二集）、「浦賀屋六右衛門話記」（『兔園小説拾遺』第一集）、「イギリス船図説」（同第二集）が異国に関する記録であると述べている。<sup>(43)</sup> それ以外にも、その記録の全部または一部分が異国の記事であるものとしては、『兔園小説』の「駿河町越後屋替紋合印の事」（第二集、文宝堂）、「銀河織女に似たる事」（第二集、同）、「高松邸中厩失火の事」（第三集、松蘿館）、外集の「著作堂小集展覽目録」（著作堂）、余録の「木下建蔵観琉球人詩」（同）などがある。

## 第六節 江戸のアマゾン伝説

説話や物語でよく描かれ、馬琴も遍歴小説や『椿説弓張月』などで描いた女性だけの国、すなわち「女人国」の話は荒唐無稽な異国物語の最たるものであると考えられるかもしれない。しかしながら、「女人国」が実在する異国である可能性があると考え、馬琴が様々な面からその実像を捉えようとしていたことは、『兔園小説』における「女人国」に関する記述を分析すれば明らかとなる。

馬琴は当時の百科辞典『和漢三才図会』、地理書『職方外紀』などを参考にし、荒唐無稽な情報を正確な知識として得よ

うとしていた。このことは、兔園会がただ珍奇の話を披露することで終わるのでなく、緻密な考証を行い、お互いに議論を重ねていたことも関係する。馬琴の『夢想兵衛胡蝶物語』のモデルとなった遊谷子『和莊兵衛』などの異国遍歴小説における「女人国」については、第二部第二章で触れておいたが、ここで強調しておきたい点がふたつある。ひとつは『兔園小説』における「女人国」の項目で見取れるのは、綿密な考証作業を通して「女人国」の实在が証明可能であるという、馬琴の前提である。もうひとつは『兔園小説』において、「女人国」の实在を立証しようとする際、そこで呼び出される根拠の重要な一部にすでに西洋由来の情報が取り込まれていたという点である。

ここでは、「銀河織女に似たる事」（『兔園小説』第二集）を取り上げる。兔園会の一人である亀屋久右衛門（文宝堂）がその内容を書いており、最後に馬琴（解）が解説をしている。この記事の情報源は、マテオ・リツチ（利瑪竇、一五五二年～一六一〇年）の『坤輿万国全図』（一六〇二年）を、ジュリオ・アレーニ（艾儒略、一五八二年～一六四九年）が増補した世界地理書である『職方外紀』（一六二三年）所収の「アマサニイ 亜瑪作擲」である。あらかじめ、ここでの分析の結論を簡潔に述べておこう。亀屋久右衛門が記述し馬琴が解説をつけた「銀河織女に似たる事」で述べられる「女人国」には、ヨーロッパにおける「アマゾン」伝説と、それがヨーロッパ世界と「新世界」（南北アメリカ）との植民地的遭遇を通して変形されていったさまが、刻印されているということである。

「銀河織女に似たる事」では、以下のような記述がある。

南亜米利加のうちに、「アマソウネン」といふ所あり。此所の山に女ばかりすみて、一年に一度河を渡りて男に逢ふといふ。その河の名を蛮語にては、「リヨデラタラタ」といひ、紅毛語にては、「シリフルリヒール」といふ。「シリフル」は銀なり。「リヒール」は河なり。もろこし人のいひ伝へし銀河織女の事などは、かゝる事を聞き伝へたるにや。その山の辺に、男つねにかよへば、竹鎗にてふせぎて入れずといふなれば、阿蘭陀通事今村金兵衛話なりと、蜀山翁申されき。

〔頭書、解按、坤輿図説、鞆而鞆附録、亜瑪作擲条下曰、迤西旧有女国。曰亜瑪作擲。最驍勇善戰嘗破名都国俗惟春月

容男子。一至其地。生子。男輒殺也。今又為他国所併。今村生所話、亜瑪作擲女国事、蓋拋之也。著作堂追記(4)

【現代語訳】は漢文のみ。(頭書)解(馬琴)按ずるに、『坤輿図説』韃而韃附録、「亜瑪作擲」の条に、「以前は女の国があつた。「亜瑪作擲」と言う最も勇猛で、戦いがうまく、かつて、ある有名な都市を戦で打ち破つた。国の風俗に、春月になると、男子を国に入れる。一人がそこに行き、子が産まれると、男はすぐに殺されてしまふ。今は他国の治めるところとなっている」とあり、今村氏の話した、「亜瑪作擲」国の事はおそらく、これに拠るのであらう。著作堂追記。

この記述の背後に、少なくともふたつの西洋由来の情報をもてとることができ。ひとつは、古典古代ギリシア神話に由来するアマゾン族伝説であり、もうひとつは、スペイン帝国が南米を征服した一六世紀、フランシスコ・デ・オレーリヤ(一五一年〜一五四六年)がこの地で女性のみからなる部族と出会い、古典古代ギリシア神話との連想からこの部族をアマゾン族と名付け、この地域に流れる川をアマゾン川と名付けたという由来である。

亀屋久右衛門(文宝堂)による「銀河織女に似たる事」の記述の内容を整理しよう。「アマソウネン」という「女ばかり」住む国は、「南亜米利加」にあり、その地域には「リヨデラタラタ」あるいは銀の川を意味する「シリフルリヒール」が流れているとされている。「リヨデラタラタ」は現在のアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイを流れる Río de la Plata (銀の川、を意味する)を指すものと思われる。

つぎに、馬琴(著作堂)による解説の内容を整理する。亀屋久右衛門が南アメリカに発するとしている「アマソウネン」の伝説を、馬琴はさらにそれに先行する古典古代ギリシア神話に遡って考証している。ここでは、馬琴が「亜瑪作擲」という表記を用いていることに注意を喚起しておきたい。馬琴がこの考証を行う際に、典拠とした情報ソースが何であったのか(『和漢三才図会』の記述ではなく、『職方外紀』―後述)が、この表記から分かるためである。

ここで、古典古代ローマのアマゾン伝説を確認しよう。紀元前一世紀のプリニウスによる『博物誌』にも記載されている

通り、この「アマソウネン」はアマゾン (Amazon)・アマゾニス (Amazonis)・アマゾネス (Amazones) のことで、軍神アレスとハルモニア (Harmonia) を先祖とする、ギリシア神話の伝説的女武者部族である。この国は女だけで成り、男子が生まれると隣国へ送るか、皆殺しにしたと伝えられている。それでも、彼女たちは子供を得るために一定の季節に他国の男と出会い、女子は幼児の頃に武器を扱いやすいように右の乳を除いていた。それゆえ、アマゾネスという名は、「乳房(マゾス mazos)」の欠けているものという意味に由来している。(45)

亀屋久右衛門が南アメリカの「アマソウネン」の生活風習を、「女ばかりすみて、一年に一度河を渡りて男に逢ふ」ものであると書いたのは、中国の「銀河織女」伝説と、一六世紀南米の歴史が接ぎ木されたものであると理解できる。織女は星に関する中国伝説の女で、日本では織姫として知られている。天帝が天の川の東側で機を織る織女を憐れみ、西側の牽牛と結婚させたが、機織を怠るようになったため、夫に会うのは一年に一度だけと制限されるようになった。これは、日本に伝わる七夕伝説のもととなった物語で、中国では南北朝時代の『荊楚歲時記』『文選』などに、日本では古くから『懷風藻』『万葉集』などにみられる。それが江戸時代に入ると民間にも広がった。――

解説を書いている馬琴(解)は、当時の中国から伝えられた百科事典や地理書などを用い、異国情報を得ていたのである。すでに本論文でも言及しているが、江戸時代、人々の間で人気があつた百科事典としては、例えば『三才図会』(一六〇七年)が挙げられる。それに倣って日本でも『和漢三才図会』(二七二二年)が刊行されたほどであった。そして、この二つの辞典は大航海時代のヨーロッパの地理的拡大を受け、世界観を大幅に拡大させた情報を盛り込んでいた。

本節で重要なのは、「女人国」がこの『三才図会』の「人物十二卷」に収められ、以下のように記述されていることである。

女人國在東南海上。水東流。昔有船舶。飄落其國群女携以歸。無不死者。有一智者。夜盜船得去。遂傳其事。女人遇南

風裸形感風而生。其國無男。(46)

【現代語訳】女人国は東南の海上にある。川が東に流れている。昔、船舶がその国に漂着すると、女達は船の者たちを家に連れ帰り、彼らは皆そこで死んだ。一人の知恵者がいて、夜に船を盗んで脱出し、その国のことをみんなに伝えた。女は南風が吹くと、裸形で風に感応して、それで子を産んだ。その国に男はいない。

この記事そのものは『和漢三才図会』の巻第十四「外夷人物」にも同じ内容で収録され、その下に「俗云女護島」と記されている。さらには「按本草綱目云。扶桑国東有女国。産鹹草葉。似邪蒿而氣香味鹹。彼人食之云云。以万国図觀之。女人国此彼亦有之。或有天竺西北大高海之西。或有日本東北」(47)【現代語訳】本草綱目によると、女国は扶桑国の東にある。塩辛い草が出る。邪蒿(セオリ)と似て、香味は塩辛い。彼らはそれを食べるといふ。万国図をみると、女人国もまた存在する。天竺(インド)西北、大高海の西にある。または日本の東北にある。)と、「女人国」の所在についての解説が付されている。当時の地理的知識の限界内で、それぞれの国について、伝説的周辺地域の地理の齟齬を整合しようとする努力が試みられていたことがうかがえる。

第二部第二章で検討した通り、『兎園小説』以前に記された『庭莊子珍物茶話』『風見草婦女節用』にも、「女人国」としての「女御の嶋」「女護の島」が登場するが、『和漢三才図会』の記述範囲にとどまっている。ところが、『兎園小説』に収められた「銀河織女に似たる事」による考証記録では、『和漢三才図会』の記述ではなく、『職方外紀』の「アマサニイ亜瑪作搦」を用いて「女人国」の説明が行われているのである。



【図三】『三才図会』 女人国



【図四】『和漢三才図会』

荒唐無稽な「女人国」を馬琴が実在する異国として証明しようとしたのは、『職方外紀』（一六二三年）の「女人国」に関する記述があつたからである。この書は、三〇年以上にわたつて中国に滞在し、中国全図を作成したイエズス会士ジュリオ・アレーニ（艾儒略）が、同じくイエズス会士マテオ・リッチの『坤輿万国全図』を増補して、漢文で記した世界地理書である。マテオ・リッチの『坤輿万国全図』にも、「女人国」の地図上の位置とそれに関する記述がみられる。そこには、「旧有此国。亦有男子。但多生男即殺之。今又為男子所併。徙存其名耳」。(48)【現代語訳】以前はこの国があつた。また男もいたが、しかし多く男が産まれるとすぐにこれを殺した。今はまた男性に（国が）併呑された。ただ、その名前だけは今に残っている。」と記されている。その際、この国を実在の土地と特定した上で、女のみが住んでいた国が現在では男も一緒に居住しているものと解されており、より現実の地理に近づいていることがうかがえる。

馬琴は、天保三年（一八三二）十一月二十六日と十二月八日、桂窓宛の手紙に、『職方外紀』を「珍書」として「秘蔵」していると記している。『職方外紀』は、禁書として公の場で読むことが禁じられていたが、一七〇八年に至り、一部を漢文から日本文（和文）に訳することが許可された。そこで、『職方外紀』の「女人国」についての記述を見てみよう。

〔韃而鞞〕

迤西舊有女國。曰亞瑪作擲。最驍勇善戰嘗破一名都。曰厄佛俗。即其地建一神廟。宏麗奇巧殆非思議所。及西國稱天下有七奇。此居其一國俗惟春月容男子。一至其地生子男輒殺也。今亦爲他國所併。存其名耳<sup>(49)</sup>

【現代語訳】迤西には、以前は女の国があつた。「亜瑪作擲」と言う。最も勇猛で、戦いがうまく、かつて、ある有名な都市を戦で打ち破つた。「厄佛俗」という。これはすなわちその地に神廟を建て、美しく細工の巧みなことは、不可思議なほどであつたからである。西国に噂が伝わり、「天下に七つの珍奇あり」といわれた。彼らの生活がそのひとつである。国の風俗に、春月になると、男子を国に入れる。一人がそこに行き、子が産まると、男はすぐに殺されてしまう。今は他国に併呑されている。ただ、その名前だけは今に残っている。

上記引用の「亜瑪作擲」に注目したい。これは『和漢三才図会』には見られない表記である。「銀河織女に似たること」に馬琴が付した解説では、「亜瑪作擲」が用いられていた。

『華夷通商考』（一六五九年）という地理書を書いた西川如見は、それがあまりにも不備なところを多く含んでいたため、密かに『職方外紀』を翻訳し『増補華夷通商考』を刊行した。<sup>(50)</sup>馬琴もこの地理書を所蔵していたことが彼の書簡からうかがえるが、<sup>(51)</sup>『兎園小説』の「女人国」を考証する際、この地理書を典拠として利用している。

さらに『増補華夷通商考』にも、「女人国」の記述がみられる。『増補華夷通商考』は一六五九年、天文学者・地理学者である西川如見によって著された、江戸時代最初の本格的な地理書である。その地理書では、中国、朝鮮、琉球、台湾、東南アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、ペルー、メキシコなど、実際に存在する国々に入り交じって、「女人国」が登場している。川村博忠は、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』やジュリオ・アレーニの『職方外紀』などが、日本だけではなくこの「女人国」をも、一六世紀のヨーロッパに荒唐無稽な説話の国として紹介していることを指摘しつつ、その説話が伝

承されていたのであろうと論じ、『増補華夷通商考』「外夷増付録」の「女人国」についても触れている。<sup>(52)</sup>『増補華夷通商考』卷之五の「外夷増附録」目次をみると、「韃靼」、「回回」、「亜瑪作擲」の順で国名があげられていて、その最後に「右ノ諸国ハ皆夷狄。戎蠻ニテ終ニ日本ニ来リシ事。無之ト云トモ。唐人紅毛等ノ説話ニ依テ記之者也」(【現代語訳】右の諸国はすべて夷狄・戎蛮<sup>(53)</sup>である。彼らは一度も日本に來たことはないが、唐人・紅毛人たちの説話によって、これを記した)とある。ここでも、「韃靼」(モンゴル系遊牧部族タタール)、「回回」(中央アジアイスラム教徒)、「亜瑪作擲」などの異国は、華夷思想に基づいて「夷狄。戎蠻」とされていることに注目したい。「韃靼(達旦)」「回回」など実在の人々や土地とともに、同じ程度の実在性を備えたものとして、「亜瑪作擲」が登場している。これといささか矛盾するのであるが、その後には、「海中異魚海獸」の題目で、「大魚類」「猛魚類」など奇妙な海の生物の目次が続いていることから、「亜瑪作擲」がそれらと同等の驚異の存在とされていることがわかる。「女人国」は「亜瑪作擲」という項目に挙がっている。

〔アマサニイ亜瑪作擲〕

達旦ノ西、地中海ニ近キ国ナリ。海陸トモニ道規未審。紅毛国ヨリ東南也。此国ノ人民総テ女人ナリ。勇強ニシテ善合戦スルト云。国法ニテ春月ノ間ニ男子ヲ他国ヨリ入ルトゾ。子ヲ産スル事アルニ、男子ナレハ則殺之ト云。但今代ハ隣国ノ為ニ奪レテ、男子共ニ生スル事如常トゾ。土産等未審<sup>(54)</sup>

【現代語訳】韃靼の西、地中海に近い国である。海路陸路ともに詳細はわかっていない。紅毛人の国の東南である。この国の人間はすべて女性である。勇猛で上手に戦いをするといわれている。国の法律で、春の間に男を他国より入れるという。子が産まれたとき、男子ならば、すぐにこれを殺すといわれている。ただ、現在は隣国に国を奪われ、普通の国のように男性とともに生活しているという。土地の産物などは不明である。

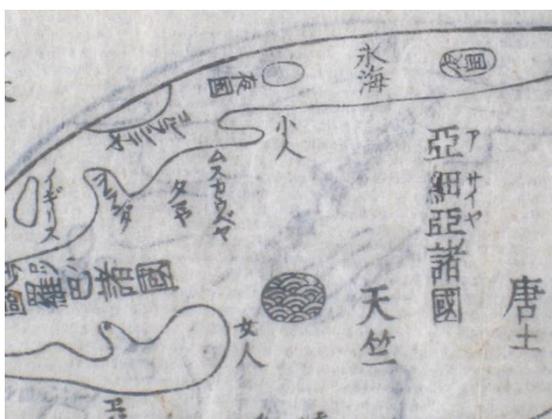
この記述においても、「亜瑪作擲」と呼ばれた「女人国」は、達旦(韃靼)のはるか西方、地中海の沿海に実在する国と

して記されている。その地理情報が『職方外紀』から『増補華夷通商考』に伝えられ、ほぼ同じ内容が含まれることになったわけである。

また、タイモン・スクルーチは、森島中良が『万国新話』（一七八九）で、「女国」と「亜媽撒擲」（アマゾン）を同じものとみなしていると指摘し、「ヨーロッパ人たちはこうした異種異類の物品を輸入したり、彼らを経験の中に位置づけ、新しい世界地図の表面に位置づけることで、現にもつと身近なものにしていた」（55）と述べている。『万国新話』の「女国」についての記述は、次のようである。



【図五】『増補華夷通商考』世界地図



【図六】『増補華夷通商考』の女人国

往昔韃の西に当りて女国あり。「アマサネ」亜媽撒擲といふ。もつとも繞勇にして戦を善くす。嘗て「エペス」厄弗俗と

いふ一つの名都を責め破り、其地に廟祠を建つ。基址を湖中に築く。……西洋の人、天下に七奇ありと称す。「七奇。蛮語にて「セイヘンウランドルレイキ」といふ。即七奇の義なり。又此詞を「テンプルハンエペス」といふ。虞初新志中に七奇図説あれども、はなはだ誤多くして取るにたらず。」はその一つに居る。春月たゞ一度。男子を容してその地に入らしめ、産む所の子男子なれば輒ちこれをころす。今は他国に併せられて唯その名を残す而已なり。「明人の説」家兄の訳説に曰く、古へ「インデヤの西北に「アマサネ」国あり。すなわち女国なり。今は亡びたり。又南亜墨利加洲中に「アマサン」亞媽鑽といふ国あり。此地に大山あり。其山中には婦人のみ住居す。春毎に他所の男子を掠め、もし平日此山中に迷ひ入る男子ある時は、矢庭に是を射殺すとぞ。其婦人の行跡亞細亞洲中の女国と似たる故、「アマサン」と名づけたるよしなり。「アマサン」は「アマサネ」なり。「アマサン」は今猶存す。家兄訳する所の「コウラントルコ」〔書名〕中の説なり。(56) (一) 割注)

ここでは、伝説の女人国に、「アマサネ」亞媽撒擲」「アマサン」亞媽鑽」の表記が用いられ、「アマサン」は「アマサネ」なり」とされている。「銀河織女に似たること」における「亞瑪作擲」という表記が用いられていないことに注目したい。

上記の引用で興味深いのは、アマゾン＝ヨーロッパ説と、アマゾン＝南アメリカ説とが両論併記されている点である。前半においては、「アマサネ」族が「エペス」すなわちエフェソス(Ephesus)の都市を破壊、そのあとに自国を建国したという、古典古代ギリシア以来のアマゾン族伝説が紹介されている。「セイヘンウランドルレイキ」とは、Seven Wonders of the Ancient World (エフェソスのアルテミス神殿、ガザの大ピラミッド、バビロニアの空中庭園、オリンピアのゼウス像、ハリカルナッソスの霊廟、ロードス島の巨像、アレクサンドリアの大灯台)を指している。先述の『職方外紀』の「天下七奇」に相当する。「テンプルハンエペス」は Temple of Ephesus、すなわち世界七不思議のひとつ、エフェソス(アマゾン族の都市)のアルテミス神殿である。鎖国政策下にあったにもかかわらず、『万国新話』の著者・森島中良は、これだけの情報を得ていたのである。

上記の引用の後半、「(明人の説)」以下においては、「アマサネ」は「インデヤ」、すなわちインド亜大陸の西北にあった「女国」であるがすでに滅びたとされ、「南亜墨利加洲」にも「アマサン」亞媽鑽がある」とされている。

『兎園小説』所収の「銀河織女に似たる事」の本文を書いた亀屋久右衛門は、「女人国」を説明するにあたって、旧来の知識である「七夕説話」と「南亜米利加」の「アマソウネン」を組み合わせて解説している。それに対し、馬琴はさらに古代ギリシアのアマゾン族伝説に言及した。馬琴による「銀河織女に似たる事」の「女人国」を解説した内容が、『職方外紀』とほぼ一致しているように、兎園会の会員たちのこのような理解を可能にしていたのが、彼らが鎖国にも関わらず入手していた西洋由来の情報であった。

## 第七節 想像の異国と脅威の異国——「うつろ舟の蛮女」

文化・文政期に入り、江戸の人々は、与えられる情報の乏しさから〈異国〉を不可思議な世界と見做すがゆえに、流通の過程で不可思議さを肥大化させ、荒唐無稽な伝説に変容させていったと思われる。その一方で、〈異国〉を日本の辺境を侵犯するばかりでなく、やがては自分たちの日常に侵入してくる可能性を持つ現実の脅威として捉えることもあった。これらについては、一方では不可思議の過剰として、一方では脅威のそれとして理解できであろう。

このような荒唐無稽なファンタジーと、外部から齎される脅威に対する畏怖の混在を検証するために、常陸の浜辺に漂着した異国船および異国女性についての話を見てみたい。この話の題目は「うつろ舟の蛮女」というもので、異国船と異国人と見られるものについて記されたものであるが、どちらも奇怪で不思議なものとして描かれている。本節の主張のひとつは、「うつろ舟」に乗って漂着した異様な風体で言語が通じない女性の姿には、『兎園小説』の時代、ロシアなどの異国船に対する危機感が高まっていた時期の不安が投影されている、というものである。さらに「うつろ舟」の出来事を、より古い伝説（「蚕伝説」）や、インド・中国・日本（本朝）からなる旧来の世界観の枠組みで説明しているという点も注目される。これ

は、そのような西洋に由来する脅威をもたらす新奇なるもの、旧来の世界観では説明できないものに対する不安と恐怖を紛らわし、押さえ込み、幕藩体制のなかに包摂しようとする試みであったと言える。

「うつろ舟の蛮女」は馬琴の息子である琴嶺が披講したと記録されている。だが、実際には馬琴が息子のために書き直したか、または最初から代作をしたかのどちらかであると指摘されている。<sup>(57)</sup>

記録の内容は、「箱を持っている蛮女」である「うつろ舟」の異国女性と、その女性が乗ってきたと思われる円盤形の「うつろ舟」の話であり、その絵も載せられている。本文は以下のようになっている。

享和三年癸亥春二月廿二日の午の時ばかりに、当時寄合席小笠原越中守〔高四千石、〕知行所常陸国はらやどりといふ浜にて、沖のかたに舟の如きもの遙に見えしかば、浦人等小船あまた漕ぎ出だしつゝ、遂に浜辺に引きつけてよく見るに、その舟のかたち、譬へば香盒ハコのごとくにしてまろく長さ三間あまり、上は硝子障子にして、松脂チヤンをもて塗りつめ、底は鉄板がねを段々筋のごとくに張りたり。海巖にあたるとも打ち砕かれざる為なるべし。上より内の透き徹りて隠れなきを、みな立ちより見てけるに、そのかたち異様なるひとりの婦人ぞあたりける。<sup>(58)</sup>

この事件が起きた享和三年は一八〇三年であり、『兎園小説』成立（一八二五）成立の二十年あまり前のことである。その記述で注目されるのは、異国の船の特異なありさまであり、それが未確認飛行物体（UFO）すら連想させるような特異な形態、従来の乗り物の概念を大きく超える形をしている、という点である。しかしながら、鉄板で船を覆い、船室に当たる部分にはガラス窓がある。「チャン」（コールタールのピッチと類似する）で腐蝕を止めるといった外装が施されている点については、日本沿海に出没する外国船の形容と類似する部分もある。

その船に乗っていた異国の女性の姿は「異様」を極めていた。その「異様」な姿を馬琴はロシアの女性のファッションと

して説明している。馬琴はこの婦人について、「そが眉と髪イレガミの毛の赤かるに、その顔も桃色にて、頭髮は仮髪イレガミなるが、白く長くして背ソレラに垂れたり。そは獸の毛か。より糸か」<sup>(59)</sup>と記述する。馬琴はそれに頭書を加え（解は馬琴である）、「解按ずるに、二露西亞一見録人物の条下に云、女の衣服が筒袖にて腰より上を、細く仕立云々また髪イレガミの毛は、白き粉をぬりかけ結び申候云々、これによりて見るときは、この蛮女の頭髻の白きも白き粉を塗りたるならん。露西亞属国の婦人にやありけんか。なほ考ふべし」<sup>(60)</sup>と推測し、ロシアからの異国人、あるいは「露西亞属国の婦人」である可能性を示唆している。「髪イレガミの毛は、白き粉をぬりかけ」とは、当時ヨーロッパで鬘ペルケ(peruke)にふりかけられていた白い粉のことを指すと思われる。

さらに注目されるのは、うつろ舟の内部に、日本人には解読不可能な文字（「蛮字」）が記されていたという記述があることである。

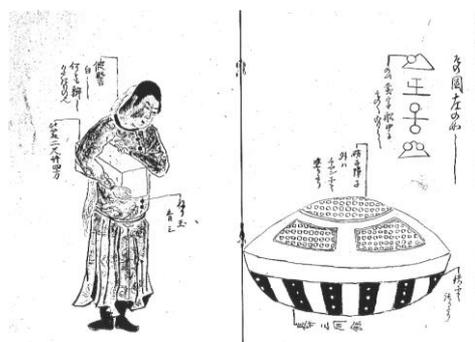
又その舟の中に、※※※※等の蠻字の多くありしといふによりて、後におもふに、ちかきころ浦賀の沖に歇カ、りたるイギリス船にも、これらの蠻字ありけり。かゝれば件の蠻女はイギリスか。もしくはベンガラ、もしくはアメリカなどの蠻王（61）の女なりけんか。

「※※※※等の蛮字」の※※※※には、挿絵に書き込まれている文字が見える（【図九】）。この女性とは、話し言葉でのコミュニケーションはもとより、漢字文化圏の者同士であれば可能なはずの筆談によるコミュニケーションも不可能であった。彼女は馬琴の国学化された中華世界の外部からやってくる存在であり、華夷世界観にそって「蠻」と呼ばれている。馬琴は本文の最後で、「かゝれば件の蛮女はイギリスか。もしくはベンガラ、もしくはアメリカなどの蛮王の女なりけんか。これも亦知るべからず」と述べている。「ベンガル」は、イギリス東インド会社の本拠地があった、北インドのベンガル地方を指している。「ちかきころ浦賀の沖に歇カ、りたるイギリス船」というのは、一八一八年、イギリス人が相模浦賀に来航して通商を要求した件を指すものと考えられる。

この異国の女性は、経費節約と支配層の事なかれ主義・先例主義のために、ふたたび海に押し流されてしまう。



【図七】『兎園小説』「うつろ舟の蛮女」



【図八】『弘賢随筆』「うつろ舟の蛮女」



【図九】挿絵文字部分拡大

この事、官府へ聞えあげ奉りては、雑費も大かたならぬに、かゝるものをば突き流したる先例もあればとて、又もとのごとく船に乗せて、沖へ引き出だしつゝ推し流したりとなん。もし仁人の心もてせば、かくまでにはあるまじきを、その蛮女の不幸なるべし。(62)

常陸の支配層がこのような「仁人の心」のない行動をとったのは、彼らが、「官府」すなわち江戸幕府に異国の女性が漂着したことを知られば面倒なことになりそうでもあり、費用もかなりかかると考えたためであった。結局彼らは、漂流者を再び沖に流した「先例」に従ったという。

「うつろ舟の蛮女」の話には、その当時、すなわち琴嶺が「うつろ舟の蛮女」を執筆し、馬琴が解説を付した一八二〇年代の時代背景と対外関係が強く関連している。この情報の原型は、水戸藩内に漂着した露国の女性の遺骸を見た体験の語りだったのであろう。常陸国の水戸近海にはじめて異国船が姿を現したのは、文化四年（一八〇七）のことである。この時以来、国籍不明の異国船が水戸近海に出没するようになったが、特に文政六年（一八二三）六月九日と同七年（一八二四）五月二八日の事件が、水戸の歴史にとって特筆すべきことであるとされる。後者の事件は「常陸大津浜事件」と呼ばれ、イギリス捕鯨船員二人が大津浜に上陸し、薪水を要求したが、全員が水戸藩に逮捕されたというものである。(63)この年に兔園会が結成されたが、水戸の異国船事件は、江戸にまで伝わっていたのであろう。この事件は幕府に大きな衝撃を与え、幕府がその翌年（一八二五年）、「異国船打払令」を発令する際、重要な要因ともなった。その「常陸大津浜事件」の時、筆談役として派遣された人物が、水戸学の創始者のひとり会沢正志斎であり、彼はこの事件をきっかけに対外的危機意識を高め、『新論』（一八二五年）を完成した。また、この事件を背景にこれもまた水戸学の創始者のひとりである藤田東湖は、自伝的回顧録の『回天詩史』（一八四四年）を著し、尊王攘夷の志士らに愛読された。彼は『回天詩史』巻上の序文の後、「三決死矣而不死」のところに「常陸大津浜事件」についての回想文をしたためている。水戸藩の政治家、儒者などは、この事件を異国からの侵略行動として捉えていた。(64)

「うつろ舟の蛮女」の記事にある「ちかきころ浦賀の沖に歇（カゝ）りたるイギリス船」とは、一八一八年、イギリス人ゴードンが相模浦賀に来航して通商を要求した件を指すと考えられることについては、先述したとおりである。『兎園小説拾遺』第二において、馬琴は「イギリス船図説」を記している。「文政元戌五月十三日、相州浦賀湊へ漂着の異國船」についての記事には、「イギリスの浦賀着船せしは、文政元年五月と、同五年七月と両度あり」（<sup>65</sup>）とある。イギリスの捕鯨船が「（鯨の）あぶらをしぼり貯て……肉はとらずして皆捨る」（<sup>66</sup>）のは、馬琴には驚きであったようだ。来航するイギリス船が、いかに大きな脅威であったかは、馬琴が浦賀六左衛門の話として記録している文章からわかる。「騒動限りなかりし」なか、役人のうち、「蠻学」に詳しい者が多く浦賀へ行った。「はじめ彼船に近づきて、船中を展検せよといふに、誰も怕れて得ゆかざりし」（<sup>67</sup>）というありさまであったという。割注で馬琴は、「雑説はなほ多かりしを、はゞかるよしなきにあらねば、書もとゞめずにやみにき」（<sup>68</sup>）と記している。外国船にまつわる噂について書くことが、鎖国政策の禁忌にふれるもので、馬琴がそれに極めて敏感であったことがわかる。

この「うつろ舟」の話は、柳田國男「妹の力」中の「うつろ舟の話」（<sup>69</sup>）、小松和彦の「海上他界の思想——「うつろ舟」を中心に」（<sup>70</sup>）など、民俗学の側面から論じられてきた。柳田は、各地の「うつろ舟」の伝説を紹介し、類似の話として瓢金色の卵から出た国王（新羅の朴姓一族の祖先譚）の伝説もあげている。小松は、「海上の他界から現世に来るために神々が用いる乗物のことで、この乗物は神話的次元においては〈船〉として、とりわけ中が空っぽになっている船いわゆる「うつろ舟」として描かれている。神霊は、この中空の船の中に隠されて地上に示現する」として、海上他界を示唆する話に「うつろ舟」が深く関係することを指摘している。

この話で注目すべき点は、「うつろ舟」の絵と、この舟が漂着した常陸という場所である。常陸には、筑波山の周辺に「蚕伝説」が伝わるが、この話と「うつろ舟」には関連性が見られる。それに関しては、既に佐藤次男（<sup>71</sup>）、加門正一（<sup>72</sup>）が「うつろ舟」の話と養蚕起源との関連性について指摘している。加門は『江戸「うつろ舟」ミステリー』で、「うつろ舟」の資料として、「瓦版刷り物」（一八〇四頃？）、『鶯宿雜記』（一八一五頃？）、『兎園小説』（一八二五）、『弘賢隨筆』（一八二五）、

『梅の塵』（一八四四）などをあげ、その絵と内容について詳細に説明している。「蚕伝説」が収められた「蚕影山畧縁起」には二種類<sup>(73)</sup>がある。ここでその内容を確認してみよう。以下がその内容で、中野猛編の『略縁起集成』から引用する。

天地開闢筑波山の麓神郡豊浦湊蚕影山大権現は神代の祭神三座にして。中殿ハ稚産霊命。左右は垣山姫命。木花開耶姫命の三神垂跡坐して。本朝新桑繭の濫觴也。往昔人皇十代崇神天皇の御宇我朝に渡らせ給へ。其後此里に於て蚕養の原始を尋るに、人王三十代欽明天皇の御時。北天竺旧仲国といふあり、帝を霖夷大王と申し。御后を光契夫人と申せいに、姫君一人おわしまし。御名を金色姫と申しき、……大王の仰けるは、汝世の常の人にあらず、是しかながらけい母の所為なるべし、此国に於て長くうき目を見せんより。いかなる国へも流し捨んと思召、桑の木のうちほ船を造り、姫君に宝珠をさつけ。御身には一寸八分の勢至ぼさつを守ふくろに掛させ給へ、汝まつたく、佛神の化身なれば仏法流布の国に流れ寄て、衆生をもさいどすべしと彼舟につくりこめ。御涙と共に沖へぞ船を出させ給へ、……此秋津洲の東の果。常陸国筑波根豊浦湊に着にけり<sup>(74)</sup>

「うつほ船」に乗せられ、「常陸国筑波根豊浦湊」に流されてきた王女は、まさに馬琴が記す「常陸国はらやどりといふ浜」に漂流してきた「うつろ舟」の蛮女に似ている。また、信多純一<sup>(75)</sup>は、『富士山の本地』の金色姫説話と「うつろ舟」の話が深く関連していることを指摘し、馬琴所蔵本（筑波大学図書館）『富士山の本地』から『八犬伝』創作への影響関係を論じている。『富士山の本地』では、金色姫が桑の木の「うつろぶね」に乗って流された挿絵があり、前述した養蚕伝説の「蚕影山畧縁起」とも話が似ている。

かくてきさきは、こんじき女の、しゅく山より。かへらせ給ふよしを聞きしめし……こんじき女を、うつほぶねに、つくりこめ。さう海にながすべし。万事はたのむとの給へは。とんよくぶたふの官人とも、やすくと御うけを申し。桑

の木のうつほぶねに。金色女をつくりこめ。万里のはたうに、ながしたてまつる。……御ふねは。数千万里のさう海をながれ行。ふさう大につほん国の東海。ひたちの国、とよらのみなどに。つきにけり(76)



【図十】『富士山の本地』「うつろ舟」



【図十一】『富士山の本地』「金色姫」と「うつろ舟」

以上のように、兎園会で「うつろ舟の蛮女」が語られ記録される際に、伝承として古くから常陸の国に伝わっていた「蛮伝説」が枠組みとして用いられていることについては、先行研究と「蚕影山畧縁起」、「富士山の本地」などの記述から確認することができた。

『兎園小説』の「うつろ舟の蛮女」の話でも、蛮女は「蚕王の女」であると説明され、高貴の女性の漂流譚になっている。しかし、王女と蛮女の出身国は異なっている。王女の出身地が「北天竺旧仲国」（インド北部）であるのに対し、蛮女はイギ

リス、ベンガラ、アメリカ、もしくはロシアのいずれかであろうと推測されている。ベンガラ（＝ベンガル）は北天竺と同一の地域であるが、西洋の一国として認識されていたのである。その人物は、絵では中国的、あるいは東アジア的な要素がふんだんに付加された女性として描かれている。異国船も小さな円盤形のものであり、西洋的な船とはかけ離れている。

馬琴らの地理観は、もはや天竺・震旦（中国）・本朝の三国を世界と認識するところを大きく逸脱していて、西洋をも視野に入れた近世地理観を構築している。しかし、馬琴は明らかに「蚕伝説」を意識しているのであり、「うつろ舟の蛮女」に描かれる異人女性も「蚕伝説」の時代そのままの、「北天竺旧仲国」のイメージで描かれている。これは何を意味しているのだろうか。兔園会のメンバーは新奇な話を好んで披露していた。これに対し、新しい情報をめぐって、事件現場の人々やその情報を流通する人々は、古い知の枠組みを用いていたということになるであろう。ここに、〈知〉の新旧が都と地方の格差に反映しているのうかがえる。それとともに、新しい地理情報を地方の人々に伝えるためには、古い〈知〉の枠組としての宗教的話型、経書教訓に依拠せざるをえなかったということも理解される。このことは、馬琴の読本の異国表象が、中世以前の異国表象に置き換えられていることと関係していると言えよう。生の異国表象などは、知識人の馬琴にとっては驚異であつても、読本の購読者に理解され納得されることはなかったであろう。かくして馬琴は、異国の驚異を異国の脅威・驚異へと移行させたのである。以上の追究から、「うつろ舟」の出来事をより古い伝説（「蚕伝説」）や、インド・中国・日本（本朝）からなる旧来の世界観の枠組みで説明することにより、馬琴が西洋に由来する脅威をもたらす新奇なるもの、旧来の世界観では説明できないものに対する不安と恐怖を紛らわし、押さえ込み、幕藩体制の中に包摂しようとする試みを行ったということが確認できよう。

## 第八節 おわりに

本章では馬琴個人による考証熱のみならず、それが彼の周囲の人をも巻き込んだものであったこと、そしてその集団的な

考証熱が『兎園小説』という作品（群）を生み出したことを確認した。それはいわば珍奇なものを求める欲望の産物であった。ただこれは、詳しく見ると、単なる伝統的想像力の産物ではなかった。ある場合は、馬琴などの個人的な出会いに基づくものであり、ある場合には、中国伝来あるいはヨーロッパ伝来の物や知識に基づくものであった。それは、現実と幻想のあいだをたゆたう異界や異国の存在に関するものだったのである。本章では特に女に関する表象と、それに関連して「うつろ舟」に関する表象を取り上げた。これにより、ロシア船やイギリス船の来航の脅威を反映していると思われる「うつろ舟の蛮女」の実話を、より古い伝説（「蚕伝説」）や旧来の世界観の枠組みで説明する試みがなされているということを確認した。そこにはロシア船やイギリス船の来航などの、現実的な異国がもたらす脅威から目をそらし、旧来の知の枠組みで捕捉可能な驚異物語の枠組みに送り戻そうとする理念操作を見ることができた。これらの具体例については、先行研究がほとんど存在せず、数多くの事例を列挙することにもなったが、さらに、馬琴やその同時代人における現実の異国への反応と関連させ、検討を深めることが必要であろう。

【注】

- (1) 『兎園小説』(『日本随筆大成』(第二期)一、吉川弘文館、一九七三年)、『兎園小説外集』(『日本随筆大成』(第二期)三、吉川弘文館、一九七四年)、『兎園小説別集』(『日本随筆大成』(第二期)四、吉川弘文館、一九七四年)、『兎園小説余録』『兎園小説拾遺』(『日本随筆大成』(第二期)五、吉川弘文館、一九七四年)。
- (2) 『新燕石十種』第六卷(中央公論社、一九八一年)・第七卷(一九八二年)。
- (3) 『日本随筆大成』(第一期)一 吉川弘文館、一九七五年、一六七頁。
- (4) 大高洋司「文化七、八年の馬琴——考証と読本——」『近世の説話』清文堂、一九九五年、三八八頁。
- (5) 播本眞一「馬琴と異国」『江戸文学』ぺりかん社、二〇〇五年、一五二頁。
- (6) 野口武彦は考証について、「基本にあるのは文献批判(テキスト・クリティック)の手順である。第一に文献を集め、第二にこれを校訂し、第三に信拠できるテキストたることを考証し、第四にやっとそれを譜録する。漢語文化の世界での文献批判学がこうして方法化されたといつてよい。……考証随筆という言葉ができあがっているが、実際には相異なる二つのカテゴリを混同しているのである。考証とは学問の方法である。随筆とはもともと文章のスタイルであり、やがて一種の自由型競技的な文字ジャンルになる。後世いかにくだけた風格のものになろうとも、随筆にはこの前史的な残像がともなっていたのである」と論じている。野口武彦「考証随筆の想像力」『文学界』文藝春秋、一九九六年、二四八頁。
- (7) 『日本随筆大成』(第二期)一九 吉川弘文館、一九七五年、二七二頁。
- (8) 同書。
- (9) 後藤丹治校注『椿説弓張月上』岩波書店、一九五八年、七三頁。
- (10) 『耽奇漫録上』吉川弘文館、一九九三年、一頁。

- (11) 同書、六頁。
- (12) 白石良夫・法月敏彦・渡辺憲司著『江戸のノンフィクション』東京書籍、一九九三年、一四四頁
- (13) 『耽奇漫録』に関しては、『耽奇漫録上』（吉川弘文館、一九九三年）の小出昌洋による改題（一〇一頁）、『日本古典文学大辞典』第四卷（一九八四年）『耽奇漫録』概説を参照されたい（二〇五～二〇六頁）。
- (14) 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第一卷八木書店、二〇〇二年、一八二～一八三頁。
- (15) 『大漢和辞典』巻一、大修館書店、一九八九年。
- (16) 『日本国語大辞典』第二版、第九卷、小学館、二〇〇一年。
- (17) 徳田武・横山邦治校注『繁野話 曲亭伝奇花釵児 催馬楽奇談 鳥辺山調綾』岩波書店、一九九二、一一二九頁。
- (18) 大高洋司「兔園小説集」『研究資料日本古典文学 第八卷 随筆文学』明治書院、三八二頁。
- (19) 兔園会のメンバーについては、『日本随筆大成』（第二期）一（吉川弘文館、一九七三年、三～五頁）の「兔園小説」に関する解説部分、『国書人名辞典』第一卷～第四卷（岩波書店、一九九三～一九九八年）を参照した。
- (20) 馬琴の書いた書簡については、柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第一卷～第六卷・別巻（八木書店、二〇〇二～二〇〇四年）を参照した。
- (21) 第十二回耽奇会に文宝堂が出品した「大名慳食の匣」に端を発した論争。
- (22) 法月敏彦「奇に耽る江戸の「知的巨人」たち」『歴史読本』新人物往来社、一九九七年、二二八～二二九頁。
- (23) 暉峻康隆他校訂『馬琴日記』第三卷 中央公論社、一九七三年四、三五頁。
- (24) 『馬琴書翰集成』第六卷、一三三頁。
- (25) 『馬琴書翰集成』第一卷、三九～四十頁。
- (26) 『馬琴書翰集成』第三卷、一三一頁。
- (27) 『馬琴書翰集成』第一卷、一九七頁。

- (28) 『馬琴書翰集成』第三卷、一三二頁。
- (29) 川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』ペリかん社、一九九九年、九四〜九五頁。
- (30) 『兔園小説』は『弘賢随筆』(内閣文庫所蔵本)七冊、一二冊、二三冊、二八冊、三一冊、四〇冊に収められている。
- (31) 『馬琴書翰集成』第六卷、一八四頁。
- (32) 中村幸彦「馬琴の書画会―賢愚同袋(六)―」『国語国文』京都大学、一九四三年。
- (33) 『馬琴書翰集成』第四卷、二九六〜二九七頁。
- (34) 小出昌洋「耽奇漫録解題」『耽奇漫録上』吉川弘文館、一九九三年、八頁。
- (35) 『馬琴書翰集成』第一卷、二〇一頁。
- (36) 『馬琴書翰集成』第二卷、二七八頁。
- (37) 『馬琴書翰集成』第五卷、二二九頁。
- (38) 『馬琴書翰集成』第二卷、二七八頁。
- (39) 『兔園小説外集』改題、二頁。
- (40) 大高洋司「兔園小説集」『研究資料日本古典文学 第八卷 随筆文学』明治書院、一九八三年、三八二頁。
- (41) 『馬琴日記』第一卷、一三頁。
- (42) 『兔園小説』二八二頁。
- (43) 播本眞一「馬琴と異国」『江戸文学』ペリかん社、二〇〇五年、一六〇〜一六一頁。
- (44) 『日本随筆大成』四七頁。
- (45) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、一九六〇年。ルネ・マルタン監修・松村一男訳『図説ギリシア・ローマ神話文化事典』原書房、一九九七年を参照。
- (46) 『三才図会』「人物十二卷」は、筑波大学図書館本による。また、以下の漢文の句読点は論者による。

- (47) 原文は筑波大学図書館本によるもので、島田勇雄他訳注『和漢三才図会三』（東洋文庫 平凡社、一九八六年）を参照した。
- (48) 『坤輿万国全図』は、東北大学図書館の古地図サイトを参照した。
- (49) 『守山閣叢書 職方外紀』巻一（嚴一萍選輯『百部叢書集成』藝文印書館（台北）、一九六八年）による。
- (50) 鮎澤信太郎「艾儒略の職方外紀に就いて」『地球』第三二卷第五号（地球学団、一九三五、三三三～三四頁）。
- (51) 『馬琴書翰集成』第二卷、二五六頁、二六九頁、二七一頁。『馬琴書翰集成』第三卷、三頁、四八～五十頁、五六頁、七三頁、七七頁、八九頁、一一三頁。
- (52) 川村博忠『近世日本の世界像』ぺりかん社、二〇〇三年、一〇三～一〇四頁。
- (53) 四方の異民族をさす。夷は東、狄は北、戎は西、蠻は南である。
- (54) 筑波大学図書館本による。
- (55) タイモン・スクリーチ『大江戸異人往来』筑摩書房、二〇〇八年、三〇頁。
- (56) 小野忠重編『紅毛雑話』双林社、一九四三年、一九四～一九五頁。
- (57) 森銑三「むだばなし（一）」（前掲書、『日本随筆大成』第二期）一の付録、二頁。
- (58) 『兔園小説一』、二七九頁。
- (59) 同書、二八〇頁。
- (60) 同書、二八一頁。
- (61) 同書。
- (62) 同書。
- (63) 水戸市史編委員会『水戸市史』中巻（二）水戸市役所、一九六九年、四六〇頁。
- (64) 同書。

- (65) 日本随筆大成編集部「イギリス船図説」『日本随筆大成五』吉川弘文館、一九七四年、一〇九頁。
- (66) 同書。
- (67) 同書、一一一頁。
- (68) 同書。
- (69) 柳田國男『定本柳田國男集』第九卷 筑摩書房、一九六二年、一六九～一八七頁。
- (70) 小松和彦『神々の精神史』伝統と現代社、一九七八年、一九八～二二七頁。
- (71) 佐藤次男「常陸海浜奇談(一)——うつろ船の異国の美人——」『郷土文化』茨城県郷土文化研究会、一九九一年、七六～八一頁。同「常陸海浜奇談(二)——続うつろ船の異国の美人——」『郷土文化』茨城県郷土文化研究会、一九九二年、一一五～一一九頁。
- (72) 加門正一『江戸「うつろ舟」ミステリー』楽工社、二〇〇九年、一一六～一二〇頁。
- (73) 中野猛編『略縁起集成』第二卷 勉誠社、一九九六年、一二～一六頁。稻垣泰一編「蚕影山畧縁起」『寺社略縁起類聚』一 勉誠社、一九九八年、八三～八七頁。
- (74) 『略縁起集成』第二卷、十二～一三頁。
- (75) 信多純一『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』岩波書店、二〇〇四年、一二八頁。
- (76) 横山重編『室町時代物語集』第二 井上書房、一九六二年。

## 第五章 曲亭馬琴の異国認識——只野真葛『独考』への反論を通して

### 第一節 はじめに

本論文では『白石叢書』から兔園会にいたるまで、曲亭馬琴が様々な異国情報のルートを持っていたことを確認した。それにも関わらず、第二部第三章で取り上げた『椿説弓張月』等を例外として、馬琴には異国を舞台にして書かれた作品は意外なほど少ない。彼の異国への関心と作品執筆との間に、なぜこのような矛盾が生じたか、この疑問を解く一つの手がかりとして、只野真葛の『独考』(一八一七年)と馬琴の反論『独考論』(一八一九年)を取り上げることにした。

真葛の伝記、交友関係、執筆活動、作品などについては、門玲子『わが真葛物語』、関民子『只野真葛』、ベティーナ・グラムリヒールオカ著・上野未央訳『只野真葛論—男のように考える女—』に詳しい。<sup>(1)</sup> その他に真葛を、女性解放論を述べた女性史上の先覚者として論じたもの、<sup>(2)</sup> 〈性差と表現〉の自覚をもって、「体制から疎外された性である女性が、体制への本質的批判者たりうる」可能性を提示した女性作家として評価したものがある。<sup>(3)</sup> 真葛の著作『独考』を主に論じたものとしては、『独考』の目的と思惟方法を「経世済民」「啓蒙的な志」で捉えた、鈴木よね子『『独考』試論—その方法と実学・国学の影響』、<sup>(4)</sup> 真葛の思想を国学と蘭学から論じた、前田勉「只野真葛の思想—国学と蘭学との交錯—」<sup>(5)</sup> などが挙げられる。馬琴の『独考論』と比較し、その見解の差異と特徴を論じたものとしては、鈴木よね子「反真葛論—『独考』一件をめぐる—」、<sup>(6)</sup> 門玲子「只野真葛—その文学と思想—孤独な挑戦者—」<sup>(7)</sup> などがある。さらに真葛の『独考』での儒教批判が「女の闘争」とは正反対の、男に気に入られるための策」であり、真葛を評価してきた従来の先行研究を批判した論文もある。<sup>(8)</sup> 本章では以上の先行研究に負うところが多いが、特に真葛と馬琴の異国認識の差異について分析を行う。両者の異国に関する認識をめぐる、そのどちらが優れているかという評価ではなく、その認識の差異を主な主題とし、馬琴の異国認識を追究することが本章の目的である。

真葛は『独考』を馬琴の元に送って寄こしたが、それは馬琴に刊行の斡旋をしてもらう目的であった。結局、この著作は刊行されなかったが、馬琴はただちに、その原著よりも大部の『独考論』という批判書を著した。『独考』の内容は学問、社会の在り方、交易、結婚制度など多岐に渡る。もともと、その中でも異国をどう見なければならぬのかについて、真葛は興味ある見解を示している。それらには、馬琴の日頃の考え方、そして彼の思想——馬琴の異国認識の根幹を支える儒学擁護、いわゆる保守的な異国観、ロシアの脅威への態度など——と対立するところが多くあった。そこで、彼としては反論の執筆を誘発されたわけである。

真葛は仙台藩医の工藤平助（一七三四年～一八〇一年）の娘として生まれた女流作家である。彼女に大きな影響を与えた父の工藤平助は、江戸中期の経世家、医者である。江戸詰仙台藩医のまま田沼意次の幕政を支え、蘭学的知見に基づく政策論の提供者でもあった。いわゆる当時の洋学者の一人と見なされている。彼は異国情報に詳しく、松前藩との交流、あるいは長崎の通詞などとの交際によって異国の情報によく触れている。林子平（一七三八年～一七九三年）の『海国兵談』（第一巻は一七八七年、全巻は一七九一年）の序文を執筆するとともに、ロシアに対する国防問題や交易などを自ら扱い、『赤蝦夷風説考』（一七八三年）を著述している。また、宝暦期（一七五一年～一七六四年）に長崎の阿蘭陀通詞で蘭方医の吉雄耕牛を知り、安永期（一七七二年～一七八一年）に江戸蘭学社中の杉田玄白、前野良沢、中川淳庵、桂川甫周らと交際した。実は平助は蘭語を読むことができなかったのだが、彼らの蘭学的知見を吸収して西洋事情を認識し、政策献言の根拠とした。天明三年（一七八三年）幕府に提出した『赤蝦夷風説考』上下二巻は、ロシア南下の実情、ロシア・カムチャツカの歴史と現状を述べ、北方警備、貿易開放、国力増強を説き策論した著作である。天明六年（一七八六）、良沢の弟子の大槻玄沢の蘭学に着目し、一関藩から仙台藩に転籍させるほどの力もあった。<sup>9</sup>

真葛はこのような異国情報に精通した父からの影響もあり、『独考』では現在から見ても開明的な異国観や国際交渉を想定した経世論を主張している。その一方で、江戸後期の進歩的な女性として、家父長的な制度に反発する見解も提示している。魅力的な人物であったことをうかがわせる。彼女は正式な教育を受けておらず、憶測に依存する箇所も多くみられる。

ここではその主張の正確さを判断するのではなく、彼女の思想を馬琴の批判と対照しながら、馬琴の異国認識について追究する。まず真葛の異国認識を考察し、それに対して現代的観点からすると伝統的で保守的に見られる馬琴が、具体的にどのような異国認識をもって反論したのかを、主な議論の対象とする。すなわち馬琴の批判を扱う。そして馬琴の保守性を嫌悪し否定しようとするよりも、むしろその保守性にこそ、読本作家たる馬琴の本領があることに改めて注目したい。保守的で通俗性を持つことは、馬琴の職業倫理である。馬琴の背後には、読本の購読者たる江戸町人の保守性が大きく広がっていたからである。

## 第二節 只野真葛の「国の全体」という異国認識

すでに述べたように、『独考』は真葛という特異な作家が多岐にわたる話題を論じた論である。したがって本節と次節では、彼女の異国認識に関わる議論、特に「国の全体」と「天地の間の拍子」について略述する。

真葛のいう「国の全体」とは、要するに国家のあり方をめぐる議論に関わることである。幕藩体制による日本列島の分権化に慣れ親しんできた多くの日本人とは異なり、真葛は「国の全体」を境界で囲まれた領土として認識するのではなく、他国との関係概念によって「国の全体」を捉えようとしていた。

我国のふりを浅々しと歎く故は、書を開て唐・日本の、昔より有こしことをだに知れば、みづからものしり人とおもひて心をゆだね、国の全体などは、かえり見せんものぞとさたする人なし。……文字を横なす国のふりに習ひて、こゝろざしを嗣つゝ、国の全体をよくかへり見、外国のよそ目はづかしからぬことをはからんと、おもふ人もがな。なむればきゆる砂糖さとうをしも、万代に朽ぬあかゞねにかへ来りしを、心浅しと、他の国の人は思おとしつらんを、いとはずかし。

書をちからにする唐人の、心かためんにして、地をはなれず。さる故に、国の全体を見ることかたし。『独考』「独考卷の中抄録」(10)

「かえり見せんものぞとさたする人なし」というのは、熟慮してみようと口にする人もいないということである。「国の全体」を真正面に据えて検討しようとする知識人が、この日本にはいないということである。知識人は、古代中国(「唐」)の古典としての漢籍を祖述すればよいと考えているために、時代の変化に対応した学、あるいは思想の構築をしようとしなからである。真葛や馬琴が生きていた時代は、特に西洋(ロシアを含む)の「異国」においてすでに「絶対主義国家」(11)が形成されていた。ところが、中国古典の知識の博大さを自慢するだけの知識人は、流動する時代の現実を直視しようとしていない。これが真葛の認識だったのである。

真葛が繰り返し憤懣を披瀝するこの「国の全体」に対して無理解な知識人の存在は、非難の対象でしかない。真葛がこのような認識を持つに至ったのも、親の工藤平助の薰陶によるところが大きかった。それは、前述の引用中にある言葉、「なむればきゆる砂糖(きたう)をしも、万代に朽ぬあかゞねにかへ来りしを、心浅しと、他の国の人は思おとしつらんを、いとほづかし」という部分が、実は父の言葉の引用であるという点にうかがえる。(12)父の皮肉な筆致は、彼自身の重商主義的な思想を明らかにしており、鎖国にすっかりなじんでしまった知識人に見られる「他国」との交易をめぐる無知を批判する意識を示唆している。(13)このような当代の知識人は、国家的規模を意味する「国の全体」に無理解である。同時に、「他国」との国際関係が、けっして華夷観念で済ませられるようなものではやなくなっていることすら理解しようとしな。というのも、中華思想に侵された儒学からしか知識を得ていない見識の狭さが、異国理解を阻んでいたためである。

しかし、日本の知識人が「国の全体」に理解を及ぼそうとしないのには、いま一つの原因として知的土壌というべきものがあると指摘できる。それは鎖国がもたらした(知)の閉鎖性・狭小性である。すなわち彼らは、政治的状况を、静止した固定的な対象として見るだけであった。変化するもの、あるいは差異のあるものとして見ようとしなというものが、真葛の

認識であった。次の引用の「昼夜の数をよそにして、天地の拍子にすがらぬ故」という一節は、西洋の「絶対国家体制」をあえて無視しようとする、日本の知識人の鎖国化された〈知〉に対する危惧である。

すべて学者といふものは、昼夜の数をよそにして、天地の拍子にすがらぬ故、心を貫くものなければ、いか程高くまねびても、一代切にくだけちるは、無益しきことならずや。なま学者の段に至りては、おもひ誤る所ことへくにして、おほくつどへば集ふほど、智はいださずして、論をなす。是学者の全体なり。『独考』「物のつひえをいとふ」<sup>(14)</sup>

この引用の「昼夜の数をよそにして、天地の拍子にすがらぬ」儒学系の「学者」について言えば、彼らに対し、経済貿易の周期的変動と、世界の中での日本の独自の気候・風土が生んだ文化・生活の差異をわからせることは不可能である。彼らは、その同一性(類似性)と差異を幕藩体制の中でのみ考えており、国家とは何かについて考えようとしなない。<sup>(15)</sup> 彼らは儒学、あるいは古代の漢籍に固定化した古典の知識において、他の日本人よりも卓越しているにすぎない。つまり、彼らは儒学を祖述するだけの「学文」にとどまっているために、祖師の知識を守るということだけに自己満足してしまっているのである。そこには新たな変化に対応する主体的創意がまったく見えないではないかというのが、彼女の批判なのである。したがって、先の引用のように、「みづからものしり人とおもひて心をゆだね」「さたする人なし」「おもふ人もがな」「心浅し」などと真葛が知識人を嘆くのは、国土の分断化に慣れて「国の全体」にまで視野を広げられないでいる彼らの〈知〉の倭小性に対してであった。そのような真葛の姿勢は、同じ「国の全体」についてであっても、父の工藤平助が林子平『海国兵談』の序文に「我国防禦」<sup>(16)</sup>と述べ、海防策の一環として敵国の想定をしつつ、その防禦のための国家的統合を考えていたのは異なっていた。

また、彼女が「外国のよそ目はづかしからぬこと」と言い、「他の国の人は思おとしつらん」(どちらも注2の引用を参照)と言っている点にも注意する必要がある。これは真葛にとって「国の全体」とは、一国が独自に存在可能であるという

立場を示唆するのではない。むしろ彼女が、国家間の関係の中で日本という「国の全体」を捉えねばならないと考えていることを示唆している。しかし、これは「異国」の国家概念を対象化した理念でしかなく、幕藩体制の現実を踏まえた上で、その体制を超えたところに理念として想定された日本国家である。ただ、このような理念的な国家像においては、父から継承したと思われる国民統合の要件である国境（境界）が前面に出ることはない。彼女は政治的な国際間の緊張関係に触れることは、あえて避けたのかもしれない。

真葛にとって、「国の全体」の構成要件で問題になるのは「国のふり」である。それは漢語「国風」の和語で、本来国学者の用語だが、ここでは大胆にも「唐」の中華漢字文化圏から主体的に離れている。その結果彼女は、「文字を横なす国」、すなわち西洋の科学・機械文明圏に日本の「国ぶり」をできる限り近づけようとして、その文明に属する「国のふりに習い」、「外国のよそ目はづかしがらぬことをはからんと、おもふ人もがな」という待望論を表明することになる。

真葛は「有こしことをだに知れば」と述べる。そこには、過去の事蹟だけを学ぶだけで良しとする知識人が、日本国家の「国ぶり」を省察しながらも、「外国」との差異を優越と誤認することにより、自己優越に浸るところにこそかえって尊大意識が生まれる、とする彼女の考えが見える。つまり知識人たちには、国際間の交易の意味と価値が、けっして優劣の価値観と結びつくものでないということが理解できないのである。彼らは、そのような自らの認識の過ちに関して、「他の国の人は」「心浅しと／思おもしつらん」ことも知ろうとしない。彼女にとって「国の全体」とは、対等な交易を介して国際関係を構築し、それによる他者認識や異文化理解を通して「国ぶり」の独自性（アイデンティティ）を自覚していくことである。それが国際関係の中で、国家として存続していくことだという。それを見ようとする知識人の態度を、真葛は「いはづかし」と表現するのである。

真葛がこのような国家認識に至った理由は、洋学者であった「故父の常に歎しこと故、聞し」ったからだという。<sup>(17)</sup> 対照的に、江戸の知識人が日本国の「国の全体」を知ろうとしないのは、まさに諸藩の民を単位とする「小」の為政に止まるだけで、日本国という「大」なる国家の国民の為政を知ろうとしない過ち（愚）だというのである。彼女のいう「国の全体」

には、日本列島を範囲とする国土意識が貫かれている。そして、地理的世界観において、他の国々とは差異のある日本列島が存在する。そこには、独自の気候・風土に育まれた文化・生活などがある。真葛はそれらを「国ぶり」と呼んだ。したがって、地理的差異に関心があるというよりも、風土的・文化的差異に「国の全体」の内実、すなわち「国ぶり」を求めたというべきかもしれない。

日本という「国の全体」をつねに考えている真葛の国家観は、父工藤平助の強い影響によるだけではなかった。馬琴の時代、荻生徂徠や伊藤仁斎といった儒学者が、朱子学を日本化しようとする機運を高めていたのと並行して、本居宣長の国学が時代を風靡し、真葛も時代の学の影響を受け入れていたと考えられる。(18)

真葛の文章がいかにも国学的な擬古文であることは、馬琴も注目するところであったが、この点からも、彼女が国学思想の影響を受けたものと推測できる。

夫、かしこくも此皇御国をさして、神の御国とは不<sub>レ</sub>申や。此名は、あがれる世の勝人<sub>すくれ</sub>をうやまひて、唯に神と申にはあらじ。神とは言に出ぬ心のうちなることを、あらかじめしめすをもて申にはあらずや。されば、諸の他国に勝て人の気早く走りかよふに依て、外国よりうやまひて神国とおはせたる名なるべし。(『独考』「願わたる事みつ」)(19)

この文章から、一方で、真葛の教養としての国学思想では、封建体制以前の古代国家が「皇御国」||「神国」と幻想されていたことがわかる。他方で真葛はいかにも近世人らしく、「神」を実在と見ることに躊躇していることがわかる。その上で彼女は、「皇御国」を「国の全体」の構想に大きく関わらせようとしている。ただし、ここでも彼女は天皇を実在の神と結びつけて超人化することには懐疑的であったようだ。彼女によれば、天皇を「神」と崇める日本人の心性は、言葉に出して言えないような臣民の想いをあらかじめお知りになられる天皇の叡知が、まるで神のように思われるという点にある。そして、風土論的思考によるといふべきであろうが、「気早く走りかよふ」心性が天皇から日本人一般へと拡大されている。

日本人は相手の訴えたいことをいち早く知るといふさといふ智の持ち主であり、それ故に外国人はその智を尊敬する。ここから彼らが日本を「神国」と称賛するようになったのだらう、という日本人論を導き出すのである。(20)

ここまで、真葛の「国の全体」論に関しては、「天地の間の拍子」と「昼夜の数」という二つの概念を通して、その国家像が重商主義的な貿易関係に位置づけられる均質性・対等性を持つということ、それと同時に、風土・文化において他国と差異のある独自性(アイデンティティ)を持つということを論じてきた。真葛の「皇御国」「神国」の理解は、当然、国学思想にその系譜を求めるべきなのかもしれないが、これらの語は「国の全体」論に重ね合わせるができる。

支配権力(＝主権)が天皇に属す古代国家像が、「国の全体」像に重ね合わされることで、天皇を主権者とする主権国家という概念が構築されることになる。しかし、仮にそうだとしても、「皇御国」「神国」といった言葉の用法は、当時盛んであった平田篤胤の国学思想とは明らかに異なる。真葛には国学的中華思想がまったく認められないからである。「中華／蛮夷」といった自国尊大主義は、彼女にはもはやなく、主権国家同士の対等な国際関係、すなわち「絶対国家体制」が目指されていた。『独考』には本居宣長の『古事記伝』からの引用や影響が多いが、(21)すでに見たように、「神国」概念の「神」は、宣長国学のように、日本の優越を担保する実体的意味を持つことはない。むしろ「神とは言に出ぬ心のうちなること」(22)と隠喩的に理解されているように、日本人の〈知〉の独自性(アイデンティティ)を意味していた。宣長国学の神秘性は稀薄になって、風土論的文脈へと溶け込んでしまっている。このように、神を風土論的な〈知〉へと転移させることにより、この〈知〉の独自性と優劣性が確保され「外国よりうやまひて」神国と尊称されるようになったと解釈するわけである。この解釈には、国と国との国際関係にあって、日本の独自性が対等性を担保するという、十九世紀西洋の絶対国家思想の芽生えが見える。この点にも注目すべきであろう。(23)

このような真葛の「国の全体」という考え方を、馬琴がどれほど理解できたかといえは、おそらく相当に困難だったと言わざるをえない。それは以下の引用に見られる通り、彼女の特異な術語をまったく誤解していることからわかる。しかし、馬琴には確固として抱懐している国家観があり、その概念の枠組みで、彼は真葛の新たな「国の全体」像を受け入れようと

した。そこに大きな誤解が生じたのである。馬琴は真葛の「天地の拍子」論に対して、以下のように反論している。

考へに、天地の間に拍子あり、昼夜の数にあはして云云しかじかといふことを、みづから考得たりと思ふは、をさなし。凡ソ書をよむほどのものは、誰もよくしれることなり。昔から国なる聖人、昼夜の数にあはせ考て曆を作り、又大皇国なる八十万やせよろつの神たち、天地の拍子により神樂を作りて、日の神を慰め奉り、又から国なる聖神も、天地の間の拍子によりて、雅樂ががくを制りてつくもて国民を教化せり。これによりて男は耕たがやく、耘くさきり、女は蚕養こがひし、土農工商おのく、天地の拍子に随したがひ、昼夜の数をおごそかに知りて、その産業なりはひを務る事を得たり。その産業の暇いとまある日、天子は樂がくを興おこしてたのしみを民と共にし、その拍子にしたがはしむ。『独考論』「願わたる事みつ」(24)

馬琴は、真葛の「国の全体」が「天地の間の拍子」と「昼夜の数」によって概念化されていることは読み取っているのだが、その概念をすべて自己の抱懐する儒教の古代礼楽国家の枠組みで読み取ろうとした。馬琴は真葛の「天地の間の拍子」と「昼夜の数」が、重商主義的な貿易関係にもとづく国家間の関係の中での日本国家、という認識であることが理解できなかった。馬琴が真葛の独特な用語を、古代中国王朝に理論づけられた礼楽論で理解しようとしたからである。古代礼楽国家思想においては、「礼」が国家の「秩序」を、「楽」は「曆術」と結びついて、宇宙・自然の秩序を表象するとされる。それゆえ中国の帝国は、宇宙の秩序を地上に移した国家形態であると認識される。まさに、宇宙―自然―国家というつながりの中で一体化されることにより、世界帝国と認識されるのである。このような古代中国の礼楽国家に対し、真葛の「国の全体」は、それとはまったく異なる「絶対国家体制」を構想するものであった。

このように、二人の世界観はまったく断絶していたため、馬琴が真葛を十分に理解できなかったとしてもやむを得ない。それでは、どうして馬琴は「いかでわれ真葛の草紙を舐りまきにして、世にあらはさん」と思ったのであろうか。それも、馬琴がもつとも恐れる江戸幕藩体制のタブーに、真葛の叙述の多くが触れているにもかかわらず、である。真葛の思想に、

何か共感するところがあったのであろうか。この点について、馬琴は『兎園小説』「真葛のおうな」で、次のように述べている。

さるを只この真葛の刀自のみ、婦女子にはいとにげなき経済のうへを論ぜしは、紫女、清氏にも立ちまさりて、男だましひあるのみならず。世の人はえぞしらぬ、予をよくしれるも、あやしからずや。されば予が陽に祛けて陰に愛づるは、このゆゑのみ。かゝる世の稀なる刀自なるを、兎園社友にしらせんとて、いとひがたきことをすら、おしもつゝまでしるすになん。『兎園小説』「真葛のおうな」(25)

「婦女子にはいとにげなき経済のうへを論ぜし」ことを、馬琴は最大限に賞賛している。これは馬琴が、真葛の経世済民の認識に深く共感していることをうかがわせるのではないだろうか。「異国」船が列島沿岸各地に出没・着岸していた当時、馬琴は自己の世界観とは違っていても、彼女の新しい世界観に何かしら深く共感したのであろう。それが「男だましひ」とか、「かゝる世に稀なる刀自」とかいう評価につながったのであり、彼女の考え方に進取性を予感したために、どのような形であつても彼女の著書を世に問おうとしたと見られる。とはいえ、馬琴はその新しい世界観を自らのものとしたわけではなかったのである。

### 第三節 「国の全体」と儒者——馬琴と真葛の主体認識の違いをめぐって

「天地の間の拍子」、「昼夜の数」という真葛独自の概念に支えられる「国の全体」とは、西洋の国民国家（ロシア）と対峙するなかで、日本列島を領土として一つの主権によって統治されるいわゆる絶対国家を幻想するものであった。(26)これは馬琴の時代における現実である幕藩体制（分権的国家）とは異なる、まさに彼女の経験知が構想させた理念像である。この

ような真葛の「国の全体」像に接した馬琴が、大きな衝撃を受けたことは予想されることである。そして馬琴の〈知〉において、世界観の転換という事態が起ころうとした。しかし、馬琴の古い世界観は新しい真葛の世界観に激しく反発せざるをえなかったのである。

真葛はどうしてそのような国家像を構想したのか。彼女は西洋列強の異国船や異国人が着岸・漂着している現実直面し、すでに近世において南蛮船がもたらした地理的世界観の中で、改めて日本という国家を考えようとしたのではないか。そして彼女はもはや日本が、日本だけでは生きていくことは考えられないということを、例えば、藩の分権を超える商品と貨幣の流通によって知ったと思われる。

外国にて日本の産と称するは、……菓種にも数々あらん。塩と砂糖は相対する品にして、塩の方、上にたつものなり。

……他国にては海遠き故、塩稀なり。塩を目かいにしして、砂糖を計てうる。日本は塩多き故、日用にも余り、あたひ下直故、いやしめ思ふは誤なり。〔「独考」〕〔中抄録〕(27)

真葛の二つの独自概念の中で、「天地の間の拍子」は貨幣の流通性に表象される国家の同一性を、一方「昼夜の数」は、経済貿易関係に布置される国々の位置の差異（「昼夜の数」の変化・差異）がそのまま気候・風土の差異を生み、その中から文化的差異が生まれることを表象している。とすれば、世界の国々はすべてこの同一性と差異の原理によって、対等でありながらも、それぞれが独自の国家であるということに真葛は気づかされた。そうである以上、真葛の「国の全体」は国家間の関係性に優劣はないという帰結を生むであろう。

しかし真葛は、そのような「国の全体」の構想を作り上げながらも、その理念像を統合していく主体については、どのように考えたのであろうか。前節で触れたが、真葛の国学的教養は「皇御国」「神国」という古代天皇帝国家像を用意していた。そして、それを「国の全体」と重ね合わせることによって、天皇を頂点とする主権国家像を成立させることは可能であった。

しかし、その理念像を実質的に実現・運営していく主体について、彼女はどうしても思い及ばなかったはずである。真葛の儒教批判・儒者批判の激しさが、それを裏書きしてくれる。なぜそれほど激しく批判するのかというと、彼女は儒者という存在を「国の全体」にとつての政治主体、あるいは政治主体を領導する知識人としての役割に位置づけようとしていたからである。真葛にとつて儒者とは、市井における町人衆の教育者というイメージではなく、幕閣の、あるいは諸藩（領国）の家老格の政策ブレーンとしての知識人であった。真葛はその延長線上で、儒者たちが「国の全体」にとつての主体的存在へと移行することを期待していたのである。そのような儒者たちが、国家間の関係の中に置かれる「国の全体」を主体的に領導して政策を提言し、迫り来る異国との外交交渉を担い得る人材となることを、真葛はまさに期待していた。彼女は「国の全体」を構想し得ても、その理念像を担うことができる主体については、これを儒者にしか期待しえなかったのである。ところが彼女によれば、いまの「儒者」は鎖国的状況に〈知〉を限界づけられてしまっていて、伝統的な華夷的世界観に安住して「異国」を夷狄視して排除するだけで、まったく幕藩体制の政策に追従するだけの存在になり下がっていた。したがって、本節での課題は「国の全体」をめぐる、「儒者」をどう考えるかということになる。

馬琴は真葛の独自の概念を理解できないままに、真葛の「国の全体」像に対する認識から、真葛に対抗して国学的素養を踏まえ、古代天皇帝国家を「皇国」として持ち出す。しかし、真葛の「皇御国」は、主権国家の「異国」に対する国家像として構築された理念であり、そこに封建的分権としての幕藩体制はまったく考慮されていなかった。これに対し、馬琴は現実の幕藩体制を認めつつ、幕藩体制による分権を実質とし、天皇制を権威化のための形式とする、当時の現実の重層国家体制を前提として「皇国」を解釈する。馬琴は真葛の儒者批判に対しては、次のように反論している。

皇国人は境を出ずして、その地図を見てこれをしれり。是亦主客の勢ひにして、智ありといふとも、彼レが我レに及ばざるの所以なり。夷狄のみ国の全体をしるものにはあらず。皇国の学者のこれを物にあらはさざるは、忌諱に触るを憚りてなり。しかれども白石翁の著述には、国体をいふ事多くあり。その書をひらきて見るべし。『独考論』中の巻あげ

ここで「皇国人」というのは、儒者系の知識人のことである。また、「主客の勢ひ」「夷狄」といい、「彼レが我レに及ばざるの所以」という文脈は、儒者系の知識人が華夷的世界観を信奉し、日本と中華を主として、西洋人などを「紅毛及び諸蛮」と呼び夷狄(「客」とするということである。ここでは、中華文明の「中心／周縁」という構造に「知」が順応させられ、「中華／夷狄」に優劣を重ね合わせる論理が駆使されていることがわかる。そのような日本と「異国」の間の優劣意識が、儒者系の知識人と西洋の政治哲学者との関係に投影される。すると西洋の学者が(主権)国家を構想している以上、「皇国の学者」(儒者系の知識人)が(主権)国家Ⅱ「国体」を構想していかないはずはないということになる。

こうしてみると、馬琴が地理的世界観の中で「国の全体」というテーマを認識していることがわかる。つまり、真葛の構想を、部分的には理解していたということになるであろう。しかし、「国の全体」を、馬琴がどのように理解していたかについては、議論の余地がある。おそらく、馬琴の時代、日本の儒教がいわば官学として幕藩体制をイデオロギー的に支える一方で、宣長流国学を継承した平田国学<sup>(29)</sup>が、国学中華思想によって日本を中華とみなすナショナリズム的イデオロギーを構築していたことと関係があるろう。日本儒教と平田国学は、前者は幕藩体制を後者はナショナリズムを代表することによって、住み分けをしようと図っていたのである。そのような儒教と国学の共存の時代が、ここでの馬琴の言説における使い分けに反映されているとみてよいだろう。

このように、馬琴は時代の体制に順応した保守主義者でもあった。現実(実質)と理念(形式)をはっきりと区別し、現実の封建的分権体制に順応するとともに、西洋の諸国家に対する国家としては古代中国的な帝国国家像と国学的な古代天皇制国家像を並列させていた。ただし、その国家観念が現実の幕藩体制のイデオロギーにとってタブーであることも彼は意識していたのである。そのために、「中心／周縁」という構造的差別を内包する華夷思想を、異国船が出没する現実の状況に対応させ、鎖国の堅持を容認したのである。したがって、馬琴の異国認識にあつては、「中心」を構成する日本と中国に対して、

それ以外の異国は〈周縁〉に位置づけられ、「夷狄」として差別されることになる。それがまた、鎖国の現状を正当化する根拠ともなったのである。

近世中期になって、国学の系譜にナショナリズムの視点が入り込んできた。中世日本は当時の中国帝国の華夷的世界に從っていたために、自己（日本列島）は「東夷」という〈周縁〉に位置づけられると認識されていた。鎌倉幕府將軍の称号が征夷大將軍だったことも、たとえ「夷」が東北地方以北を指すとしても、東アジア地域から見ると自己規定にほかならなかった。近世の国学の系譜は、本来、ナショナリズムの傾向を多分に含んでいたが、宣長流国学を継承した平田国学は、学知におけるナショナリズムを超えて日本こそ中華だとする国学中華思想を提唱するやいなや、多くの知識人の共鳴を得るようになった。そして、馬琴もその思想に深く共鳴した知識人の一人であった。中華漢字文化圏ともいべき東アジアの秩序体制の中で、〈中心／周縁〉の構造的論理がまさに脱中心化しようとしていた。平田国学において中国を中心とする華夷秩序が脱中心化されることで、新たに日本が〈中心〉を志向して独自の国家像を描くようになる、儒者の間にもこの国学的ナショナリズムが影響を与えるようになった。馬琴はそれまでの華夷的世界観を脱中心化して、日本＝中華の世界観にそれを再編した。その一環が、さきほどの注<sup>28</sup>の引用に見てとれたわけである。

ここで指摘しておきたいのだが、この脱中心化の世界観は単に儒者に影響を与えたばかりではない。実は真葛の「国の全体」像を支える世界観が、脱中心化の成果であったと見ることも可能なのである。経済貿易関係に布置される国々は、それぞれの「昼夜の数」による差異と国家間の貨幣流通にも支えられて、国家としての同一性と差異を保っている。真葛の世界観によれば、これはまさに脱中心化の世界観といえることができる。つまり、馬琴と真葛とは世界観の脱中心化という点で同代人だったのである。とすると、そのような脱中心化された世界観の中の日本という「国の全体」をいったい誰が主体的に担うべきかという問題は、馬琴と真葛にとっては、共通の課題として浮上して来ても当然であった。ただし、脱中心化ということは、〈中心〉たる中国帝国の真理と価値観からの移行でもあって、古代中国の經典の祖述を学知とする儒者の学問をも動揺させるものである。これは、儒者を自負する馬琴には認めることのできない、あるいは理解することのできないこ

とであった。真葛は、〈知〉の鎖国性の中で自己規制している儒者を激しく批判するが、その彼女も「国の全体」の主体となる「人」に関心を持っていることが、次の言説からわかる。

天地の間に生出し人は、昼夜の数と、天地の拍子を本として、何事も是に合ことをゑりて用ひ、あはぬことにはかゝらぬ様にせば、一生おだやかなるべし。仏の教も聖の道も、共に人の作りたる一の法にして、おのづからなるものならず。動かぬものは、めぐる日月と、昼夜の数と、浮たる拍子なり。是をあだごとくおもはんとがらは、真の事は知らじ。『独考』「願わたる事みつ」(30)

この「人」が「国の全体」を担う主体となる、ということを実葛が考えているのは確かである。すなわち彼女は、「昼夜の数」という世界の国々の差異、および「天地の間の拍子」という商品流通経済における貨幣流通の超越性や変動性を、主要な〈知〉の対象（「本」としている）のである。彼女の中で、曆（地理的世界）と貨幣の一般性が、宗教（「仏の教」と哲学思想（「聖の道」といった特殊性（「一の法」）を超越していることは、曆（地理的世界）と貨幣を「おのづからなるもの」「動かぬもの」と彼女が断定していることにはうかがえる。したがって真葛は、その差異と変動（「浮たる拍子」）の周期性に対応することのできる「人」を、「国の全体」の主体と考えていることになる。さらに言い換えれば、日本という「国の全体」と接触してくる異国との外交と交易とを、世界的視野をもって担いうる能力を持つ人材の要請ということになるであろうか。

真葛によれば、「めぐる日月と、昼夜の数と、浮たる拍子」は「おのづからなるもの」、すなわち自然の法則であり、一般性・普遍性を内包している。その対極にあるのが、「人の作りたる一の法」にすぎない「仏の教」であり「聖の道」である。これは、一つの国の原理・法則という特殊性を意味している。ところが、その特殊な他者的宗教が、いま日本という「国の全体」を覆うイデオロギーとして、政治から生活に至るまでの、日本人々の知と行とを規定している。彼女は、中国由来の宗教的イデオロギーをもって、「（日本）人」が「国の全体」の統合理念とすることなど考えられないと非難する。

そのような「人」が、日本仏教の指導者であり儒者であることは言うまでもない。この「人」が現在の封建国家体制のイデオロギーの担い手として、為政にかかわる武士階級を補佐する知識人となっている現状に、真葛は我慢できないのである。

とりわけ近世に入ると、仏教は檀家制度に縛られ、いわゆる葬式仏教化し、やがて中央での力を失っていった。それに対して、儒教の方は中央の政治から幕藩制下の人々の日常生活にまで深く浸透していった。「国の全体」にとって儒教がどういふイデオロギー的役割を果たしてきたか、という点で告発を受けたということには、注意を払うべきであろう。次の言説がよくその事情をうかがわせてくれる。

聖の道は、昔より公もはごとに専用もはらるれば、誠は道らしくおもはるれど、全く人の作りたる一法を、唐土より借て用たるものにて、表むきの飾道具、例えば海道を引車にひとし。……わが国の人気にうとく、天地の拍子にたがひはつるものなり。おそるべしく。『独考』「願わたる事みつ」<sup>31</sup>

「聖の道」が「公ごとに」もちいられているという事態は、その「道」が幕藩体制下における君臣関係のイデオロギーとして信じられているということを意味する。しかし真葛は、それが「国の全体」とは相反する国家の分権状態を固定化する体制イデオロギーとなっているという批判を背後で行っている。体制下のイデオロギーが、日本人の〈知〉をもいかに家父長制に従属させているかという点について、真葛は憤っているのである。

ところが、儒教はあくまで「唐土より借て用たるもの」で、現在では民衆から疎じられている（「わが国の人気にうとく」）。真葛の認識によれば、これは、儒教に支えられた封建体制が、その身分制や階級制によって民衆からはまったく嫌悪されているという事態とまさに連動している。なぜか。分権による地域の断絶は、各地域を結ぶ商品流通経済における貨幣の流通性にとって障害となる（「天地の拍子にたがひはつるものなり」）。のみならず、「昼夜の数」とともに真葛の構想する「国の全体」を主体的に担うような人格を育てるうえで、これは完全な障害となるからである。主体的存在が育たないとすれば、

「国の全体」という概念はいつまでも実現しないことになる。その実現を妨げている元凶が儒教にほかならない。それが彼女の認識であった。

真葛は「国の全体」を妨げる阻害要因となるがゆえに儒教批判をおこなっているのであるが、「国の全体」という観点からすると、批判するというよりも、むしろそこから排除すべきだとする論理に移行する。「全く人の作りたる一の法」という儒教認識は、中国にのみ通用する特殊な国家体制イデオロギーである以上、この日本の「国の全体」から排除すべきだということになるのである。排除の論理は単に儒教による体制イデオロギーだけにとどまらない。次の言説を見てみよう。

日本には国ぶりを教べき文なければ、言のはじめに唐文を読故、かたはしを学びて、あらかじめ思ふことはみなあだごとなり。心にかけてまねば気おくるゝは、他国の拍子を学ぶ故なり。己が国の教となるべき文もがな。人の心の愚なりしほどこそ、よそ国の教をもうけめ、いまはかく下々のものまでも心ざしそなはりて、うるはしう成し世に、など、よそ国の文によらん。我国ぶりの神の神たる、いはぬ心をあらかじめする利心とまを先だてゝこそ、万のわざはおごそかならめ。気のきくばかり我国ぶりなるをや。我国のことを置て他国の文を学ばする国、又あらんや。(『独考』「独考巻の中抄録」)<sup>32)</sup>

ここには真葛の国学的素養が顔をのぞかせている。この際、中華漢字文化圏に組み込まれる以前、すなわち漢字漢文受容以前の国家が想定されるという思考は、国学的発想にほかならない。彼女は、受容以前の国家の風土、文化、そして民族生活を一括して「国ぶり」と述べるが、これは国学的用語として多用された漢語「国風」の翻訳語である。真葛が望むのは、「己が国の教となるべき文」である。「国の教」というのが、ここでいう体制イデオロギーである。それは、個人レベルでは倫理道德であり、同時にそれを言表化する「文」、すなわち日本独自の思想とその言語表現である。彼女が、宣長から平田篤胤へという系譜をたどる国学を知らないはずはない。真葛がめざしたのは、その国学をもって、日本人の〈知〉に浸透する

儒学を排除させること、すなわち日本の「国の全体」から体制イデオロギーとしての儒教を排除することだったのである。

ただし、「文」を民族言語と解釈することはできない。真葛の用いる「文」は、言語ではなく、イデオロギーを意味する語である。だからこそ、真葛にとつて、漢字漢文を受容することはそのまま中華漢字文化圏における華夷的世界観を受容することになる。したがってそれは、日本が文化的に中国に従属するという文化支配の論理を受け入れることに他ならないと彼女は考えたのである。彼女の危惧は、「心にかけてまねば気おくる」といった言葉に表われている。漢字漢文を学べば学ぶほど、「国ぶり」を貫く個別的独自性（アイデンティティ）を喪失してしまうのではないかというコンプレックス（「気おくれ」）をおぼえることになると、彼女は自己反省したのである。

真葛の構想する「国の全体」という考えにおいて、その同一性と差異の概念により、日本と中国とは対等であった。ただその風土・文化・生活、それに心性などにおいては、それぞれ個別的独自性をめざすべきである（「いはぬ心をあらかじめしる（日本人としての）利心を先だててこそ、（日本人の）万のわざはおごそかならめ」）。真葛が「国の全体」の独自性をめざしたということは、いま一つの重要な意味を持っていた。それは、東アジア地域における古来の秩序原理（華夷思想）を脱中心化する思想でもあったということである。馬琴においては、「中華」という概念の移行にそれが求められたのだが、真葛にあつては、多中心化ともいうべきものと化す。秩序原理の破壊が、そのまま中国帝国の真理（「聖の道」）と価値の相対化をもたらすことになる。このような相対化を踏まえた真葛は、「我国のことを置て他国の文を学ばする国、又あらんや」と日本の儒学を批判することで、従来の儒者の行ってきた経書素読による漢籍の（知）の祖述を否定していく。相対化された「一つの法」は日本にも求められるべきであり、それは日本にあつて、日本の風土・文化・生活に適った日本人主体の「一つの法」でなければならぬのである。

その儒教批判の典型的な一例が、当代の儒学の泰斗である熊沢蕃山や新井白石といった碩学に対する姿勢に見てとれる。

熊澤・白石の両儒は、世に拔出しごとくきけど、書置し物をみて学力をほめあふぐのみにして、現につたはりて其人の

せしわざといふことのなきぞ、朽<sup>くち</sup>をしき。……すべて学者といふものは、昼夜の数をよそにして、天地の拍子にすぎらぬ故、心を貫くものなければ、いか程高くまねびても、一代切にくだけちるは、無益しきことならずや。なま学者の段に至りては、おもひ誤る所ことくくにして、おほくつどへば集ふほど、智はいださずして、論をなす。是学者の全体なり。『独考』「物のつひえをいとふ」(33)

真葛の批判は儒教批判ではあるが、その背景において、「国の全体」の主体を担えるかどうか、また脱中心化の学知のありかたとはいかなるものかという問題提起へと連なる。彼女によると、蕃山や白石といった、当代にその名を知られた碩学であつても、その名声は、彼らの儒教、あるいは漢籍による知識量が他の日本人よりも卓越していることによるにすぎない。彼女によれば、彼らは儒教を祖述するだけの「学文」にとどまっているために、中国の聖賢の知識を守ることにより自己満足しており、そこには自己の主体的創意がまったく見えない。そのために、「才智の勝しによりて、一身をくるしめしだけ、ほね折ぞんならずや」ということになる。その根拠にあるのが、脱中心化の思想であることは言うまでもない。脱中心化された東アジアでは、唐土は唐土であり、日本は日本であつた。日本の儒者は、日本の「国の全体」に関して、それが「昼夜の数」「天地の拍子」に支えられた独自のものであることを認識しようとしなない。いわば「他国の拍子」を学ぶ徒にすぎない。だからこそ、そこに主体的創意が働かないのである。「唐土」の学を祖述するということは、そのまま中国に従属することである。彼女は「日本人としての」心を貫くものなければ、いか程高くまねびても、一代切にくだけちるは、無益しきことならずや」と述べる。すなわちこれは、儒学とは中国(他国)の学問の模倣であつて、彼ら(蕃山、白石)一代限りで終わるにすぎないという批判なのである。注意すべきなのは、真葛の使う「まねば」が真理を探索する学ぶではなく、他者の学問を模倣する意味だということである。そして「一代切に」その学問が崩壊してしまうのは、それが日本の風土・文化、それに日本人の生活と心性に根拠を置いていないためだ、ということになる。

このような脱中心化する学知において、きわめて有効な〈知〉こそ、日常知・経験知だとするのが真葛の信念であつた。

日常の生活経験を直視し分別し記述することで、日本が日本であることの独自性、固有性を、風土・文化として認知することができる。「智をいささずして、論をなす」とは、主体的な「智」の発揮がないままに、漢籍受容に明け暮れた結果、中国「他者の「智」を模倣した「論」に終始するのが日本の儒者（知識人）の通弊だということである。したがってこれは、その知識がいかに日本人の心性と生活からかけ離れた空論に終わっているかを暗示する。そのような空理空論をふり回しているのが、日本の「学者の全体」なのである。

ただ、このような儒者の「学文」への姿勢ゆえに、真葛は儒者を排除しなければならないと言っているのではない。単に、理論・思想を学ぶ学者であれば、「国の全体」を主体的に担う存在とはなりえないだろう。しかし、主体的存在に当たる人材を模索する真葛にとっては、幕藩体制下の幕政や藩政において「儒者」と呼ばれる存在に、政治的経済的に重要な役割が与えられていることを見逃すことはできない。真葛が排除しようとしたのは、そのような役割を演ずる「儒者」であった。なぜなら、彼らは分権的政治の理論家であり、鎖国的状況に限界づけられた〈知〉に完全に束縛された者だからである。そのような「儒者」の実態については、馬琴が反論の中で語っている。

凡儒者の事業は、先聖孔宣こうせんの道をひろむるに在り。その位を得るときは、進みて政を資たすけ、用ひられざれば退きて徳を脩おさめ、書を講じて諸生を教育す。これを無益とするは、女子小人の見解けんかいなり。人の要領は仁義礼智忠信孝悌れんち廉恥を明力に知るにあり。国を治め家をととのへ身を脩おさる大道の教をしも無益しき事とせば、何をか有益の事とせん。〔『独考論』〕  
六 つひえをいとふ（34）

儒者を自負する馬琴にとって、『大学』のいう「国を治め家をととのへ」というときの「国」とは、藩単位の鎖国のことである。馬琴が、その「国」を「皇国」に重ね合わせることで、真葛の日本という「国の全体」に対する観念としているこ

とを、まず注意しておきたい。そのような「国」において、「儒者の事業」は幕制においても「その位を得るときは、進みて政を資け」ねばならない。儒者はなんといっても、治政者の諮問に答える政策ブレンという役割を果たさなければならぬのである。その場合、馬琴の考えによれば、「先聖孔宣の道」という儒教經典の古見の知識を、積極的に現在の政策課題に対応させ、諮問に答えることが要請される。その諮問を受けて治政者は、修身しゅうしん齊家せいけ治國ちこく平天下へいてんかといった『大学』に記されるような基本的政治観に従って、藩領を治めるとされた。「儒者の事業」は、幕藩体制にとつて、その分権化された藩領の内外政策を立案、実行する政策ブレンとしてのものである。馬琴は、儒者がこのような存在で良いと認めた。しかし真葛からすると、それは、東アジアの華夷的世界観が堅固であるという前提があつて成り立つ考え方にすぎない。もしその世界観が崩れ、中国帝国が世界の〈中心〉でなくなれば、これは成り立たなくなる。従来の伝統的世界観が崩れて脱中心化が起こったとき、「儒者の事業」は、日本という「国の全体」からは疎外されざるをえなくなると彼女は考えたのである。

真葛の批判する「儒者」とは、中国の治政を模倣するだけで、しかも分権的領内でしか通用しない役割を演ずる政策ブレンのことであつた。それにもかかわらず、彼らこそ「国の全体」とは対極に位置づけられる幕藩体制の政策を立案・実行する当事者にほかならない。そのような彼らは、きわめて内向きであるために、「国の全体」が他国とどのような国際関係に置かれているのかを考えようとしてもしない。彼らの姿勢とは、どのようなものなのか。例えば、漢籍の古典は唐土という他者の「国の全体」を基底にする「学文」である。そのうえ、「(唐土の)書を開て唐、日本の有こしことをだに知れば、みづからものしり又とおもひて心をゆだね」とあるように、古典崇拜と歴史主義によって完全に束縛されている。彼らは真葛とは異なり、日本の「国の全体」の沿岸に迫っている異国船の脅威を直視しようとしない。真葛によれば、まさに「国の全体」とは、地理的世界におけるそれぞれの国々の同一性と差異が問われるものであつた。日本の「国の全体」がどうあるべきかを理解するためには、他国の「国の全体」と比較し、その差異の認識を通じて、国の独自性がつねに問われねばならない。ところが、儒者はつねに過去(歴史)の規範にしか関心を示さない。それゆえ彼らは、現在の変化や異国との関係の差異と同一性を捉える〈知〉を持っていない。西洋列強の進出は、もはや過去の規範にすがる内向きの「学文」ではどうにもなら

ない。とすれば、儒教は排除されねばならない。これが真葛の儒教批判であった。真葛の関心は、あくまでも、日本の「国の全体」を主体的に担う人材とはどのような者でなければならぬかという点に置かれていたのである。

以上述べてきた真葛の「国の全体」論についてまとめると、彼女の批判には二つの大きな要点があったと言える。

一 「国の全体」は現在の日本にあつてはまだ理念像ではあるが、地理的世界観と商品流通経済に基づく貨幣の流通性から考えると、世界の国々はすでに「国の全体」を実現しているか、もしくは実現せねばならないと考えているはずである。そうでなければ、諸国と対等に交渉し得る「国の全体」の主体性（主権）と独自性を発揮することはできない。

二 「国の全体」にとって、儒者はその実現をはばむような反対勢力となり得る存在である。彼らは現在の分権国家体制に安住し、中華Ⅱ中国の漢字漢文文化に従属することに甘んじている事大主義者である。また歴史の過去にしかまったく関心のない歴史主義者であつて、日本の「国の全体」が現在の状況において異国とどのような関係にあるのかについては、眼を向けようとしていない。

この二つの現状批判・儒教批判に対して、馬琴はどのように反論しようとしたのであろうか。この点において注目すべきは、次の点になるだろう。すなわち真葛によれば、異国の儒教とは「二の法」にすぎないにもかかわらず、儒者はそれを「学び」、それを人々に教化してきた。かくして彼らは、「外国をのみいという推尊」とは、本義なるべし」という姿勢を取っている。ここから、彼らは日本の「国の全体」の主体性と独自性を自覚しようとしないうと批判されるとは、馬琴の反論はこの批判に焦点がおかれているといってよい。

#### 第四節 馬琴の異国認識

真葛が「国の全体」論を構想する過程で、伝統的な華夷的世界観はまったく無化され、中華Ⅱ中国は非中心化されてしまった。真葛の世界観はきわめて近代的な多中心的ともいえるものであった。それに対して、馬琴の反論はどのようなものなのか。特に馬琴が、中華Ⅱ中国に対する日本の位置について、どう考えようとしていたのかに注目することにしよう。なお馬琴は、真葛とは違って「仏の教」に言及しない。これは馬琴が儒者であることを自負しているからである。彼にとって、仏教はもはや現代においては、為政の学でも論理道德の学でもありえなくなっていたためである。

我邦には教の書伝らず、から国なる孔子の教は、則神の教にひとし。貴賤今日一切の所作は、みな儒の道によらざるはなし。故いかにとなれば、皇国には文字なし。よりてから国なる儒の教をとりまぜて、皇国人に教させ給ひたる、是則神の御はからひなるべし。もし八十万の神たち、儒道をにくみ嫌ひ給はゞ、彼神風などいふものもて、払ひ退け給ふべきに、さはなくて彼道をこゝへも伝へうけしより、いよゝますくひらけにひらけて、漢文作るわざまでも、から人に羞ずなりしは、神の御しわざなるにより、孔子の教は我邦の神の教にひとしといふなり。皇国なる儒者佛者は、かゝる神わざを夢にもしらずで、外国をのみいといたう推尊るとは、不義なるべし。〔『独考論』「願わたる事みつ」(35)〕

この馬琴の言説で注目されるのは、日本には本来「神の教」というものがあつたとする点である。これが近世に入って国学の中から生まれたナシヨナリステイクな概念であることはいうまでもない。馬琴はこの概念を、歴史上実在すると認めることによつて、中国の「孔子の教」と、日本の「我邦の神の教」とを、差異と同一性の論理によつて編成し直そうとする。このような再編を通して、中華Ⅱ中国と日本の関係を構築し直そうとしていることがうかがえる。

日本にはもともと中国の「孔子の教」と同じような「神の教」があつた（「から国なる孔子の教は、則神の教にひとし」）。これが同一性の論理である。もっとも、「孔子の教」は漢字漢文という文字表現によつて後世に伝えられたが、「神の教」にはそれを表現する文字がなかった。日本は、口承によつて伝えられる非文学の文化の国であつた。これが差異の論理である。

そのために、日本では古来、貴賤にかかわりなく、人々が儒教の教えを中国から受容し学んできたのであるが、実はその儒教とは、「神の教」に「儒教をとりまぜ」たものであって、そうするように促したのはほかでもない「神の御はからひ」であった。この同一の論理から、中華⇨中国と日本とは、同一性の論理道德などの思想（「道」「教」）を共有する対等の国とされたのである。そのことを証明するのが、儒教という言説文化がそのまま日本に根付いたということである。もし、日本文化の固有性にそぐわない「教」であったならば、この国土から一掃されたにちがいない。それゆえに「儒の教」を始めとする中華⇨中国文化が日本に伝来するようになり、（中華）漢字文化による文明国へと日本を開化させていったのである（「いよゝますゝひらけにひらけて」）。日本の知識人たちは「漢文作るわざまでも、から人に差すなりし」という程度にまで到達するようになり、中華漢字文化を中国とともに支えるようになっていく、というのである。

馬琴が「から国なる孔子の教（儒の教）」と表現することで唐国（中国）を差異化しようとする意識は、「我邦の神の教」が、もともと日本にはあったという国学的発想に根拠を持つ。当然「皇国」をインドや中国に対して差異化することが可能となり、同一の「教」を媒介にして、日本は対等で独自の「国の全体」だという論理が導き出されることになる。しかも、ここでも注目されるのは、中国を他者化する根拠として「皇国」という国学的呼称を用いていることである。この意識には、真葛の「国の全体」という概念に反論しつつ彼が見出した認識が明らかにはたらいっている。ここには、現在の幕藩体制を「国の全体」とみなすことはできず、国学の古代国家観を表象する「皇国」を用いざるをえなかったという背景がからんでいる。「皇国」とは国学者がいうように、天皇の統治する国家の意味である。こうして馬琴は、国学的な「神の御はからひ」「神の御しわざ」をことさらに言挙げし、「孔子の教は我邦の神の教にひとしといふなり」という（神語）の絶対性を媒介にするのである。彼は、本来空無というべき「我邦の神の教」の内実に「孔子の教」を埋めこむことによって、改めて日本が儒教を受容した歴史を正当化しているわけである。馬琴が「教」の同一性を保ちつつも、言説文化と非言説文化の差異をもって中国に対峙し、日本を他者化し、「皇国」（⇨日本）を中国とは対等で独自の国家として捉え直していることが見てとれる。このような言説を貫く論理こそ、脱中心化の論理ということになる。日本が、中国とは対等で、それなりに独自の「国の全体」

を有するということは、中華漢字文化圏における〈中心／周縁〉という構造的差別を、日本に限って脱中心化させることによって克服しているということである。

このような馬琴の反論を見ると、注目すべき論理が見えてくる。さきほど指摘したことだが、それは、真葛の論理に反論しながらも、その一方でその論理を吸収し反射するという姿勢が著しいということである。例えば、真葛はすでに引用した言説の中で、日本には「国ぶりを教べき文なければ」といい、「いはぬ心をあらかじめ察知する利心を先だてゝこそ」と記している。あるいは彼女はまた、日本人の心性が、相手がまだ言い出さない先にその心の動きを察知する鋭い感性をそなえていると言う。これはいわば、思いやりという独自の風俗・文化を見出す試みである。けれども彼女は、それらを表現するにふさわしい民族言語の存在しないことを嘆く。それは馬琴の主張する「神の教」とはまったく異なるものである。

真葛が徹底的に主張するのは、脱中心的論理であり、儒教はあくまでも「唐土より借て用たるもの」であって、それは古代から遠く離れた現在の日本の「国の全体」に有効な「学文」ではないという点である。

聖の道は、昔より公こごとに専用もらるれば、誠は道らしくおもはるれど、全く人の作りたる一法を、唐土より借て用たるものにて、表むきの飾道具、例えば海道を引車にひとし。……わが国の人気にうとく、天地の拍子にたがひはつるものなり。おそるべし。『独考』「願わたる事みつ」(36)

このような認識は、中国の古典(経書)とは中国のものだとする姿勢であるが、真葛の「国の全体」の独自性からすれば、当然の帰結といえよう。したがってそこからすれば、馬琴を始めとする従来の儒者が、「孔子の教」を日本の教えと同視することの危険性を突いたものと見ることができるといえる。当然、その背景には日本には日本に独自の「教え」があるはずだという信念があることになる。

それに対して馬琴は、日本人の心性の独自性を認めない代わりに、日本古代に本来あったという「神の教」を持ち出すこ

とによって、真葛の言おうとしたことを自らのものとしている。真葛が心性の独自性を根拠にして中華＝中国を他者化したのに対し、馬琴は「神の教」を根拠に中華＝中国を他者化し得たのである。彼は「神の教」と「孔子の教」の差異を文字表現の有無に求めるだけで、その思想性においては同一であることを強調していた。それを文字と口誦の差異とするなら、「神の教」は、口誦で教えられた「孔子の教」ということになる。

皇国には文字なければ、神の教おしゑを伝へがたし。聖神の迹あとといふとも、教のふみ伝らでは、後生こうせいにをしゆべきよしあらず。

且ツ天朝は武の国なり、からくには文の国なり。文武は車の両輪のごとし。武のみにして文なければ野いやし。譬たとへば獵人の刀たちばな佩はるが如し。文のみにして武なければ虚むなし。譬たとへば咲る花に実なきのごとし。〔独考論〕「願わたる事みつ」(37)

馬琴が「皇国には文字なければ、神の教を伝へがたし」と断言する一節には、脱中心化への志向が認められる。それは、中華漢字文化圏とは中国と共に日本があたかも車の両輪のごとくに支えているものだと自負へとつながっていく。これは、馬琴に見られるいま一つの他者認識と言えるだろう。

馬琴は中国が日本と対等である他者であり、そして日本は、中国の「孔子の教」と同一の「教」を持つ国であるという。この論理によって、従来の中華漢字文化圏における特権である〈中心〉に、中国帝国と共に日本が位置づけられることになる。これは反面からすると中国の脱中心化にはかならないが、中華漢字文化圏——東アジア地域における「中華」の〈中心性〉——は残されている。その文化圏の中で、〈中華〉という位置に日本が入り込んできたということである。馬琴のこのような論理にはさきほども触れた平田国学の国学中華思想の影響をも見るべきだが、平田国学は中国を排除するといったラディカルな思想であって、馬琴の穏和な折衷的思想とは異なる。注18の引用で、馬琴はそれを文武に対応させ、中国が「文の国」である以上、「武の国」日本が文字による表現を中国(＝漢字)から受容することは必然なことであるとして、日本が中国から漢字を受容したことを理由づけている。真葛は、日本には日本に独自の言語表現があるべきだとし、いわば民族言語に対

応する言語の存在を、「国の全体」の構成要素として希求していた。それに対して馬琴は、中華漢字文化圏という、いわば東アジア地域の独自の文明圏という（全体）の中で、日本（「皇国」）の独自の位置を求めたということになる。

前に引用した馬琴の言説の中に、「皇国人（儒者）は境を出ずして、その地図を見てこれをしれり」とあった。これは他者認識とはいえないが、馬琴が真葛を十分に認識した言説だと言える。儒者が「国の全体」にとつてどのような主体としての役割を果たすべきかという点で、真葛に対する馬琴の反論を見ることがしよう。まず確認しておきたいのは、そのような反論の存在を明示的に指摘することはできないものの、馬琴は「儒者の事業」が日本（「皇国」）を中華漢字文化圏に結びつける紐帯となっていると認識しているということである。つまり儒者こそが、日本という「国の全体」の主体性と独自性を表象しているという自負が、馬琴の儒者観の根底に見られるということである。それゆえ、彼が洋学者（「蘭学者流」）に対して敵意を剥き出しにするのは無理もないが、その言説が「学文」の方法の差異に言及しているとすれば、看過することはできない。その差異は、過去の変動した世界と日本の関係を範型として捉えるか、それとも現在の変動と捉えるかという点に求められているからである。

近ごろ蘭学者流が、漢学者を嘲るたぐひにして、一トわたりその理りは聞えたれども、智術をのみたふとみて、行状をよそにするは、則夷狄のわざなり。さらにく羨むべき事にあらず。……紅毛及諸蛮の国ぶりの智術に長て、その齡の長からざるは、寔に禽獸にちかければなり。更にく羨むべき事にはあらず。（『独考論』「中の巻あげつらひ」）<sup>38</sup>

ここで馬琴は「蘭学者流」の古典祖述の学知と「漢学者」の「知術」の優劣論争を行って見せている。「知術」とは経験知であり、現在の変動する関係の変化を直視して得る（知）のことである。古典祖述の対極の学知と違ってよい。しかし、「蘭学者流」の「知術」はそれを大きく超えている、すなわち「蘭学」とは、文脈上「夷狄のわざ」とされているもの、つまりとりもなおさず西洋の学問と技術のことである。ただ馬琴は、西洋の科学的数式的知を含んでいるといえるかもしれない

い。「術」とは技術、科学的数式的知によって得られた西洋の技術を言うものと思われる。第二部第一章と第四章で検討した通り、馬琴は『白石叢書』に関する考証作者や、兔園会などを介した知識人との交流を通して、西洋の「知術」についての情報を入手していた。そのように「智術」とは、現在の様々な状況の変化やそこから生ずる事件に対し、帰納的方法によって解決法を模索する〈知〉だということになる。もう一方の儒教的方法とは、経書（古典）から演繹的方法により、状況に対応する〈知〉を得るというもので、まったく反対の方法である。

このような学問の方法の違いにもかかわらず、馬琴は日本が西洋列強に優越する根拠を求めようとしている。馬琴が「智術」をさげすむ一つの根拠は、儒者を自負する馬琴が慣れ親しんだ、次のような歴史主義的な〈知〉への愛着があるからであらう。

更にく、羨むべき事にはあらず。から国にも周末戦国しゅうまつせんごくのとき、蘇秦・張儀・李斯・韓非かんひがともがら、智術を旨として敵に捷かち、天下を併せんと謀りしものは、皆聖人の罪人なり。智術技芸は国を治め家をととのへ、民に教る所以ゆゑにあらず。皇国にも儒学の人、智術を旨として徳行を修めず、遂に国を乱して斧鉞ふゑつに死せしものあり。少納言入道信西・宇治ノ悪左府是なり。これらの理りを生学者なまは、なほ思ひ得ざるもあるべし。いはんや婦女子などは、うち聞くまゝに羨しくおもふにやあらん。(39)

ここでいま一つの根拠がこの言説から求められる。馬琴が強調するのは、「行状」が重んぜられていないという点である。「行状」とは日常生活における庶民倫理的・道徳的行為という意味から、政治的实践における為政者のそれをも意味すると考えられる。馬琴は、権謀術数にのみ走る背徳的行為は「紅毛及諸蛮」の「智術」に結びつくという見方が、「行状」の背後に暗示されているとする。しかし、人間の知と行為に差異があるのは文化的差異に他ならず、そこに「行状」うんぬんをいうのは馬琴の偏見にすぎない。

むしろ馬琴は、真葛が「国の全体」を担う主体の適格性を基準にし、儒者批判を展開していたという点を認識することにより、それを日本と西洋の間の学知の優劣へと置換したと見るべきであろう。

孔子をいたく貶おとしめて、孔丘こうきゅうとのゝしり、儒道にうだうをにくみ嘲あざわりしは、侮あなどりを隣国にまねくのみならず、そをうやまひ祭り給ふ天子將軍を譏そしり奉るに似たり。〔『独考論』「第四 願わたる事みつ」〕(40)

このような優劣論には、儒教が次第に洋学に圧倒されていく状況が顕著に現れており、それを馬琴は目の当たりにして、危機感をおぼえるようになったことを示唆している。馬琴の論理からすると、一般的優劣論は、「皇国」(「国の全体」)を主体的に担う為政者の優劣につながる。彼は、それがそのまま国家の優劣(存亡)に直結すると感じていたのかもしれない。このような優劣論において、日本の優越性を確認しようとする意図がはたらく背景には、日本を「皇国」と呼び、異国を「夷狄」と呼ぶという姿勢がある。「皇国」とは中国と共に中華としての世界の中心であり、「夷狄」はその周縁に位置しているとされるが、馬琴が「紅毛及諸蛮」という用語を用いたように、西洋列強も「夷狄」とされていた。その中心／周縁という差別構造の認識は、文明の差別意識(中華優越意識)を含意している。そのために「主客の勢ひ」があり、いくら「夷狄」に「智ありといふとも、彼レが我レに及ば」ないということが先験的事実となるのである。

## 第五節 おわりに

このように見てくると、馬琴は、中華漢字文化圏に属する日本を、一方で中国と対等な国の位置に捉えることで、中華／夷狄、あるいは中心／周縁といった構造的差別から解放していた。他方、中華Ⅱ中国という伝統的観念を切り離し、「中華」を抽象的で高次の文化価値へと上昇させることにより、その高次的価値の下における脱中心化、すなわち相対化をはかった。

そうすることで、日本を中国と対等な文化的中心であると論じた。馬琴はそうした論理によって、伝統的世界観を克服しようとしたのである。

しかし、その脱中心化の論理は日本の特権性を温存する。したがって極めて不徹底なものであった。というのは、中華漢字文化圏の内部において、彼は、構造的差別の観念を積極的に否定しようと試みている。しかしその外部においては、中華／夷狄という構造的差別観が温存されているのである。この世界観は真葛のそれと大きく異なる。真葛の「国の全体」では、その同一性と差異において、世界地図上のあらゆる他国（異国）との対等が目指される。真葛の場合、平等的一元的世界観の方向に開けた思想があった。しかし馬琴の場合、日本という「国の全体」が「紅毛及諸蛮（の国ぶり）」よりも長じているといえるのは、つねに優劣の価値基準に照らしてであった。そこにはやはり、日本が中国と共に中華漢字文化圏を主体的に担っているという強烈的な自負があった。したがってそれ以外の「異国」に対しては、構造的差別観をはらむ華夷思想による夷狄観をぬぐうことはできなかったと言うべきであろう。その「夷狄」には、馬琴の時代、商船や軍艦を派遣して日本に開国を迫っていた西洋列強も含まれていたのである。

だが、馬琴の優劣観をもっと大きな時代的文脈で見ると、彼の生きた時代が（知）の転換期であったという事実を想起しなければならぬ。馬琴は真葛の新しい地理的世界観に接したとき、自己の伝統的世界観とはまったく異なる（知）に衝撃を受けざるを得なかった。その同時代に、異国から大型の蒸気帆船が列島の沿岸に接近・着岸するようになった。それゆえに、おそらく、馬琴は真葛の地理的世界観の先進性を感じざるを得なかったのではないだろうか。そこから、馬琴自らが、世界観の転換期に置かれていることを実感したのであろう。その他者意識が馬琴の伝統的世界観や異国認識に修正を迫っていたことは、これまで論じてきたところである。しかし馬琴は、それでも自己の抱懐する伝統的世界観の優越性を強く意識させられた。西洋に対する優越表現は、西洋の脅威を抑圧する心的規制と表裏一体をなす、その表れとも考えられる。それが、当代一流の知識人であった読本作家・曲亭馬琴の特色であり、限界でもある。そしてこの限界は、大多数の読本読者に共有されるものであったといえよう。かくして、すでに論じたように、『椿説弓張月』以降の作品において、馬琴は現実

的な異国表象よりも、幻想的な異国表象、そして驚異と儒学思想に満ちた異界表象を極めていくことになるのである。

【注】

- (1) 門玲子『わが真葛物語』藤原書店、二〇〇六年、関民子『只野真葛』吉川弘文館、二〇〇八年、ベティーナ・グラム  
リヒョオカ著・上野未央訳『只野真葛論―男のように考える女―』岩田書院、二〇一三年。
- (2) 中山栄子『むかしばなし』平凡社、一九八四年、二六四頁。
- (3) 北田幸恵「真葛から紫琴へ―性差と表現」『日本文学』日本文学協会、一九九四年、五六頁。
- (4) 鈴木よね子『独考』試論―その方法と実学・国学の影響』『都大論究』東京都立大学 国語国文学会、一九八七年、七五頁。
- (5) 前田勉「只野真葛の思想―国学と蘭学との交錯―」『日本文化論叢』第十二号、愛知教育大学日本文化研究室、二〇〇四年。
- (6) 鈴木よね子「反真葛論―独考』一件をめぐって―」『日本文学』日本文学協会、一九八七年。
- (7) 門玲子「只野真葛 その文学と思想―孤独な挑戦者―」『江戸期おんな考』桂文庫、一九九六年。
- (8)、山村美桜「只野真葛『独考』論―真葛は本当に女性解放の先覚者か―」『国文研究』第五十号、熊本県立大学日本語日本文学会、二〇〇五年、一〇五頁。
- (9) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第四卷、吉川弘文館、一九八〇年、八二四頁。
- (10) 鈴木よね子校訂『只野真葛集』国書刊行会、一九九四年、二七五頁。
- (11) 関民子は、真葛の国家論について、「彼女のロシア政治社会制度への強烈な関心は、「君子にして商ふ」という経済論が重商主義的な経済組織の構築の問題を、また、宗教制度への着眼が「臣民」の宗教的一致」という王権神授説成立での基礎条件の創出の問題を内包している以上、……きわめて未成熟なものであるとはいえ、絶対主義国家への志向を意味するものであるといえよう」と述べ、彼女の「絶対主義国家への志向」を評価している。関民子『江戸後期の

女性たち』亜紀書房、一九八〇年、一四四頁。

(12) 『只野真葛集』、二七五頁。

(13) 『赤蝦夷風説考』の冒頭部を見ると、「松前人の物語を聞くに、蝦夷の奥丑寅に当りて国有り。赤狄アカエテといふ。ゑぞの東北の末の海上に千島と名付て島々大小数々あり。この島続より折々交易する事むかしよりこれあるよし。あかゑぞの産物、からさけ鯨あぶら類その外、ゑぞ物品々出るよし。こなたよりも塩、米、反物、鉄の細工もの、刃物、包丁など渡して、口ゑぞとの交易これある事、昔より承伝る所なり」とある。「赤蝦夷」は「カムチャツカ」のことで、つまりロシアのことを指す。すでに口蝦夷（北海道西南部）と交易が行われ、「鯨油、塩、米」などの産物が主である。『赤蝦夷風説考』はロシアとの交易が主な内容で、平助はロシアを脅威の対象として認識しつつも、その大国との交易を通して蝦夷の発展を狙っている。寺澤一・和田敏明・黒田秀俊編集『赤蝦夷風説考』『北方未公開古文書集成』 第三卷、叢文社、一九七八年、三〇頁。

(14) 『只野真葛集』二九五頁。

(15) 「政治経済論においては、馬琴が一貫して幕藩体制の枠組の内部で客観的な打開策を講じているのに対し、真葛は武士の勢力の回復を意図しながら、かえって幕藩体制を解体せしめ、絶対主義を志向する方策を打ち出していることに気づくのである」。関民子『江戸後期の女性たち』一四六頁。

(16) 林子平『海国兵談』の序文には「傍採海外奇策古今来嘗見聞者出之。足以觀我 国防禦之大方。其所志可謂偉矣」とある。山岸徳平・佐野正巳編『新編林子平全集一』第一書房、一九七八年、八一〜八二頁。

(17) 『只野真葛集』二八〇頁。

(18) 前田前掲論文、六一頁。

(19) 『只野真葛集』二六八頁。

(20) 前田前掲論文、五六頁。

- (21) 鈴木よね子『独考』試論―その方法と実学・国学の影響―『都大論究』第二十四号、東京都立大学国語国文学会、一九八七年、八〇〜八一頁。
- (22) 『只野真葛集』二六八頁。
- (23) 関氏子『江戸後期の女性たち』一四四頁、一四六頁。
- (24) 『只野真葛集』三一七頁。
- (25) 日本随筆大成編集部「真葛のおうな」『日本随筆大成一』吉川弘文館、一九七三年、二五六頁。
- (26) 注(11)と同じ。
- (27) 『只野真葛集』二八一頁。
- (28) 『只野真葛集』三二九頁。
- (29) 平田学は幕末に大いに普及し、明治維新の実現に大きな力となった。篤胤は、自己の学問の分野を、古道学・暦学・易学・軍学・玄学の五つに分類しているが、構想と知識との博大なことでは国学者中第一であり、諸学を総合する無比のスケールに支えられている。『日本古典文学大辞典』第五卷、岩波書店、一九八四年、二〇七頁。
- (30) 『只野真葛集』二六九頁。
- (31) 『只野真葛集』二六八頁。
- (32) 『只野真葛集』二八〇頁。
- (33) 『只野真葛集』二九五頁。
- (34) 『只野真葛集』三五四頁。
- (35) 『只野真葛集』三一八〜三一九頁。
- (36) 『只野真葛集』二六八頁。
- (37) 『只野真葛集』三一五頁。

- (38) 『只野真葛集』 三二八頁。  
(39) 『只野真葛集』 三二八頁。  
(40) 『只野真葛集』 三一六頁。

## 結章

本論文は、馬琴の読本、特に史伝ものである『椿説弓張月』と『南総里見八犬伝』の長編構想を中心に論じたものである。その際、江戸後期に発展した出版の流通経済システムは作品の構想に重要な意義を持つ。このような商業出版の発展は新興購読者に書物を商品として認識させ、書物は現在の宣伝・広告というメディア性を持つようになった。また、貸本屋は書物の流通経済に大きく関連し、板元・作者・読者を結ぶ仲人の役割を果たした。その貸本屋は利益を多く得ることになり、直接に出版にも関与し始めた。それは本論文で扱った馬琴の作品も同様で、彼の作品と貸本屋とは深い関連性を持っていた。さらに商品としての書物という面からみても、馬琴の読本は様々な広告や売薬などを含む重要な商品であったであろう。

本格的な書物の流通が開始され、商品経済が成長していた時代を背景に、職業作家としての馬琴が誕生したことを考えると、経済と文化、そして文芸の関係性の中に、それ前代にはない特徴が見られる。それは作品の創作に商業的な外部要因が影響しているという点であり、その外部の様々な経済原理が作家、作品を支配することになる。このような経済流通構造の中で、書物を商品として認識し、それにもとづいて作品の内部を分析することに努めた。この方法により、馬琴のケースにあつては、彼の収集活動、考証随筆、彼が参加した文人会、読本創作、異国表象などを解釈することが可能となった。この形式性を支配しているのが江戸後期の商業出版であることに注目したのが、本論の大きな観点であった。

こうした江戸後期の出版経済、書物流通の発展の影響下で、馬琴が自分の作品を長編物として執筆した際、いかなる方法をもって購読者の興味と関心を維持させたのか、その際の販売戦略とはいかなるものであったのか、それが本論文での考察内容となった。かくして『椿説弓張月』と『南総里見八犬伝』が考察対象の作品となり、これら二つの作品における長編構成及び構想のモチーフを明らかにすることができた。

また、馬琴の膨大な作品の中から、特に日本国内外の現実・架空の諸地域を扱った著作（遍歴小説）や、それらの地域に由来する事物を考証した作品（『兎園小説』などの考証随筆）を取り上げ、そうした諸地域や事物についての表象（ある事物

や概念の表現のされ方)の特徴に注目し、その現代的意義を論じることになった。具体的には、これまであまり取り上げられることのなかった(馬琴以外のものも含む)遍歴小説、これまでに論じ尽くされた感もある『椿説弓張月』、そしてこれも取り上げられることが少なかった『兎園小説』といった作品を年代順に取り上げ、これらの作品における日本内外の地域や事物についての表象を、異国と異界という対概念を使って整理・分析した。その際、異界表象にも注目したが、より重要視したのは異国表象の複雑さである。中国の古典や西洋からの情報を元にした異国表象は、非常に幻想的なものもあれば、現実的なものもある。本論文では、特に異国表象の幻想性と現実性が共存しつつも拮抗していることを指摘し、このことの意味を中心に論じることとなった。

近世日本は、いうまでもなく鎖国が主な政策となっていたため、人々が異国を直接に体験することは不可能であった。彼らが異国を体験する手段は書物によるしかなかった。そうした間接的な異国経験によって、一般の人々は異国の情報に接し、異国像を形成していたはずである。しかし、その異国は完全なる海外ではなく、中世から継続されている異界、異界と異国が混沌する世界、地理的な異国であった。こうした混沌たる異国像ではあるが、彼らにとって(異なる世界)というものが、大きな好奇心を引き立てるものであったことは確かである。日野龍夫は近世日本における異国の意味を、次のように概説している。

近世中期、すなわち経験主義的思惟の相応の発達によって、死後の世界やお伽話めいた異界がリアリティーを喪失した時期、人々の(もう一つの世界)を求める思いに答えたのは、学問のレベルでは、こくがく国学の発見した(古代)と、蘭学の提示する(海外)とであった。国学と蘭学は、その志向するところが正反対であるが、宝暦(一七五一〜六三)前後の、閉塞しながら弛緩している生煮え状況からの脱出という、知識人たちの願望に発する点で、もと同根である。そして、民衆レベルで(もう一つの世界)への希求にもっとも有効に答えたのが、蘭学のそれとは次元を事にする、民衆手持ちの古来の異界の観念の延長上にある(海外)であったのではないだろうか。……海外についての正確な情報から遮

断されている以上、この〈海外〉のイメージは、実在の諸外国とは無縁の、異界との区別のない、非地理的な世界であるほかない。しかし、そこにお伽話をこえるなんらかの変容が見出され、それが、近世中期の民衆がみずからの希求に基づいて加えた変容と認められるならば、この海外には、〈もう一の世界〉の役割が託されていたと考えられる。近世人たちも、たぶん、やはり海外を必要としていた。近世文学において海外の担っていた意味は、海外が舞台になっているかどうかは、そのイメージが地理学的に正確であるかどうかは無関係のところ存するものと思われる。<sup>(1)</sup>

日野は、近世において海外（異国）が「異界との区別のない」「非地理的な世界」であったことを指摘する。ただ異国がそうした不正確な異界的な世界であることについては問題視していない。むしろ異界を超える「なんらかの変容」に注目している。論者も、馬琴における異界から異国への変容という点には注目した。しかし、馬琴は国学者、蘭学者とは異なり、作品の中に「変容」を見出している。したがって本論では、彼が書いた作品のうち、異界と異国を取り扱った作品を中心に分析を行うこととなった。

さらに本論文では、馬琴の考証趣味と『燕石雑誌』、『烹雑の記』のような考証随筆を研究対象とし、彼が考証を行った対象とその内容を検証した。馬琴が熱心に収集を行った『白石叢書』（筑波大学図書館所蔵本）については、異国を題材にした書物を中心にして、叢書の内容と馬琴の校訂記録を照らし合わせながら分析を行った。彼の異国への関心をめぐり、現存する『馬琴日記』、『馬琴書翰』の異国記録を取り出し、異国情報を提供した人物や書物も明らかにすることができた。

また、馬琴の考証趣味と考証随筆はより学問的な考証活動へと発展し、只野真葛『独考』を論証した『独考論』に見られるように、文献批判にもつながるものであった。これら二作品を取り上げ、二人の異国観と世界認識の差異、「勸善懲悪」を中心に論じ、彼の異国認識を、真葛の著書との比較研究で明らかにすることができた。馬琴のこの作業は、兎園会、耽奇会の文人会でも行われ、個人でなく「集」による考証活動をも伴った。本論では、馬琴が参加した耽奇会、兎園会のメンバーとその性格を分析し、そこで記録された『耽奇漫録』、『兎園小説』のうち、異国に関するモノ、話に焦点を当てて考察する

ことになった。

そうした馬琴の異文化情報収集・検証を踏まえ、改めて彼の創作との関連を分析も試みることができた。たとえば馬琴の作品では、「女人国」、不可思議な「島」などの虚構の異世界が主に描かれている。馬琴は幕府の鎖国政策に逆らわないよう、また人気を得る作品を執筆するために、禁に触れるような実際の異国を描くよりも、虚構上で特異な魅惑を放つ驚異の異世界をさまざまに創出したと言える。しかし注意しなくてはならないのは、その異世界においても、馬琴が単に荒唐無稽な不可思議な国を創出したのではなく、確かな現実の知識と情報に基づいた上で、実際の異国と虚構の異世界がない交ぜになった、みごとなワンダーランドを構築したという点である。馬琴の描いた異世界が、どのように表象され、前近代社会において、いかなる世界観を形成していたのかが、本論文によって明らかとなった。

より具体的に各章の内容をみると、第一部第一章では、江戸時代の商業出版、商業作家について、既成の作品に関する認識の変化という点に注目して論じた。作品を純粋な創作物としてではなく、一つの流行商品として考えるならば、作品はこれまでとは異なる側面を見せはじめる。江戸後期は商品性をもつ作品の登場という大きな変化が生じた時期であり、京伝、馬琴などの商業作家の登場は近世文芸にも大きな影響を及ぼした。またこの時期に貸本屋という仲介業が登場し、貸本屋により出版という画期的な書物の流通形態が発生した。原稿料を通して読本というジャンルの作品が高価な商品となり、それによって貸本屋の流通システムが定着したものと推測できる。江戸後期の代表的な商業作家馬琴に着目するのは、彼が大量の日記と書簡文に概略的な作品の原稿料に関する記述を残しているためである。作品の商品性を論じる際、作品による広告、宣伝という商業的機能は見逃すことができない。こうして作品の商品性に注目し、書物による新刊・続刊の広告、薬と店の宣伝、書物の購読者への直接提供という役割を果たした貸本屋について、本論では論じることとなった。

第二章では『椿説弓張月』が〈話型〉の反復と連鎖によって長編化されていることについて論じた。本作品の主人公である源為朝の「貴種流離譚」の要素や「島渡り」という設定が様々な地域・人物に繰り返されることにより、長編のプロットが形作られる。この為朝という貴種の放逐、周縁での苦難、周縁の女との結婚、貴種の中央への帰還、周縁と中心における

新たな世界創造などが〈話型〉となっている。この〈話型〉を作品の内容から析出し、それが反復され連鎖していることを考察した。また、その〈話型〉に沿って悪の存在が登場し、琉球では悪人矇雲の物語が「はじめ、中間、おわり」の完結した構造になっていることにも着目した。

この為朝を含む重要人物における〈話型〉の反復と連鎖、悪人物語を取り入れることによって、本作品は人気を持続させながら長編化して記されることになる。それは、近代の人物の心理、情景描写などによるストーリー展開とは異なる〈話型〉に沿った方法である。また様々な地域を舞台にしたのは、近世の地理観の拡大と新地域に対する読者の好奇心を満足させるためであった。こうして第二章では、〈話型〉の反復と連鎖、地理観の拡大などが、作品長編化の重要なモチーフになっていることを検証した。

第三章では、『南総里見八犬伝』の長編構成、及び構想のうえで、坪内逍遙によって批判された「勸善懲悪」に注目した。「勸善懲悪」を、江戸時代を代表する思想の観点ではなく、一つの構想の要素として捉えたのである。それは様々な小物語のモチーフとして利用され、第二章の〈話型〉のように、反復・連鎖されている。この「勸善懲悪」をモチーフとした小物語の反復・連鎖によって『八犬伝』は長編作品となった。この第三章の内容は、近代の「勸善懲悪」に対する批判（坪内逍遙の『小説神髓』、読み切り形式と「勸善懲悪」、歴史物語風の構成、『八犬伝』の小物語における「勸善懲悪」といった事項である。このように本論文では、江戸後期の商業出版と書物流通という社会的な影響の下、商業作家である馬琴が長編作品の構成及び構想として利用した〈話型〉、「勸善懲悪」について論じることとなった。さらに、その〈話型〉、「勸善懲悪」が一回にとどまらず、反復・連鎖され、それによって『椿説弓張月』や『南総里見八犬伝』が長編化していったことについて分析を及ぼした。

『八犬伝』は、歴史仕立ての里見家の再興という史伝風の筋立を、いわば大きな物語としている。そしてその史伝風の大きな物語のなかでは、八犬士という勇士（善なる家臣団）の列伝という体裁が建前となっている。もともと実質的に『八犬伝』の長編構想は、八犬士の目的を妨害する悪人を焦点に据え、〈始め—中間—終わり〉という構成をもつ小さな物語を〈反

復」と「連鎖」という原理に則りつつつむいでいったものだと言える。ただ全体的に俯瞰したとき、八犬士の活躍に読者の人気・不人気を反映させたためであろうか、八犬士の物語としては、叙述量の差が際立って目に付くようになっていた。したがって、小物語としては八犬士に均等ではなく、ある犬士にかたよって叙述量が際立って多い。この点で、不揃いの小物語の「連鎖」となっているというべきであろう。

本論文の第二部では、まず第一章において、馬琴が異国に強い関心を持ち、文献を収集・校訂していたことを確認した。ただそれにもかかわらず、彼の異国遍歴作品、特に『椿説弓張月』や『兔園小説』においては、現実に存在する地域をもとにした異国に関する表象や物語が必ずしもメインであったとは言えず、むしろ物語の重要な部分に、現実と遊離した異形の存在に満ちあふれた異界の表象や、幻想の異国の表象が書き込まれていることを確認した。これが同第二部第二章から第四章の内容である。このことからどのような結論が導き出せるだろうか。一つには、馬琴は読本作家であり、江戸期の読者のニーズをよく把握していたがゆえに、かつて岩波文庫版の校訂者と和田万吉を飽きさせたという考証（本論文の「序」注4を参照）に由来する異国情報や異国表象ではなく、幻想的な異国表象や伝統的な異界表象を用いたのだという説明が可能であろう。しかし本論文では、このような読本市場に注目したアプローチよりも、むしろ江戸期に生きた知識人としての馬琴に注目した。これについては、第二部第二章、馬琴の異国認識のところで詳細に検討し、彼の作品中での異国表象と実際の異国認識が乖離していた理由を確認することができた。

最初に第二部第一章では、馬琴が熱心に収集した『白石叢書』のうち、異国を題材にした書物を研究対象とし、馬琴がこれらの書物に書き込んだ校訂記録から、彼が異国をどのように評価、認識していたのかを考察することになった。『馬琴日記』を読むと、作品の執筆中、馬琴がどのような情報に興味を持っていたのかが見て取れる。馬琴が興味を持っていた情報の中には、作品に影響を与えているものもあれば、そうではないものもある。それらの情報を通して、彼が収集・筆写した異国関連の書物と、彼に異国情報を提供した交友関係を検証する作業を行った。馬琴が『白石叢書』を購入したことは、彼の異国に対する関心が高まるきっかけの一つとなった。これは確実であろう。馬琴の書入れをみると、白石著作の真偽がかなり

重要であり、特に琉球と関連がある『南嶋志』などは、彼の作品執筆にも大きな影響を与えていた。また、蝦夷に関する情報も松前藩と『白石叢書』から多くを得ており、馬琴がロシアの南下政策にも脅威を感じていたことが確認できた。

江戸の異世界遍歴小説は、荒唐無稽な異世界を見世物として描き、読者の好奇心を満足させるものであった。しかし、馬琴の創作物においてはそれだけではなく、主人公が移動した先の異世界の人々に対して儒教論理に基づいて教訓を語るなど、日本の優越性が強調されていた。第二部第二章は、江戸の異世界遍歴小説の中に、馬琴の遍歴を据えてその意義を捉えたものである。馬琴は、それまでの幻想に満ちた卑俗な異国表象が、欲望を満足させるだけの寓意的空間の産物にすぎなかったことに対して、なんとか実在の国をモデルにしようとする知的好奇心の旺盛さを持っていた。しかし、それを実在の異国として表象できなかったのは、旧来の異国表象に引きずられてしまったためであると言えるだろう。こうした幻想の異国は、いかにも見世物的で、かつ官能的快楽を刺激する荒唐無稽な空想空間にすぎなかった。

第二部第三章では、異国、異界として表象された『椿説弓張月』の琉球について述べた。琉球が、日本から距離の離れた、独自の言語や制度を持つ異国であること、朦朧が王朝を倒し国の支配権を握る話における怪物的表現が物語全編を覆っていることについて考察した。つまり、『椿説弓張月』は琉球を、虚構がないまぜになってはいるものの現実の独自の存在である異国としてのみ表象するのではなく、完全にこの世ではない異界と結びついたものとしている。このような物語になっていることは、馬琴の巧みな仕掛けであったと言える。

馬琴の考証は、個人的な考証活動から、耽奇会や兎園会の「会」による、文人グループの集団的な考証活動へと発展していった。第二部第四章では、その二つの文人会を、江戸時代に結成された他の会と比較しつつ、参加者と「会」の性格を明らかにした。参加者たちが珍奇なモノを持ち込み、それを観覧・批評した耽奇会についても触れることになった。そうした作業は『兎園小説』という作品を生み出した。これは珍奇なものを求める欲望の産物であったと言える。その中でも、珍奇なる女性・異国・異界が共存している記録について考察することになった。馬琴は、異国を理解する際、旧来の世界観の枠組みで説明することを試みている。また、この兎園会を通じて得た異国に関する情報を正しい知識として記録するために、

馬琴が参考として用いた異国についての地理書や百科事典及び当時の伝承などについても考察を及ぼすことになった。

江戸後期の異色の女流学者、只野真葛は『独考』という画期的な経世論を書き、その添削や刊行を馬琴に依頼した。しかし馬琴は、真葛の依頼には応じず、『独考論』を著し、彼女の論理を細かく検証しながら厳しい批判を行った。第二部第五章では、真葛の『独考』と馬琴の『独考論』に見られる論理の相違点に注目し、特に、真葛の儒学批判や開明思想などを論じた。その後、その論拠に対しての、儒学に基づく馬琴の反論や批判を考察した。この章では、馬琴が『独考論』で著した真葛の『独考』に対する批判的な言説を通して、彼の儒学擁護、儒学論理に基づいた保守的な異国観、開明的な思想を持つ女性への差別意識などを読み取ったのである。

また、馬琴の異国へのまなざしを真葛への反論書の中で考察した。馬琴は、日本がその「国の全体」を通して、夷狄の異国より優越していると論じている。そこには、中華／日本、日本／夷狄（異国）という内在化された中華思想が働いていた。さらに馬琴には、日本は中国と共に中華漢字文化圏を主体的に担っているという強烈な自負があり、彼が構造的差別観をはらむ華夷思想によって異国を認識していたことが確認できた。

最後になるが、馬琴の遍歴小説についての最近の先行研究を紹介して本論文を締めくくりたい。川村湊は『夢想兵衛』に教訓めいたエピソードが多いことを指摘しつつ、次のように述べている。

つまり、夢想兵衛は、自国以外の様々な国、島を遍歴、観察することによって〈聖賢の教〉の優れていることを改めて知り、老荘ではなく、儒教道徳であるという結論を携えて振り出しに戻って来たのである。……だが、これを単に馬琴の保守思想、頑迷な鎖国的態度であるとするのは、馬琴の思想の可能性をとらえ損なうものであると思われる。なぜなら、馬琴は「日本」という島国以外に、国々や島々のあることを知らず、またそこに別個のモラルや価値観（聖賢の教以外の）のありうることを認めようとはしなかったのではなく、逆にそうした海外の異文化、異次元の世界からの圧迫のようなものを肌身に染みるように感じたからこそ、自らの内部を固めるための〈聖賢の教〉を必要としたのではな

いかと考えられるからだ。(2)

馬琴が「海外の異文化、異次元の世界からの圧迫のようなものを肌身に染みるように感じた」と説く川村の見解は、異国表象と異国表象が拮抗していることを論じてきた本論文の結論を導いてくれるものだろう。本論文でも確認してきたように、馬琴の作品においては、現実の地域や事物を元にした(元にしていない)異国表象も、架空の存在に他ならない異国表象も、どちらも読者を圧倒する量であった。

ただし、川村の見解には一言申し添えたいことがある。川村は風間の見解を意識しつつ、「海外からの異文化、異次元の世界からの圧迫」への防衛機構として、『夢想兵衛胡蝶物語』における道徳的エピソード、すなわち「自らの内部を固めるための〈聖賢の教〉」を必要としたことを説く。しかし、現在馬琴を読む私たちが、馬琴やその同時代人にとっての「自らの内部を固めるための〈聖賢の教〉」を必要とするかどうかはわからない。むしろ、そのようなものが存在しないことを認め、だからこそあらためて馬琴の遍歴小説を読みつつ、「海外からの異文化、異次元の世界」あるいは異国・異国表象のあいだを揺れながら、私たちにとっての現実の異国(そして異界)と対峙するための知恵を見いだしてゆくことが必要であろう。こうした試行錯誤を試みる者にとって、なお組み尽くせぬ可能性を秘めた『南総里見八犬伝』が存在する。

本論文は、これらの研究の題材や資料などを参考にするとはいえ、これらの論とは方向性を異にするものである。すなわち先行研究では、馬琴の異国観を保守主義の立場にあるものと見做し、彼の側面が短編的にしか捉えられていない。しかし、馬琴の異国観が保守的な側面を持つていたとしても、彼は日常的に異国への関心を抱き、書物や交友関係を通して、多くの異国情報を収集していた。本論は、そうした異国情報の収集源を明らかにし、真葛との比較を通して、馬琴の異国認識、さらには国家観、世界認識まで考察を試みた。勸善懲惡に関しても、善ではなく悪に注目し、馬琴読本世界の本質を問うことをも目指すこととなった。

また本論文では、中世的伝統を引き継ぐ宗教的概念である異界、地理的概念である異国への知的好奇心を掻き立てた、江

戸後期の文人・文化世界を馬琴研究の背景に据えようと試みた。これは、江戸後期の文化世界に、馬琴とその作品を新たな観点から位置づけようとする試みであるともいえる。かくして本論文は、馬琴をめぐる従来作家・作品研究を、江戸文人、文化の文脈に接続することで、新たな馬琴像を生み出そうと努めるものとなったのである。

【注】

- (1) 日野龍夫「近世文学に現われた異国像」『日本の近世』第一卷、一九九一年、二六八頁～二六九頁。
- (2) 川村湊「馬琴の島——馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集成』二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年、一一八～一九頁。

## 【参考文献】

- 青木稔弥 「明治の曲亭馬琴」 『週刊朝日百科 世界の文学』八八 南総里見八犬伝』朝日新聞社、二〇〇一年
- 真山青果 『随筆滝沢馬琴』岩波書店、二〇〇〇年
- 麻生磯次 『江戸文学と支那文学』三省堂、一九四六年
- 「馬琴の原稿生活」 『国語と国文学』至文堂、一九五四年
- 『滝沢馬琴』吉川弘文館、一九五九年
- 荒野泰典 『近世日本と東アジア』東京大学出版会、一九八八年
- 板坂則子校訂 「戯作のファンタジー」 『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、一九七九年
- 『松株木三階奇談』 『馬琴草双紙集』国書刊行会、一九九四年
- 石川秀巳 「琉球争乱の構図（上）」 『椿説弓張月』 試論—— 『山形女子短期大学紀要』第一五集、一九八二年
- 「琉球争乱の構図（下）」 『椿説弓張月』 試論—— 『山形女子短期大学紀要』第一七集、一九八五年
- 石川了 「貸本屋」 『研究資料日本古典文学』第四卷 近世小説』明治書院、一九八三年
- 稲垣泰一編 「蚕影山畧縁起」 『神社略縁起類聚』勉誠社、一九九八年
- 揖斐高監修 『江戸文学』第三二号 ぺりかん社、二〇〇五年
- 今井伸子 「只野真葛考」 『鶴見日本文学』第七号、鶴見大学、二〇〇三年
- 植田啓子 「曲亭馬琴の対外関心について」 『言語と文芸』第四二号、大修館書店、一九六五年
- 大高洋司 「兎園小説集」 『研究資料日本古典文学』第八卷 随筆文学』明治書院、一九八三年
- 「読本と本屋——京伝と馬琴の場合」 『国文学 解釈と教材の研究』學燈社、一九九七年
- 『椿説弓張月』——構想と考証』 『日本文学研究論文集』二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年

- 「馬琴流〈勸善懲惡〉の言表と「誤読」の問題」『江戸文学』第三六号、ぺりかん社、二〇〇七年
- 編集『読本【よみほん】事典』笠間書院、二〇〇八年
- 責任編集『江戸文学』第四〇号、ぺりかん社、二〇〇九年
- 『京伝と馬琴』翰林書房、二〇一〇年
- 大屋多詠子「馬琴読本の演劇化―文化期の上方面演劇作品における―」『読本研究新集 第五集』翰林書房、二〇〇四年
- 「勸善懲惡」『江戸文学』第三四号、ぺりかん社、二〇〇六年
- 小野忠重編『紅毛雑話』双林社、一九四三年
- 岡雅彦校訂『和莊兵衛』国書刊行会、一九九〇年
- 折口信夫『折口信夫全集5』中央公論社、一九九五年
- 風間誠史「世界の外へ」―『異国奇談 和莊兵衛』頌』『日本文学』一九九八年
- 『和莊兵衛』覚書―世界の外へ』『相模国文』相模女子大学国文研究会、二〇〇二年
- 『椿説弓張月』の「琉球」』『相模国文』第三三三号、相模女子大学国文研究会、二〇〇六年
- 加門正一『うつろ舟ミステリー』楽工社、二〇〇九年
- 川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』ぺりかん社、一九九九年
- 川村湊「馬琴の島―馬琴『椿説弓張月』』『日本文学研究論文集成二二一 馬琴』若草書房、二〇〇〇年
- 川村博忠『近世日本の世界像』ぺりかん社、二〇〇三年
- 北田幸恵「真葛から紫琴へ―性差と表現」『日本文学』日本文学協会、一九九四年一月
- 木下直之『美術という見世物』筑摩書房、一九九五年
- 曲亭馬琴作・和田万吉校訂『椿説弓張月上巻』岩波書店、一九三〇年
- 清田啓子「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙（四）庭莊子珍物茶話」『駒沢短期大学研究紀要』第六号、駒沢短期大学、一九七八年

- 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』岩波書店、一九八四～一九八五年
- 鮎澤信太郎「艾儒略の職方外紀に就いて」『地球』第三二卷第五号、地球学団、一九三五年
- 小出昌洋「耽奇漫録解題」『耽奇漫録上』吉川弘文館、一九九三年
- 小谷信行「和莊兵衛の系譜」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』鈴鹿工業高等専門学校、一九九六年
- 国書刊行会編『徳川文芸類聚』国書刊行会、一九七〇年
- 国民図書編『夢想兵衛胡蝶物語』国民図書、一九二七年
- 後藤丹治校注『椿説弓張月上・下』岩波書店、一九五八・一九六二年
- 小松和彦『神々の精神史』伝統と現代社、一九七八年
- 小谷野敦『新編 八犬伝綺想』筑摩書房、二〇〇〇年
- 今田洋三『江戸の本屋』日本放送出版協会、一九七七年
- 今野達校注『今昔物語集一』（新日本古典文学大系三三三）岩波書店、一九九九年、三八九頁。
- 佐藤至子「試練としての異界遍歴」『日本文学』日本文学協会、二〇〇一年
- 佐藤悟「馬琴の潤筆料と板元―合巻と読本」『日本文学研究論文集成二二 馬琴』若草書房、二〇〇〇年
- 佐藤次男「常陸海浜奇談（一）―うつろ船の異国の美人―」『郷土文化』茨城県郷土文化研究会、一九九一年
- ―――「常陸海浜奇談（二）―続うつろ船の異国の美人―」『郷土文化』茨城県郷土文化研究会、一九九二年
- 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第一巻～第六巻・別巻 八木書店、二〇〇二～二〇〇四年
- ―――新訂増補『曲亭馬琴日記』第一巻 中央公論新社、二〇〇九年
- 信多純一『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』岩波書店、二〇〇四年
- 島田勇雄他訳注『和漢三才図会三』平凡社、一九八六年
- 杉本つとむ『馬琴、滝沢瑣吉とその言語生活』至文堂、二〇〇五年

鈴木健一監修『江戸文学』第三四号 ペリかん社、二〇〇六年

鈴木よね子『独考』試論—その方法と実学・国学の影響—『都大論究 第二十四号』東京都立大学国語国文学会、一九八

七年

——「反真葛論—『独考』一件をめぐって—」『日本文学』日本文学協会、一九八七年一月

——「近世後期における主体と表現—只野真葛をめぐって—」『日本文学』日本文学協会、一九九五年一〇月

関民子『只野真葛』吉川弘文館、二〇〇八年

関根賢司『物語文学論』桜楓社、一九八〇年

——『物語史への試み』桜楓社、一九九二年

徐葆光著・原田兎雄訳注・完訳『中山伝信録』言葉社、一九八二年

神保五彌校注『浮世風呂 戯場粹言幕の外 大千世界楽屋探』岩波書店、一九八九年

高木元「勸善懲惡」『研究資料日本古典文学 第四卷 近世小説』明治書院、一九八三年

——「小説の原稿料」『研究資料日本古典文学 第四卷 近世小説』明治書院、一九八三年

——「江戸読本の形成—貸本屋の出版をめぐって、『文学』岩波書店、一九八八年

——「江戸読本の新刊予告と〈作者〉—テキストフォーマット論覚書」『日本文学』日本文学協会、一九九四年一〇月

——『江戸読本の研究』ペリかん社 一九九五年

高田衛『江戸文学の虚構と刑象』森話社、二〇〇一年

——『完本八犬伝の世界』筑摩書房、二〇〇五年

——『滝沢馬琴』ミネルヴァ書房、二〇〇六年

高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、一九六〇年

高橋圭一『実録研究—筋を通す文学—』清文堂、二〇〇二年

- 高橋亨「物語学にむけて―構造と意味の主題的な変換」『物語の方法―語りの意味論』世界思想社、一九九二年
- 滝沢馬琴著・木村三四吾他編校『吾仏乃記 滝沢馬琴家記』八木書店、一九八七年
- 竹島淳夫『和漢三才図会』に見る異国・異国人』『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、一九九六年一〇月
- 武部健一『山海経』研究の歴史とその現代的意義』『成城国文学』二三巻、二〇〇七年
- タイモン・スクリーチ著・高山宏訳『大江戸異人往来』筑摩書房、二〇〇八年
- 寺島良安著、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会三』平凡社、一九八六年
- 徳田武『椿説弓張月』と『狄青演義』『国語と国文学』至文堂、一九七八年
- ――『椿説弓張月』―作品鑑賞』『図説日本の古典十九 曲亭馬琴』集英社、一九八〇年
- ――・横山邦治校注『繁野話 曲亭伝奇花釵児 催馬楽奇談 鳥辺山調絃』岩波書店、一九九二年
- 永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系三二 保元物語・平治物語』岩波書店、一九六一年
- 長澤規矩也解題『和刻本漢籍随筆集』第十五集、汲古書院、一九七七年
- 長友千代治『近世貸本屋の研究』東京堂出版、一九八二年
- ――『近世の読書』青裳堂書店、一九八七年
- ――『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、二〇〇一年
- ――『江戸時代の図書流通』思文閣出版、二〇〇二年
- 長福恵理子『椿説弓張月』論―三部構成論を中心に―』『国語研究』〔愛知教育大学大学院〕第七号、一九九九年
- 中野猛編『略縁起集成 第二巻』勉誠社、一九九六年
- 中野三敏「小説神髓再読」『日本近代文学』第六五集 日本近代文学会、二〇〇一年十月
- 中村完・梅澤宣夫『日本近代文学大系第三巻 坪内逍遙集』角川書店、一九七四年
- 中村幸彦『風流志道軒伝』〔風来山人集〕岩波書店、一九六一年

- 「滝沢馬琴の小説観」『日本文学研究資料業書 馬琴』有精堂、一九七四年
- 「椿説弓張月」の史的位置』『中村幸彦著述集』第五卷 中央公論社、一九八二年
- 「読本発生に関する諸問題」『中村幸彦著述集』第五卷 中央公論社、一九八二年
- 中山栄子『むかしばなし』東洋文庫四三三、平凡社、一九八四年
- 野口武彦「考証随筆の想像力」『文学界』文藝春秋、一九九六年
- 野田寿雄「近世後期の異国遍歴小説」『國語國分研究』第三一号 北海道大学国文学会、一九六五年
- 日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』〈第一期〉一 吉川弘文館、一九七五年
- 『日本随筆大成』〈第二期〉一 吉川弘文館、一九七三年
- 『日本随筆大成』〈第二期〉三 吉川弘文館、一九七四年
- 『日本随筆大成』〈第二期〉四 吉川弘文館、一九七四年
- 『日本随筆大成』〈第二期〉五 吉川弘文館、一九七四年
- 『日本随筆大成』〈第二期〉一九 吉川弘文館、一九七五年
- 野田寿雄「近世後期の異国遍歴小説」『國語國文研究』北海道大学文学会、一九六五年
- 服部仁「天保初年に於ける馬琴の年収」『学習院大学国語国文学会誌』十八号、学習院大学国語国文学会、一九七四年
- 編『夢想兵衛胡蝶物語』和泉書院、一九九七年
- 花咲一男『江戸売菓志』近世風俗研究会、一九五六年
- 早川純三郎編『参考保元物語・参考平治物語』国書刊行会、一九一四年
- 濱田啓介「勸善懲惡」補紙」『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年
- 林美一編輯・校訂「風見艸婦女節用」『未刊江戸文学』第三冊、未刊江戸文学、一九五二年
- 校訂『江戸広告文学』未完江戸文学刊行会、一九八二年

- 橋川文三『藤田東湖』中央公論社、一九七四年
- 原田禹雄訳注『新井白石 南島志 現代語訳』榕樹社、一九九六年
- 播本眞一「曲亭馬琴伝記小攷―曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川畳翠旧蔵本『松窓雜録』について」『読本研究新集 第二集』  
翰林書房、二〇〇〇年
- ―――「馬琴と異国」『江戸文学』ぺりかん社、二〇〇五年
- ―――「椿説弓張月」論」『日本文学研究』大東文化大学、二〇〇七年
- ―――「八犬伝・馬琴研究」新典社、二〇一〇年
- ハワイ大学図書館蔵『江戸期琉球物産資料集覧 第二巻』本邦書籍、一九八一年
- 久岡明徳「舜天丸と琉球王位―『椿説弓張月』論―」『光華日本文学』第七号、一九九九年
- 日野龍夫「近世文学に現われた異国像」『日本の近世』第一巻、一九九一年
- ベティーナ・グラムリヒィオカ著・上野未央訳『只野真葛論―男のように考える女―』岩田書院、二〇一三年
- 前田愛「出版社と読者―貸本屋の役割を中心として」『前田愛著作集 第二巻 近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年
- 前田勉「只野真葛の思想―国学と蘭学との交錯―」『日本文化論叢』第十二号、愛知教育大学日本文化研究室、二〇〇四年
- 馬淵和夫・稲垣泰一・国東文麿『今昔物語集 四』小学館、二〇〇二年
- 水戸市史編さん委員会『水戸市史』中巻（二）水戸市役所、一九六九年
- 水野稔編『山東京傳全集 第十七巻』ぺりかん社、二〇〇三年
- 宮崎道生「滝沢馬琴の蒐集校訂本『白石叢書』」『国学院大学院紀要』第一六輯、国学院大学院、一九八四年
- ―――「新井白石と滝沢馬琴」『新井白石と思想家文人』吉川弘文館、一九八五年
- 三宅米吉「馬琴と白石」『文学博士三宅米吉著述集』上巻、目黒書店、一九二九年
- 宮田登『ヒメの民俗学』青土社、一九九三年

門玲子「只野真葛 その文学と思想―孤独な挑戦者―」『江戸期おんな考』桂文庫、一九九六年

——『わが真葛物語』藤原書店、二〇〇六年

柳田国男『定本 柳田国男集』第九卷、筑摩書房、一九六二年

山村美桜「只野真葛『独考』論―真葛は本当に女性解放の先覚者か―」『国文研究』第五〇号、熊本県立大学日本語日本文学会、二〇〇五年

山本博文『見る・読む・調べる 江戸時代年表』小学館、二〇〇七年

横山重編『室町時代物語集 第二』井上書房、一九六二年

横山邦治『読本の研究―江戸と上方と』風間書房、一九七四年

——編『読本の世界―江戸と上方』世界思想社、一九八五年

吉岡信『江戸の生葉屋』青蛙房、一九九四年。

ルネ・マルタン監修・松村一男訳『図説ギリシア・ローマ神話文化事典』原書房、一九九七年

渡辺匡一「日琉往還―為朝話にみる差異化と差別化、同一化の歴史」『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、二〇〇一年

## 【図版一覽】

### 第一部第一章

- 【図一】 早稲田大学所蔵本『東海道名所図会』
- 【図二】 早稲田大学所蔵本『江戸名所図会』
- 【図三】 早稲田大学所蔵本『浮世風呂』
- 【図四】 早稲田大学所蔵本『双蝶記』

### 第二部第一章

- 【図一】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図二】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図三】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図四】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図五】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図六】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図七】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』
- 【図八】 筑波大学図書館所蔵本『白石叢書』

### 第二部第二章

- 【図一】 筑波大学図書館所蔵本『和漢三才図会』

- 【図二】筑波大学図書館所蔵本『和漢三才図会』
- 【図三】筑波大学図書館所蔵本『和漢三才図会』
- 【図四】筑波大学図書館所蔵本『唐土訓蒙図彙』
- 【図五】岡雅彦校訂『異国再見和莊兵衛後編』『滑稽本集一』国書刊行会、一九九〇年
- 【図六】『庭莊子珍物茶話』『未刊江戸文学』第三冊、未刊江戸文学会、一九五二年
- 【図七】『庭莊子珍物茶話』『未刊江戸文学』第三冊、未刊江戸文学会、一九五二年
- 【図八】早稲田大学所蔵本『椿説弓張月』
- 【図九】早稲田大学所蔵本『椿説弓張月』

## 第二部第四章

- 【図一】『耽奇漫録上』吉川弘文館、一九九三年
- 【図二】『耽奇漫録上』吉川弘文館、一九九三年
- 【図三】筑波大学図書館所蔵本『三才図会』
- 【図四】筑波大学図書館所蔵本『和漢三才図会』
- 【図五】筑波大学図書館所蔵本『増補華夷通商考』
- 【図六】筑波大学図書館所蔵本『増補華夷通商考』
- 【図七】加門正一『江戸「うつろ舟」ミステリー』楽工社、二〇〇九年
- 【図八】国立公文書館所蔵本『弘賢随筆』
- 【図九】加門正一『江戸「うつろ舟」ミステリー』楽工社、二〇〇九年
- 【図十】筑波大学図書館所蔵本『富士山の本地』

【図十一】筑波大学図書館所蔵本『富士山の本地』

## 初出一覧

\*既発表の論文については、いずれも加筆・修正を施した。

### 第一部第一章

\*発表:

- ・「Comparative Studies of Books for Loan between Korea and Japan」International Comparative Literature Association (国際比較文学会) (二〇一〇年八月)

\*論文:

- ・「江戸時代の商業出版・商業作家——馬琴を中心にして——」『日本研究』第七輯 高麗大学日本学研究センター (二〇〇七年)

### 第二章

\*論文:

- ・「馬琴『椿説弓張月』の長編化分析」『日本研究』第五輯 高麗大学日本学研究センター (二〇〇六年)
- ・「馬琴『椿説弓張月』の長編化構想——話型の反復と連鎖——」『文学研究論集』第二四号 筑波大学比較・理論文学会 (二〇〇六年)

### 第三章

\*発表:

・馬琴読本における〈悪〉と「勸善懲悪」（韓国日本学連合会第五回学術大会、二〇〇七年七月）

・「馬琴の懲悪論―儒学思想と異国観との関連を中心に―」第一二二回 日本近世文学会大会（二〇一二年十月）

\*論文..

・『南総里見八犬伝』長編構想―「勸善懲悪」をモチーフとする小物語の反復と連鎖―』『文学研究論集』第二五号  
筑波大学比較・理論文学会（二〇〇七年）

## 第二部第一章

\*発表..

・「滝沢馬琴と異国情報」韓国日本語文学会 春季学術大会（二〇〇八年四月）

・「馬琴の異国観と歴史認識―『白石叢書』の書き入れと校訂記録を通して―」日本文学協会 第二八回 研究発表  
大会（二〇〇八年六月）

・「曲亭馬琴における周辺国への認識―琉球と蝦夷を中心に―」韓国日本研究総連合会 第三回 国際学術大会（二  
〇一四年四月）

\*論文..

・『馬琴日記』と〈異国〉―江戸後期の日常がはぐくむ〈異世界〉への探究心―』『第三二回 国際日本文学研究  
会会議録』国文学研究資料館（二〇〇八年）

・「曲亭馬琴の周辺国への認識―琉球と蝦夷を中心に―」『日本文学』第六一輯 韓国日本語文学会（二〇一四年）

## 第二章

\*発表..

- ・「Wonder Land in Imaginary Travel writing of Edo period」 The Asian Studies Conference Japan (二〇〇九年六月)
- ・「Edo Literature and its Dynamic Geographical Imagination : Kyokutei Bakin and the Images of South Pacific Islands and Australia」 JASS-ICJLE (豪州日本研究学会) (二〇〇九年七月)
- ・「異国遍歴小説における〈異国〉と〈悪〉——異国像の変化と〈悪〉が潜む異国」高麗大学・筑波大学共同研究集会 (二〇一〇年八月)
- ・「Foreign Country Representation of the Early Modern Japanese Literature」 The Association for Asian Studies (二〇一一年三月)

\*論文:

- ・「外界人が潜む国 日本」『幻想と怪談』図書出版ムン (二〇一〇年)
- ・「異国遍歴小説における異国——「女護が島」表象を中心に——」『日本文化学報』第六二輯 韓国日本文化学会 (二〇一四年)

### 第三章

\*論文:

- ・「『椿説弓張月』における〈異国〉——為朝の〈島〉への移動と琉球——」『テキストたちの旅程』花書院 (二〇〇八年)
- ・「異国・異界としての琉球——『椿説弓張月』の琉球表象」『日本研究』第二二輯 高麗大学日本研究センター (二〇一四年)

### 第四章

\*発表:

・「モノが語る珍奇と異国——江戸の好事・好古会と『耽奇漫録』——」筑波大学日本語日本文学会 第三三回大会（二〇〇九年九月）

・「曲亭馬琴と文人会——コミュニティによる収集と考証」東アジア比較文化国際会議（二〇一〇年一〇月）

・「文人会における異国と異界——耽奇会と『耽奇漫録』を中心に——」韓国日本語文化学会 春季国際学術大会（二〇一四年五月）

・『「兎園小説」における異界と異国』韓国日本研究総連合会 第四回 国際学術大会（二〇一五年四月）

\*論文..

・「曲亭馬琴の考証」『近世部会誌』第四号 日本文学協会近世部会（二〇一一年）

・「想像の異国と実在の異国のはざままで——『兎園小説』の異国記録と馬琴の考証——」『日本文学』明治大学日本文学研究会（二〇〇九年）

## 第五章

\*発表..

・「只野真葛と曲亭馬琴の儒学と異国へのまなざし——『独考』と『独考論』における認識の差異を通して——」女性・消費・歴史記憶 台湾国立政治大学 国際シンポジウム（二〇〇九年一二月）

・「馬琴の文献批判と儒学による異国認識——只野真葛『独考』への批判」高麗大学若手研究の未来構築フォーラム（二〇一〇年五月）

・「前近代女性の国家論とその批判——只野真葛『独考』における「国の全体」——」韓国日本語文化学会 春季国際学術大会（二〇一三年六月）

\*論文..

・「曲亭馬琴の異国認識―只野真葛『独考』への反論を通して」『日本学研究』第四三輯 檀国大学日本研究所（二〇一四年）

・「前近代女性の国家論とその批判―只野真葛『独考』における「国の全体」―」『日本言語文化』第二八輯 韓国日本語文化学会（二〇一四年）